

アサルトリリィ～もうひとつの物語

武士道の犬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私立百合ヶ丘女学院。50年前に突如現れたヒュージと呼ばれる謎の生命体。これは、そんなヒュージと戦う少女たち——リリイ——の数あるレギオンのひとつの物語。

※アニメ、ゲーム(ラスバレ)、原作準拠はしていますが、文章リハビリ中のため所々読みづらい箇所があります。ご了承ください。

目次

私、百合ヶ丘のリリイになります！	1
クラス分け・その1	8
クラス分け・その2	15
勧誘・その1	21
勧誘・その2	34
レギオン	49
誕生日	60
ノインヴェルト戦術	83
アステリオン	94
尾上明日香	111
守護天使	118
鬼龍院琴乃	127
京夏の過去	141
決意	152
気分屋のおちこぼれ	180
櫻子・S・エリザベス	189
カワイイもの談義	198
カワイイもの談義・その2	215
カワイイもの談義・その3	235
再会	245
ギガント級	263
番外編置き場	
はっぴいばれんたいん	276

CHARM持ち替え	282
第二章（2年生編）	
幼なじみの新入生	288
2人の妹（シルト）	316
LG再始動	333
親友	352
守護天使と妹	377
休日	398
知識	419
別れ。そして心身不安定	432
別れ。そして心身不安定その2	459
困惑	468
困惑・その2	494
私たちのノインヴェルト戦術	507
守護天使（シュッツエンゲル）禁止令	530
アルケミラ女学館	556
番外編置き場（第二章）	
守護天使	579

私、百合ヶ丘のリリイになります！

まさか私がこの学園ガーデンに編入するなんて夢にも思わなかった。

もう「お荷物」とか「いらぬ子」だなんて言わせない。そう、ここでなら私は……。

「やつと着いた……ここが百合ヶ丘かあ……」

真新しい制服に反して背中には使い込まれたCHARMケース。非常に不釣り合いなこの格好だが、いざ校門前に立ち、入ろうとする
とやはり緊張する。

(よし、心機一転！頑張ろう！)

私立百合ヶ丘女学院。——リリイ養成機関の中で最も古く、憧れる人も多い。そんな由緒正しいところに、編入とはいえ入れたことが
なにより嬉しい。

「どいてどいてー！」

「えっ?」

声をするほうを見ると、行き過ぎて戻ってきたのか、坂の上のほう
からもものすごい勢いでリリイがこっちに向かってくるではないか。

「わわっ!」

スツ……

間一髪のところでは避ける。レアスキルを使うほどではなかったが、
気づくのが遅かったら正面衝突しているところだ。が、

バタン!

「いつ!」

その子は校門前の道路と横断歩道の堺の縁石に足を引っ掛けて派
手に転んでしまった。

「いったあ……ごめんなさい!大丈夫?」

彼女も新入生だろうか。真新しい制服、真新しいCHARMケ
ース。私と同じくショートカットの子だ。

「え、ええ。それよりあなたは?」

「はい、大丈夫です!実は間違えて上の裏門のほうに行っちゃって……
慌てて戻ろうと思って走ったら止まれなくなっちゃって……。でも

ぶつからなくてよかったあ・・・」

「それより結構派手に転んだみたいだけど、あなたのほうこそ大丈夫？ケガしてない？」

「はい・・・すみませんでした！」

その子は深々と頭を下げる。

(さて、改めて・・・いざ！)

「あの・・・」

と、私のほうをまじまじと見る。

「・・・？」

「あなたも新入生？」

ニコニコしながらショートカットの子は私のほうを見る。そんな期待の目で見られても困るんだけど・・・。

「新入生だけど、残念ながら私は編入生よ」

すると目の色を変えてきた。

「わあ・・・先輩リイだー！どこの出身？名前は？前いた学園は？」

「ちよ、ちよつと待って！ストップ、ストップ！」

質問攻めのマシンガントーク・・・入学式初日からえらいことになってきた。

「あ。ごめんなさい・・・」

私が困つてると思ったのか、申し訳なさそうな目で見てくる。

「ここ、校門だよ？目立つから中に入って話さない？すっこい恥ずかしいんだけど・・・」

「あ・・・」

ようやく気づいたのか、みるみるうちに顔が真っ赤になっていく。もちろん周りからは注目の的だ。

「・・・中、入りましょうか」

「そ、そうね・・・」

地元東京を離れ、鎌倉府に来たが、見て驚くのは自然の豊かさだ。藤沢から電車に乗り、百合ヶ丘の最寄りに着くまで景色を眺めていたが、緑の木々が生い茂るいいところだなあと感じた。もちろんヒューズ迎撃の最前線であるため、学園周辺は被害を最小限に抑えるため関

係者以外は立ち入ることができない。

学園内の敷地を進んでいると何やら人だかりができています。

「中等部以来お久しぶりです結夢様」

「何かご用ですか？遠藤さん」

「亜羅椰と呼んでいただけませんか。そして入学のお祝いにCHARMを交えていただきたいんです」

「あの・・・あれってどういう・・・」

さつきの子が訪ねてきた。

「下級生が上級生に絡んで手合わせを申し込んでるみたいね」

ちなみに手合わせとは、リリイ同士がCHARMを交えて戦うことを指すのだが、修練目的以外での手合わせは禁止されている。この場合上級生リリイの誰かが判定人を立てて修練扱いにするはず。

にしても触らぬ神になんとやらだ。ああいうのは関わらないに限る。後にこの二人たちとは大きく関わることになるのだが・・・。

「さて、お互いの自己紹介もまだだったわね。私は・・・」

ゴーン！ゴーン！

ヒュージ出現を知らせる鐘だ。

「うっそ・・・」

「どうしたんですか？」

「ヒュージが出たのよ」

「ええっ!?!ヒュージ!?!」

ここ鎌倉府でも特に学園一帯は特段出現率が高い。近くにアルトラ級ネストがあるのも関係しているのだろう。出現は時間を選んでくれないようだ。

ちなみにヒュージは大ききさで呼び方が変わってくる。小さいほうからスモール級、ミドル級、ラージ級、ギガント級、アルトラ級だ。

「ええ。けど・・・私たちは入学式もまだだからいきなり出撃・・・はないわよ」

「よかったあ・・・」

さつきの子が胸を撫で下ろす。

もし出撃になるのであれば私たちの持っている携帯端末に何かし

らの指示が飛んでくるはずで、今回は上級生リリイが担当することになる。

「じゃ、改めて自己紹介。私は尾上明日香。百合ヶ丘に来る前は御台場女学校にいたの。よろしく」

「敷井円まじかって言います！元々普通の学校にいて、一般公開セレクションでギリギリ入れた補欠合格組で・・・」

百合ヶ丘の試験は大きく分けて2つあり、1つは別学園からの予備隊推薦枠だ。ちなみに予備隊とは中等部でのリリイ活動単位のことだ。もうひとつは一般学校と同じように試験を受験する方法だ。一般公開セレクションではスキラー値が50以上あれば誰でも受験ができるため、ここ百合ヶ丘では記念に・・・と受ける人が多いことで有名だ。その中でも合格ということは何かしら持っている、ということでもあるが・・・。

「敷井さんだって補欠合格でも入れるなんてすごいじゃない」

「尾上さんのほうがすごいよ。お台場だって百合ヶ丘と同じぐらいすごいところだもん。後、私のことは円がいいよ」

とニコニコしながら返してくれた。尾上さん、か。

「じゃあ、私のことも明日香でいいよ。あんまり名字で呼ばれるの好きじゃないし。で、円さん。あなたはこうしてリリイになろうと思っただの?」

「えっと・・・」

すると途端に黙ってしまった。

「言いたくないのならいいわ。リリイになる子って何かしら悩みだったり、人に言えないことを抱えてたりするから」

ピピピ・・・

私と円さんの携帯端末が鳴る。

「何の音?」

「携帯端末の音ね。ちよつとまって」

内容を確認する。見ると学園からのメールだった。

『工廠科の施設より実体標本化予定のヒューズが逃亡、現在捕獲または討伐中。なお、討伐には一部の新生が参加。これにより入学式は

新入生の無事と帰還を待つて開催します。会場内で待機するように」
え……こんなことつてあるの!?

まさか新入生が参加しているとは。おそらく経験者なのだろうが、
手柄をあげてどこかのLGレギオンに入りたいとかそんな感じなのだろう。

「ねえ円さん」

「はい?」

「入学式、かなり遅くなりそうだから先に荷物を寮に置いてこない?」
と、携帯端末を見せる。

「……そうですね」

百合ヶ丘に限らず各学園は全寮制だ。ここ百合ヶ丘は二人で各一
部屋ずつ使うらしい。えっと、入居予定の部屋は確か……。

しばらく探したところでようやく自分の入る居室番号を見つける
ことができた。しかし、まだ円さんは私の隣にいる。

「あれ?円さん自分の部屋に行かないんです?」

「明日香さんこそ」

お互い顔を見合わせる。居室棟番号も部屋番号も見間違えてない
はず。

「ということ……」

「もしかして……」

二人に送られてきた入学案内の通知書を見せ合う。そこに書かれ
ていたのは、

『あなたの部屋はB棟45室です』

「え……」

「うそ……」

校門で偶然出会って、部屋まで同室とは。これでクラスまで同じ
だったら奇跡を越えて運命を感じてしまう。

運命、かあ……。

「ねえ円さん。こうなったのも何かの縁だし、いつそのことさん付け

で呼ぶのやめよう?」
すると、

「わあ・・・うれしい。ありがとう明日香ちゃん!」

「いいいいよ。それにね、同室のリリイってパートナーになりえるの。あ、パートナーって言っても怪しい意味じゃなくて、相談相手とかそういう意味ね」

中にはそういう関係になるリリイもいるらしいが。

「ということ・・・これからよろしくね。円ちゃん」

「これでよし、と」

御台場から持ってきた荷物類をひと通り片付け、割り当てられた机の椅子に座る私。

「・・・明日香ちゃん。カエル、好きなの?」

「そうなんだ・・・って見ればわかるか」

実は私、大のカエルグッズ好きなのだ。机の上にはありとあらゆるものがカエルで埋め尽くしている。百合ヶ丘の寮は御台場よりも狭い、と聞いていたのでかさばるもの（大きいぬいぐるみとか）は実家に送ってある。

「前いた学園の子に『あんた、やりすぎ!』って言われちゃったけどね」

「ははは・・・けど、いいなあ・・・」

「なんで?」

「私には夢中になれるものがないから・・・」

と言って円ちゃんは落ち込んでしまった。その表情は何か寂しくも見える。

「私は・・・そんなことないと思うな」

「え?」

「せっかく百合ヶ丘に来たんだし、リリイになるって目標があるのに、夢中になれるものがないって、なんか変じゃない?」

「そう・・・だね。私、これから頑張って探してみる」

「じゃ・・・会場いこっか」

クラス分け・その1

私たちリリイはマギを起動元とし、レアスキルと呼ばれる特殊能力やCHARM(Counter Huge ARM)を介して力を発揮する。ヒュージも同様にマギを使う。通常兵器などではヒュージに対抗できないのだ。

謎の生命体ヒュージの侵攻が始まってから半世紀が経つが、いまだ謎が多いため根本的な殲滅にはいたっていない。

さて、入学式の会場に移動してきた。どうやらここは普段修練場として使われているようで、扉や手摺に術式が書かれているのが見える。

さすがは名門と呼ばれるだけあっていろいろなリリイがいる。どうやら私たちが最後のようで、席に座るまでジロジロと見られてしまった。

「なんか、目立っちゃったね」

「あはは・・・」

思わず乾き笑い。

席に座った後周辺を見る。その中でも一際目を引くリリイがいた。

(留学生かな・・・キレイな人)

ブロンド髪にウェーブがかかったさらさらロングヘア。そして緑の目。ここ百合ヶ丘は世界的にも有名なので留学生はいてもおかしくはない。

式は大幅にずれ込み夕方近くになってようやく開催となった。その帰りでのこと。

「明日香ちゃん」

同じ部屋同士になった敷井^{しきい}田^{まじか}ちゃんが私に声をかけてきた。

「どうしたの?」

「えっと・・・」

またしても円ちゃんは言いよどんでる。

「実は相談があるんだけど・・・」

「ここじゃなんだし、どこか静かなところで・・・」

しばらく学園内を動き回り、偶然見つけたのが――

「へえ……こんなところがあるんだ……すごい」

着いたのは講師棟と居室棟（寮）の間にある足湯だ。高台に面していて、相模湾が一望できる。

正直私もビックリしたが、学園の方針だそう。『学院はヒュージ迎撃の最前線であるのと引き換えに、リライにとつての聖域^{アジール}であるべきである』と。

「で、相談って?」

温泉なのだろうか。湯あたりが気持ちいい。

「ええつとね……私にCHARMの使い方を教えてほしいの」

「え?改まって言うことでもないんじゃない?」

最初は誰もがそうだと思う。あさってから講義も始まるし、そう急ぐこともないと思うのだけど。

「あ。使い方って言っても起動できないとかそういうことじゃないから」

つまりは起動はできてもマジを込める方法とか太刀振る舞いがわからない、ということなのだろうか。

「事前に使えるようにって学園^{ガーデン}の案内にあったから契約とか一通りのことはしたんだけど、結局それだけで……」

百合ヶ丘は他学園と違い、自主性が重んじられているそうだ。対ヒュージへの姿勢はどこも変わらない。

「それぐらいのことは教えるよ。お互い頑張ろうね」

「ありがとう!明日香ちゃん」

と私にハグしてきた。

「ちよつと!危ないってば!」

私もこんな何も知らない無知な頃に戻れたら……。

「それと――」

「?」

「明日のクラス発表、同じだったらいいね！」

「そうだね」

翌日。

寮のラウンジで食事を済ませ、講義棟に移動してきた。クラス分けが張り出されているはず。そこに向かうまでの間。

数多くいるリリーのなかで昨日のブロンド髪のリリーの子がいた。昨日は座っていたので分からなかったが私より背が高い。そして、どことは言わないけど結構でかい。けど、その佇んでいる表情は寂しそうに見えた。

(やっぱりこの人キレイ・・・)

その時だ。

「・・・」

「・・・」

(あ。やば・・・目が合っちゃった)

偶然にもお互い目が合ってしまった。

気まづくなりすぐに目を逸らす。

「・・・明日香ちゃん、どうしたの？」

それに円ちゃんは気づいたようだ。

「な、なんでもない。知らない子と目があっちゃって・・・」

これが後に百合ヶ丘で共にする仲間との出会いになるとは。

「そういういえば・・・昨日の一柳さん・・・だっけ？あの子すごいなあ・・・私と同じ素人なのにヒュージ倒しちゃうなんて・・・」

そう。昨日入学式が遅れた原因(言葉は悪いが)は上級生に混じり新入生が参加していたということだった。後から聞いた話ではそのときまだCHARMと契約すらしていなかったそうだ。

「さすがにあれは私もビックリしたわ。下手したら命すら落としかねないのに」

何か思うところあつての行動だとは思いますが、無鉄砲というか無謀と
いうか。

「ほら、ウワサをすれば・・・」

見れば居室棟から歩いてくるピンク髪の、四つ葉のクローバーのア

クセサリーを付けているリリイが。

「梨璃さーん！」

そしてもう一人梨璃と言って歩いてくるリリイが大きく手を振っている。

「あ、二水ちゃん！」

二水と呼ばれたリリイはお互いに近づき、

「ぐ……」

「ぐ……」

「(ぎげんよう)」

「私、今百合ヶ丘に来たーって実感してますう！」

「私もだよ！」

と喜びながらお互い手を取り合う。

「それに梨璃さんと私、同じクラスになったんですよー！」

「ホントー？よかったあ……うれしい」

楽しそうだなあ……。ちよつと気になるのでしばらく歩きながら見ることにする。

「そんなに喜んでいただけると、わたくしもうれしいですわ」

え？この人まさか……。

一柳さんと二水さんの間に割って入り、その上から両手を握ってそう答えている。

「楓・J・ヌーベル……」

思わず口に出してしまった。

世界トップクラスのCHARMメーカーグランギニョルの社長令嬢……。彼女も実力は相当と聞く。やっぱり百合ヶ丘つてすごい……。

「誰？それ？」

「あ。そっか……。ごめん一人で。リリイの中では有名な人だよ」

「へえ……。そうなんだ……」

「さて、私たちは……と」

着いたたので掲示板のほうを見る。

椿組、李組、櫻組、杉組……と並んでいる。

「どこかな……。えつと……」

あいうえお順のはずで順に追っていく。

「あ、あった！」

先に円ちゃんが見つけたようだ。

「私たち櫻組みたい！」

櫻組・・・あった。確かに見つけた。『尾上明日香』の文字。

・・・私たち？

「うそ・・・ホントに？」

「だって・・・ほら」

と言われて円ちゃんに指されたところを見る。確かにあった。

「ホントだ・・・うそみたい」

こんな偶然ってあるだろうか。校門でぶつかりそうになって、同じ部屋で、同じクラス・・・。

「改まってよろしくね明日香ちゃん」

「こちらこそ」

お互い向き合いながらニッコリ。

今日は発表のみで特にするものもない。

「んじや、早速だけど始めましょうか」

昨日夕方言われたとおりCHARMの使い方を教えようと早速構えるさせようとしたときだ。

「あなた、尾上明日香さん？」

突然後ろから声をかけられた。

振り返ると黒髪ストレートでややたれ目の、見た目優しそうなリイだ。

「そう・・・ですけど」

「よかった・・・ごきげんよう。はじめまして明日香さん。私は二年生の夏目京夏って言います。御台場にいる知り合いから百合ヶ丘に編入になったって聞いて・・・」

誰だろうか？確かに数人教えてもらったリイはいる。

「京夏様・・・ですか・・・私になにか？」

「いきなりだけど尾上さん。私と手合わせしてくれないかしら？」
「え・・・」

手合わせって……。

「お断りします」

挨拶されて、いきなり手合わせ、とか……非常識にもほどがある。

「なら、あさがお 権ちゃんから頼まれたって言ったら、あなたはどうする？」

「え……権様？」

「そうよ。あなたなら知っているでしょ？」

知っているものにも、中等部時代お世話になったリリーの一人だ。彼女からはかなり鍛えられた。

「ご存知なんですか？」

「直接の関わりはないけどね。仲はいいわ」

「あの……」

円ちゃんが心配そうに私のほうを見る。

「ごめんね。変なことに巻き込んだりやって。とにかくこの件はお断りします。今日のところはお引取りください」

頭を下げる。

「なら、わたくしとなら手合わせしてもらえるのかしら？」

さらに後ろから声が聞こえてきて、私の前に現れたのは――

「あ……あなた……さっきの……」

クラス分けの掲示板に向かう途中で目が合ったりリリーだった。

「ごきげんよう。尾上明日香さんとおっしゃったかしら？」

さきほどのリリーは目が合ったときと違い、機嫌の悪そうな、いかにもこちらの挑発するかののような態度だ。

「初対面で名を名乗らないのは失礼にあたりますから、一応名乗っておきますわ」

ブロンドの長い髪をかきあげつつ続ける。

「はじめまして。わたくし、櫻子・S・エリザベスと申します。尾上

明日香さん。わたくしと手合わせしていただきます？」

なんかヤな感じの子だなあ……。

「櫻子さん。あなたのほうこそ失礼なんじゃない？さっきも京夏様に言ったけど、私は手合わせする気もないし、CHARMだって持ってきてないわ。だから断るわ」

「なっ!？」

私の態度が気にいらぬのか、櫻子さんは突然怒り出した。

「わたくしを怒らせた罪は大きいですわ!名前呼びするだなんてなんて失礼な!」

もしかして彼女、自己中心的?

「あの・・・私の話聞いてました?とにかく・・・」

「さあ明日香さん!寮に戻ってCHARMを取りにお戻りなさい!そしてわたくしと勝負ですわ!」

百合ヶ丘に限らずリイ同士でCHARMを交えることは禁止されている。ただし訓練はお互いの技術を切磋琢磨するという観点から認められているが、それ以外ではいかなる理由があつたとしても許されない行為となつている。

ただし例外もあり、試合という形で寸止めをすること、判定人(審判)を置く、などが条件になるが、これらが私たち一般的に言う手合わせだ。

「明日香ちゃん・・・」

「ごめんね・・・なんか厄介ごとに巻き込んだみたいで・・・」

入学2日目にしてこの事態って一体・・・私そんなに有名人だったっけ?

クラス分け・その2

「あああああつ！やってしまいましたわ！」

私——櫻子・S^{せーぬ}・エリザベス——は1人悶だえていた。

「せっかくやり直すために百合ヶ丘に来ましたのに、これでは前いた学園と変わりませんわ！まあ言ってしまった手前、手合わせはいたしますが……」

「あの……一人で盛り上がってる所申し訳ないけど、いきなり割って入ってきて何？私に喧嘩売ってる？」

「けど、以前から気になってはいたのですわ……わたくしと同じく孤独な方が御台場にいらつしやると」

「おーい……」

「これは自分を変えるチャンスですわ！ここは是非とも勝って明日香さんとお友達に……」

「ねえちよつと!!」

私の目の前にはさきほど明日香さんとお話していた京夏様とおつしやるリリイが仁王立ちしていた。

「エリザベスさん……だっけ？さっきから何？人の話も聞かずに無視して独り言とかどういふことなの？それとも……あなたも私と手合わせする？」

「ご冗談を。なぜわたくしが上級生であるあなたと手合わせする道理がありますか？」

「あなた……言ってることとやってることが矛盾してるんだけど……」

京夏様とおつしやるリリイは頭を抱えている。

「まあいいわ……ちようどメンバー探し、今日のところはあなたたちの判定人やってあげるけど、この勝負にあなたが負けたら私のレギオンに入ってもらうわ。それでいい？」

「わかりましたわ京夏様。ま、わたくし手合わせには自信がありませんから、負けるはずなどないですわ」

「まったく何なのあの子！いきなり手合わせとか・・・」

寮に戻ってつてきた私たちは自分のCHARMケースを手に持ちながら円ちゃんに怒りをぶつけていた。

「明日香ちゃん落ち着いて・・・」

「だってそう思わない？私たち初対面なのよ？なのにあの態度・・・あーもうあつたまくるー！」

この余る怒りを手合わせにぶつけないと。

「この機会だから円ちゃんもちやんと見ておいてね？リリイ同士で戦うときのルールとかもあるから」

「そうなの？」

「本来リリイ同士でCHARMを向け合うことは禁忌とされてるの。訓練目的以外ではね」

文句を言いつつもしつかり向き合おうとしてる私もどうかと思うが、円がいる手前あそこで断ったらダメだと感じてしまったのだ。

「例外もあつて今日みたいに訓練扱いになる場合もあるわ。あんまり気が進まないけどね」

「ははは・・・」

リリイとはいえ、(私含め)年端も行かない子ばかりだ。血の気の多い子がいてもおかしくはない。けど、さっきの様子はちよつとおかしく感じた。

さて、中庭に戻り、京夏様の案内で中庭から訓練棟へと移動してきた。

「ここが・・・」

御台場と違い、非常に小さっぱりとした印象を受ける。必要最低限の設備、といった感じだ。

「最新設備とかあるのかと思ってました」

「他所から来た人はそう思うかもね。百合ヶ丘はノインヴェルト戦術

に注力してるから」

「ノイン・・・って何?」

円が小声で耳打ちする。

「ノインヴェルト戦術っていうのは九人一組でマジをパスで回して最終的にヒュージにぶつけるやり方。百合ヶ丘はノインヴェルトのエキスパートの集まりみたいなのところだから」

同じく小声で説明する。

「寮に戻ったと見せかけて怖気づいて逃げたかと思いましたわ。さ、CHARMを出しなさい」

言うなり櫻子さんはCHARMを私に向ける。

グランギニョルのユニーク機か。どうやら結構なお嬢様らしい。

「へえ・・・ブラダマンテ。グランギニョルのCHARM持つてる子は百合ヶ丘でもほとんど見かけないわ」

京夏様も物珍しそうにCHARMを見ている。

「グラン・・・って?」

「CHARMを作ってるメーカーのひとつ。百合ヶ丘だとユグドラシルのCHARM使ってるリリイが多いって聞きますけど、そうですね京夏様?」

「ええそうね。私のダインスレイフ・カービンもね」

CHARMケースから自分のを取り出す。

ユグドラシル社製タングズニル。対ヒュージ戦では接近戦には有利とされている。

ここ百合ヶ丘ではグングニルを使うリリイが多いようだ。

「じゃ、始めましょうか櫻子さん? あなたから喧嘩ふっかけてきたんだから自信はあるんでしょ?」

あえての名前呼び。こちらも挑発に負けていられない。

「望む所ですよ。わたくしが勝つたら言うことを何でも聞いていただきますわ」

「手合わせだって」

「今年の新入生こわい・・・」

気がつけば周囲には上級生と思われるリリイ達にわか集まり

始めていた。

・・・誰のせいでこんな目立つことになったんだか。

とはいえ昨日の一柳さんの件に比べたら大したことはないかもしれないが。

「ルールは私の一存で決めさせてもらうわ。二人ともそれでいい？」

お互い無言で頷く。

「時間は・・・今日は関係からいいか・・・無制限、レアスキルはなし。で、ここは室内だから訓練弾及びシューティングモードの使用も禁止。あと分かっているとと思うけどヒューズの警報鳴ったら問答無用でこの手合わせはなかったことになるからね」

「さあかかってきなさい明日香さん！この勝負すぐ終わらせますわ」

「その自信はどこから来てるか知らないけど、私が勝ったら私の言うことを聞いてもらうわ」

自身のCHARMにマギを込める。マギの保有量は個人差が出てくるため、レアスキルは原則使用禁止だ。手合わせのルールは判定人の裁量だが、たいてい京夏様が言った範囲で納まることが多い。

「はじめ！」

さて、どう攻めるか。実のところ接近戦向きCHARMを使っている私だが、実際対リリイ接近戦はあまり得意ではない。

少しずつ間合いを詰めていく。

「はあっ！」

先に向こうから来た。

キンツッ！

CHARM同士が重なる独自の音が響き渡り、受け手に重くのしかかる。

「くっ・・・」

早い。私は受けるので手一杯だ。

口先だけなのかと思ったがどうやらそんなことはないらしい。御台場にいたとき、ルド女こと、ルドビコ女学院にやたらと手合わせをしたがる子がいたのをふと思い出す。

すかさず攻撃しようと懐に入ろうとするも間合いを取られてしま

う。

「さすがは明日香ちゃん御台場女学校出身ね。エリザベスさんもなかなか・・・」

京夏様は関心しているが、こちらは必死だ。

「はっ！」

櫻子さんは容赦なく攻めてくる、が、

(確かに早いし、自信あるのも納得行く・・・けど・・・)
「・・・」

すっかり受け手に甘んじてしまっている私。

「明日香さん、最初の勢いはどうしましたの？これじゃあいつまで経ってもわたくしの独擅場でしてよ？」

見る限り、何かを急ぎ焦っているようにも見える。

「明日香ちゃん庄されちゃってる・・・大丈夫かな・・・」

このままでは円ちゃんに申し訳が立たない気がしてきた。

「確かにあなたの言う通り実力はあるみたいね。けど、あなたには足りないものがひとつだけあるわ」

「何を根拠にそんなことおっしゃいますの？そういうことは・・・わたしに勝つてから言うことですよ！」

そのときだ。

「あっ・・・」

足を捻って一瞬態勢を崩す。

(あのときと同じだ・・・)

実を言うと一度手合わせで負傷したたことがある。その相手があの船田純きんいと様だった。私の不注意といえればそれまでなのだが、そのときの記憶が一気によみがえってくる。そのときに言われた言葉も――

『あなた・・・実力はあるのに対リリイはてんでダメなのね。実力は認めますわ。けど、このままではいずれ対ヒュージでもやられる未来しか見えませんわね。そんなお荷物なりリイは御台場には必要ありませんわ』

(なんでこんなときにあのときの事思い出すんだ私・・・)

このままでは私の負けになってしまう。が、
「き、京夏様!?!」

突然目の前に現れた見ていたはずの京夏様。

「エリザベスさんストップ!」

「ちよ．．．どういうことですか!?!」

「危険と判断したのでこの手合わせは無効。二人とも納得出来ないだろうけどいい?」

まさかとは思うけど．．．京夏様のレアスキルって．．．。

「はい．．．」

「え、ええ．．．」

京夏様はなぜ危険と判断したのだろうか?

勧誘・その1

「え? いいんですか私まで!？」

「いいのいいの。私としては殺伐としてるよりは和気あいあいとできるほうがいいからね」

と言いながらLGレキオン契約書を差し出す京夏様。

面白いところはこれだけ歴史を重ねた学園ガーデンにもかかわらず契約は書類、という古典的な方法が成立している点だろうか。

署名をするところまでは行つた円まじかちゃんだが、

「あの・・・これってどうやるんでしょう?」

と印の部分を指刺し尋ねる。

ああそつか、リリーのこの文化には慣れてないからね。

「ごめんごめん。えっと・・・印のところに指輪をかざして?」

「こう・・・ですか?」

右手薬指の、指輪の部分を印のところにかざす。

パアアアアア・・・

すると指輪が反応し、術式が起動、印のところにルーンが記された。

(これが円ちゃんのルーンか・・・)

ちなみにルーンとはリリーが個々に持っている識別信号のようなものだ。普通の人でいうところの指紋と同じような感じかもしれない。

結局手合わせはけんか両成敗、という形で京夏様に無理やり丸く収められた形となり、私と櫻子さん2人でLG契約書にサインをし、ルーンの捺印をすることに。

「これで正式にLGのメンバーよ。まだ人数が足りてないから機能するのはもう少し先ね」

結局のところ。京夏様に止められた形となってしまうので勝負は不明なまま。櫻子さんに圧された状態で止められたので実質私の負けだろう。それにしても――

(まさか京夏様が私と同じレアスキルだなんて・・・)

百合ヶ丘にはほとんどいないと聞いていたのだが・・・レアスキル

——ゼノンパラドキサ。

地面を高速移動できる縮地と、相手の攻撃の動きを事前に先読みすることができるこの世の理の複合サブスキルのようなもので、高速移動と相手の動きを読むことを同時に行えるスキルだ。ただ——
今まで何人か同じレアスキル使いの人を見てきたが・・・あそこま
でキレイで隙きがなく、動作が早いリリイは見たことがなかった。
(私なんか足元にも及ばないなあ・・・)

というのが現時点での素直な感想だ。

「では改めましてごきげんよう。櫻子・S・エリザベスセーぬですわ。ここ
に来る前は聖メルクリウスにおりました。以後お見知りおきを」
と一礼する櫻子さん。

「聖メルクリウス出身だったんだ・・・」

聖メルクリウス・インターナショナルスクール。百合ヶ丘同様鎌倉
府の5大学園ガーデンと言われている。御台場とも姉妹関係ではあるが、私自
身はあまり意識したことがない。というか、元いた予備隊に出身リ
リイがいなかったから、かもしれない。

「ええ。もうひと方同じ学園から編入されているようですが、わたく
しは面識のない方ですわ」

「で、そもそも初対面なのになんで私に喧嘩吹つけてきたんです？
エリザベスさん？」

また暴れられても困るのであえての名字呼び。

「それは・・・その・・・と、とにかく！あの理由の通りですわ！」

言いにくそうにしている。まさか勢い!?

ノリと勢いだけで喧嘩とか勘弁してもらいたいところだ。

「意味がわかんないんだけど・・・」

ということ、この日はそのまま解散という形に。

「まさか入学二日目にしてLGに入れるとはね・・・」

天上の庭（寮と併設の共同浴場）での会話。上級生優先で入浴なの

だが、私たち1年生は一番最後の時間(20時)だ。

「明日香ちゃんはともかく私まで入れるなんて・・・」

「いや、円ちゃんは将来を見越してだと思うな。絶対いいリリイになれるよ」

「そんな・・・言い過ぎだよ・・・私なんて大したこと・・・」

と言いかける円ちゃんに私が先に口を開いた。

「円ちゃん。私なんて、とか言っちゃダメ。いい?理由はどうあれ京夏様が認めてくれてるんだよ?もっと自分に自信を持たなきゃ」

「そうですね。もっと自分に自信をお持ちなさいな。そうすればわたしや明日香さんみたいになれますわ」

「うわっ!」

背後から櫻子さんの声。思わず足を滑らせそうになってしまった。

「・・・え、エリザベスさん。あなたいつからいたの?」

「最初から後ろにいましたわ」

あっけらかんと答える。

「その割に気配全く感じなかったけど・・・ストーカーか何か?」

「まさか。たまたまですわ」

足を組み、リラックスしている様子。

「で、何か用?エリザベスさん?」

わざと煽るように言ってみる。

「あら・・・随分と冷たいんですね。せっかく同じLGになったのですからもっとフレンドリーに接していただいてもかまいませんのに・・・」

その態度のどこがフレンドリーだと突っ込みたくなるがまあいい。

「じゃあ・・・ベス」

「・・・えっ!」

「え・・・じゃないでしょうよ・・・あなた自分からフレンドリーに・・・って言ったんじゃない?それも否定する気?」

「いえ・・・そういうわけでは・・・」

櫻子さん・・・いや、ベスはきよとんとしている。

「そうだよベスちゃん。せっかく同じ仲間になったんだから仲良くなりたくないな」

「円さん・・・」

「じゃあ決まり。今日からベス呼びで」
「・・・」

ベスが何かぼそぼそと何か呟いた気がしたが、ハッキリとは聞き取れなかった。

「・・・私、怖いな」

「なにがですか?」

「あまりにも事がうまく運びすぎてるから、かな。まだなにかありそうな気がするんだよね・・・」

「ひゃあああああああああ!」

ザッパーン

浴槽に落ちる音と共に後ろから悲鳴らしき声。しかし姿はない。よく見ると・・・。

「あ・・・あれ?もしかして・・・溺れてる!?!」

音がしてから1分近く経つが一向に上がってこない。

「大丈夫!?!」

慌ててそのリリイを浴槽から上に揚げる。

「人工呼吸!」

「う、うんっ!」

私が呼吸を確認。よかった。息はしているようだ。円ちゃんが气道を確保し、そのリリイの鼻を摘み、息を吹き込んでいく。

ふうふうふう・・・

しかし反応はない。

「もう1回!」

「一体どうしたんだろう?あれは間違いなく悲鳴だったけど・・・」
「わかんない・・・誰かに襲われたとか?」

「襲われたって・・・誰にですか?そんなことする方がここ百合ヶ丘に・・・」

「げほっ・・・げほっ・・・げほっ・・・」

吸い込んだお湯を吐き出し、ようやく気づいたようだ。

(よかったあああああああ……)

ホッと一安心。

「あの……ありがとうございます……ごいいます……。助かりました」

三編みおさげにメガネをかけたリリイが私たちに一礼して、その場を去ろうとする。

「あー待ってー!」

「はい?」

そのリリイは私たちのほうを向き、

「どうして溺れそうになったの?」

「えっと、実は――」

彼女によると友達に追いかけ回された、とのこと。

「しっかし……なんでまた天上の間で……?」

「わかりません……元々友達はアーセナル希望なので誰かのCHARMいじりたいだけなんだと思いますよ?あ……忘れてました。私、李組の紫衣原咲良しいぼらさくらって言います」

「私は尾上明日香。よろしくね」

「咲良ちゃんかー。私は敷井円。よろしく」

「櫻子・S・エリザベスですわ」

「エリザベス……ひよつとしてグランギニョルのマテリアルの人ですか?」

「あら、あなたお詳しいんですね。ええ……わたくしのお父様はマテリアルマスターですわ」

え……マジか……。

「そんなすごい人だったの!?!」

私自身あまり詳しいわけではないのだが、グランギニョルのCHARMはマテリアルネーム(作っているところ)と一緒に使用者のルーンも刻印される、と聞いたことがある。

そもそも維持費の問題でグランギニョルのCHARMなんて夢のまた夢だ。ケタが違いすぎる……。

「わたくしよりもつとすごい方がいるじゃありませんか」

・・・どうやらバスも楓さんのことは知っているらしい。

「あの・・・いろいろ私の知らない単語が・・・」

「まず、マテリアル・・・はCHARM作つてるところね。マテリアルネームなんて呼び方が正解に近いかも」

「アーセナルは？」

「CHARMを専門にいじる方のことですね。ここ百合ヶ丘は戦うアーセナルの育成に力を入れてっていると聞いてますわ」

「アーセナルかあ。メンテナンスは定期的にしなないとだし、いまのうちから見つけておかないと。」

「ねえ咲良ちゃん。その・・・友人つて子を私に紹介してくれない？LGにも入ったし、CHARMのメンテとかいろいろあるから」

その咲良ちゃんだがあまり表情が良くない。

「あれ・・・なにか問題でも・・・」

「問題つていうか・・・私は紹介してもいいんですけど・・・なんていうか・・・」

その口ぶりを見る限りは問題児な感じもする。

「円ちゃん。CHARMのメンテの話が出たけど、銃芯とかブレードは消耗品だからね。定期的にメンテナンスしないと・・・だからアーセナルを見つけないほうがいいのよ」

流浪していろいろな人にメンテ出す人も中にはいるらしいが、個人の意見としてはかかりつけはいたほうがいい、というのが本音だ。

ということと、咲良ちゃんの案内で工場の工房が集まる部屋にやってきた。

「工場の科つていつ来ても物々しいのよね・・・」

「まあ・・・普段メンテ出しに来るとき以外は滅多に来ませんからね」

『縮妻わがつまのりこ乃莉子』と書いてあるプレートの前で止まった。

「乃莉子ちゃん・・・ちよつといい？」

部屋に入るなり開口一番思ったのは、

(どうして工廠科の人たちってみんな揃いも揃って散らかってるの?)

CHARMの部品が散乱している。お世辞にもキレイな部屋とはいいがたい。

「咲良じゃん。どした?CHARMのメンテならこの前したばっかじゃないっけ?」

「ごきげんよう。はじめまして。櫻組の尾上明日香です。いきなりで悪いんだけど、今度CHARMのメンテやってほしいの。私、外部生だから知り合いとか一切いなくて・・・」

「はじめまして。結妻乃莉子です。CHARMのメンテか・・・いいわよ?」

「ありがとう!私タングズニル使いなんだけど、ちよつとした仕掛けしてあって・・・普通のアーセナルの人にはちよつと言ひ出しづらくて・・・」

と、ある資料を乃莉子さんに渡す。

「へえ・・・シユールディングモードでわざと重たくなる仕組み、かあ・・・実装することとなった経緯を説明するとえらい長くなると思うので詳細は割愛するが、簡単に説明すると乃莉子さんの言う通り、シユールディングモード起動時のみ重くなる仕組みだ。」

で、初対面であるにもかかわらず乃莉子さんを信頼してるのか、というと――

本人のものと思われるCHARMを見たからだ。おそらく自作でユニーク機と思われるそのCHARMが作れるということは・・・相当の腕があるということだ。

「え?同じクラスだったの!?!」

「何を今更驚いてますの?クラス表にあったではありませんか。ちやんと見てまして?」

次の日。今日から講義が始まる、のだが・・・まさかベスも同じク

ラスだったなんて。

「いや、自分たちの分しか見てなかったから・・・」

なんとも心苦しい言い訳。

「まあ、普通はそうですわね。講義と演習のあとはどうされますの?」

「えっと・・・終わったら円ちゃんと一緒に訓練棟の射撃場に行くかな」

「射撃場?」

「昨日のあのあと京夏様に相談したら『射撃場あるよー』って教えてもらったから」

「それはわかるのですけれど・・・どうしてですか?」

ベスが疑問に思うのも無理はない。

「えっと・・・射撃場使ってみたいのもあるけど、円ちゃんの練習がメインかな」

そう、一昨日約束していたとおり今日こそ使い方(シューティングモード)のレクチャーをするつもりでもある。

「そういうえば、円さんは全くCHARMを扱ったことがありませんでしたわね・・・わかりましたわ。私も付き合って差し上げますわ」

「え、いいの?ベスちゃん他に予定とかあるんじゃないの?」

「構いませんわ。わたくししたちリリイは助け合ってこそ。実力至上主義を謳ってる方もいらつしやるようですが、それは間違ってますわ! 実力があるのは結構なことですが、協調性がなかったらそれはただの邪魔でしかありませんわ!」

「ベスちゃん語るなあ・・・」

確かにベスの言うことは正論なのだが。その逆も然りなのだ。それが命取りになることもある。

講義と演習が終わった後、

CHARM初心者組と経験者は演習は別メニューなので、そこから合流して訓練棟の奥まった所にある射撃場にやってきた。すでに数人のリリイが利用している。

「早いもの勝ちかー．．．さっさと始めましょ」
フォン．．．

空いているブースに入り指輪をかざしCHARMをケースから取り出す。ユグドラシル製グングニル——百合ヶ丘で最も使われている初心者向けともいわれるCHARMだ。

隣のブースからは、

「あああああああまただああああああああ
とうなだれる声。

「みどりちゃん力みすぎ．．．」

咲良．．．ちゃん？

どうやら隣も同じように教えているようだ。

「では、わたくしからお手本を．．．」

ベスが言い終わる前にすでに構えていた私が一発撃つ。

パンツ！

訓練弾独特の、少し乾いた音。御台場にいたときは仮想空間の画面に向かって撃つていたのもあり、私にはすごい新鮮に感じられる。

弾はもちろん命中。若干だが的中央より少し下の位置に穴が空く。

パンツ！

間髪入れずもう1発。寸分のズレなく同じ位置へ。

パンツ！

さらにもう1発。寸分のズレなく同じ穴へ。

「なっ．．．!?ちよつと明日香さん!?!」

「いやー．．．ゴメンごめん．．．こういうアナログな設備って初めてだから興奮しちやっつて、つい．．．」

しかし、当の円ちゃん本人は目を輝かせていた。

「明日香ちゃんすごいー!」

「止まってる的に命中してもヒューズは倒せないよ?あくまで練習は練習。じゃあやってみよっか」

円ちゃんがCHARMを構える。しばらくするとCHARMのコアが光り起動。が、円ちゃんはそこで固まってしまった。

「どうしたの?」

「ごめん・・・ここから先どうやっていいかわかんなくて・・・」
「こうですわ」

ベスが円ちゃんの手の上からある一点に触れさせる。
ガチャン！

すると長身の剣の形をしていたグングニルが形を変え、半分ほどの大きさになった。

「へえ・・・グングニルのシューティングモードってこんななんだ・・・」
「明日香ちゃん見るのは初めて？」

「グンニグニルのはね。御台場で使ってる子はいなかったから」

扱いやすさの点だろうか、百合ヶ丘では第2世代CHARMが主流なのであろう。御台場では第3世代を持つリリイが圧倒的に多い。

「で、この後どうするの？」

「そのまま意識をCHARMに集中させればマギが溜まりますわ。後は照準を睨んでトリガーを引けば・・・」

「やってみる・・・できるかな・・・」

「大丈夫。こうやってリリイになって百合ヶ丘に入れてるんだから。けど。その前に・・・」

「一つアドバイスを。」

「えっ!？」

円ちゃんの背後に回り肩と腰に手を添える。

「痛かったらごめん。ちよつと直すね」

「もうちよつと上体起こして・・・背筋伸ばす。で、手の添える位置はもうちよつと前のほうがいいかな・・・」

見る限り円ちゃんの姿勢が変（というかへっぴり腰のよう）に見えたので矯正。

「実戦だとこんなことやってる余裕ないけど最初のうちは基本だけでも覚えとかなないと。それと・・・」

さつきから気になっていた隣のブースにも目をやる。

「なに? あたしのやり方が悪いっての?」

「あなたも同じだよ。姿勢が安定してない。それと銃芯が下に向きすぎ。もつと上に向けないと・・・」

赤髪でショートボブ、若干背が低めで私のほうが見下ろす形にはなるが、むくれ顔をするみどりと呼ばれたりリイ。

「ダメだよみどりちゃん・・・喧嘩売っちゃ・・・あ・・・昨日はありがとうございました」

やはりだった。おさげ髪は咲良ちゃんだ。一礼される。

「ごめんなさいね。横からつい口出しを・・・」

「いいんです。私も人に教えるのあまりうまくないですし・・・」

「それともう一つアドバイスするとすれば・・・撃つたときに衝撃で的から位置がかなりズレちゃってるみたいだから、構えるときは逆に力を抜かないと。撃つたときに変な方向に飛んでっちゃうよ?」

「んー・・・」

みどりと呼ばれたりリイは少し考えてから、

「今日はもういいや。咲良、また明日な!」

スツ・・・

言うなりみどりと呼ばれたりリイは一瞬でその場から姿を消してしまった。

(縮地か・・・もしかして、この子日常的にレアスキル使ってる!?)

「すみません・・・みどりちゃん・・・普段からああいう子で。知らない人に教わったりするのが苦手みたいなんです・・・」

と咲良ちゃんは申し訳なさそうに謝る。

「いや、余計なことをしたのは私のほうだし」

そんなやり取りをしている間に円ちゃんはすっかり終わっているのかと思いきや、まだ構えて待っていた。

「ごめん・・・今のやり取り聞いてたら、撃つたらなんか申し訳ないなーってなっちゃって・・・」

そんなの気にしなくていいのに。

「やってるわね。調子はどう?」

そこへ後ろから京夏様が声をかけてきた。

「ごきげんよう京夏様、実はこれからで・・・」

「けど、もう穴空いてるわよ?」

と私が空けた的を指差す。

「あはは・・・すみません。実はあれ私で・・・アナログな設備にテンション上がっちゃって・・・つい・・・」

「それにしても随分射撃精度いいわね。これ一発だけ？」

「いいえ違いますわ京夏様。これにはわたくしも目を疑いました
が・・・明日香さん3発撃つて3発とも同じ位置ですわ」

「へえ・・・明日香ちゃんがねえ・・・」

と関心している様子。

「ところで・・・そっちのリリイは？」

と、その後京夏様が咲良ちゃんのほうに目をやる。

「ご、ごきげんよう・・・ええと・・・あの・・・李組の紫衣原咲良です。えっと・・・」

咲良ちゃんが動揺しつつも今の状況を冷静に説明しようとする。

「確か・・・えっと・・・エリユーズニルの・・・」

と言いかけたときだ。

「よく知ってるわね。正確には『だった』だけど」

「し、そうでした！大変失礼しましたっ！私失礼なことを・・・」

「気にしないでいいよ咲良ちゃん。事實は事實だから」

「あの・・・京夏様？だった・・・っていうのは・・・」

「ああ、ごめんね。気にしないで。その話はメンバーが揃ってある程度落ち着いてから話すつもりだから・・・」

「えっ!?!ええええええええっ!?!」

円ちゃんの素っ頓狂な声。

慌ててそちらを向くと完全に慌てている姿が見て取れる。利き目と思われる右目の眼球中心に、遠くを見るための拡大目盛りと思われるガラスのような層がいくつか展開されていた。

もちろん当の本人は大困り・・・なのだが、私たちからすれば喜ばしい出来事だ。

もちろん京夏様はニコニコしている。

「おめでとう円ちゃん！」

「明日香ちゃん・・・これどうしたら・・・京夏様あ・・・」

レアスキル——天の測目。数キロ先のものを誤差なく把握する。遠距離射撃を志すリリイからすれば花形みたいなものだ。ただ、LGとして冷静に考えると1人ぐらいいはいても惜しくはない存在なのだが。

おそらく・・・ではあるけど、円ちゃんがCHARM・・・ではなく、自身のマジを集中した結果今回のレアスキル覚醒になったのではないかと思う。

「レアスキル覚醒おめでどう。それにしてもすごい早さね・・・私でも1年近くかかったのに・・・」

「ええっ!?!でもあの・・・これってどうやったら戻るの!?!」

「うーん・・・一旦マジの意識を切って?」

とはいえ軽くパニック状態に陥っている円ちゃんに冷静な判断能力はない。

これは・・・円ちゃんが落ち着くまで待つしかないかなあ・・・。

勧誘・その2

パンツ!

ようやく円ちゃんのレアスキルが治まり、改めて仕切り直し。撃つところまでできた。

「どう・・・かな?」

「まあいいんじゃない?後は早さと正確さかな・・・」

「そうだね・・・」

私から見ても円ちゃんの撃ち筋は悪くないと思った。ただ、気になるのが・・・

グングニルは近中距離射撃向きではあるものの、遠方射撃であれば対ヒュージ戦で手を添えて撃つてもこの機構ではブレが生じてしまう。シューティングモードでの命中率は低いと思う。それを差し引いても初心者でも扱いやすいCHARMということで百合ヶ丘では普及しているわけだ。

私のCHARM——タングズニル——はそのグングニルの欠点を補うためにあえて格納部分を伸ばした。なので、シューティングモードでの安定感ヒヒイロカネ製のアステリオン並に高い。

「あの・・・京夏様。円ちゃん、間違いなくBZだバックゾーンと思うんですけど、どう思います?」

京夏様に小声で耳打ち。ちなみにBZとは対ヒュージ戦においてフォーメーションを取る際の位置付けのことだ。

「そうね・・・私もそう思うわ。今のところAアタッキングゾーンZが琴乃しかいなくて心許ないから・・・できれば明日香ちゃんかエリザベスさんにお願ひしたいところね」

「えっ?私ですか!」

ちよつと待つて・・・そこは隊長である京夏様が出るところでは・・・
「何驚いてるの。私は明日香ちゃんの可能性にかけてるのよ。ホントは私が出なきやいけないところなんだろうけど、私が前に出ちゃったら指示とか誰が出すの?」

「あのっ!・・・京夏様・・・お願いがあります・・・!」

咲良ちゃんが突然大声で京夏様に声をかける。

「私と・・・守護天使シユツツエンゲルの契りを結んでももらえないでしょうか？私・・・中等部で京夏様の活躍を聞いて、高等部に上がったら絶対京夏様と守護天使になるんだって心に決めてました。もちろんムリならムリで構いません。そのときは諦めます・・・お願いします京夏様」

言つて咲良ちゃんは頭を下げる。

守護天使——シユツツエンゲル——上級生が守護天使となり、下級生シムト(妹)を導く、疑似的な姉妹のことだ。ここ百合ヶ丘のリリイになったのであれば誰もが憧れる存在である。

(咲良ちゃん大胆だなあ・・・守護天使かあ・・・あれ、でも・・・) 守護天使は上級生から下級生に対して示すものじゃ・・・。

「ありがとう咲良ちゃん。でもごめんね・・・もう決めてる子がいるの・・・」

そう言つて私のほうに目をやる京夏様。

「ちよつと待つて下さい！お気持ちは嬉しいです。けど京夏様とは会つたばかりで私まだ何も・・・」

「明日香ちゃん」

私に向き直し、

「直感・・・じゃ、ダメ、かな？」

「・・・」

直感？

「ほら、明日香ちゃんのこと友達から聞いたつて言つたでしょ？御台場女学校つて百合ヶ丘と違つて自主性よりは徹底教育つてイメージがあるから、いくらそこから外れてきても実力はあるんじゃないかつて・・・」

「やめてください！京夏様が思うほど私は・・・」

すると京夏様は突然私の背後に来て背中を覆うように抱きしめる。

「えっ!?!あの・・・京夏・・・様？」

困惑する私をよそに、

「明日香ちゃん・・・守護天使・・・いいなあ・・・」

撃ち終わった円ちゃんが羨ましそうにこちらを見ている。

「待つて、まだなるって決まったわけじゃ・・・」
「ごきげんよう。やってるやつてる」

見ると背は京夏様と同じぐらい、紺色の髪をポニーテールにまとめたりリイがやってきた。

「琴乃も見に来たの？あ、咲良ちゃん。守護天使にはなってあげられないけど、一緒に戦うことはできるよ。それじゃダメかな？」

「ごきげんよう琴乃様」

「はじめまして。鬼龍院琴乃って言います。京夏ちゃんと同じクラスで同じLGよ。よろしくね」

とニコニコ笑顔で答えてくれた。

「で、京夏ちゃん。ホントに明日香ちゃんを守護天使にするつもり？」
「見ての通り。本人は困ってるみたいだけどね」

「・・・あの、京夏様・・・いつまでこうしてるつもりです？すごい恥ずかしいんですけど・・・」

「守護天使だつて・・・いいなあ」

「私も妹シムレトほしい・・・」

見ればその場にいたリイたちの注目的になっていた。

「うらやましい・・・明日香さん？京夏様とはどういう関係なんですの？」

「あんたは知ってるでしょうに・・・白々しい・・・」

尾上明日香——御台場女学校出身。元東雲予備隊メンバー。当時の予備隊格付けランクこそ上位には及ばないものの、実力は確かなものだと思っている。船田姉妹（特に純きいと）のせいで卑屈になった彼女に自信を取り戻して欲しくて願ひ出た・・・と思いたい。少なくとも今の私はそう思っている。決して同じレアスキル持ちだから、ではないはずだ。

「・・・そうね。ゴメンなさい」

嫌がってはないが、さすがにかわいそうなので明日香ちゃんからは

離れる。

「京夏様。一緒に戦うっていうのは……?」

「琴乃、今日持ってきてる?」

「持ってきてる、とはLG契約書レギオンのことである。」

「あ。ゴメン……持ってない」

「咲良ちゃん。後で私のところに来てくれない? 詳細を説明するわ」

「あ。はい……」

落胆の咲良ちゃん。守護天使にはなってあげられない代わりに私の側にいてもらうことがせめてもの償いになるのではないか、と思っただの。

「京夏様。守護天使は一旦お断りします。私、京夏様のことよくわかってないですし、それに……」

一旦言葉を切る明日香ちゃん。

「今の私に必要なのか?と問われたら答えは『NO』です。もしかしたら同じLGのメンバーとしてやっていくうちに変わるかもしれない……何かのキツカケでもない限り気持ちは変わらないと思います。すみません」

頭を下げる明日香ちゃん。

「そっか……ごめんね突然言い出して。でも私の気持ちは変わらないから」

一旦はフラれた形となってしまうが、諦めてしまったわけではない。私のメンタルが落ち着いている間は平気かもしれないが、それがなくなったときが一番怖い。レアスキル——ルナティックトランサー酔狂の月——とも似ているかもしれない(琴乃には申し訳ないけど)。

「そう。それは残念ね……」

部屋に戻り、幼なじみでルームメイトの佐野重初花さのえういかの開口一番の台詞がこれだった。

「けど、諦めたわけじゃない。いきなり言ってられるのは当たり前前

だもの。それに——」

一旦言葉を切る。

「明日香ちゃん。まるで昔の私だわ」

「そう?」

「ええ……お姉様に出会う前の私を見てみたい……お節介焼きで面倒見が良くて。そのくせ自分のことを犠牲にして……」

口にしてそうか……と思った。私が明日香ちゃんに感じたもの——過去の自分そっくりだった。

「後1人か……」

思ったことが口に出ってしまった。

「やっぱり梅誘うの?」

「まさか。さつき琴乃に聞いたんだけど、明日円ちゃんが訓練するそうよ。その相手のリリイが……」

「守護天使かあ……」

京夏様から告白(?)されてしまったわけだが、正直困惑している。百合ヶ丘に来て、2日目にして手合わせの申込みをされて、その上での申し入れ。京夏様がどんな方かも分かってないのもあつて断つてしまった。それと——

納得できなかった点がひとつ。最初に会ったときにも言っていたが、御台場の誰から私のことを聞いたのか、である。私の知っている誰かであれば、連絡を取って私が納得行くまで話を聞くのだが、今の時点では想像すらつかない。

「あ。明日香ちゃん」

そして今一番会いたくない人——夏目京夏様が。

「ごきげんよう……ごめんさい!」

「待って!」

反射でその場から走り出していた。しかし、京夏様は追いかけてこない。不思議に思ったが、とにかく今は顔を合わせたくない。それだ

けで走り出した結果——

「あれ、ここどこだろう?」

気がついたときには学園の外に出てしまっていた。見ればその場所からは鎌倉の海岸が一望できる。

「きれーい……」

と思っただのはそこまでで、その場所は少し異様な光景であった。

(……墓地?)

不均等に建てられた墓標には名前が書かれている。

よく見ると百合ヶ丘の校章が掘られていた。ここって……。

「ここにいましたのね……」

「ベス……よくここがわかったわね」

「京夏様から聞きましたの。でもここには用はないんじゃないやなくて?」

「……あんだ、知っててワザと言ってる?」

「明日香さん」

面と向かってベスとちやんと喋るのは初めてかもしれない。

「あそこまでしてまで京夏様の好意を断る理由はなんですか?あるんですしたらちゃんと説明を……」

「……関係ない」

「明日香さん?」

「あんだには関係ないって言ってるの!やぶからぼうに何?別に私がどう思おうと勝手でしょ!」

「それはそうですが……」

今の私は精神的に不安定になっているのかもしれない。

「それとも何?また私に喧嘩売ってる?だったら受けるわよ?今度は非公式でね!」

非公式——判定人を介さずに行うルールなしの対人戦だ。非公式対戦を好む所謂デュエリストと呼ばれるリレイ達も存在する。もちろん生徒会に見つかれば厳しい罰が待っている。下手をしたらリレイの身分を剥奪されるかもしれない。

「そこまでは言ってませんわ。わたくしはただ……」

「悪いけど今は一人にさせてくれない?今の私じゃベスに何するかわ

からない・・・」

咄嗟に言ってしまったが、何をするかわからないのは本当だ。せつかく仲良くなったばかりなのにその関係を自ら壊しに行きたくはない。

「・・・わかりましたわ。なるべく早く戻ってくださいな。円さんが心配してますわ」

「・・・やっちゃったかな」

ベスはおとなしく引き下がってくれたものの、あまり良くは思っていないはず。

「明日香ちゃん」

今度は意外な方が私の元にやってきた。

「・・・琴乃・・・様?・・・どうしてここに?」

「円ちゃんが心配してるよ?寮に戻らないの?」

「ベスにも同じこと言われました。それで・・・わざわざここまで?」

「それだけじゃないけどね」

言いながらニコニコしている琴乃様。が、表情を変え、真剣な眼差しになった。

「明日香ちゃん。あまり京夏ちゃんを攻めないでほしいな。あの子明るく振る舞ってるけど、自分を抑え込んだところあるから」

「・・・」

「京夏ちゃんね・・・自分の守護天使を亡くしてるの・・・理不尽な理由でね」

「理不尽な理由って・・・」

「それは私からは言えないわ。けどね、これだけは言える・・・今の京夏ちゃんには支えになる子が必要な。もちろん、守護天使の意味は分かってるわよね?」

「それはもう。百合ヶ丘リリーの憧れですから」

「なら、考えてくれないかな?今後の私たちのためにも、ね」

「・・・少し時間をください。今は頭の整理が付いてなくて・・・それと琴乃様。ちよつと相談が・・・」

「・・・明日香ちゃん。顔が怖いよ？大丈夫？」

寮に戻り、円ちゃんに言われた一言。

「え？私そんなに怖い顔してる？」

「怖いっていうか・・・考えてる？」

「・・・京夏様の守護天使の申し入れはすごい嬉しいんだけどね。私どうしていいかわかんなくて・・・」

「私、明日香ちゃんが羨ましいな」

「えっ？」

「あ。守護天使が・・・ってことじゃないよ？そりやあ私かなれたらもちろん嬉しいけど、百合ヶ丘に入ったばかりでそんなの贅沢・・・じゃなくて！」

一旦息を整えた後、

「そんな悩みがある明日香ちゃんがうらやましいなあって・・・私は、今をどうしようかで必死だから・・・」

「あ、そうだ。明日さ、ちよつと付き合いってほしいんだけど」

翌日の講義終わった後、隣のクラス——李組にやってきた私と円ちゃん。

「あ。いた。咲良ちゃん！」

程なく私たちを見つけ、こちらにやってきた。

「ごきげんよう明日香さん。なにか用でしょうか？」

「昨日の赤髪の・・・みどりちゃん・・・だっけ？いる？」

「みどりちゃんなら上級生に会いたいからーって講義終わってすぐ出ていきました。あの子楽しいこと見つけると見境いなくなるみたい

で縮地使用って飛んでいきました・・・」

と少々苦笑い。つていうか、日頃からレアスキル使ってるのかあの子・・・。

「上級生探しかあ・・・難易度高いなあ・・・」

「それと明日香さん、円さん」

「なに？」

「よろしくおねがいますー!」

深々と頭を下げる咲良ちゃん。

「あの後京夏様のところに行って正式にLGのメンバーになりました。なのでご挨拶を・・・」

「そこまでかしくまらなくていいよ。同い年でしょ？」

「そうだよ咲良ちゃん。それだと話かけづらいかな・・・」

「もつと普通に話せない？それだと上級生と話してるみたい」

「普通・・・ですか？」

「あー!」

後ろから耳を抑えたくなるような大声。

赤髪ショートボブのリリィ——みどりが立っていた。

「あ。みどりちゃんおかえりー。早かったね」

「あのとき喧嘩売った子!」

「失礼ね。喧嘩売ったんじゃないわよ？アドバイス」

「じゃ、あたしはこれで・・・」

縮地で逃げられる——そう思った私はとっさにレアスキルを発動、みどりに近づいて制服の裾を掴む。

「なにすんだよー!」

「今日は逃げてもらっちゃ困るのよ。あなたに用事があるんだから」

「へ？あたし？」

「そ。だから付き合ってもらおうわよ」

ということをやってきた訓練棟の修錬場。一昨日私とベスが手合わせしたところだ。

「はい。2人ともCHARM出して？」

「あ、明日香ちゃん・・・ホントにやるの？まだちゃんと使ったことな

「いんだよ？」

「それはみどりちゃんも同じじゃない？だよね、咲良ちゃん？」

「そうです。私もまだ・・・そこまでは教えてないので・・・」

「マジの入れ方はシューティングモードのときと同じ。ただ、入れ方次第でブレードの耐久性が変わる・・・んだけど、最初のうちは入れるところから始めよっか。そしたら・・・」

遅れて琴乃様もやってきた。背中にはCHARMケー・・・ん？普通のより長いような・・・。

「みんなごきげんよう。遅くなってごめんなさいね。準備してたらこんな時間に・・・」

準備？

見ると手にはなにやら容器を持っている。

「琴乃様。昨日の打ち合わせ通り持ってきてくれました？」

「ええ。私のCHARMは百合ヶ丘でも有名だから知らない人はいないと思うけど」

と、ニコニコしながらケースから取り出す。

「うわあ・・・これが・・・」

私は昨日直接聞いてビックリしたが、実物を見るとなおさらだ。

「ながーい・・・これが、琴乃様のCHARMですか？」

「私も、実物は初めて見ました。中部は校舎が違うので噂だけは聞いてましたが・・・」

と、感動ぎみの咲良ちゃん。

「そう。フリングホルニ。私が百合ヶ丘に来たとき、最初はグングニルだったの。けど、全然扱えなくて・・・」

「で、当時たまたま居合わせたユグドラシルの開発担当アーセナルが琴乃様のために作ってくれた、と」

私が付け加える。

「ええ。これのおかげで今の私があるって言ってもいいぐらいよ」

特徴的なのはCHARMの長さだ。私の身長が158cmなのだが、それを遥かに超える。見た目はグングニルには似ているが、唯一違う点は可動部分がなく、銃芯と思われる部分が大幅に延長されてい

る点だろう。一般的なCHARMは必ず持ち手が存在するのだが、このフリングホルニにはそれがない。

「でもどうしてユニーク機なんです？選択肢は他にもあったと思うんですが・・・アステリオンとか」

「長さが足りないのよ・・・」

「長さ？」

「ええ。構えるクセでこの長さじゃないとどうしても攻撃できなくて・・・」

私には、琴乃様の言ってる意味がいまいちよく分からなかった。

「ごきげんよう。今日は何？みんなで合同訓練？それは関心だわ」

京夏様もやってきた。今日は来ると聞いてなかったが、おそらく琴乃様が呼んだのだろう。

「ごきげんよう京夏様。今日は訓練というよりは講義のほうが正しいかも・・・」

「何？フリングホルニの話？ああそっか・・・みんなは知らないんだっけ。琴乃、私が説明してもいいいわね？」

講義、とは言ったものの、今は皆がフリングホルニのほうに目が行ってるため、その話題になるのも自然な流れだ。

「ええ」

「琴乃はね。昔からやってる薙刀の師匠でもあるのよ」

「師匠じゃなくて当主。実家が道場なんだけど、私が寮に入っちゃったから今は弟に任せてるわ」

琴乃様の苗字からしてなにかある、と思っていたが、まさかの結果に驚きを隠せない。

「私のCHARMの話はとりあえずおしまい。今日は手合わせするんでしょ？」

「ここでみどりが手を上げる。

「しつもん！」

「何？みどりちゃん？」

「・・・手合わせって何？」

「練習試合みたいなものよ。今回みたいだね」

「あの・・・琴乃様」

「何、明日香ちゃん？」

「みどりちゃん・・・LGメンバーじゃないんですよ・・・なのでちよつと語弊があるかなーと・・・」

「とにかく2人ともCHARM起動して？」

2人のCHARMにマギが入り起動する。

「で、これから2人には手合わせしてもらおうわけだけど・・・本来同級生リリース同士だったら判定人に上級生を立てなくていいんだけど、今日は琴乃様をお願いしたわ」

「そういうこと。なのでよろしくね。円ちゃん、みどりちゃん」

「はい」

「おう」

「2人とも初めてだからとにかく怪我のないように。ルール・・・じゃないわねこれは。分かっているとは思うけどレアスキルは禁止ね。勝利報酬・・・はどうするの明日香ちゃん？」

「あー・・・」

実は全然決めていなかった。

「じゃあ、私からいい？」

「京夏様？」

「勝ち負けじゃなくて私から見えて判断させてもらおうわね。けど練習だからそんなに緊張しなくてもいいわよ・・・って言ってもムリか」

苦笑いの京夏様

「えつと・・・」

明らかにガチガチに緊張してる円ちゃん。

「いつでもいいよー」

CHARMを起動させたただけなのに大喜びしてるみどりちゃん。

「集中していればブレードにマギが入るから。そしたらそのまま始めちゃって」

フォン！

「おー！すげー！」

先にブレードにマギが入ったのはみどりちゃんのほうだった。

元々琴乃様みたいにかかしらの運動や習い事をしている子のほうがマギを入れるコツはつかみやすいと思う。

「明日香ちゃん．．．どうしよう．．．マギが入らない．．．」
こればかりは個人差だからなあ．．．アドバイスしようがない。

「余計なことを考えちゃダメ。自分はCHARMを使うんだ、つていうことを常に考えて」

京夏様のアドバイスは的確だと思う。

「円ちゃん。参考になるかわからないけど、鬼龍院流の心得にこんなのがあるわ。『邪念を払い心を無に。体を成し、己の力となる』先代．．．お父様から良く言われたわ」

はるか昔の本で剣豪が箸で蠅を掴んだ、というのを読んだことがある。集中していれば不可能はない、という例えだが、琴乃様の言う心得はそれに近いと思った。

「京夏様ー、もうはじめちゃうよ?」

みどりちゃんが痺れを切らした。にしても早い．．．我慢ができないのだろう。

「おりゃあー!」

キンツ!

「うわあつ!」

マギが入ったCHARMで振り下ろされてどうにか受け止めた円ちゃん。

「こ、こんな重いんだ．．．」

キンツ!キンツ!

実に楽しそうにCHARMを振り下ろすみどりちゃんとは逆に、
「ううっ．．．」

ただ受けることしかできない円ちゃん。一昨日の私の姿と重なって映ってしまった。

(止めたほうがいいのかな．．．)

ブンツ!

「うわあつと．．．」

みどりちゃんは見ててややあぶなっかしい。

「どうしましょう?一旦止めます?」

小声で琴乃様に相談する。

「もうちょっと待ちましょう。普通の子はすぐにマジは入れられないわ」

さすが琴乃様、武道家だけあってよく見ている。

どうしよう?

初心者なので当たり前といえればそれまでなのだが、ここまでお膳立てをしてもらってるのに何ひとつ成果を上げられていないことに焦りを感じていた。

(えつと・・・えつと・・・)

焦れば焦るほど集中力が切れそうになる。

とにかく一旦落ち着こう、と思い目を閉じる。

(邪念を払い・・・心を無に・・・)

琴乃様の言葉を思い出す。

「あれ?なんで目閉じてるの?」

みどりちゃんの声が聞こえるが無視する。

ボソボソ・・・

少し離れたところで見ている明日香ちゃんと琴乃様からは何か話をしてるのは分かったが、何を言ってるのかまでは聞こえない。

(無になるってこういうことなんだ・・・よし、これなら・・・)

改めてCHARMに神経を集中する。これでマジは入るはず。

フォン!

やった!マジが入った!よし・・・!

目を開けみどりちゃんに向かって一振り。

キンッ!

「うわっ!」

「ストップ！」

京夏様が止めに入った。危険要素はないはずだが。

「どうしました？何か問題でも……」

「うーん……」

京夏様が唸っている。

「あら……京夏ちゃんスイッチ入っちゃったわね……」

「スイッチ？」

「そう。何か閃いたときとか、考えたりするときには周りが見えなくなっちゃうのよ」

「なるほど……」

しばらくして、

「みどりちゃん」

「何？京夏様？」

「こっち来てもらっていい？」

なにやら小声で話している。こちらからは全く聞こえない。

「ホント？じゃあ、あたし、入ります！」

「あの……咲良ちゃん……」

「なんですか？」

何の疑いもなくこちらを見る咲良ちゃん。

「まさか、とは思うけど……みどりちゃんって……」

「しーっ！」

指を前に出し、

「明日香さん……それ本人の前で言っちゃダメですよ？それが彼女の良さなんですけど……」

小声の咲良ちゃんのその言葉ですべてを理解した。

だがそれは、何色にも染まっていないままさらな状態ということでもある。京夏様がどう考えたかわからないが、LGの戦略として思うところがあって彼女——周防みどり——をLGに迎え入れようということなのだろう。

レギオン

「ホントですか？京夏様」

「私もびつくりしたわ。LG^{レギオン}としてこんなに早く生徒会から承認されるとはね・・・」

京夏様から連絡をもらったときは驚きだった。LGの承認基準は学園^{ガーデン}ごとに異なると思うが、申請してわずか一週間かからずして承認されるとは。

連絡を受けてやってきたのは講義棟にあるLGの控え室が集められた別館だ。

「ごきげんよ・・・あれ？」

どうやら私たちが一番乗りのようでもまだ誰も来ていないらしい。

「誰も来てないね・・・」

「部屋、間違えてない・・・よね？」

「と思うよ・・・」

一旦部屋を出てもう一度京夏様から連絡が来た番号と照らし合わせる。

(LG—38・・・うん、合ってる)

「ごきげんよう。早いわね」

「京夏様ごきげんよう」

「工芸同好会にルームプレート作ってもらってたらちよつと遅くなっちゃった」

と言って手に持っているプレートを部屋の入口に貼り付ける。

『Region:Eljudnir』

と大きく筆記体で書かれたプレート。私たちのレギオン名——エリユーズニルだ。京夏様曰く二代目ということだが・・・詳細は分からない。琴乃様か初花様にでも聞けばわかるのだろうが、話しても教えてはくれないだろう。

「明日香ー、京夏様おーっす」

「……ぎげんようでしょみどりちゃん。指導官いたら怒られてるよ？」

「その……ちゃん付けなんかヤだなあ……」

「なんでよ。咲良ちゃんは普通に呼んでるじゃない？」

「ヤなものはヤなの！ってことでヨロシク」

「はあ……とため息をついてから、

「じゃあみどり。講義とか終わっても縮地を使って移動しない。いいわね？」

「えー！なんでー？」

「えーじゃないでしょ？いい、もし普段から使って万一ヒューズ退治の出勤要請が出て、戦闘中にマギが枯渴したらどうするつもり？あんなの命に関わるわよ？ま、早死にしたければ止めはしないけど？」

「明日香ちゃん言い過ぎ……」

「明日香ちゃんの言う通りね。LGRリーダーの私からも言っておくわ。これは『命令』ね」

さすがに命令と言われてしまえばみどりも反論はできないだろう。

「う……わかったよ京夏様……」

マギの使用量はわずかかかもしれないが、日頃から温存するというクセを付けていかないと後々痛い目を見てしまう。過去の私のように「ごきげんようみんな。来るの早いのね」

まるで気配を感じないように背後から声が。

「うわっ!?!?!、ごきげんよう初花様。私たちが一番乗りだったんですよ。ははは……」

周りは気にしていない（というか気がついてない）ようだが、もしかすると初花様も普段からレアスキル——を使っているのでは……と思ってしまうほど感じなかった。

「……ごきげんよう。まだ……全員来てないんだ？」

灯音様もやってきた。

「琴乃はいつものやつで遅れるって。千香溜みたいに上手く焼けないって叫んでた」

いつもの？

「えつと千香溜つていうのは？」

「ああ、琴乃の同じ年の友達ね。百合ヶ丘じゃなくて他所の学園ガーデンだけ
ど」

京夏様によればお台場からもほど近いエレンスゲ女学園のリリイ
だそう。エレンスゲ？

もしかしたら私も会ったことがあるかもしれない。

「あら？もうお揃いですね。ごきげんよう」

「・・・ベスおそーい。何やってたの？今日は用事ないんじゃない
たっけ？」

「ないはずでしたが・・・なぜか工廠科の・・・乃莉子のりこさん呼び止めら
れてしまいました、時間を取られましたわ・・・あの方わたくしにし
つこく迫ってきましたの・・・皆さんも気をつけてくださいな。一度
捕まったが最後、私にCHARMいじられるー！ってきますわ」

真っ青な顔で怯えながら語るベス。昨日咲良ちゃんの言っていた
友達の犠牲者第一号になつてしまったらしい。

「すみませーん遅くなりましたー。友達を手伝ってたら違う用事に付
き合わされて・・・琴乃様は？」

「琴乃は食堂にいるわ。さて、琴乃がいないけどはじめちやうわね」

部屋は椅子とテーブル。壺に生けられた花とホワイトボードがあ
る程度で特にこれといったものは置いてない。

「で、早速だけど食器類はこれから琴乃が持つてくるからいいとし
て・・・」

「京夏。アレが最初でしょ？」

と、初花様。

「そうね・・・」

軽く咳払い。

「昨日も明日香ちゃん達には言ったと思うけど、このエリユーズニル
は二代目なの。水基様みずきたちのためにも私たちが意思を引き継いでい
かなくちやいけないわ」

「あの・・・失礼ですが・・・水基様たちって・・・」

「ああ・・・ごめんね。先代の先輩リリイ達のことよ」

琴乃様はそれ以上のことは言わなかった。

「それと、ノインヴェルト戦術もしっかり練習していかないかね」

ノインヴェルト戦術——マギスフィアを9人一組のLGメン
バーでパスを回し、力を増大させて最終的にヒュージに叩き込むやり
方のことだ。もちろん相応に技術も必要だが、同時にマギをかなり消
費するため、対ヒュージへの最終手段としての役目が大きい。

「ノインヴェルト・・・ってなに？」

「9つの世界・・・って意味。ノインヴェルト戦術自体は習ったでしょ
？それと、5人でやるときも総称で言うこともあるけど、正式にはフ
ンヴェルト戦術になるわ」

京夏様がみんなにノインヴェルトの特殊弾を見せる。

「もしやるときは私から誰って指示出すから。しばらくは訓練弾で練
習かな」

訓練弾とはいえマギの消費量は通常ノインヴェルトほどではない
してもかなりのものだ。慣れない円ちゃんたちは1日でへばりそう
である。

「みんなごめんなさいね。遅くなっちゃって・・・」

「琴乃様。ごきげんよう。その大荷物は・・・？」

背中には大きめのリュック、手には何かが入った容器をもってい
る。

「ああ、これ？みんなの分のお皿とかよ」

お皿？

「あの・・・ここって控え室・・・ですよね？」

「ええ、だから必要なの。控え室って言ってもここはみんなの憩いの
場だからね」

とニツコリしながら手際よくお皿にティーカップ、紅茶を用意して
いく。

「わーうまそう・・・」

みどりが手を出そうとするが、

「みどりちゃん。みんなに配り終わるまでは食べちゃだめよ」

「へーい・・・」

全員分並べ終わったところニコニコしながら一言。

「今日は訓練前だけど、これからミーティングとか終わった後に食べられるようにクッキー焼いて作っておくね」

「あの・・・これって訓練に必要なことでしょうか？私にはそうは思えないんですけど・・・」

「ごめん明日香ちゃん。私から言わせてもらおうわ」

「京夏様・・・」

「私はありだと思ってるわ。他所のLGの話をここで出すのもアレだけど・・・百合ヶ丘のLG控え室って結構自由なのよね」

「それとこれと何の関係が・・・」

「あるでしょ？明日香ちゃん。御台場のとき控え室でどうしてたの？」

京夏様に言われ、御台場にいたときに所属していた——東雲予備隊のことを思い出す。あの控え室は椅子とテーブルこそあったものの、それ以外に特になかったと記憶している。

「特になにも・・・ただ、椅子とテーブルがあるだけでした・・・」

「LGって結束力が大事だと思うの。ただ訓練しておしまい！じゃないくて、その後の反省会とか今後の課題とかを話し合う場かな」

「明日香さん。もう答えは出ているじゃありませんか。京夏様のおっしゃることがお分かりになりませんか？」

「ベス・・・」

「そ。ただ話し合うだけじゃなくて、心の休息が必要、ってこと。ただ対ヒュージのためにいくら訓練して、作戦とか立ててもみんなとのコミュニケーションが取れなかったら意味はない。そうでしょ？」

確かにそうだった。なんでこんな当たり前のことに気づいてなかったんだろう・・・。穴があったら入りたいとはこのことか・・・。「すみません。質問した私が変わりましたね・・・なんでこんな当たり前のこと・・・」

「はい。終わったところでみんなでいただきますでしょうか。さき、食べ比べて？」

空いてるソファに座り、盛り付けられた皿にあるクッキーひとつを手に取り一口。

「・・・おいしい」

これはお世辞でもなんでもなかった。小麦粉と卵のバランスが絶妙で、ちよつと焼きが・・・などころはあるけど、それを差し引いてもお店とかで買えるものとクオリティに差はないと思った。

「おいしいです琴乃様。もしかしてお菓子作りがお好きなんですか？」

「お菓子だけじゃないわ。普通に料理もするかな。時々食堂の厨房を借りて京夏ちゃんたちに作ってたべてもらってるんだけど、すごい好評で・・・」

「琴乃、その話はほどほどにね。早速だけどこの後の訓練の話をするわね」

と控え室備え付けのホワイトボードに今日の流れを書き出す京夏様。模擬戦？

「円ちゃん、咲良ちゃん、みどりは見学ね。明日香ちゃんとエリザベスさんはこの後模擬戦をしてもらいます」

「わかりましたわ」

「はい」

昨日に引き続き訓練棟の修練場へきた私たち。

「ちよつと待っててね。今声かけてくるから」

到着するなり京夏様はいなくなってしまった。

「・・・うちの・・・通過儀礼みたいなものだから・・・心配しなくて・・・大丈夫」

灯音様はこう言うが、

「・・・と言いたいところだけど、そのときの担当次第なのよね。私のときは百由さんだったから、ついムキになっちゃって壊しちゃったのよね」

壊しちゃた・・・？

現時点では何を言っているか分からなかった。

10分後。

「ごめんね。もうそろそろ来るから」

ガシャン！ガシャン！

えっ!? ヒュージ!? と思ったがよく見ると少し様子が違った。

「ごっきげんよう！あれー？エリザベスさんもいるじゃない！これは熱いわ！」

「乃莉子ちゃん？」

「あれー？咲良じゃん。ここのLGだったんだー」

乃莉子さんだ。工場科は制服が違うので見ればひと目でわかる。

紫髪でロングヘアー、この前CHARMの定期メンテを依頼しに行ったときは座っていて分からなかったが、身長は私と同じぐらいか。

「ごっきげんよう乃莉子さん・・・へえ・・・メカヒュージかあ・・・」

「京夏様に頼まれてメカルンベルを1つ隣の工房から借りてきたけど、なるほどねえ・・・」

ふむふむと頷きながら乃莉子さんはこちらのほうを見ている。

「ユグドラシルのタングズニルにグランギニョルのブラダマンテ・・・どれも実戦特化・・・」

すでに目が怪しい。

「ちよつとごめんさい」

これはダメだと思ったのだろう。咲良ちゃんが慌てて乃莉子さんのほうへ駆け寄り、

「ダメだよ乃莉子ちゃん。これから訓練なんだから・・・」

「わかってるわよ、もう・・・」

「それにしてもよくこの子に声かけましたね・・・」

「あはは・・・ホントは百由さんに声かけたかったんだけどね・・・ちよつとCHARMブレードの硬化処理してたから邪魔しちゃ悪いなーって・・・」

なるほど。で、ベスはというと・・・。

「あの・・・わたくし少々気分が・・・」

少し青ざめていた。

「今は咲良ちゃんがいるから大丈夫でしょ・・・何ビビってるの」

「あの・・・百由様って・・・」

円ちゃんが京夏様に尋ねる。

「ああそつか・・・真島百由・・・百合ヶ丘にいれば誰もが知ってる有名なよ。まあいなくても有名なんだけど・・・」

「そうそう。CHARMの開発に携わってるとか、ヒュージの研究論文とか、ほぼ毎週のように発表があるから『週間百由』とか言われているわ。愛称なのか揶揄なのかわからないけど」

「さて、これから2人には模擬実戦をやってもらうわ。円ちゃんとみどりちゃんの見本って意味合いも兼ねてるから慎重にね。ところで

――」

京夏様が乃莉子さんのほうへ向き、

「このメカルンベルの設定ってどうなってるの？」

「あー・・・」

乃莉子さんは頭をかきながら、

「実は借りてきただけでどうなってるかまでは・・・」

「・・・どうやら知らないらしい。どの程度のヒュージ設定になっているのだろうか？ミドルクラス程度だったらデュエルでも1人でなんとかなると思うが。」

「じゃあ壊しちやっても特段問題はないんですね？」

「多分・・・」

乃莉子さんの許可が出たところで普通に戦ってもいいということになった。

「明日香ちゃん、エリザベスさん。壊してもいいけど、あくまでも壊さないのが前提だからね」

「わかってます」

「了解ですわ」

「あのメカヒュージって・・・」

「例の暴走するやつよね？」

「新入生にアレと戦わせて大丈夫なの？」

別LGと思われるリリイたちの声が聞こえてきた。

暴走とか不吉なワードが聞こえたが、大丈夫だろうか。

「とりあえずどうする？」

ベスに耳打ち。

「それはあなたが決めてくださいな。わたくしはあなたに従いますわ」

珍しいこともあるものだ。ベスが素直だと返って何か起きるのではないか、と余計な勘ぐりを入れてしまいそうだ。

「じゃあ、始めたら私が正面から間合い取って入るから、ベスは後ろで待機、もし暴走してきたらテストメントお願い」

「あら、わたくしと対戦したときと随分違いますか？」

「それはお互い様でしょ。今は言い争うよりどう効率よくメカヒュージを倒すかよ」

フォン！

CHARMを起動し、マギを込めて構える。

ヒュージ独特の動きを完全再現してるのか・・・。

お台場にいたときは画面上の仮想空間のヒュージが相手だったが、ここまで実戦さながらとは。

間合いを取りつつ少しずつメカカルベルに近づいていく。

音とも叫びとも呼べないヒュージ独特の音まで再現されている。

触手が伸びてきた。

キンツ！

とりあえずは払う。

すかさず違う触手が飛んでくる。実際のヒュージと戦っているような感覚だ。

キンツ！

「くっ・・・」

受けたものの衝撃が想像より重かった。

「はあっ！」

ベス!? 人の話を聞いていたのだろうか。私より前に来た。

メカルンベルに近づこうとする。

「ちよつと!?!人の話聞いてたの?前に出るなって・・・」

「あっちゃー・・・もう始まつちやったかー」

「あ、百由さん。ごきげんよう。間に合わなかつたって・・・琴乃ちゃんのとときと同じ?」

真島百由——幼稚舎から百合ヶ丘にいる生粋のリリィ・・・のはずだが、本人はアーセナルを希望した。隣の工房の新生と意気投合した、ようなことを聞いたがさて・・・。

「ごきげんよう・・・って挨拶してる場合じゃなかった。気を付けて!その子突然凶暴化するから!」

「ええっ!?!凶暴化って・・・うわっ!?!」

キンッ!

直接メカルンベルからの攻撃。受け流しつつ、タイミングを見計らって腹を狙って攻撃する。

今の所平気みいだだが、出方次第ではレアスキルも使う必要があるそうさ。

(どうする・・・)

本人がいる手前壊してしまうかも・・・と思ひ半分、でもそれじゃ訓練にならない、と思つている自分。

ヒュージ独特の(再現された)動きと音がさらに激しくなってきた。

(こういうことか・・・)

一旦メカルンベルから下がり構える。ベスはまだメカルンベルの側にいるがお構いなさだ。

「あっ・・・」

ベスが少し離れた!よし!

「はああああああっ!」

レアスキル発動。近づいたと同時にブレードによりマギを込め、正面から左に向かつてCHARMを降り下ろす。いや、横からだから下ろすとは言わないか。

メカルンベルは真っ二つになる。そこへ、

「やあああああああー!」

ベスが上からCHARMを降り下ろす。いいとこ取りか。
メカルンベルは見事4つ切りとなった。

「あーあ・・・やっちゃったわね・・・」

口ではそう言ったものの、私自身は彼女のことを確信した。

(やっぱり私が思った通りだわ。この子なら・・・)

「あああああああああやっぱいいいいいい・・・」

当の百由さんは変わり果てたメカルンベルをみて落ち込んでいた。

「これが・・・実戦訓練・・・」

「ええそうよ。といっても今回はお試してみたいな感じだったけどね。
実際のヒューズはこんなもんじゃ済まないから」

誕生日

明日香ちゃんとベスちゃんのやり取りを見て改めて思ったこと――
――連携は大事なんだということ。今はアンバランスな2人だけど、
訓練を増すごとに上手く連携も取れていくんだろう。そこは京夏様
がどう捉えているかわからないけど、体制としてそうなっていくのだ
ろう。

「あの・・・京夏様・・・私にもちゃんとできるでしょうか・・・？」
「大丈夫。そんなに難しく考えることはないわ。今回は暴走する前に
明日香ちゃんが一気に行った形だけ・・・実際はそんなこと考えて
られないしね」

「ふう・・・」

「終わりましたわ。このメカヒューズ、どうしたらよろしいんですの
？百由様」

「・・・そのままでもいいわ。後で自分で片付けるから」

すっかり肩を落として落胆している百由様。

「明日香ちゃん。エリザベスさん。現状での評価をするわね」

京夏様がこちらに歩み寄る。

「まず明日香ちゃん。結果を急ぎすぎ。暴走する前だったらわざわざ
レアスキル使わなくても冷静に判断すれば行けたはずよ。それとエ
リザベスさん。自分から明日香ちゃんに指示を仰いでおいて独断で
動くってどういうこと？もし私とだったらあなたを止めに入ってい
るわ」

「はい・・・」

「もうしわけ・・・ありませんわ・・・」

京夏様の評価はごもつともだった。周囲のリリイから暴走・・・と
いうワードを聞いて焦って先を急いだ。だが、実際のヒューズだった
らそんなことを言っている場合ではないのだがここは黙っておく。

「けど、間違ってもないわ。まあ2人がかりでスモール級相当をやった感じだったけど」

「あれでスモール級なんですか？」

「そうね。全てが・・・とは言えないけど、幼体だったり、成長するから強さも個体差が出るわ。だからこそ訓練が必要なんだけど2人にはチームワークが必要ね」

「・・・それはベスに言ってください。私が悪いわけじゃないです」

「わたくしは明日香さんが勝手に判断したのだと」

「嘘をつかない！あんたが勝手に動いたんでしょがっ！」

ベスの頬をつねる。

「わたしはよかれと思ってやったんですわ！誤った判断をしたとでも？」

つねり返してきた。

「結果的によかったけどそれじゃ意味ないでしょ」

空いてる頬もつねり返す。

「それはお互い様なんでなくて？」

ベスも空いてる頬をつねり返してきた。

「こらー！2人ともー！」

コツン

「あいたっ」

「なにするんですの？」

京夏様に頭を小突かれた。

「当然だよなー。ケンカはだめだぞー」

「・・・みどり。あんたにいわれたくないわ」

その後も円ちゃんやみどりを中心に基礎訓練が多めのメニューをこなしていった。

訓練をはじめてちょうど二週間経ち、百合ヶ丘に来て初めての休日。

ちなみに休息日とは、一般的な休みとほぼ同じ扱いだが、外出の際は必ず制服着用、CHARMも携帯する義務がある。

休息日とは別にCHARMを持ち歩く必要のない休暇日もあるが、こちらは事前に生徒会に申請する必要がある、手続きが少々面倒だ。実家に用事があるときや、何か特別なことがない限り使うことはないと思う。

「ねえ、どこいこっか?」

実は鎌倉府に来てから(百合ヶ丘直行で)街の中は全くもって初めてなので休息日が楽しみだった。

「明日香ちゃん嬉しそうだね」

「まあね。一番の目当ては……」

「カエルグッズ、でしょ?」

先に言われてしまった。

「あははは……よくわかってらっしやる円ちゃん。咲良ちゃんたちも誘えばよかったかなあ?」

「咲良ちゃんは今日乃莉子さんのところにCHARMのメンテナンス出してるから外行けないって……」

「あ。そっか……対処できないもんね。で、みどりは?」

「先輩リリイ……えっと……梅様まいって言ってたかなあ……『梅先輩と勝負するんだー!』って張り切ってたよ?」

梅様、こと吉村・Thi・梅——当時のトップLGレギオンと言われた初代オールヴヘイムのメンバーだったリリイだ。解散後はどこのLGにも属さずソロで活動していると聞いた記憶がある。

「へえ……まあみどりらしいけどね。何の勝負してるかわかんないけど」

と適当に答えたものの、同じレアスキル同士なので何の勝負をしているかはなんとなく見当がつく。

「そういうえばベスちゃんはよかったの?」

ベス——櫻子・S・エリザベスせーぬ——同じLG(エリユーズニル)のメンバーで同じクラスのリリイのことだ。

「いいのいいの。どうせ『わたくし、こういうお店には興味ありません

わー』とか言いそうだったし」

「あ、ここのお店……」

所謂雑貨屋なのだが、ひと目見て何かを感じた。

「入ろっか？」

そこで見つけたのはペンダントなのだが――

「うわあ……これすごい……」

緻密に、しかも精巧に再現されたディテール。目元や造形が私の一番好きな『アオガエル』そのものだった。

聞くところによると今これだけのものを加工できる職人さんがもうほとんどいないんだとか。ほ、欲しい……。

が、しかし、値段をみて愕然とした。

「う……」

百合ヶ丘に来てまだ間がなく、実績も対ヒューズの討伐報酬もない私にはとてつもなく高い。

装飾品は一期一会だ、という人もいる。逃したらもう手に入らないかもしれない。しかし、今回ばかりは諦めざるを得ない。

「明日香ちゃん……これ欲しいんだ？すっごい高いけど……」

「欲しいけど、さすがにムリ。誰かからプレゼントとしてもらえるんなら嬉しいけどね」

（プレゼントかあ……今年是谁からももらえないかも……）

自分でさらっと言ってしまったが、実はもうすぐ誕生日だ。

この後2人でクレープを買って食べ歩き、そのまま寮へ。毎日こう何も無い日々ならいいんだけど……。

「今日はノインヴェルト戦術の練習よ」

翌日、百合ヶ丘近くの廃墟が密集している場所にやってきた。かつてはここに住民の人たちが住んでいた。そう思うと少し胸が苦しくなる。

「京夏様ー、なんでこんなところでやるの?」

「こんなところ、じゃなくてここじゃないとできないの。いくら訓練弾を使うとはいえ、訓練棟でなんか使ったら百合ヶ丘に居られなくなるわよ……」

いくら知識がないとはいえ、実際のノインヴェルトを見たことがないみどりが言うのも無理はない。

「それと、習ってるからわかっているとと思うけど、ノインヴェルト戦術はマギを激しく消費するわ。マギスフィアを落としたらやり直しが利かないから慎重にね」

「はい」

「はい」

「あ。待ってー!」

「どうしたの灯音?」

灯音様の目が赤い。レアスキル——鷹の目だ。鷹の目は上から俯瞰して見下ろせ、視界が碁盤の目のように広範囲に見えるため、欲しがるLGは多い。

「ここから4時の方向……300m先にミドル級3体とスモール級が4体いる……」

「ヒュージですか?」

「そう……近くにネストやケイブは……なさそう……野良……なのかな……」

「あろうがなからうがヒュージには変わりありませんわ!どうなさいます?・京夏様?」

「学園からの指示は?」
ガーデン

初花様が確認する。

「えつと……まだ何も来てないわ。けど、放っておけるわけないでしょう? 訓練は中止。ヒュージの殲滅に切り替えます。明日香ちゃん、琴乃、エリザベスさんはミドル級の早期殲滅を。他のメンバーは3人のサポートをしつつスモール級の駆除を。円ちゃん……みどりちゃん……初めてで緊張するかもしれないけど、万が一のときは私たちがサポートするわ」

「はい!が、がんばります!」

「おう！たのしみー」

まさかの訓練中にヒュージとは。時間を選ばないとはよく言ったものだ。だが、ネストやケイブがないのは幸いだ。そしてこれがLG二代目エリユーズニルの初陣となる。

「これでミドル級でも特型だったら手を焼きそう・・・」

「縁起でもないことを言わないでくださいまし。わたくしだつて御免ですわ」

「雑談してる暇はないわ。行くわよー」

ヒュージがいると思われるポイントに到着。が、姿が見えない。

(どこだ・・・)

ヒュージ独特の、鳴き声・・・いや、音は聞こえるのだが。

GYAAAAA!!

後ろから!?

咄嗟にマギ弾を打ち込む。にしても――

「相変わらずっ！見てて気持ちいいもんじゃないわ・・・ねっ！」

キンツ！

触手を1本切り落とす。百合ヶ丘近辺のヒュージはこんななのか・・・。そもそも場所も何もあったもんじゃないが。

GYAAAAA!!

間髪入れず次の触手が来た。

「こんのっ！」

カンツ！

鈍い音がして跳ね返される。装甲(という表現が正しいかわからない)が硬くなった感触だった。

まさか、このヒュージ・・・攻撃を学習する!?マギの入れ方が悪かったのか?と瞬間考えたがそんなはずもない。

いや、冷静になれ・・・通常ありえないことだ。凶暴化して強くなることはあっても、攻撃を学習して防御するなんてことはありえない。コイツ・・・特型か・・・?

琴乃様とベスは!?

見渡すと案の定苦戦していた。が、特型に当たったのは私だけのよ

うだ。

「琴乃様！ベス！1体は特型だわ！なんで嫌な予感当たるか・・・なっ！」

カンッ！カンッ！カンッ！

「くっ!?!」

攻撃を避けつつ、とにかく触手を切り落とそうと必死に入れようとするが、どうにも入らない。ベスにテストメントをかけてもらったところで範囲が広がるだけでおそらく意味はない。咲良ちゃんに早く来てもらいたいところだ。

「明日香ちゃん！」

「京夏様！コイツは特型です！全く歯が立たない！」

遅れて京夏様たちも到着。

「咲良ちゃんレジスタお願い！」

「は、はい！レジスタ！」

パアアアアアア・・・

咲良ちゃんの掛け声とともに光に包まれる。マギにCHARMが吸い込まれていくような感覚——レアスキル、レジスタはCHARMのマジ純度を高め、CHARMのスペックを向上させるスキルとも言われている。よし、これなら・・・。

キンッ！

よし！ようやく通った！

レアスキル発動！すかさず特型ヒュージの背後に周りマギを込めて一撃・・・のはずだった。

GYAAAAA!!

「えっ!?!」

特型は私の速度に順応するかののように正面を向いて襲いかかってきた・・・！通常ではありえない速度で。

(うそっ!?!)

やられる・・・目を瞑って私は死を覚悟した。

「はあああああっ！」

シュバツツ！

・・・あれ？私・・・死んで・・・ない？

「大丈夫明日香ちゃん？」

「京夏・・・様？」

間一髪のところまで私の前に入り、レジスタで強化されたCHARM
——ダインスレイフ・カービン——で特型に切りつけたのだ。

「私・・・生きてる・・・」

「明日香ちゃん感想は後！今は琴乃たちのアシストが先決よ」

「は、はい！」

「琴乃様！ベス！初花様！大丈夫？」

「いつもより手強いわ！」

「平気でしたらこんなにも苦労しませんわっ！」

「琴乃！もし厳しそうだったら許可するわ。ただし、ほどほどにね！」

許可？京夏様の言ってる意味が分からない。

何の許可なのだろうか？

「どういうことですか？」

「私も・・・あんまり使わせたくはないんだけど・・・レアスキル使った後の精神状態が・・・」

それを聞いて理解した。

「・・・白井結夢様と同じレアスキルでしたよね？」

「そう。だからこそ精神状態を安定させるために普段からマジ交感してるんだけど・・・しばらくは大変かも・・・」

白井結夢——吉村・Thi・梅と同じく初代オールヴヘイムのメンバーだったリイだ。私の知る限りでは2年前に没落のキツカケとなった甲州撤退戦に参加、そのときに自身の守護天使シュッツエンゲルを殺めてしまったことを今でも苛み続け、どこのLGにも属さないと聞いた。

が、つい最近入学式のとくに話題に上がった一柳さんがアピールを続けて守護天使の契りを結んだとか。

今はそんなことはどうでもいい。琴乃様かベスのサポートが先だ。

「う・・・」

突然琴乃様の顔色が変わる。

「うわあああああああああああああああああああ！」

あの長身CHARM——フリングホルニを振り回し、まるで人が変わったかのように動きが変わった。

ルナティックトランサー

「酔狂の月……」

「ルナ……えっ?」

ただの傍観者になってしまってる円ちゃん。

「このレアスキル……いや、レアスキルなんて呼べないかもしれない。自身が持つてるマギがなくなるまでバーサーク状態になるの」

「……」

「ただ、同じレアスキル持ちで全員が全員同じじゃない」

「そうね……明日香ちゃんがいた御台場女学校の船田姉妹……」

「はい。あの2人はレアケースだと思います。そして桁違いに強い……」

そう。だから負けて当然なのだ。

「どゆこと?」

ハテナ顔のみどり。

「上手くレアスキルと付き合ってるの。平常心を保ったままバーサーク状態になれるってこと。リリイでもほんの一握りしかないわ」

メンタル次第では鍛えることができるのだろうが、専門外なのでそこはなんとも言えない。

ベスはというと……。

「くっ!」

相変わらず苦戦はしていたが、初花様が加勢している分苦にはなつてなさそうだ。

「まったく……しつこいですわ!」

「エリザベスさん。そこにいて!」

「はい?」

初花様の言う通り動かないベスだが、目の前にヒュージの姿はなかった。

(これが……)

実際のレアスキルを見るのはこれが初めてだった。

いるように気配を残しておいて実際は……。

「はあああああああつっ！」

シュバッツ！

ヒュージの姿は消え、跡形もなくなっていた。

「何が起きたんです？」

「初花様のレアスキルだよ」

「え．．．どういう．．．」

「ユーパーザイン．．．百合ヶ丘でも持つてるのは初花と工廠科の野田あめり雨莉様だけね」

「気配を操ることができの。私も見るのは初めてだからビックリだわ．．．」

さて、琴乃様だが．．．

シュバッツ！

「はあつ．．．はあつ．．．」

ちょうどヒュージを倒したところでマジが切れたみたいだった。

バタン．．．

「琴乃様!？」

その場に倒れ込んでしまった。

「バス！琴乃様を医務室へ！」

「え、ええ．．．」

「とりあえずみんなお疲れ様。まさかヒュージに遭遇するとは思わなかったけどね。みんな帰る．．．わけないわよね．．．」

「決まってるじゃないですか！琴乃様が心配です！」

「まさかこんなことになるなんてさー」

「あの．．．京夏様．．．こんなときになんですが、ちよつといいですか?」

琴乃様を無事医務室へ届け、琴乃様が眠りにつき、LGメンバーが帰ってようやく落ち着いた。が、私と京夏様は足湯にいた。

「あの．．．京夏様．．．」

「何？明日香ちゃん？」

「えつと・・・」

いざ口に出そうとするとなやまり恥ずかしい。口ごもってしまふ。
「どうしたの？」

「今日は・・・ありがとうございます」

「なあに改まって。LGメンバーを助けるのは当然よ」

「じゃなくて！ええつと・・・」

「もしかして・・・緊張してる？」

「はい・・・」

「明日香ちゃん・・・いえ、明日香」

呼び捨て？

「あのときは断られちゃったけど、改めて聞きます」
「・・・」

「もしこれで断われたら私は今度こそ諦めるわ。あくまでもLGメンバーとして接します。尾上明日香・・・」

「あのっ！私から言わせてください！」

京夏様が言いかけたのを遮り、私が割り込む形で口を開く。

もちろん心臓はバクバクだ。けど、もう迷いはない。

「あのときは・・・正直まったく分からなくてお断りしました。けど今は・・・やつと頼れる・・・信頼できる人に出会えた・・・そう思っています」

「じゃあ・・・」

「はい！よろしくお願いします！京夏お姉様！」

晴れて私——尾上明日香と夏目京夏お姉様——2人の間で
守護天使シュッツエンジェルの契りを交わすこととなった。

部屋に戻ってからはずっとニヤニヤが止まらない変な人になって
いた。

「明日香ちゃんどうしたの？ご機嫌だね」

「そ、そう?」

「見ればわかるよ。だってずーっとそうだよ?」

私ってそんな態度に現れるタイプだったのか・・・それはそれでシヨックだ。

「何があつたの?」

まあ、隠していてもいずればれることだ。ここは素直に白状することにする。

「実は・・・さ。さつき京夏様と守護天使の契りを交わしたの」

「ええっ!? 明日香ちゃん前に断つたんじゃ・・・」

「そう・・・なんだけどね・・・今日の対ヒュージ戦で助けられたでしょ? あれが決め手。まあ憧れみたいなのかな・・・」

助けられたことがキツカケなのは事実だが、ここは曖昧に答えることにする。

「そっかあ・・・守護天使かあ・・・」

翌日。講義棟にあるラウンジ。そこで契約書にお互いのルーンを記し、晴れて正式に守護天使となった私と京夏お姉様。

「あの・・・一つ聞いてもいいですか?」

「なあに?」

「昨日の琴乃様についてなんですけど・・・」

「あー・・・」

急にバツの悪い顔をする京夏お姉様。

「ごめん明日香。私からでも言えないわ」

「どうしてです?」

「どうしても、よ。もつとも、本人に聞いたところで教えてくれるとは思えないけどね」

「ごきげんよう。京夏様。明日香ちゃん」

「あ。咲良ちゃんごきげんよう」

「ごきげんよう。今日は訓練はなしって言ったはずだけど?」

「えつと・・・それどころじゃないんです！」

「はあ!? みどりがケンカあ！」

「はい。さつき教室から出て・・・これから一緒に寮に戻ろうっていうときに遠藤さんと肩が当たってしまったって売り言葉に買い言葉で・・・」

遠藤亜羅椰あらかや——LG二代目アールヴヘイムのメンバー、実力はあ
るのだが、自分自分好みのリリイに見境なく手を出すことで有名な、
学園ガーデンからは別の意味で問題児扱いされている。

「で、誰も止めなかったの？」

「私が必死になだめたんですけど、全然聞かなくって・・・」

「あんのバカッ・・・！」

まったく世話が焼ける。

「はい。樟美さんや壺さんがいればよかったですけど、そのときは・・・」

天野天葉——LG二代目アールヴヘイムの主将にして数多くいるリリイの中で世界最高峰のマジ保有量を有する、と言われている、いわばリリイのトップ中のトップだ。ブロンドのショートヘア。いかにも、な風貌ではあるのだが、それでいて嫌味に感じない。だからこそ皆に愛されるのだと思う。その天野天葉の守護天使——江川樟美——違うクラスなので普段関わりはないが、咲良ちゃんやみどりを呼びにいくときにしよっちゆう会っている、程度の印象しかない。

「で、どいにいるの？」

やってきたのは百合ヶ丘近所の海岸だ。

「あらあ・・・皆さんお揃いで。ごきげんよう」

「お揃いで、じゃないでしょ遠藤さん。うちのみどりに手出してどうするつもり？」

「さて、なんのことかしら？ 私はただ、この『世間知らず』の子に、リリイとはなんたるかを教えてあげるところですわあ・・・」

確かにみどりは破天荒なところがあり、それに関しては同感なのが、今回ばかりはちよつと違う。

「だからって手合わせてしていい理由にはならないでしょ？今すぐやめてさっさと学園に戻ったら？」

「明日香ーとめんな！あたしは今はらわた煮えくり返ってんだ！絶つ対許さない・・・！」

・・・ケンカふっかけたのはみどりのほうか？

「とにかく2人ともやめなさい。それと遠藤さん、これ以上事を進めるようなら天葉ちゃんに報告するからね」

「そ、それは・・・」

「まったく世話が焼けるんなんだから・・・あれ、京夏」

「ごきげんよう」

「天葉ちゃん」

「ごきげんよう天葉様。はじめまして。尾上明日香って言います。よろしくおねがいします」

軽く一礼をする。

「知ってるよ。さつき週間リリイ新聞見たから。京夏の守護天使でしょ？」

「えっ？」

週間リリイ新聞？なにそれ？

「椿組の二川二水さんが単独で出している、リリイに特化した記事の乗っている新聞ですね。さつき号外が貼り出されました」

え・・・情報流れるの早くない？

っていうかめちやくちや恥ずかしいんだけど・・・。二川さん、スカーカーか何かか？

「そ、それはどうも・・・」

「あらあ・・・それはおめでたいですわね・・・なら、なおのこと、お祝いをしなきゃ、ですわ」

と言ってCHARMを構える遠藤さん。

「こら亜羅椰！CHARMを仕舞う！」

「みどりもね！」

「はーなーせー!」

結局私と京夏お姉様、天葉様と樟美さんで2人を引き離し、とりあえず事態は収まることになった。

「まさかとは思っていましたが、京夏様と本当に守護天使になるだなんて……」

「……なにそれ。私になっちゃいけないみたいない方じゃん」

天上の間。ベスの一言で少し機嫌が悪くなった。

「そ、そんなことはありませんわーほら、なんていいますの……親しい中にも礼儀あり、というじゃありませんか……」

「けどビツクリしました。まさかあの時のことが現実になるだなんて……」

あの時——2週間ほど前の出来事のことだ。

「そういえば……いつもご一緒の円さんは?」

「でしたよね?」

「あー……それが……今日は早上がりしちゃって『これからちよつと用事あるから!ベスちゃんたちに謝つといて!』って」

「そう……ですの」

「咲良ちゃん」

ちよつとカマをかけてみるか。

「はい、なんでしよう?」

「これだけ仲良くなってるのに中等部何してたー、とか一切話さないけど、どうして?」

「そ、それは……」

やはりか……咲良ちゃんは黙り込んでしまう。

「話たくないならいいけどね。誰にでも言いたくないこととかあるから」

「咲良ちゃん。ちよつと……」

ベスに聞こえないように耳打ちをする。

「後で私たちの部屋に来てもらっていい？ 円ちゃん戻って来るの遅いはずだし」

「明日香さん・・・わざわざ部屋に呼んでまでなんででしょう？」

天上の間から上がり、円ちゃんのいない私たちの居室へ来た咲良ちゃん。

「ごめんね、わざわざ部屋に呼んだりして。でもね、やっぱり気になるのよ・・・何かつらいことでもあった？」

「・・・」

いくら周りに誰もいないとはいえ、口を開こうとはしない。思い切って私の話を切り出す。

「あのさ、咲良ちゃん。お台場女学校の船田姉妹知ってるでしょ？」

「はい。中等部時代すごい活躍をされていたリリイですよ？それがどうかしたんですか？」

「私が・・・お台場の中等部に上がってすぐね、その船田純様まことと手合わせたことがあるの・・・」

「すごいじゃないですか！っていうか羨ましい・・・」

「ちつともすごくないよ・・・あのときはまだレアスキルも覚醒してなかったし、マジ保有量も今ほど高くなかったから・・・当然だけど、負けちゃった・・・」

「ですよね・・・けど、なぜその話を・・・？」

「それだけならまだよかったんだけどね・・・負けた後に純様から言われた言葉がショックで・・・さ・・・」

「なんて・・・」

『「あなたみたいなリリイは御台場には必要ない」ってさ・・・」
「え・・・どうして・・・」

「そのときはすごい悔しくてさ・・・必死に訓練したよ？まあ、それがトラウマになっちゃって今こうして百合ヶ丘にいるんだけど・・・」
「そう・・・だったんですか・・・明日香さんみたいな実力ある人がな

んでわざわざ百合ヶ丘に？って不思議に思っていました」

「私より実力ある人なんていっぱいいるって。それよりもさ・・・」

一呼吸置いて、

「そこまで話たがらない理由って何？嫌ならこれ以上追求しないわ」

「そうじゃないんです・・・エリザベスさんも明日香さんもみんなすごい人ばかりで、私の話をしてもちつとも面白くないんじゃないか・・・って」

ピンツ

咲良ちゃんに軽くデコピン。

「あいたっ」

「咲良ちゃん。自分を卑下しちやダメ。それに話に優劣なんてないでしょ？芸能人じゃないんだから」

「私・・・初等科から百合ヶ丘に入ったんですけど・・・特にこれといって目立ったことをしたことがなくて・・・中等部が上がって少しは変わるかなーと思ってがんばってはいたけど・・・それでも・・・」

「別に・・・いいんじゃない？」

「目立つことが目的じゃないよ？私たちはリリイなんだから」

「でも・・・」

「ほーらそれ。これからネガティブ発言禁止ね」

咲良ちゃんの両頬をつねる。

「ひゃい・・・」

「それともうひとつ、いい？」

「なんででしょう？」

「初代エリユーズニルのこと。なんで誰も・・・何も教えてくれないのか知りたいのよ」

「・・・」

「私外部出身だから百合ヶ丘の内情とか・・・あ、有名な話は知ってるよ？甲州撤退戦とか、お台場迎撃戦とかね。お台場は・・・私は蚊帳の外だったんだけどね」

苦笑い。

「実は・・・初代エリユーズニルはメンバーの大半が亡くなってるんです・・・」

「え・・・」

「だから・・・亡くなった先輩リリーの意思を継いで二代目を立ち上げたんだって・・・」

確かに最初のミーティングでは亡くなったリリーのことを話してはいたが、大半って・・・。

「亡くなった後、京夏様が事件を起こして大変だったんです。中等部ではトラブル防止で手合わせが原則禁止だったんですけど、手当たり次第強そうなりリイを捕まえてやみくもに手合わせを・・・」

京夏お姉様が？

「嘘・・・でしょ・・・？」

普段温厚で誰にでも優しく接しているあの・・・。

「嘘じゃないです。信じられないかもしれませんが、人が変わったような荒れ方でした。もしかしたら、心の拠り所が欲しいんじゃないかって・・・それで高等部に上がったら・・・シュツツエンゲル守護天使になって側にいよう！って・・・。けど蓋を空けてみたら、実は京夏様が明日香さんのことが気になってて・・・それで・・・」

「咲良ちゃん・・・」

「ごめんなさい・・・気持ちがおさえられなくて・・・ううっ・・・」

私が横から取ってしまった形か・・・。

「ごめんね・・・けど、ありがとう・・・話してくれて・・・」

「いいんです・・・もう・・・過去のことですから」

ガチャ・・・

「ただいまー・・・あれ、咲良ちゃん！なんで私たちの部屋に？」

円ちゃんが戻ってきた。

「おかえりー。あー私が呼んだの・・・ちよつと話があったから・・・」

「咲良ちゃんありがとね。話してくれて」

「いいえ。でもおかげで私もすっきりしました。それと、遅れましたけど守護天使の契りおめでとうございます」

え、ここでそれ言うの？

「あ、ありがとう咲良ちゃん」

なんか複雑な気分だ……。

「それじゃあ、私自分の部屋に戻りますね。ではごきげんよう」
「ごきげんよう」

ボタン……

咲良ちゃんは自室へと戻っていった。

「で、咲良ちゃん何話してたの？」

「なーいしょ」

「ずるーい……教えてよー」

気分を沈ませたくないので話題を変える。

「琴乃様……もう平気なのかな……」

「急にどうしたの？」

ルナティックトランサー

「酔狂の月持ちのリリイって精神が不安定だって言ったでしょ？
もう落ち着いたのかな……って」

実は琴乃様の過去も気になっていた。けど一切そのことを誰も口にしない。そもそも私も聞いてもないのだが。

「あれから何も聞いてないけど、どうなんだろうね……明日控え室に行けばわかるんじゃないかな」

「そうなんだけど……やっぱ気になるー」

「あ。消灯時間……もう寝よ？」

「うー……」

次の日のLG控え室^{レキオン}。琴乃様が姿を見せた。が、様子が違う。

控え室にある窓から外をずーっと眺めている。いつも笑顔でニコニコしている表情とは違い、上の空のようにも見えた。

「やっぱりね……ほら、琴乃始めるよ」

「あ。ごめん……ちよっと考え事……」

「琴乃様、ちよっと」

「え……」

言って指輪をしている右手同士で握手。

しばらくすると指輪同士が光り、自分自身一瞬フラつとしたが、すぐに収まった。

「マギ交感・・・」

マギ交感是对ヒュージで溜まった負のマギを浄化する行為・・・のだが、通常は私と京夏お姉様、といった疑似姉妹同士で行うのが一般的だ。かといってそうでないリリイ同士がしないか、というところではない。

「明日香ちゃん・・・」

「すみません・・・どうしても我慢できなくて・・・少しは落ち着きましたか？」

実は京夏お姉様よりも琴乃様のほうが守護天使が必要なのでは、と余計なことを考えてしまう。

無言だが頷いてはくれたものの、やはりまだどこかぎこちなかった。

「今日の訓練だけど・・・なしにしてこれからミーティングにしましょうか」

そう言って京夏お姉様は自分のソファに座・・・らない？

そして私の背後に回り込む。

(何するんだろう・・・?)

琴乃様以外はなぜか皆ニコニコしている。

それから2分ほど経過。状況は変わらず。

「あ、あの・・・」

と言ったそのときだ。

「えっ!？」

京夏お姉様が後ろから目隠し。

「あの・・・なにを・・・」

「いいからいいから」

ジャラ・・・

私の首に何かかかった音が聞こえる。

目隠しされてから30秒ほど経って、

「もういいかな・・・」

目隠しから開放される。

「何がしたかったんです?」

頭の中はハテナだらけだ。

「明日香。胸元を見て」

胸元・・・。

見ると見覚えのあるものが首にかかっていた。

愛嬌ある目元、特徴的なデイトール・・・それは一昨日円ちゃんと一緒に行ったあの店に置いてあったアレだ。

「え・・・これって・・・」

「誕生日おめでとう明日香」

「えっ!?えっ!?」

ちよつと頭の整理がつかないんだけど・・・

「ゴメン明日香ちゃん黙ってて。実は——京夏様から誕生日のこと相談されてて、何かできることはって・・・」

待つて・・・円ちゃん以外には誕生日のことは言っていないはず・・・けど京夏お姉様が知ってるってどういうこと?

「あの後・・・二川さんのところに行ってきたの。そうしたら今日が誕生日だって・・・」

二川さん・・・一体何者・・・

「で、私がカエルグッズのことを話したら、京夏様が今一番欲しいものは何かって聞かれたから一昨日のあの店でのことを話したの」

円ちゃん・・・

「内緒で部屋も見させてもらったわ。スゴいわね・・・隅から隅までカエルだらけで。本当に好きなんだなって・・・」

「・・・」

「で、すぐにLGのみんなに連絡入れてプレゼントしたいからって話たら全員オツケーしてくれたからみんなで出し合ったのよ」

え・・・全員?

「だからこれは、私からだけじゃなくてLGみんなからのプレゼントだよ。琴乃、もういいわ。お疲れ様」

「・・・普段やらないことって疲れるわね。でも上手く騙せたからいいかな」

いつもの琴乃様だ。

「明日香さんみずくさいですわ。なんでおっしやってくださりませんの。言ってくださればもーつとスゴイものを用意しましたのに・・・」

ベス・・・

「そうですね明日香さん。昨日言ったこと、忘れないですからね？」

「そ、それは・・・」

咲良ちゃんにツッコまれるとは・・・

「・・・おめでどう。えっと・・・」

いつも無口な灯音様あかねだが、言い終わるも、

「実は私もそれ狙ってたんだ。すっごい出来いいよね。値段だけのことあるし、あの店ってたまにすっごいレアアイテム入ってることあるからチェックしてたほうがいいよ！」

「あの・・・灯音様？」

「ご、ごめん・・・驚かせちゃって・・・私・・・さ・・・カワイイものに目がなくなっって・・・つい・・・」

突然のマシガントークに驚く私。円ちゃん、ベス、みどりも驚いていた。

「おめでどう明日香。私も聞いたときは驚いたわ」

「ありがとうございます初花様」

で、みどりだが、黙っている。

「・・・ちよつとみどり。なんかなの？」

「・・・別にいいじゃんか。何も言わなくても」

と言っではいるが、いつもと態度が違っていた。

「もしかして、はずがしがってる？」

「う、うるさい！いいじゃんか別に・・・」

なにはどうあれ嬉しいのは事実だ。

「みんなありがとう。大切にします・・・！あ、あれ？」

気が付いたら視界がぼやけていた。

「おっかしいな・・・嬉しいはずなのに・・・なんで？」

サプライズは嬉しい。けど、リリイになって今までこんなお祝いのされ方を一度もされたことはなかった。

「ちよつとやり過ぎたかな・・・」

「そんなことはないです！ただ・・・今までこんなこと・・・一度もなかったから・・・」

今どんな顔してる？と聞かれたら恥ずかしくて答えられないかもしれない。それぐらいひどい顔をしてると思う。

「さー、今日は腕によりを奮ったわ。みんな食べて食べて」

「うわあ・・・」

テーブルの上には私の似顔絵が描かれたケーキ、いつものクッキーと紅茶が置いてあった。そしてケーキには『誕生日おめでとう』の文字。なんか食べるのもつたいない・・・。

「それと、明日香ちゃんには特別にこれも」

「はい？」

——といってテーブルに出されたのは——

「か、かわいい・・・」

これもケーキなのだが、抹茶で着色されて型を取ったそれは、トノサマガエルのそのようだった。目には大きめのチョコレート、独特の縞模様にはチョコチップ。こっちも食べるのがもつたいない・・・

「いいなあ・・・」

「灯音・・・ダメでしょ」

「あはは・・・今度灯音ちゃんにはゴリラのやつ作ってあげるから・・・」

「ゴ、ゴリラなんだ・・・ちよつと灯音様のかわいいの感覚が分からない。」

——そんなわけで——

この日は私にとって、百合ヶ丘に来て一番のサプライズをもらった。けど、それだけで終わったわけではなくて——

ノインヴェルト戦術

「ごめんね明日香ちゃん、ビックリさせちゃって・・・」

「いいよ気にしなくて。それよりありがとう。御台場でもこんな風に祝ってくれる人いなくて」

寮の部屋に戻ってからの会話。

「そうなの？」

「御台場って実力優先主義っていうか・・・そこまで気が回る人いなくて・・・だから本当にうれしかった」

「たまたま私の周りにそういうリイがいなかったただけかもしれないが。でも本音だ。」

「そつか・・・あ。そうだ！」

「え、なに？」

「まじか円ちゃんを取り出したのはキレイに包装された包紙だ。リボンも付いている。」

「はいこれ。私からのプレゼントだよ」

「・・・」

私は黙り込んでしまう。

「どしたの？受け取らないの？」

「あ、いや。ごめん・・・ちよつと思考が・・・ありがとう円ちゃん」と言って受け取った。

「開けてみて？」

包みを開けると、そこには少々不格好ながらもカエルの置き物が入っていた。そういえば、昨日もだが、ここ1週間ばかり天上の間に رفتっても、早上がりして『用事があるから・・・』と足早に出て行っていたが、もしかして・・・。

「あのね・・・今までいろいろと教えてもらってばかりで、私にも何かできないかなあって思ってた・・・そういえばもうすぐ誕生日だっと思って・・・そうさく倶楽部の汐里さんのところで作ってたんだ。こういうの初めて作ったからちよつと不格好だけど・・・」

六角汐里——レギオンLGレギンレイヴの副主将、人当たりはすごくい

い。違うクラスだけど、誰にでもまんべんなく話しかけてくれる子だ。そんな彼女だが、レアスキルは円環の御手——通常片手で1振りずつしか使うことが出来ないCHARMだが、両手で同時に扱うことができる。戦い方は性格とは裏腹にかなり豪快、CHARMの扱いがものすごく煩雑で、終わる度に修理に出しているのだとか。それよりも。

「これ作ってくれたの？すごい！ありがとう！」

もらった置き物を早速自分の机の上に置き、円ちゃんのほうを向こうとしたときだ。

「ちよつと・・・!?!」

突然円ちゃんが背中に抱きついてきた。

「ありがとう、はこつちのセリフだよ・・・」

「え・・・何言ってる・・・」

円ちゃんの力がさらに入る。

「ホントはね・・・京夏様に誕生日のこと教えたの・・・私なんだ・・・」
「やっぱり・・・」

「けど・・・ペンダントの話はホントだよ？」

「どうしたの急に？」

「私・・・百合ヶ丘に入る前はね・・・すごい優柔不断だったの・・・だからここに入るときも自分から入ろう！つてきめたわけじゃなくて・・・友達から面白半分勧められたのが断れなくて・・・」

確かに百合ヶ丘の高等部一般セレクションは誰でも受験できる門徒とはなっているが、リリーのりの字も知らなかった円ちゃんがどうしてここに？と疑問には思っただけだが、そういうことだったのか・・・。

「周りはみんなすごい人達ばかりで、怖い人達ばかりだったらどうしよう？とか、仲良くなれなかったらどうしよう？とかそんなことばかり考えてた・・・だから・・・入学式のとくに明日香ちゃんに会ってなかったら私・・・リリーにならずにやめてたかも・・・」

え、そこまで？

「今ここにいるのは明日香ちゃんのおかげ・・・だからお礼を言うのは

私のほうだよ……」

「そんな……大げさだって……」

「大げさなんかじゃない！」

「……」

「だから……私にとって明日香ちゃん……はリリーの師匠でもあるんだよ？」

「円……」

気が付いたらちゃん付けではなく、呼び捨てにしていた。

「うれしいけど……師匠はやめて……」

「えー、なんで？」

「なんでも。だってそんなガラじゃないし……」

「あ、そうだ。聞きたいことがあったんだっ！今日の講義で分からないことがあってさー……」

「え、どこ？」

「今日こそノインヴェルト戦術の訓練をしましょうか」

やってきたのは百合ヶ丘から少し離れた山深いところだ。

少し高めの岩肌左右囲まれている、所謂切通しと呼ばれるところだ。

「へえ……こんなところあるんですね」

「人が行き交うために山だったり丘だったりを切り開いて通れるようにしたところよ。今でこそトンネルとか簡単に作れるけど、昔はそんなことできなかつたからね」

とは京夏お姉様。

「え、でも……こんな狭いところでパス回しの練習になるんでしょうか……？」

「ここだからいいのよ。一昨日はいきなりやってみようと思ったけど、それどころじゃなくなっちゃったしね」

あー……確かに。

「それに、いきなり長距離のパスで連携取れるとは思わないわ。だか

らここにしたの」

「なるほど・・・確かにここなら撃ち漏らすこともなさそうですね。けど、外したときがちよつと・・・」

外した際に切り通しが崩れてくるというリスクはある。

「大丈夫。そのときはみどりちゃん頼るから」

「え？あたし？」

「あんたしか縮地使えないでしょうに・・・それに、私と京夏お姉様のゼノンパラドキサは縮地とこの世の理ことわりの複合スキルだけど、使える範囲は狭いわ。いざつてときに咄嗟に動けるのは同じだけどね」

そう。一昨日京夏お姉様に助けてもらったのは同じレアスキル——ゼノンパラドキサ持ちだからなのだが、反応速度はお姉様のほうが上だ。もしかして・・・とは思うけど、実はSランク？

「だからそのときはお願いねみどり」

「えー・・・めんどくさい」

「めんどくさい、じゃありませんわみどりさん。下手をすれば訓練どころではなくなりますわ」

「・・・そうだよみどり。もし外れて・・・切通しが崩れて・・・誰かが生き埋めになったら・・・どうするの？」

「う・・・それは、そうなんだけどさ・・・」

「何？他に文句あるの？」

「わかったよ！やればいいんだろやれば！」

「素直じゃないなあみどりちゃん」

といつもの琴乃様。

「フィニッシュショットは・・・明日香、お願いね」

「え・・・私？」

もつと適任がいると思うけど・・・。

「それはそうですよ。だってあれだけ正確に撃てるなら」

咲良ちゃんそれは・・・。

「いや、円だと思うな。ここは然るべきレアスキルを持ったリリイが・・・」

京夏お姉様がどうパス回しのプランを考えてるか分からないが、私

に撃て、ということとはヒューズにより近い位置で叩き込め、ということだ。同じA アタッキングゾーン Zにいる琴乃様にフィニッシュショットを任せるとは考えにくい。となると後はベス、ということになるが……。

「始めるわよ。準備して」

結局まとまらないまま始めるらしい。フィニッシュショットは私か……。

各自CHARMを構える。

「一昨日も話したけど訓練弾とはいえかなりマギを消費するわ。気を付けて」

「はいー!」

「まずは……咲良ちゃん!」

訓練弾を装填し、50mも離れてない咲良ちゃんに向かって、
バンッ!

訓練弾独特の乾いた音。ノインヴェルトのときはそれに別な音が加わる。

「は、はいっー!」

咲良ちゃんのCHARM——ナグルファール——のブレードに弾が当たる。

「お、重い……」

咲良ちゃんも中等部時代にノインヴェルトはやっているはずだが、重いと感ずるってことは、そのときよりも京夏お姉様のマギの威力があるということだ。

で、京夏お姉様は赤みがかった青いマギか……マギの色はリリイによって違いが出てくる。

「えっと……誰にパスすれば……」

「パス回しはヒューズを攪乱させる目的も兼ねているわ。中等部でも習ったでしょ?」

「はい……じゃあ……琴乃様!」

シュバツ!

咲良ちゃん上手い!

ブレードからブレードへ。琴乃様のフリングホルニにマギスファイ

ア（訓練弾）が渡る。琴乃様は黄色っぽい青か。

「咲良ちゃん上手ね。何かスポーツとかやってたの？」

「まさか！一部のリリースはスポーツやりながらの子もいましたけど・・・私・・・そんな器用じゃ・・・」

「そう。じゃあ・・・灯音ちゃん！」

シュバツ！

長身のCHARMを振り灯音様に回す。

「・・・受け取ったよ」

相変わらずカワイイものがあるとき以外は淡々と喋る灯音様である。灯音様のCHARM——ブリューナクはケルティックデール製だが、ユグドラシルのグングニルの後継とも言われ、百合ヶ丘ではグングニルの次に使用者の多いCHARMだ。灯音様のマギは真っ赤らしい。

「次・・・エリザベスさん」

「おまかせあれ」

シュバツ！

やはり回し慣れているのか、灯音様も琴乃様もうまい、パス回しのルートも的確だ。

グンツ！

「訓練とはいえ、実戦模擬弾のマギスフィアは重いですわ・・・」

ベスも実戦経験は豊富のはずで、そのベスが珍しく文句(?)を言っている。グランギニョルのCHARMはブレードの機能性もだが、デザインにかなり拘りがある。ゆえにLGメンバー中ブラダマンテ持ちのベスが一番目立つのだが・・・。にしてもベスのマギの色が濃いピンクとは。笑ってはいけないのだが、吹き出しそうになる。

「次っ！円さんにパスですわ！」

シュバツ！

「ああっ！」

ベスの放ったマギスフィアが関係ない方向へ飛んでいく。まずい。このままでは切通しに当たる・・・のか？

「ベス・・・もしかして、ノーコン？」

「なっ!?し、失礼なっ!今のはたまたまですわ」

「よっと・・・」

グンッ!

みどりナイス! マギスファイアが壁に当たる寸前のところでうまく受け取った。

「うわっ・・・重っ!こんななの?」

「そうだよ。実際のはもっと重いからね」

「え・・・マジか・・・」

と文句ばかりのみどりだが、運動神経はバツグンなので、そこは問題ない。そこに縮地持ちとあればなおのことだ。

「みどりは特に問題なさそうね」

とは京夏お姉様。

「やったあ!」

マギの色は非常に分かりやすい。名前どおりのみどりだ。

「じゃ・・・円、パース!」

見よう見真似にしてはコツを掴んでいるようで、キレイに回している。

シュバツ!

「えっと・・・」

「ブレードを起こして盾にするように受け取って!」

「は、はい!」

グンッ!

「ひゃあ!」

受け取ったものの、一瞬よろける円。LG今後の課題が見えてきたかもしれない。京夏お姉様も同じことを思っているはず。

「大丈夫?」

「な、なんとか・・・これが・・・マギスファイア・・・」

「さっきも言ったけど実際はもっと重いわ。倍以上あると思って」

倍以上、か。フィニッシュショットで受ける(訓練弾の)マギスファイアはフンベルト相当、ということ。そして円のマギの色は黄色らしい。

「えっと・・・パスってどうやれば・・・」

「ボールとかを打つ要領と同じ。集中しながらマギをコントロールすれば行けるわ」

「わかりました。えっと・・・」

シュバツ！

「あ。できた！初花様おねがいます！」

「わかったわ」

グンツ！

「つつ・・・確かに訓練弾にしてはちよつと重いわね・・・」

初花様のCHARM——グルヴェイグ——は私のタンクズニルの原型とも言えるCHARMだ。グングニルの取り回しの良さと同じユグドラシルのヒルドルのシューティングモードの良さをあわせたようなCHARMだ。だが、欠点もある。モード切替に時間がかかること。そのため一部のリリイに愛用者はいるが、数はそれほど多くない。初花様のマギの色は薄い紫だ。

「明日香！最後、頼んだわ！」

シュバツ！

「はい！初花様！京夏お姉様！最後はどこに？」

「そうね・・・切通し正面が小高い丘みたいになってるから、そこ狙つて！」

「わかりました！」

グンツ！

「くっ・・・」

ブレードで受け止める。確かに重い・・・。けど、この程度ならまだ余裕で受けられる。

これが実戦なら、ヒュージの攻撃を避けつつ・・・になるわけだが、予備隊時代にフンベルトで慣れているとはいえ、不安しかない。

ガチャン！

シューティングモードに切り替える。

ノインヴェルトのフィニッシュショットの場合、マギスファイアは変形時に装填されるため、特に何かする必要はない。そして——

「行きますー！」

照準を覗む。狙いは・・・切通し先にある丘の上にある木の根本！

スガン！

「うっ・・・！」

手の衝撃が重い。

「さすが明日香ちゃんすごーい！」

確かに正確には撃てている。この後円とみどりは驚くことになると思うが。

ドーン!!

「うっ・・・！」

衝撃がすさまじい。吹き飛ばされるのではというぐらいの勢い。つい手とCHARMで覆いたくなってしまう。

ようやくノインヴェルトの衝撃が収まり、狙った先を見に行くことになるが、

「うわあ・・・！」

「すごい・・・！」

直径200mほどが衝撃でぼっかり丸く穴となり、もちろん元あった丘は跡形もなく消えている。

「これでも訓練弾だからね。実弾で使うとしたらラージ級以上のヒューズになるけど・・・その前にいろいろ課題が見えてきたわね」「まずはエリザベスさん。一応・・・念の為に聞くけど本当にたまたまなのね？」

「う・・・！」

言葉に詰まるベス。

「も、申し訳ありません京夏様・・・実はわたくし・・・こと球技に関してには苦手です・・・！」

「じ・・・！」

「な、何か文句でも？」

「あつたりまえでしよ・・・たまたま・・・とか言つといて実際ホントにダメとか・・・っていうかりリイにとつて致命傷・・・」

「聞こえない・・・なーんにも聞こえない・・・わたくしはなにも・・・聞いてもいませんわ・・・」

しやがみ込んでぶつぶつと耳を塞ぎながら呟くベス。

「聞こえない、じゃないでしよ？まずはその球技の運動音痴を直すことからね」

「はい・・・ですわ・・・」

これは相当効いたな・・・ベスにも弱点があつたとは。

「後は・・・円ちゃんね」

「あ。はい・・・」

円は冷静に自分を見ているようで、

「私は・・・体力・・・ですよ。割と普通だと思ってたんですけど・・・」

「体力・・・というかコツ、かな」

「コツ？」

「そう。手合わせでCHARMを受け流すのと同じように、マギスファイアも受け流すように受け取ればある程度は衝撃を抑えられるわ。

これは1年生みんなにも言えることだけど、受け取る時にブレードを抑え込むように押ししてると思うけど逆。次からは引いて受け取るように意識してみてください」

引いて受ける、か。今までフンベルトでやるときは逆だと思つていた。

「引いて・・・受ける・・・」

「それと——」

初花様が付け加える。

「円みたいに押して受けると手首にも負担がかかるし、マギを込める前に余計に消費してしまうわ」

「私・・・御台場では逆に教わってました・・・そっか・・・受けて流す・・・」

さすがはノインヴェルト戦術の名門百合ヶ丘である。学ぶことが

非常に多い。

「それから、フィニッシュショットは基本明日香に任せることが多いと思うけど、エリザベスさんにも練習してもらおうわ」

「わかりましたわ・・・あの・・・京夏様、琴乃様でなくてなぜわたくしに?」

「それは自分から説明するわ」

琴乃様が口を開く。

「FRINGEホルニはね・・・シューティングモードがないの」

え?ない?

「あの・・・それってCHARMとして成り立つんですか?」

「私も不思議に思っただ一度ユグドラシルの人に聞いてみたの。そうしたら『シューティングモードはあるにはあるが、モード切替えに時間がかかる』という解答だったわ。だから私はないものとして見るの」

琴乃様が一度モード切り替えをしたところ、起動に2秒ほどかかるそう・・・確かに実用的ではない。

「さ、みんな。戻ったらお茶しながら今後の特訓メニューについて考えましょ」

アステリオン

レギオン
LG 結成から1ヶ月が経ち、私たちの連携もようやく慣れてきた。今だラージ級と戦っていないのは幸いだが、違う課題も見えてきた。

「やつぱり……どうしてもブレちゃう……」
円が嘆いている。

この日は私と、円、ベスの3人で近くの廃墟となった街に来ているのだが、遠くの廃墟ビル目がけて訓練弾を放つ、という自主練だ。もちろんレアスキルはなしで、だ（特に円）。

私はともかく、ベスは焦りすぎて、撃つときに少しブレるようだ。まあ援護向きではないと思うので特に問題にはしていない。心配なのはフィニッシュショットのときぐらいか。

「うーん……私のCHARM貸してあげたいけど……コアの付け替えが必要だしなあ……」

「コア？」

と言って、指である一点を指す。

「CHARMを動かしているマギの宝玉のことですわ。扱えるかはともかく、入れ替えれば琴乃様のフリングホルニも使うことができますの」

「……例えが極端すぎ。でもまあ、そういうこと。御台場にいるときはオートウンシユベルトも持たされてたから自分で付け替えてはいただけど、百合ヶ丘に来る時置いてきちゃった」

「オートウンシユベルトって第1世代のCHARMですわよね？どうしてまた？」

「デュエルで戦うときの御台場での基本戦法。御台場のリリイは全員オートウンシユベルトが1振りずつもらえるんだけど、メインで使つてヒュージを弱らせて、タングズニルで最後……ってやつ。最後のほうはメンドくさくなつて最初っからタングズニルでやつちやつてたけどね」

「へえ……」

「で、そのことをメンテのときに乃莉子さんに話したらめちやくちや

怒られてさー……』『だめですよ！そんな簡単に扱ったら！下手をし
たら二度とCHARM使えなくなりますよ？』だつてさ……」

工場科との温度差、ということか。

「と、とにかく！円さんのCHARMの扱い方がうまくなってるのは
良いことではありませんか。そこは喜ぶべきですわ」

「それはそうなんだけど……なんか納得いかないー！」

円は不満そうな顔だ。

「ということなの。乃莉子さんなんかならない？」

「うーん……なんとかつて言われてもなあ……」

工場科の乃莉子さんの工房。

乃莉子さんは頭をかきながら言う。

「確かにグングニルは初心者にも扱いやすい作りにはなってるんだけ
ど……銃芯とか伸ばせるような構造になつてないのよ……だから
そこをどうにかするつてのは……あ？ちよつと待つて……」

ガサゴソ……

思い出したかのように工房の後ろのほうを探す乃莉子さん。

「えつと確か……あつた！」

——と言つて持つてきたのは——

「アステリオン？……これ、誰のです？」

少々ガタが来ているようだが、間違いなくコアの入つていないヒビ
イロカネのアステリオンだった。

「前に知り合いから譲り受けたんだけど……ほら、私のつて自分で作つ
たユニーク機だから部品とか使い回せないし……誰かのリペア用につ
て取つておいたやつ」

「なるほど……で、これがどうかしたんですか？」

「だ・か・らー！これをベースに魔改造しちゃおうか、つてこと。アステ
リオンの良さを活かしつつ……えへ……えへへへ……」

ま、まずい……スイッチ入った。どうしよう？

「乃莉子ちゃん。あれ？明日香さんごきげんよう。どうしたんですか？メンテならこの前出してませんでしたっけ？」

よかった・・・困ったときの助け舟、咲良ちゃんがたまたま来た。

「あー・・・ごきげんよう。今日はちよつと相談ごとをね。あ・・・乃莉子さん。例の機構も実装してもらえる？あの機構絶対円向きだと思うのよ。細かい設計図なんかは最初に渡した資料にあるから」

「りょーかい。にしても明日香さんも物好きよねー。普通あんなの組み込まないわよ？」

物好きと言われてしまった。

「あ、あとそれともうひとつ相談が・・・あ。これ円にはナイショで」

「え？グングニルのブレードの強度を落とす？」

それはそうだろう。普通は逆なのだから。

「ただCHARM替えろつて言っても本人は納得してくれないと思うの。だからキツカケを作りたくて・・・それと、次のメンテのときにわざと古い銃芯使つてほしいの」

「あー・・・なるほど・・・つまり、壊れた・・・つて体ていにしたんだ」

「これは後で京夏お姉様にも言つて相談するけど・・・勝手なことやつて怒られないかな・・・咲良ちゃんどう思う？」

「あ・・・話が全く見えないんですが・・・」

今日あつた一通りのことを説明。

「なるほど・・・確かに今の円さんならグングニルだちよつとスペック足りませんね。」

思い切つて乗り換えちゃってもいいのかも・・・」

今の円はLGに入った時に比べると格段に強くなっている。スモール級ヒュージを倒すのに初花様や京夏お姉様の力を借りてやつと・・・だったのが、今では咲良ちゃんと肩を並べてもおかしくないぐらいにまで成長している。

「けど本人は初めてのCHARMで愛着あるだろうし、そう安々とは

「いこれ、つて乗り換えると思えないのよね・・・とにかくありがとう乃莉子さん。で、どのぐらいかかりそうなの？」

「2週間。それでなんとかするわ」

え・・・2週間って・・・早くない？

「私なんかまだまだよ・・・百由もゆ様に比べたら」

あー・・・。

「まあ百由様は次元違うから比較することはないんじゃない？とにかく京夏お姉様に話を通るまではちよつと待ってて。オーケーが出たらすぐに連絡するから。じゃ、ごきげんよう」

「ということなんです京夏お姉様」

翌日訓練が終わった後。いつもの足湯にきた私たち。

「そうね・・・確かに今の円ちゃんにはグングニルじゃないほうが良いと思うわ」

「じゃあ・・・」

「円ちゃんのことを一番理解してるのはあなたでしょ？反対する理由なんて、ある？」

「ありがとうございますごいませ京夏お姉様。不思議に思ってたんですけど、なんで私のことをそんな大目に見てくれているんです？」

「もしかして・・・気づいてない？」

え？

「明日香を信頼しているのもあるけど・・・あなたが1年生のみんなを引っ張ってってくれてる。サブリーダーみたいなものよ」

私が・・・サブリーダー・・・。

「サブリーダーだなんて・・・そんな・・・」

ピンッ！

「いたっ」

京夏お姉様にデコピンされてしまった。

「自分に自信を持ちなさい明日香。そうやって他の子を励ましてきた

んでしょ?」

「・・・」

「それと、リリイはなにかしらの悩みとトラウマを持つてるわ。それを克服できればもつと強くなれる。私にも言えることだけどね・・・」
と言つて海のほうを眺める京夏お姉様。いつもとは違い、どこか寂しげな顔をしている。こんな表情をするお姉様は初めて見た。

「明日香ちゃんどこ行つてたの?」

「工廠科。ちよつと相談をね」

部屋に戻つて来て円とのやりとり。

「・・・最近乃莉子ちゃんと仲いいよね?もしかして何か企んでる?」

まさか・・・気づかれた?そこまでカンがいいとは思えないが、

「・・・なにするの。まあしたとしてもCHARMのモードの切り替えもつと早くできない?とかぐらいしかないよ?」

「嘘うそ、冗談だつて。真に受けないでよ」

「あの子円」

「何?」

分かりにくいように聞いてみるか。

「もし・・・もしもの話ね。グングニルが壊れたらどうする?」

「そりゃあ・・・工廠科の、乃莉子ちゃんのところを持ってって修理してもらうかなあ・・・」

普通はそう答える。

「じゃあそれで持ち込んで、修理不可だつて言われたら?」

「・・・」

円は答えなかった。というよりは答えられなかった、が正解か。

「そういう可能性もあるつてこと。知つてると思うけど、汐里さん。扱いはアレだけど、致命傷になるまでの大破はさせてないみたい。円も気をつけてよ?いくら新しいつて言つてもいつそうなるかわからないから」

とは言ったが、嘘も方便で実際のところその程度でグングニルは壊れない。マジリフレクターにでも当たらない限りは、だ。

2週間後。

乃莉子さんから連絡が入ったので早速工務科の工房へ。すると普段見慣れないリリイが来ていた。

「おう。明日香か。それにしてもモノ好きじやの。わざわざ魔改造頼むとは」

ミリアム・ヒルデガルド・V・グロピウス——ふおん乃莉子さんの隣の工房にいる同じ1年生のアーセナル兼リリイだ。

「ごきげんようミリアムさん。いや、使うのは私じゃなくてルームメイトの円なんですけどね」

「なんでお主が頼んどるんじや？本人が直接頼めばよかろう？」

もちろん事情を知る由もないので小声で耳打ちする。

「・・・ふむ。なるほどのう」

「話は終わった？」

と別な作業をしているっぽい乃莉子さん。

「ごきげんよう。出来上がったって聞いたから。で、どんな？」

「正確には出来上がった・・・というか、最終調整がまだなのよね・・・」

あー・・・思い出した。

「バランスウエイトですか？」

実は私のタングズニルには仕掛けがしてある。銃芯のところになどと重りをつけてシューティングモードのときのみ手元が重くなるようにしてあるのだ。なので魔改造の塊であったりもする。

その仕様に関してはメンテのときに困るだろう、と当時やってもらったお台場専属のアーセナルから設計図面の写しをもらって事前に乃莉子さんに渡してある。

「一応明日香さんのを参考にはしてるけど・・・どうなのかなあ・・・」

「私のコア移してもらっていいですか？ちよつと見てみます」

アステリオンなのだがガタの来ていた部品は新品になっているの
で見た目は整備されたCHARMにしか見えない。唯一違う点は
ブレード部分が若干小さくなっていること、モード変形機構部分と
ホールド部分が大きくなっている点だろう。

訓練棟の射撃場。たまたま誰もいないのが幸いだ。見られたら困
る、というのもあるが万が一のことを考えてのことだ。

「ちよつとやってみますね」

ガチャン！

シューティングモードに切り替える。

アステリオンは予備隊にいたときに何度か遊びで交換して使った
ことがあるが、それよりも格段に持ちやすくなっていた。

バランスウエイトの位置も私基準なのでじっくり来るのは当たり
前だが、特に問題はないようだ。

試しに1発撃ってみる。

パンツ！

「普通のアステリオンより扱いやすい・・・不思議・・・」

「アックスモードを省略したからね。円さんがあれ使う機会なんてな
さそうだし、思い切って取っちゃった」

だからか。

「私が使いたいぐらいだわ。ウエイトの位置は問題ないと思う。もし
これですごく重いつて感じるようななら気持ち軽くしてもいいかな」

「了解。後はグングニルか・・・」

乃莉子さんの部屋に戻り、コアを戻してもらったときだ。

端末に連絡が入る。出撃司令だ。

「タイミング良すぎ・・・ごめん、行くね。ありがとう」

連絡を受けてやってきたのは住民が住んでいる地域から近い所だ。ここは小規模ながらもエリアディフェンスが敷かれているので通常ヒュージは発生しないはずなのだが……。

「京夏お姉様、ヒュージの数は？」

「スモール級ね。大したことはないわ。ただ……」

「……数が多い。私たちだけで裁き切れるか、怪しい……」

灯音様によればゆうに100体以上いるとか。100……か……。

「確かに厳しいですわね……琴乃様に酔狂ルナティックトランサーの月はあまり使わせたくないですし……」

今回ばかりは円まじかに頑張ってもらうしかなさそうだ。

「円。ちよつと大変かもしれないけど、お願いね」

「できるだけやってみる」

「行くわよ、みんな」

「はいー」

パンツ！　パンツ！

今回はとにかく数が多い。マギは極力消費したくない。冷静に、確実に狙っていく。

「ああつ、もう！ほんつとに数多すぎー！」

目に付くスモール級はとにかく仕留める。CHARMがオーバーヒートしなければいいのだが……。

オーバーヒートというのはCHARMにある保護機能が働くなる現象のことの通称だ。本来の意味はマギを過剰に流し込み、ヒュージを一気に叩くという戦法で、ラージ級以上に有効な方法のだが、負荷があまりにも高すぎる上に、コアの再起動までに時間がかかるため、特定CHARM以外には使用できないようになってる。さて円は――

パンツ！

肉眼で見えない範囲のスモール級を狙い撃ちにしているようだ。琴乃様は、

「はああああつー！」

ズバツ！

「ああつ！もう！1体ずつなんてまどろっこしいですわ！テストメント！」

「パアアアアアア……」

「レアスキル発動。テストメントは攻撃やレアスキルなどの範囲を広げる効果がある。」

「咲良さんこれで一掃しましょう！さっさと終わらせませすわ！はあああああ！」

「シュバツ！」

「ブレードモードに切り替えて一気に2体、

「はいー！」

「咲良ちゃんも同じく2体。」

「灯音様、残りは何？」

「500m先に2体いるだけ……かな……」

「分かりました！よし……」

「聞いて構える円だが様子がおかしい。」

「あれ？動かない……」

「え？どういうこと？」

「わからない……」

「と思っていたが、よく見るとマジクリスタルコアが赤く点滅している。CHARMのオーバーヒート警告だ。これ以上使うとおそらくは……」

「むしろこれはチャンス、と思った私。」

「円。その状態でも後2発は撃てるからやってみて」

「待って。それ以上使ったらCHARMが再起不能になるわよ？いいの？それでも？」

「と、初花様。」

「あの……すみません。実は……」

「事情を耳打ちする。それで理解してもらえたのか、あーなるほど、とニヤニヤ顔で黙ってしまった。」

「え？壊れるって？」

「いいからやって！私でもあの距離はムリ……」

「う、うん・・・」

パンツ！　パンツ！

射撃音が響く。そして――

シュー・・・

グングニルから白い煙が上がる。

「えっ？　ええっ!？」

当然本人は困惑。

京夏お姉様はあえて何も言わないようだ。

「CHARMのオーバーヒート・・・私初めて見ました・・・」

「確かに滅多に見られるものじゃないわね・・・」

「あの・・・これってどうなっちゃたんですか？」

半分泣きそうになっている円。

「マジ弾1発に力を詰めすぎるとCHARMの保護機能が働いて本来の力を発揮できなくなるのよ。それを続けていると保護機能も働かなくなつてCHARMとしての役目が終わる・・・」

「え・・・じゃあ・・・」

「そのCHARMは部品を交換しても2度と使えないわ。けど、安心して円。実は前々から思ってたことがあって『わざと』そうさせたのよ。不幸中の幸いと言うのも何だけど丁度出来上がったばかりだからいい機会かな」

「どういうことですか？」

「あ、そっか。バスにも説明してないんだっけ……。実は密かに『あるもの』を依頼してたのよ」

「あるもの?」

ということまで再び工廠科の乃莉子さんがいる工房へ。

「あらみなさんお疲れ様ー・・・って、どうしたのそれ!？」

円のCHARMを見て驚いている。

「それが・・・例の話はなくなっちゃって・・・」

「見ての通りですわ」

まじまじと眺める乃莉子さん。

「あちゃー・・・オーバーヒートかぁ・・・」

「そういうことなので・・・例のCHARM出してもらっていいですか？」

「あーはいはい・・・ちよつと待って・・・」

と言って工房の奥のほうへ。

「CHARMが、どうかしたんですの？」

ハテナ顔のベスと円。

「まあいいからいいから。見ればわかるよ」

しばらくして、

「お待たせー。あの後外装の色ちよつと変えたから」

持ってきたのは――

「アステリオン・・・ですわよね？」

確かにアステリオンだが、私が見たときは標準色（青）だったが、今は赤になっている。

「そう。ただのアステリオンじゃないわ。名付けてアステリオン・ブリッジ」

「アステリオン・ブリッジ？」

「ヒビロカネのアステリオンは知ってるでしょ？」

「はい。確か・・・李組の王雨嘉わんゆうしあさんが使ってるはず・・・それが、どうかしたんですか？」

王雨嘉――アイスランドからの留学生で、円と同じレアスキル――

――天の秤目――の持ち主だ。

「アステリオンはブレード、シューティング、殴る目的のアックスモードが搭載されてるんだけど、このアステリオンはアックスモードを省略した代わりに本体の補強とブレードの強度向上、それに射撃距離が少し伸びるようにしてあるの。もちろんそれだけじゃないわ」

乃莉子さんは続ける。

「明日香さんのタングズニルと同じようにシューティングモードのときだけバランスウエイトが働いて安定して射撃できるようにしてあ

るから長距離からの援護がかなり楽にできるはずよ」

「バランスウエイト？何それ？」

「初めて聞きました」

「明日香さん、CHARMにそんなことしてありましたの!？」

驚くのもムリはない。

「あはは・・・」

苦笑い。

「実はね、御台場にいたときから学園外ガーデンのビームライフルのスクールに通つてて、そのせいもあって、CHARMでも重量がないとシューティングモードでブレブレになつちやうから当時の工廠科にお願いして作ってもらったの」

「だからあんなに安定して撃てるんだ・・・」

「使ってみればわかるけど、少し慣れが必要だから最初のうちは苦労するかも」

「じゃあ天の秤目なしであれだけ撃てるのは？」

「・・・気が付いたら出来るようになってたから」

「なんの話ですか？」

ベスはそのときまたまた離れていたの知る由もない。

「えつとね、明日香ちゃんがレアスキルなしで500mぐらい先にいたスモール級撃つたからなんで？つて」

「ありえませんか!？」

と激昂するベス。

「考えてもみてくださいな。わたくしたちが見えるのはせいぜい良くて100mぐらい。それを500だなんて・・・」

「そうね。普通はありえないわね。もしかして、サブスキル持ち？」

「さあ・・・？今まで意識したことないからなあ・・・」

乃莉子さんに言われて気づく。それは考えたことがなかった。サブスキル——魔眼、か。

けど、私の知る限りゼノンパラドキサでサブスキルを持っているリイはいない。

「と、とにかく！コアを移して試しに撃つてみたら？明日も訓練ある

し、今のうちに触つといたほうが・・・」

2度目の射撃場は日は落ちかけすつかり夕暮れとなっていた。

「へえ・・・アックスモードなしのアステリオン・・・考えたわね。ブレードも少し小さくなってるわ」

京夏お姉様にも来てもらい、見てもらうことにする。乃莉子さんも一緒だ。

「よく分かりましたね京夏様！そんなんですよー。これがアステリオン・ブリッジのいいところで、小さくした分強度が出せるんです」

「円、持ってみて、どう？」

「うーん・・・なんか慣れないなあ・・・頭でつかちつていうか」

見た目の印象だろうか。重量はどちらも変わらないはずだ。

「じゃあ・・・モード変えて撃ってみて」

「うん」

ガシャン！

モードの切り替わる音。

「うわっ！」

円が体勢を崩しそうになる。バランスウエイトの欠点はこれ。モードが切り替わった際、本体に仕込んであるウエイトの位置が変わるためだ。まあ結局は慣れなのだが。

「おっと・・・」

慌てて私が手を添える。

「重量はどう？」

円が不思議そうにCHARMを眺めている。

「え？なんで？どうなってるの？」

「仕組みは教えられないけど、持ってみてバランスはどう？どっちかに重いつてことない？あるなら調整するわ」

「ちよつと待って。よつと・・・」

円がCHARMを構える。

「うわあ……すごい……構えてるだけなのに全然銃芯がぶれない……」
円が感動している。

「でしょ？それを置いといても、元々アステリオンは長距離射撃向きだから円にはピツタリのCHARMだよ」

「乃莉子ちゃん。えっとね、もうちよつと後ろに重く、かな。手が疲れ
る……」

「はいはいちよつと貸してね。えーつと……ここをこうしてつと……」

乃莉子さんは受け取るなりすぐ調整した。

「もしかして、これって自分で出来たり？」

聞いてみる。

「できるようにはなってるわよ。けど、専用工具が必要だからちよつ
と厳しいかなー」

と乃莉子さん。

「へえ……そんなに変わるものなのね。ねえ乃莉子さん、私のCHA
RMにも実装は可能？」

京夏お姉様に乗ってきた。

「可能ですけど……妹シルトと同じ仕様にした、とかですかあ？もう……
お暑いですなあ……」

「……そういうのじゃないわよ。純粹に欲しくなっただけ」

もしかすると、LGメンバレキオンー全員がバランススウエイトを付ける日が
来るかもしれない。

パンツ！

訓練弾独自の乾いた音。

パンツ！

もう1発。撃った弾は的の中心より少し上に当たる。もちろん2
発とも同じところだ。リリイになりたての円は的に当てるのもやつ
とって感じだったが、ここまでうまくなったのだ。

「これすごい！ありがとう乃莉子ちゃん！」

「お礼なら私じゃなくてルームメイトにね」

と私のほうを指す。

「明日香ちゃん……」

「私は何もしてないわよ？相談しただけ・・・なーんてね。ホントはさ、2週間前にやった自主訓練のときに思ったんだ。円のブレ問題どうにか解決できないかなあって」

「・・・」

「で、自分のことを振り返ったらバランススウエイトのことを思い出したから、乃莉子さんをお願いしてカスタムしてもらっただけ。タイミングを見計らってグングニルを壊れたことにしてこっちに・・・って思ったらまさかのタイミングでオーバーヒートさせちゃうしき・・・ビツクリしたわよ。もしかして、ベスってファンタズムでも持つてるとか？」

「あははは・・・」

「ファンタズム？なんのことですか？わたくしにはさっぱり・・・」

「ほら、先週の中庭での話。忘れた？自分で言ってたでしょうに・・・」

あー、と手を打ち、

「あのときの・・・そういうえばそうでしたわね。単なる偶然ですわ」

「これでレギオンの方針がやつと固まったかな・・・みんな、ちよつといいい？」

京夏お姉様が口を開く。

「なんですか？」

「ちようど1年生ほとんどいるし、ポジションについて正式に話すわね」

「ポジションですか？大方決まってるんでなくて？」

「一応、ね。明確にしておきたいのよ」

と、京夏お姉様。

「まず明日香。A アタッキングゾーン Z。琴乃と常に最前線にいることになると思うけど、一番の要だから慎重にね」

「はい」

「次、エリザベスさん。あなたも明日香と同じぐらい戦闘スペックは高いわ。けど、前にも言ったけど、勝手な判断をすることがあるから、そこだけ要注意ね」

「はい・・・ですわ・・・」

「それさえなければ常に前線で戦ってもらいたいぐらいね。円ちゃん
は・・・CHARMは持ち替えたけど、太刀振る舞いはまだまだだか
ら、私としては後方支援のほうに回ってもらいたいわ。明日香もそう
思っただんでしょ？」

「ははは・・・その通りです。咲良ちゃんもかな、と思っただんですが」
「よく分かってるわね。そんなところかな。今はみどりがいないけ
ど、縮地の利点を生かしてヒュージの引っ掻き回し役になってもらう
つもりよ」

それは大いに賛成なのだが、ひとつ不安が――

あのメンドくさがりのみどりがちゃんと命令に従うのかどうか。

「それなんですけど・・・多分大丈夫だと思います。みどりちゃんって、
面白そうだったり、自分が興味あることには素直なんです。だからそ
こは問題ないかと」

「へえ・・・」

今まで気にしたことがなかった。

「そんなところかな。乃莉子さん、後で工廠科行くから、さっきの話の
続きを」

「りよーかい。では工房でお待ちしております！」

尾上明日香

「待ちなさい明日香！」

京夏お姉様の静止も耳に入っていない私は一目散にヒュージに向かていく。

「はあああああああああつ！」

斬りかかろうとするも、

キンツ！

目の前には京夏お姉様。

「落ち着きなさい明日香！何があったかわからないけど今は・・・」

「止めないでください京夏お姉様！やっと思つけたんです！こいつを倒すまではなんとしても・・・」

言い終わる前に私の予想しなかったことが起きる。

パシツ！

「え・・・」

なんと、京夏お姉様がCHARMをその場に置いて私の頬を叩いたのだ。身勝手な行動をしているんだから当然なのだが。

啞然とする私。

「戻りなさい明日香。これはLレギオンGリーダーとしての『命令』よ」

「・・・はい」

「いきなりなんですの？人の話も聞かずにヒュージに向かていくなんて・・・いつもの明日香さんらしくありませんわ」

「そうだよ明日香ちゃん。一体どうしちやったの？」

「みんな、ごめんね・・・」

「どういうことか説明してもらえる？」

突然戦闘から始まり困惑している人も多いと思う。私たちは今ラージ級と戦おうとしているわけだが――

「あの個体・・・レストアです。そして私の憎つき相手・・・」

「レストアってなんだ？」

と、みどり。

「一度負傷したヒュージがネストに戻って回復した個体のことよ。私たちはレストアード——略してレストアって呼んでいるわ」

初花様が説明してくれた。

「ということは……以前明日香さんはこのレストアと対戦したことがあると？」

「ええ……対戦どころじゃなかったわ！だからこそこの手で……」
「わかったから落ち着きなさい明日香。それで今回の作戦だけど……」
「その前に説明させてください。なんで私が慌てて駆逐しようとしているか」

息を整え一旦呼吸を置く。目の敵がいるのは分かるが、落ち着け私。

「あのヒュージ、最初のうちは大人しいです。時間が経つにつれて耳障りな音とともに凶暴化していきます。それだけならいいんですが……マグリフレクターを発動したら厄介です。ノインヴェルト戦術も効かなくなるかも……」

「マグリフレクター……か。あまり考えてる時間はないわね。明日香、今回あなたは前線に出ないでほしいの。悔しいだろうけど我慢して。エリザベスさん。今回あなたに前線を任せるわ」

「わかりましたわ京夏様」

この判断が吉と出るか凶と出るか。

「みんなは2人を中心にサポートを。それでも厳しければノインヴェルト戦術に移行します。1年生のみんなはこれが初めてになるけど、くれぐれも慎重にね」

まさか前衛から外されるときが来るとは。

「明日香。ちよつとこちらへ」

みんなから少し離れたところへ。幸いまだヒュージは攻撃範囲にはいないようだ。

「いきなり平手打ちしちやったことは謝るわ。それよりどうしたの急に？」

「私もいきなり飛び出してしまつてすみませんでした」
頭を下げた上で、

「一年半前……あのレストアに殺されかけたんです」
「え……」

「あのときはレアスキルに覚醒したばかりで自分自身が浮かれてたつていうのもあつたんですけど……私が相手をしたときはミドル級だったのにまさかここまで……」

「でもミドル級相手にそこまで苦戦したのは……?」

「耳障りな音です。耳を劈くというか……とにかく立つものやつとなぐらいの音……あまり喋つてると時間がなくなります。急ぎましようー!」

「そうね……」

「はああああああつ!」

キンツ!キンツ!

ベスが前衛にいるのがすごく違和感に感じるがそんなことを言っている場合ではない。

パンツ!パンツ!

私が後方射撃に回っているのは珍しい。それよりも――

パンツ!パンツ!

前衛にいないことをマガ弾に込めて撃っている自分がいるのが悔しい。

「明日香!悔しいのは分かるけど闇雲に撃たない!」

「すみません……」

今の自分は冷静さに欠けている。落ち着こうとすればするほど余計焦っているらしい。

「あの……やっぱり今の自分には我慢できそうもないです!ゴメン、ベス!場所変わって!」

「明日香!」

「ちよつと明日香さん正気ですよ!?あとでどうなっても知りませんわよ!?!」

キンツッ!キンツッ!

「こんのっ!このっ!」

「作戦変更! 私たちは3人のアシストへ! まったく・・・」

京夏お姉様は呆れた顔をしてるが、実際のところはどう思っているのだろう。

「明日香ちゃん! こいつの弱点は?」

琴乃様が尋ねる。

「中央左の赤く点滅しているところ・・・あそこから耳障りな音が出ます! なのでそこを叩けば・・・」

「中央左ね・・・」

琴乃様が動きを一旦停止させ、目を瞑っている。

「あの・・・琴乃様、止まってる場合では・・・」

瞬間目を見開き一目散にヒュージに向かっていく。

「はあああああああああつ!」

ラージ級の懐中央左へ。

ガンツ!

GY A A A A A A A A A A A A!!

鈍い音とともにラージ級が暴れ出す。致命傷にはなっていないようだがダメージは与えられたようだ。

ヒュンヒュン・・・!!

ラージ級からの攻撃!

「くっ・・・」

かろうじて避ける。

パンツッ!パンツッ!

後ろからの援護。この程度の攻撃は当然利くはずがない。

GY A A A A A A A A A A A A!!

ヒュンヒュン・・・!!

ラージ級の攻撃が急に激しくなる。私の記憶ではこの後さらに耳障りな音が激しくなる。それがさらに進行するとマガルフレクター

が発動して一切の攻撃が効かなくなったはず。

「京夏お姉様これ以上はマズいです！ノインヴェルト戦術を！」

「わかったわ！」

言うなり封を切った専用マジ弾をCHARMに装填する。

「いい？これは本番よ！絶対ミスは許されないわ！」

ダンッ！

まず最初にパスが渡ったのは――

「えっ!?わたくしのですの!?!」

一番ミスする率の高いベスに最初のマジ弾が行く。リスク回避としては最適解だと思う。パス回し対策としてリレイと全く関係ないラクロスやらされて(?!)いたわけだが、ここでどうなるか。

「いいから早く！」

「わかりましたわ！灯音様！」

ヒュンッ！

マジスファイアが灯音様に渡る。

「・・・次、初花お願い！」

ヒュンッ！

初花様へ。

「まだ攻撃は大丈夫よね？」

初花様が確認する。

「はい！でも急いでください！」

とは私。

ヒュンッ！

何も言わずに投げた先は――

「ちよつと初花ちゃん！」

琴乃様の元へ。口調は怒り気味だが、本気で怒っているわけではないようだ。

「まったく・・・」

しょうがないなあ、といった感じの表情をしている。それを許している、ということは何か確実なものがあるからだろう。

「頼んだわ咲良ちゃん！」

ヒュンツ!

「は、はい!」

受けとるなり、

「えっと……」

CHARMを持ったまま固まっている。

「いいから早く!」

京夏お姉様から怒声が飛ぶ。珍しい光景ではあるが……。

「誰でもいいから受け取って!」

ヒュンツ!

「よっと……うわっ!」

すかさず取ったのはみどりだ。が、

GYAAAAAAAAAAAA!!

ヒュンヒュン……!

「うわっつと……」

縮地を使いながら攻撃を巧みに避けてはいるが、マジスファイアを落
とさないか心配だ。

「ああああ……落としそう……」

「早くパスして!」

「わかってるよ!」

ヒュンツ!

残るは私と円まどかだけだが……。

「……」

受け取ったものの、何も喋らない円。

「……」

またしても沈黙。

「円!」

私の声でハッ!としたのか慌てた顔になり、

「ご、ごめん明日香ちゃんボーっとしてた……最後お願い!」

ヒュンツ!

「くっ……」

守護天使

「あれ……ここ……は？」

見慣れない天井……そうか、私……。

あの憎つくき特型ラージ級を倒した後、マジを使い果たしてそのまま倒れてしまったらしい。

「目が覚めたみたいね。バカ明日香。みんなに心配かけて……」

ベッドの側には京夏お姉様をはじめLGレギオンのみんながいた。

「そうだよ明日香ちゃん？みんな心配したんだよ？」

「……無茶はよくない」

「あたしは別に明日香のことなんかこれっぽっちも心配しなかったけど？」

「その割には医務棟に一目散に駆け込んだのは誰かしら？」

「う……それは……」

「なんだかんだみどりちゃんって心配性だよね」

「う、うるさいな！いいだろ別に……」

言いながらそっぽを向く。

そして約1名——むくれ顔をしてこちらを見るリリイが。

「……今回の件、最初から詳しく説明していただけます？わたくしは納得しておりませんわ！」

「ベスちゃん、ここは医務室なんだから大きい声出しちゃダメだよ？」

「京夏お姉様……みんな、身勝手な行動をしちゃってごめんなさい……」

みんなに謝った上で、

「あのヒュージは……私が御台場中等部に入って仕留め損ねたやつなの……まさか鎌倉府で敵討ちを取るとは思わなかったけどね……」

「それは分かるのですけど……仕留め損ねたというのは……」

「そのときはまだミドル級だった、って言ったら？」

そう——あのときは間違いなくミドル級だった。

「明日香さん、レストアだとおっしゃってましたわよね？」

「おそらくね……それと——」

一呼吸置く。

「御台場の教育方針で、この当時は付き添いで先輩リリイが同伴することはあつても、一切手を出さなかったの。あの時はあさがお権様が私の付き添いだつたわ」

「権様って？」

「L G ロネスネスの藤田権様。お台場迎撃戦は知ってるでしょ？そのときのメンバーよ。それより前の話」

権様のことを説明したうえで、

「そのとき権様は私一人でミドル級を駆逐できるって判断だったんでしようね．．．私もそのときはそう思ってたわ。けど．．．あの音のせいで私は．．．」

言葉に詰まってしまった。

あの鳴き声とも甲高い叫び声とも思える、さらに不快な金属が擦れるような複数が混じったあの音。

「最初のうちはミスさえしなければデュエルでも勝てるって思った．．．当時から弱点は把握出来ていたし、そこさえ叩けば後は．．．っていうのが浅はかだったわ．．．中央左下は確実に叩けてたし後はとどめだ！ってときに．．．目の前であの音が．．．」

咄嗟に両耳を塞ぎCHARMから手を離してしやがみ込んでしまったのだ。通常ならありえない行為。

「その場で我慢して刺せればよかつたのに耳を塞いじやって．．．背中からヒューズの攻撃をもらって．．．気が付いたときにはベッドの上．．．」

「．．．」

「頭に思い浮かんだのはあの船田きいと純様と手合わせしたときのセリフだった．．．やっぱり私はここにいちやいけないんだ．．．って」

「明日香さん．．．」

「あのとき私が．．．我慢していればって思ったら．．．悔しくて悔しくて．．．」

「明日香ちゃんにそんな過去が．．．」

最後の方は涙声になっていた。私が今まで語りたくなかった過去。それは自らの過ちでもある。自分の弱さとも言えるか。

「じゃあ、御台場から百合ヶ丘に来たっていうのは・・・」

「その後いろいろあつて予備隊には入れたよ？けど、メンバーとは不仲になっちゃってさ・・・ここならみんな優しくしてくれるんじゃないかって。もちろん強くなりたいていうのはあるよ？けど、ここに来てよかつた・・・みんな優しいし、すごいフレンドリーだし、なによりも守護天使シユツツエンゲルの契りを結べたこと・・・それがここに来て一番嬉しかった」

「明日香。これからは一切無茶をしないこと。それと私たちは仲間なんだからみんなを信頼すること・・・つてそれは言わなくてもわかっているか」

「はい。敵討ちはもう済みましたから。それに——」

みんなのほうを向き直し、

「やりたいことはまだまだありますから」

「さて、と・・・まとまったところでお知らせがあります」

改まって京夏お姉様がみんなのほうを向く。

「来週L Gの代表会議がお台場であるから私は不在。その間L Gのまとめ役は・・・明日香、お願いね」

「えっ!?私!?!」

聞いてないんだけど・・・。

「今初めて言ったからね」

とニコニコしながらさらっと言う京夏お姉様。

「今日はもう解散ね。みんな戻っていいわよ。お疲れ様」

「明日香ちゃん。もう平気？」

「多分・・・けど、もう少ししたら戻るから円まじかは先に戻ってて」

「じゃ、後でね」

みんな医務室から出ていく。が、

「・・・」

京夏お姉様だけはまだ医務室にいる。

「あの・・・戻らないんですか？」

「・・・」

「京夏・・・お姉様？」

しばしの沈黙。

「明日香。ちよつと時間、いい?」

ようやく口を開く。

「……私もいい加減けじめを付けないとね」

「……けじめ?」

その場所に行くまでは京夏お姉様の言っている意味がわからなかった。

ついに来てしまった。

意気地なしと呼ばれてもかまわない、そこに行ったらお姉様が蘇ってくるのではないか、そんな幻想を見る気がして、今まで近づかなかった。でも、いつまでもそんなことを言っているわけにはいかなかった——ようやく私にも守護天使シュツツエンゲルができたのだ。いい加減過去を振り切らなければ先へは進めない。

「あの……京夏お姉様大丈夫ですか?顔色が……」

「ううん……なんでもない。ここへは前に迷子になって来たことがあるのよね?」

「はい。あのときはバスと琴乃様にいろいろ言われましたから。でも今はこうやってお姉様と一緒になれて……よかったと思っています」

私の妹シムレット——尾上明日香はハッキリ言う。

「実は……ちゃんと来るのは初めてなのよね。まあ、勇気が出せなかったのが正解かな……」

海のほうを眺めながらぼつりとつぶやいた。

「あの……今まで黙ったんですけど……お姉様に守護天使がいた、つて」

「ええ。だからその墓参り。その前に——」

明日香と向き合い、

「今までちゃんと話したことはなかったわね……初代エリユーズニルのこと」

LG初代エリューズニル。対ヒュージ外征戦を活動拠点としていた。

「元々はね、高等部の人数不足を補うために作った即席混成LGだったのよ」

「それは・・・咲良ちゃんから聞きました。お台場迎撃戦で百合ヶ丘の主戦力がいないから、今いるリリイで補うためだって」

「そう。じゃあ日の出町の惨劇は知ってる？」

日の出町の惨劇——エレンスゲ女学院のLGヘルヴォル主導の対ヒュージ殲滅作戦・・・であったのだが、当時のヘルヴォルは戦力重視の、結束力のないLGだった。そのため判断を誤った作戦が遂行、結果——多くのリリイが犠牲となる。甲州撤退戦と並ぶ近年の二大惨劇とされている。

「はい。というか、私も実は参加していました」

「えっ!？」

「って言っても最前線にいたわけじゃないです。あのときは、まだ中等部に入ったばかりで右も左もわからない状態なのに突然、日の出町で住民の避難誘導しろ!って言われて・・・」

所謂小間使いの扱いだ。

「そう・・・その日の出町に結成して間もない私たち9人のうちの4人が外征したわ」

「全員じゃなかったんですか?」

「ええ。なぜか上級生の4人だけ、ね。もし全員だったとしたら今私はここにはいないかもね」

「・・・」

「それぐらいの戦いよ。まあ運が良かった、と言ってしまえばそれまでだけ」

期間中は留守番という形で百合ヶ丘に残っていることが心残りだった。できることならお姉様と一緒に戦いたい——司令を無視して参加してもよかったのだろうけど、居場所がなくなるのは間違いなかった。

「その4人は・・・結局帰って来なかったわ。これだけなら良くある

話・・・」

落ち着け・・・落ち着け私・・・そう自分に言い聞かせながらも話を続ける。

「LGができる以前から私は・・・高等部によく遊びに行ってたの。そこで1人のリリイと仲良くなった」

「それが・・・」

「ええ。私の守護天使——鹿野洲^{すの}寧^の美^みお姉様よ」

と、首にかけているペンダントの中を開き、明日香に見せる。

「鹿野・・・洲寧美様・・・どういう理由で・・・」

「自殺よ」

「えっ・・・」

「私だって・・・今でも信じたくないわ・・・けど事実・・・」

「お姉様・・・」

平静を装いつつも続ける。

「同じLGになった私たちと洲寧美お姉様と亡くなった4人・・・」

「あの・・・私たちって・・・」

「私と初花は初等科からの幼なじみ、灯音と琴乃は中等部から仲良くなった友達・・・たまたまLGが一緒になって・・・その関係が今でも続いているのよ」

「・・・」

「日の出町の前から私と洲寧美お姉様は守護天使の契りを結んでいた。4人が亡くなったって連絡が入って、リーダーでもあるお姉様から何か話があるんじゃないかって思って、私はLG控え室で待機してた。けど・・・」

「けど?」

「3日経っても・・・一週間過ぎても洲寧美お姉様は控え室に来ることはなかったわ」

「これはお姉様になにかあったんじゃない・・・そう思って中等部の寮からわざわざ高等部の旧館に行こうとした・・・ときに・・・」

「」で言葉が詰まってしまふ。

「・・・お姉様?」

だめだ。ここで躓いてしまつては守護天使——姉として示しがつかないではないか。一旦ここで深呼吸。

「当時の高等部生徒会から携帯端末に連絡をもらったわ。洲寧美お姉様が自室で倒れている……つてね」

「……」

「もちろんすぐに旧館の、お姉様の部屋に飛んでいったわ。けど、周りの様子がおかしかった。部屋に荒らされた形跡もない、ヒュージに襲われたときにたまにルーンの後が残ったりすることがあるけど、それもない。とにかく不自然だった」

「じゃあ……」

「洲寧美お姉様の机を見ると……そこに……」

しばらく黙つてしまふ。乗り越えろ私。

「お姉様がいて、頭から白い布がかけられていたわ……生徒会に話を聞いたら……昨日までは……講義と演習には出ていたつて……」

「なんで!? どうして!? 私はわけが分からなくなつて部屋を飛び出したわ……だつてそうでしょ? こんな……納得できる……わけ……ないじゃ……ない……ううっ……」

今まで頑張つて泣くまい、と耐えてきたけど、ここでついに我慢の限界を越えて、声を上げて泣いてしまった。

「そう……だつたんですね……。なんで、今までLGのことを話したがらなかつたんだらう? つて不思議に思つてました……リリイなら死と隣り合わせで……けど、どうして……」

「わからない……お姉様の机の上には、薬らしき錠剤と、メモが置いてあつたわ……『京夏、ゴメン』つて……」

「まさかとは思いますが……洲寧美様つて……」

「違う! お姉様……洲寧美お姉様は……そんな人じゃ……ない……」
今まで耐えてきたものが一気に崩れていた。

「こうなるつて分かつてたから……! だから……今までここには来なかつたのよ……!」

「洲寧美お姉様あああああああ!」

いつもの私はどこへやら。今は守護天使を亡くした、1人の妹——
—夏目京夏としてただ泣き崩れるだけだ。

数ある墓標の中で唯一、文字色の違うものがある。自ら命を断って
しまった私の守護天使——鹿野洲寧美お姉様。ここに眠る多くの
リリイはヒュージとの戦いに敗れた者ばかりだ。

泣き崩れる私を明日香がそつと背後から抱きしめてきた。

「けど、もう大丈夫です。今は……私が……この私が……お姉様
についてますから……」

「明日香……」

「最初はなんで私なんか守護天使に……なんて思っていました。けどあ
のとき、京夏お姉様が私のことを助けてくれなかったらどうなってい
たか……」

「LGメンバーがピンチだったら……助けるのは当たり前のこと
よ……」

「けど、それだけじゃないです……京夏お姉様。確かに決め手はそう
でした。初めて会って、ベスと手合わせしたときのこと覚えてますか
?」

「もちろんよ。確かあのときは明日香が足をくじいて、あのままじゃ
怪我しそうだったから私が止めたのよね」

「はい。私も、今までいろんなリリイと手合わせしてきました。もち
ろん『あの』船田純様きいととも。でも——」

「ベスを止めに入ったときの間合いとタイミング……あれを見たとき、
今まで悩んできた私の答えが見つかった。そう思ったんです。私が
目指すのはこれだ! って……」

「え……」

「私……今まで対人戦で1勝もしたことがないんです……恥ずかし
い話ですけど……対ヒュージ戦だとこんなことないのに……」

言われてみれば確かにそうだった。対ヒュージ戦では私と同等……
いや、それ以上の実力を発揮しているのだ。が、対人戦はどうして?
となるほどひどいことになっている。

「やっと純様に言われたことがわかった気がしました。あれは私を蹴

落としたくて言ったんじゃないなくてもっと自分に自信を持ちなさいって……だから、上を目指すために京夏お姉様みたいなリイになるうって……」

自らの口から京夏お姉様に守護天使になろうと思ったキツカケを話すとは思わなかった。

「だから京夏お姉様……今は私があります……過去は過去です。でも、忘れる、とは言いません……今を……いえ……その先を見てください」

京夏様を抱きしめていた腕にさらにギュつと力が入る。

「でもこれで……やっと心の詰まりが取れた気がするわ……ありがとう明日香……」

「えっ!?!」

抱きしめていた手が振りほどかれ、代わりに私が京夏お姉様から向かい合って抱きしめられてしまった。

「あの……京夏お姉様!?!」

「いいの……しばらく……ままでいさせて……」

出会って最初の頃に琴乃様に言われた台詞を思い出す。

『今の京夏ちゃんには支えになる子が必要な』

私が京夏お姉様の支えに、ようやくくなれた、そう思うと嬉しかった。

鬼龍院琴乃

「お父様！」

GYAAAAA……

ヒュージ独特の音。

「早く逃げなさい琴乃。鬼龍院の代を途絶えさせては……ぐはっ……」
言い終わる前に私の目の前で父——鬼龍院和将はヒュージに背中から襲われた。

「い……いやあああああああああああああああああ！」

当時の私はリリイでもなんでもない、リリイになりきれないマデイツクだった。アンチヒュージウエポンは常に携帯していたものの、ヒュージに決定的なダメージを与えられるものではなかった。

「許せない……」

私の中で何かが外れる音がした気がした。

「う……うわあああああああああああああああああ！」

GYAAAAA……

その後の記憶は、ない。

覚えているのは壊れたアンチヒュージウエポンと粉々になったヒュージだったものが転がっているだけだった。

「はあっ……はあっ……また……あの夢……」

手のひらと額には大量の汗。背中もびっしょりだ。

最近またこの夢を見るようになった。LGメンバレギオンになる前までは見ることがなかったのに。

私、鬼龍院琴乃は他のみんなとは違い、特別寮という普通のリリイ達とは違うところに入っている。特別寮は特殊な事情があつて一般寮に入れない子やG・E・H・E・N・Aの研究から逃げ出して保護されたリリイなんかが收容されている。

それ以外は普通のリリイとなんら変わりがないはず。

「さて、と」

制服に着替える。今日は講義がない日なので朝から訓練だ。自前の料理道具とあらかじめ注文しておいた材料を用意。訓練前にそれらを食堂に持っていくのが私のルーティーンになりつつある。おかげですっかり食堂のおばちゃん達と仲良くなってしまった。

「琴乃様。今日は何を作るんですか？」

友人でもある夏目京夏——彼女の妹シルトでもある尾上明日香ちゃんが私に尋ねてくる。

「ナイショ。言っちゃったらつまらないでしょ？」

いつもどおり笑顔で答える。そう……これが普段の私。

「えーっと……今日は各自自主練習……なんだけど、ベスは昨日に引き続きラクロス、初花様と琴乃様は……私たちとフォーメーションの確認を」

今日は京夏ちゃんがお台場に行っているの、代わりにサブリーダーである妹の明日香ちゃんがリーダー代行をしているのだが……。
「まじか円、タイミングちよつと早すぎ！初花様はもう少し前に。咲良ちゃん少し遠慮しすぎてるかな……」

最後の方は尻窄みな言い方だ。自信がないのかな？

「明日香ちゃんどうしたの？いつもみたいにハッキリ言えばいいのに」

「どうもその……なんか私がリーダーだって言われると落ち着かなくて……」

気持ちちは分からなくもない。初めて実家の道場で教えたときも緊張で何を言ったかまるで覚えていなかった。

「けど、もうすぐ終わりにするんでしょ？だったら控え室でゆっくり反省しましょ」

訓練が終わり、LG控え室に戻った後。

今日は抹茶のシフォンケーキだ。さすがにこれは作るのに時間がかかるので前日にあらかじめ仕込みをしておいて、訓練中に焼いて、戻ってきたときにみんなに食べられるようにしておいた。

「うわあ……今日はシフォンケーキですかー」

「そう。作るのが大変だから数は用意出来なかったけどね」

「あの・・・ところで琴乃様」

「なあに明日香ちゃん？」

「後で時間いいですか？ちよっとお聞きしたいことが・・・」

いつもの足湯。

「ここは利用者が少ないのか、訪れるときは私たちしかいない気がする。」

「すみませんお呼びだてしてしまって・・・」

「いいのいいの。で、聞きたいことって？」

「琴乃様の過去についてです。気を悪くしちゃったらごめんなさい。」

初花様や京夏お姉様に聞いても何も教えてくれなくて・・・」

いつもニコニコしている琴乃様の表情が急に険しくなった。

「・・・ごめん明日香ちゃん」

「言いたくないのはわかります。誰にだって思い出したくない過去もある。けど・・・それを乗り越えないと強いリリイにも慣れないって京夏お姉様も言っていました。私だって・・・偶然でしたけど、過去を乗り越えられたんです。琴乃様だって・・・」

「やめて！」

いつも大声を出さない琴乃様が・・・。

「私だって・・・それぐらい分かってるのよ！けど・・・けど・・・！」

「だったら・・・」

「明日香ちゃん・・・もしそれがきっかけで私がリリイになったって言ったら？」

「え・・・」

「ごめん・・・私・・・戻るね・・・」

・・・明日香ちゃんには悪いことしたかな。まさか私の過去について聞かれるとは思わなかったからだ。

「ううっ・・・」

耐えきれなくなつて声を上げてしまう。ここ何日か連続で見ているあの夢、それに追い打ちをかけるよう。

「うわああああああああああああん！」

ここしばらくは京夏ちゃんとマジ交感をしていたせいもあつて落ち着いていたのだが・・・私自身不安定になっているのだろうか。

「・・・そう」

翌日。中庭で偶然灯音様に会つたので昨日のことを話した。

「琴乃様つてそんなに私たちと違うんですか？」

「違うというか・・・あの子・・・百合ヶ丘は・・・途中編入なんだよ・・・」

途中編入？

「詳しいことは言えないけど、入る直前にレアスキルに覚醒して百合ヶ丘に来たつて・・・」

入る直前にあつた出来事がトラウマだったということか・・・。

これは改めて本人に聞くしかないんだけど・・・昨日の今日ですぐ話してくれるとは思えない。

「ねえ明日香ちゃん。どうして琴乃様のことがそんなに気になるの？」

「そうですね。特段気にする必要ないんじゃないやなくて？」

不思議がつてる円まどかとベス。

「あれ、話さなかつたつけ？京夏お姉様からサブリーダーって言われたこと」

「そうなの？」

「うん。だからみんなのことをもつとよく知りたいから、いろいろ聞いて回ろうと思つて、手始めに一番話やすい琴乃様からつて思つてただけど・・・ねえどうしたらいいと思つ？」

「どうって言われてもなあ・・・」

「時間が解決するとも思えませんし・・・そうですわ!」

ポン!手を叩き、何かがひらめいたように私のほうを向き、

「明日香さん、琴乃様に弟子入りすればよろしいんじゃないですか?」

「弟子入り?」

「あ、そっか・・・薙刀術!」

「え・・・どういうこと?私が琴乃様の弟子になっても変わらないと思うんだけど・・・」

「うん・・・アイデアは悪くないと思う・・・ただ・・・勘ぐられる可能性は高い・・・」

「ですよー・・・」

「ごきげんようみんな。ねえ何の話?」

わ。当の本人の登場。

「い、いえ・・・何でも・・・」

「ありませんわ・・・ほほほ」

「ちよつと・・・LGの話を・・・ね」

「そう・・・ならいいけど」

そう言い残し、琴乃様は行ってしまった。

「・・・あーびっくりした。今の聞かれてないよね?」

「多分」

あれ?

「・・・ねえ。さっきの琴乃様、いつもニコニコしてるはずなのに、なんか違ったよね?」

いつもの琴乃様だったらニコニコしながら会話をしているはずだが・・・今日は無表情というか・・・私の誕生日のときに騙された、あの、どこか上の空のような感じだった。

「あ・・・まずいかな・・・」

「まずいって・・・なにがですか?」

ルナティックトランサー

「狂酔の月って、バーサーク状態になる代わりに・・・精神状態が不安定になるんだよ・・・」

「それは存じ上げておりますわ。それで有名な方もいますし・・・」

「じゃあ・・・琴乃が特別寮に入ってることは？」

「特別寮？」

「なんですか？初耳ですわ」

特別寮——特殊な環境下で保護されたリリイたちや、G・E・H・E・N・A.の実験施設から逃げ出してきて保護されたりリイ、などが入っている寮のことだ。百合ヶ丘は反G・E・H・E・N・A.であり、お台場以上に強化リリイや、実験から逃れてきたリリイの保護をしている、と聞いたことがある。

「んー・・・私が言えるのはここまで・・・かな・・・」

「灯音様は琴乃様の真実と知っていると？」

「知ってるよ・・・けど・・・本人が望まないんだったら・・・私からは言えない」

「んー・・・」

これはどうしたものか。

「京夏ちゃん！あなたの差し金？」

「なに、いきなり？どうしたの？」

琴乃が突然大声を上げて私に怒鳴る。

「私の過去よ！わざわざ掘り返そうとするなんて・・・」

「待って琴乃、言ってる意味がわかんないんだけど・・・」

「とぼけてもダメよ！私がしばらくおとなしくしてたからって・・・」

「いいから落ち着いて！」

咄嗟に指輪をしている手同士で無理やり繋ぐ。

パアアアアアアア・・・

私のマギが琴乃に流れていく。

「・・・どうしたの琴乃。しばらくマギ交感サボってたのは私の責任だけど・・・誰かから何か言われた？」

ようやく落ち着いてくれたのか、琴乃はなんとも言い難い表情をしてこちらを見ている。

「ごめん、京夏ちゃん・・・実は——」

「そう、明日香が・・・」

まさか明日香が私の言ったことをそこまで受け入れてくれていたとは思っていなかった。

「あのさ琴乃、明日香は悪気があつて言ってるわけじゃないよ？純粋に過去のことに関われるなって言ってるんだと思う。さすがに私もあの話を聞いたときは正直びっくりしたし」

「それは・・・分かるのよ。このところほぼ毎日あの夢ばかり見ちゃつて・・・けど、やっぱり忘れられない・・・」

「それは違う」

「えっ？」

「私もね・・・明日香に言われたの・・・。忘れろとは言わない・・・今を・・・その先を見ろ！つてね」

「・・・」

「それでハッと気づいたわ。なんで私必死になって守護天使シュッツエンゲルを結んだんだろう？つて」

「心の抛り所が欲しかったんだと思う。琴乃は誰かLGメンバーで守護天使になりたいって思った子とかいたりするの？」

「え？」

急に私が振ったからなのか、琴乃は固まってしまった。

「やだ、京夏ちゃんなに言つて・・・」

「半分は冗談、半分は本気。守護天使はムリだとしても、鬼龍院流薙刀術当主なんだから、それらしいことするのもありなんじゃない？」

「そう・・・かな・・・」

琴乃は納得してないようだが、私としては同じ想いをしてほしくない。

「それと・・・このタイミングでいうのもなんだけど・・・あのときはありがとう。あのとき琴乃が止めてくれなかったら今頃私は・・・」

「京夏ちゃんそれは言わない約束でしょ？お互い様なんだし」

そう——洲寧美お姉様が亡くなつてすぐのことだ。当時の私は情緒不安定で、中等部で禁止されていた修練以外の手合わせを、学年

問わずリリイに吹っかけていた。そんな荒れていた私を唯一止めに入ってくれたのは、灯音でもなく、幼馴染の初花でもなく琴乃だった。今思えばなぜ初花は私を止めなかったんだろう？という疑問も残るが、初花なりの私への気遣いだったのだろう。

「そう・・・だったわね・・・ゴメン」

「いいのよ京夏ちゃん。それより・・・あした明日香ちゃんに謝るわね。八つ当たりみたいなことしちゃって・・・って」

寮の部屋に戻ってから京夏ちゃんに言われたセリフが頭の中をぐるぐる回っていた。

確かに今の私は過去にしがみついたままで気持ちの切り替えが出来ていないと思う。それを克服できれば酔狂ルナティックトランサーの月との付き合い方も変わるかもしれない。そう思うと少し気が楽になった。

トントン・・・

「はっ？」

普段私の部屋に人が訪問することなんてないのだけど、誰だろう？

ガチャ・・・

そこには意外な人物が立っていた。

「明日香ちゃん・・・」

灯音様に教えてもらい、当たって砕けろで琴乃様の部屋を訪ねてみたわけだけど・・・ここに来るまでの間、寮に住むリリイ達から凝視されてしまった。そんな訪問者があることが珍しいのだろうか？

「突然すみません・・・昨日のお詫びがしたくて・・・」

「立ち話もなんだし・・・中に入って？」

部屋の中に入る。部屋の造りは新館とほとんど同じだ。灯音様曰く本来私たちと同じく2人部屋だが、特別に1人部屋を割り当てられ

ている、と聞いた。

「ひとつだけ確認させてください。本当に話したくないんですよね？」

「それなんだけど・・・明日香ちゃんに謝りたくて・・・」

「え・・・」

　　どういことだろうか。

「私ね・・・過去のトラウマにずーっとらわれてたんじゃないかって思ったのよ。だから・・・あんな・・・八つ当たりみたいな言い方で突き放そうとしちゃって・・・」

「琴乃様・・・」

「あの後京夏ちゃんにも同じこと言われちゃった。だから・・・ごめんね」

「あの・・・言ってる意味がわかんないんですが・・・」

「私ね・・・元々はリリイじゃなかったのよ」

「それは・・・灯音様から聞きました。それ以上のことは教えてくれませんでしたけど・・・」

「そうなんだ・・・」

　　なぜか納得している琴乃様。

「元々はマディックアカデミーにいたのよ」

「え・・・御台場のですか？」

　　御台場女学校には下部組織の学園ガーデンが多数存在するが、そのうちのひとつである。教育内容は本家と同じでスパルタであるとうワサで聞いたことがある。そのマディックアカデミーから努力で這い上がってリリイになった人もいる。

「そう。リリイになりたくてもなれなかった・・・けど私が中等部2年になって半年経ったある日・・・たまたま用事があって自宅の道場に戻ってたの。そうしたら・・・」

　　琴乃様は黙り込んでしまった。そして――

「ううっ・・・うわあああああああああああああああああああああああああああああ！」

　　大声で泣きはじめてしまった。

「落ち着いてください・・・ってこの状況じゃムリか・・・」
無理やり指輪をしている手同士を結ぶ。

「パアアアアア・・・」
「うっ・・・」

私のマギが琴乃様に流れていく。流れ込んだ一瞬眩んだ。

「・・・ごめん明日香ちゃん」

「それはいいです。こうなるのは分かってましたし」

「・・・やっぱりダメ！言えない！」

なんとか言おうとしてるのはわかるのだが・・・どうにも情緒不安定なのは明らかだ。

これはどうしたらいいんだろう？

ピッ・・・

携帯端末を取り出し、

「あ。すみません明日香です。やっぱり私だけでは無理みたいなので・・・お願いできますか？・・・あ、はい、わかりました。では待ってますね」

ピッ・・・

「明日香ちゃん誰と話してたの？」

「来れば分かりますよ」

一番当たり障りない人物が――

トントン・・・

程なくしてドアをノックする音。

「開いてるわ」

ガチャ・・・

「・・・どうしても言いたくない？」

「灯音ちゃん・・・」

実は特別寮に来る前、事前に灯音様に寮の前で待機してもらっていた。

『今の琴乃は・・・みんなが知っている琴乃じゃない。だから・・・もしものときは・・・私を呼んで』

と言われ、言われるがままにした。

「あのとき……もし私がいなかったら……どうするつもりだった？」
あの時？

「琴乃はね……途中編入初日に中等部の校舎で……大暴れしたんだ
よ……レアスキルでね」

「どういうことだろうか？」

「その話はやめて！」

「琴乃様が大声をあげるが、

パンツ！」

え……普段感情を出さない灯音様が琴乃様に平手打ち……。

灯音様は顔を真っ赤にして怒鳴る。

「いい加減にしなよ！いつまであの事を引きずってんの？明日香が
困ってるじゃん！」

「……」

「確かに親が亡くなったたらそりゃあ私だって同じ気持ちになるよ？け
どそれ以上にちゃんと敵討ちしてるじゃん？なんでそれを誇りに思
わないの？そのせいで覚醒したから引きずってる？そんなのただの
甘えでしょ！」

「親が亡くなってる？どういうことだろうか。」

「パンツ！」

そして琴乃様も灯音様に平手打ち。

「灯音ちゃんに私の気持ちがわかるわけじゃない！どれだけつら
いか……まだ他に教わりたくないこともあったのに……うわあああ
あああああああああああああああああああああああああああ！」

「あ、あの……」

「困惑する私をよそに、」

「ごめんね明日香……こうでもしないと……わからないと思ったか
ら……つい……」

しばらく琴乃様が泣いた後――

冷静さを取り戻したのか、かなり、落ち込んだ様子で私のほうを見て、

「今日のこんな私の姿見たら他の子たちはびっくりするでしょうね……」

ぼそりと呟く。

狂酔の月を持ったリリイたちの欠点^{デメリット}——それは精神的に情緒不安定になるということだ。

この状態を乗り越えたりリイこそがレアスキルとうまく付き合うことであり、ルドピコ女学院の松永・ブリジット・佳代様であったり船田姉妹だったりする。

「私も予備隊のときに狂酔の月持ちの子がいたからわかるんです……その子とはもう絶交状態みたいな感じですけどね……」

そして琴乃様が口を開く。

「……灯音ちゃんの言うとおり、私はお父様を亡くしているわ。しかも私の目の前でね」

目の前で……。もし同じ境遇でレアスキル覚醒前だったら琴乃様と同じ状態になっていたかもしれない。

「とにかく目の前のヒューズが許せなかった。そしたら何かスイッチが入ったような感じがして……。その後の記憶はない。気が付いたときには壊れたアンチヒューズウエポンが地面に落ちていたわ」

「それで……。その……。大暴れしたっていうのは……」

非常に聞きづらいが、尋ねることにする。

「お父様が亡くなった……。っていう気持ちの整理がつかなくて……。レアスキルが暴走したような状態……。っていうのかな……。来たばかりの私はそんな感じだったわ」

「……。それを身体を張って止めたのは私」

灯音様が？

「そう……。来たばかりの琴乃は……。まだCHARMをちゃんと扱えない状態だったから……。止めるのは……。比較的簡単だった……。ただ……。琴乃を止めよう！ってリリイが……。私以外に……。いなかった」

琴乃様がグングニルを持ってすぐ、か。もしこれがフリングホルニ
だったら・・・と思うとゾツとする。

「だから灯音ちゃんが、百合ヶ丘に来て最初にできた友達。信じられ
ないかもしれないけどね」

「私も・・・初等科は・・・アルケミラ女学館にいたからね。いろいろ
あつて中等部に上がるタイミングで・・・百合ヶ丘に編入してきたけ
ど・・・」

アルケミラ女学館——湯河原にある学園で、甲州撤退戦とほぼ同
じ時期に駿府方面の戦いで3年生のほとんどを失った、と聞いたこと
がある。

「まだあの頃の灯音ちゃんはこんな無口じゃなかったのよね？」

「え・・・このタイミングで・・・その話する？」

「みんな中等部で仲良くなったんですね？京夏お姉様から聞きまし
た」

「そうだね・・・」

「あの！」

思い切つて聞いてみる。

「^{すのみ}洲寧美様が亡くなったとき、どう思いましたか？」

LGを語る上で初代エリユーズニルのことはどうしても外せない。

「どうって・・・そうね」

最初に口を開いたのは琴乃様だった。

「私は、直接洲寧美様から水基様たちとは幼なじみだつていうのは聞
いてたわ。京夏ちゃんには言わなかつたみたいだけど。だから亡く
なったときは『やつぱり』って・・・あ、このことはナイシヨにして
おいてね」

やはり・・・後追い自殺だった。

「初花様はそのことを知ってたんですか？」

「そこまでは・・・」

「私も・・・そのことは知ってたよ。けど・・・」

灯音様は一旦言葉を切り、

「私には・・・ねえ灯音、京夏にはナイシヨにして欲しいんだけど、私、

「このまま生きていく自信がないのよ……」って漏らしてた」

妹である京夏お姉様に相談するならまだしも、全く関係ない灯音様に打ち明けるといふのはどういう心境だったのだろうか？

「唯一知らないのは京夏お姉様、か……」

「私もそこは疑問に思ってたわ。守護天使である洲檠美様がなぜ妹に相談しないんだろう？って」

「多分……だけど……あ。これは……あくまでも……私の想像だからね？」

灯音様は前置きしたうえで、

「洲檠美様は……守護天使になりきれてなかったんじゃないかな？京夏を導こうとする意思はある……けど……結果として……水基様たちのほうを取ってしまった……」

「でもそれって……」

妹を裏切ることになる——

「だから……京夏に言えなかった……んじゃないかな」

と灯音様。

「もうひとついいですか？」

「ええ」

「咲良ちゃんから聞いたんですけど……亡くなった後すごい荒れてたって……」

「あ……」

その話題を出した途端表情が変わる。

「どうしても……聞きたいんだ？」

「明日香ちゃん、本当にいいのね？」

「どういふことだろうか？」

京夏の過去

「はああああああああつー！」

キンツッ！

修練場に響くCHARM同士の独自の音。

キンツッ！キンツッ！キンツッ！

これが訓練であればよその学園ガーデンでもよくある光景だが、そうではなかった。

「ちよつとー！いい加減にしなよー！」

私が声をかけるも聞く耳持たず。

キンツッ！キンツッ！キンツッ！

「きゃあああああつー！」

ドンツッ！

対戦相手のリリイが倒れてしまう。

「そこまでー！」

形式上声をかけてくれたのは琴乃だった。

「もういいでしょ……いい加減やめなつて……」

初花が宥めるも、

ザツ……

その相手のリリイにCHARMを向け、なおも手合わせを続けようとした。

「京夏ちゃんー！」

琴乃が京夏に向かい、

パンツッ！

思いつきり平手打ち。

「ごめんなさいね和香のとかちゃん。京夏ちゃん、あの事件があつて以来ずっとこうなの……」

新家和香にいみ——当時まだ予備隊扱いだった初代アールヴ Heim 所屬だったパワーに特化した戦い方をするリリイだ。

彼女は黙ったまま頷き、一礼をしてそのまま修練場を後にした。

こんな状態が続くこと1ヶ月。

ついに同級生は対戦相手がいなくなる。私も相手はするが、京夏の攻撃パターンはある程度理解しているつもりなので負けるということはない。

「えっ？私ですか？」

当時アーセナルに（正式に）なっていないなかったわがつまのりこ結婚妻乃莉子さんとも手合わせはした。もし彼女がアーセナルを望んでいなかったら将来有望なリリイになっていたかもしれない。

その傍らで見えていたのは今のLGメンバレギオンーでもある紫衣原咲良だ。

「ねえ？いつまでこんなことやるともり？このままじゃ私たち居場所がなくなるかもしれないのよ！ねえ分かってる？」

「……」

「そんなの……言われなくても分かってるわよ！」

「それでも……やめる気ないんだ？そんなことしても……洲凜美様は戻ってこないんだよ？」

私からしてみれば今京夏がやっていることはただの八つ当たりにしが見えない。

「ううっ……わあああああああああああああああああああ！」

ついには泣き出してしまう。

そんな京夏を背中から抱きしめたのは琴乃だった。

「ねえ京夏ちゃん、約束して？今の京夏ちゃんには支えになる子が必要だわ。私たちが高等部が上がって、もしかしたら導いてあげたいって子が出てくるかもしれない……その時まで手合わせはしないで……」

「……」

「そのやるせない気持ちは……私たちリリイじゃなくて……ヒュージにぶつけようよ？それが……本来の姿」

「そうね……」

「そこまでだったなんて・・・」

信じられないがああ普段温厚な京夏お姉様がここまで・・・。

「もしかして、京夏ちゃんのことキライに・・・」

「なんかならないです!」

これだけはハッキリ言える。今の話を聞いて確信した。再びこうならないためにも、今以上に頑張らないと。

「明日香ちゃん・・・」

「私・・・もつと京夏お姉様のためにがんばろうって思いました。もつと努力しなきゃ・・・」

「明日香・・・努力するのはいいけど・・・頑張りすぎちゃダメだよ? リバウンドが来るから」

「え・・・?」

今の私には灯音様の言っている意味がわからなかった。

「今は・・・その話はいいかな・・・同じ過ちを・・・明日香にはしてほしくない・・・」

「明日香さん。ちよつと・・・」

翌日、講義の終わった後、訓練前の控え室にて。

「それが・・・なんといいいますか・・・その・・・」

ベスが珍しくハッキリと言わない。

「え?なに?ハッキリ言ってくれなきゃわかんないわよ?」

トントン・・・

控え室のドアをノックする音。

「はい?」

誰だろう?

ガチャ・・・

「約束どおり来ましたわ。これでよろしい?」

黄土色の髪にサイドテールのセミロングヘア、そしてなんと言っても特徴的なのが左右で目の色が違う、所謂オッドアイであろう。

「ごきげんよう神琳さん。うちのLGに何か用でも?」

郭神琳——台北出身の、幼稚舎からいる生え抜きリリイで、実力も相当だと聞く。

「用があるのは明日香さんではなく隣にいるエリザベスさんのほうです」

「ちよつと・・・」

ベスの制服の袖を引っ張り控え室の隅のほうへ。

「なんですか?」

「なんですの、じゃないわよ・・・あんた神琳さんに何したの?」

小声で耳打ちする。

「そのことで相談しようと思ったのですが・・・まさか直々に本人が来るとは思いませんでしたわ・・・」

「だ・か・ら!何したのって聞いているでしょ・・・」

「実は・・・昨日訓練が終わった後自主練をしていたのですが・・・その・・・」

「まーた喧嘩売ったの?喧嘩の件は私で懲りたでしょうに・・・まったく・・・」

「お待ちなさいな!話は最後まで聞いてくださいます。売られたのはわたくしのほうですわ」

「はあ?何わけわかんないこと言ってるの?神琳さんがそんなことするわけ・・・」

「あるんですよ。それが」

まさかあの神琳さんが?

「わたくしの態度が気に入らなかつたのでしようね・・・ただ、間違つたことは述べませんでしたので、わたくしに非があるとは思えませんわ」

「だから具体的に・・・」

「いつまで話をしているんです?」

しびれを切らしたのは神琳さんのほうだった。

「あなた・・・雨嘉ゆーじあさんに何をしましたの?」

ニコニコしながら普段よりも低めの声で問い直す。王雨嘉わん——
お互いクラスは違えど、寮ではルームメイトだ。にしても神琳さん・・・怒らせると怖い、というのがよく分かる。

「・・・やっぱり怒らせてるんじゃない。懲りてないというか・・・学習しないっていうか・・・ごめんなさいね神琳さん。後でバスにはきつく言っておきますから」

私が頭を下げるも、

「いいえ、それではわたくしも怒りが収まりませんわ」

「私は部外者ですけど・・・何があったのかだけ話してもらえませんか?」

神琳さんによれば、昨日修練場でバスが自主練をしていたようだが、そこへたまたま居合わせた雨嘉さんとぶつかりそうになったらしい。それだけならお互い気をつけましょうね、で済む話なのだが、こともあろうくに神琳さんのCHARM——マッレリック媽祖聖札をダシに使ったようなのだ。

「なるほど・・・ちよつと待って下さいね」

一旦バスと神琳さんを離し、私は控え室の外へ。通信端末を取り出す。

ほどなくして京夏お姉様が出た。

「すみません突然。実は——」

事の顛末を説明する。

「まさかこんなことになってるなんて思わなかったので・・・。それなんですけど、私から提案が・・・」

「すみませんおまたせして。えっと・・・」

端末で話をしてるうちになんだか雰囲気が変わっていた。

「あら、これおいしいです。うちのLGにも欲しいですわ」
うちのLG？

そういえばウワサで一柳さんが新規にLGを立ち上げた、とかなんとか聞いたことがあったのを思い出し、京夏お姉様にその話をしたばかりなのだが・・・。

「あの・・・琴乃様・・・この状況は・・・」

さつきまで穏やかではない表情だった神琳さんがすっかり私たちの控え室でまったりしている。

「明日香ちゃん、実はね・・・」

耳打ちしてくれた。

「神琳さん」

改めて面と向かって、

「さっきの話ですけど、正式にLG間での修練目的で手合わせになりました。ベス、これならいい？」

「いいも何も・・・まあいいですわ。公式戦ならばわたくしに拒否権はありませんし」

「わかりました。では後日改めて手合わせということ・・・」

「あなたのせいでこうなったんだから、責任持ちなさいよ？」

天上の間にて。

「ちよっと！ほっぺたつねるのやめてくださいます？マトモに喋れませんかわー！」

「まだ反省しない？ほらっ？」

「ひっ!?ちよっと明日香さん！どこ触ってますの!?!」

端から見ればじゃれ合っているようにしか見えないだろう。

「明日香ちゃん・・・みんなの注目の的だよ？もうその辺に・・・」

「あ・・・」

気がつけば周りのリリイから見られまくっていた。穴があつたら入りたい、とはこういうことか。

「一柳さん」

「はい？」

ひとつやなぎりり
一柳梨璃

——LGラーズグリーズ（こと、通称一柳隊）隊長——

まじか

一円と同じく一般セレクションで百合ヶ丘に入学するも、実戦経験なしにいきなりヒューズを倒したり、私よりも早く白井結夢様と守護天使の契りを結んだり、ちよつと羨ましかつたりする。守護天使に速さとかは関係ないんだけどね。

「この度はうちのLGメンバーの不祥事でわざわざ公式戦の場を快諾してもらいありがとうございます」
頭を下げる。

「明日香さん待つてよ！快諾だなんてそんな・・・」

「一応・・・LGの副隊長なので・・・形式上でもちやんと挨拶しないと」

「あははは・・・」

苦笑いの一柳さん。

「ほらあんたも、挨拶する！」

借りてきた猫のように大人しいベス。

「よ・・・よろしくおねがいますわ」

「・・・随分大人しいじゃない？いつもみたいに『ごきげんよう、以後お見知りおきを』ってやればいいのに」

「そ、それは・・・その・・・」

さつきからやたらと横に視線が行っている。あーそういうことか・・・。

「ちよつと明日香さん・・・」

珍しくベスに小突かれて小声で耳打ちされた。

「親会社の社長令嬢を前にそんな失礼なことができると思いで？答

えは『NO』ですわ」

楓・J・ヌーベル——CHARMメーカー、グランギニョルの

社長令嬢。聖メルクリウス中等部時代には当時予備隊格付けではそれまでなし得なかった百合ヶ丘を抜いて最高格付けを取った実績がある。そんな凄腕リリイがなぜ新進気鋭のLGに？という疑問は残るが今は関係ない。

「けどそれは親同士の話で、私たちは関係ないでしょうに……」

「それはそうなんですが……」

どうも納得していない様子。

「あれ、他の人たちは一緒じゃないんですか？」

「神琳さんたちなら私と少し離れたところにいるよ？」

「あー……ごめんなさいね。別に神琳さんたちに用があるわけじゃないから」

「明日香さーん。今度インタビューいいですか？」

唐突に話かけてきたのは同じLG所属の二川ふたがわ水みづだ。彼女も一般セクションで百合ヶ丘に入学してきたが、所謂リリオタクで戦術やりリイにやたら詳しい。学園

の新聞部とは別に『週間リリイ新聞』を独自に発行している。インタビューとはその週間リリイ新聞に乗せるためのものだろう。

「別に構わないけど……何を聞きたいの？」

「えつとですね……以前夏目京夏様と守護天使を結ばれたじゃないですか。その馴れ初めをご本人から直々に聞きたくてですね」

そういえば……。京夏お姉様と守護天使を結んだ直後に早速載ったことを思い出した。

「別に……私が暇なときだったらいつでもどうぞ」

「ホントですかあ？よかったあ……丁度週間リリイ新聞に載せるネタがなくて困ってたんですよー」

理由はともあれ断る理由もない。

「あ。それと一柳さんに言つとかないと……」

数日後。

修練場・・・ではなく、百合ヶ丘近所の海岸にやってきた。

神琳さん本人たつての希望だそうだ。

にしても海岸かあ・・・正直苦手だ。だが、そうも言っていられない。

「まず手合わせー組目。制限時間はなし、レアスキルは禁止。危険と思われる行為は見つけ次第止めに入るわ。それでいい梨璃ちゃん？」
「はい・・・って言っても今回お姉様に全部お任せしちやってるので私は何も・・・」

と苦笑いしているのはピンク髪の、四つ葉のクローバーの髪飾りが特徴の一柳さんだ。

ちなみに彼女の言うお姉様とは、一柳さんの守護天使——白井夢結様のことだ。甲州撤退戦では初代アルヴヘイムとして参加していたが、自身の守護天使——川添美鈴様を自らの手で殺めてしまう（本人は記憶が曖昧で罪にはならなかったそうだが。それも有り自らを苛み続けている。

そんな結夢様だが、温かい目で見守っているようだった。

「それにしても——」
手合わせが始まってから。

「あなたも思い切ったわね明日香。まさか結夢ちゃんとなえ・・・」
そう。京夏お姉様に連絡したとき、

『あの・・・ついでと言っては何ですが・・・私も公式戦・・・ということでご便乗でお願いしてもいいですか？』
無理を言っただけで結夢様との手合わせをお願いしたのだ。

「いつまでも苦手だ、なんて言っただけでいいですか。それに——」
「どうしたの？」

「あ、何でもありません。ははは・・・」
と言いかけて止めてしまった。

「神琳さんもすごいなあ・・・」
「けど、これは神琳さんにやられてるわね。見事なまでに」

円が関心している。ユニーク機（マソレリック媽祖聖札）であれだけこなせるのだから。だが、気になるのはベスのほうだ。間違いなく圧されている。おそらく原因は――

（こんなはずでは・・・）

焦っていた。あのときは正論を述べただけなので、それ自身は悪くないのだが、煽ったのは事実だ。

「エリザベスさん。わたくしに勝つんじゃないくて？」

砂で思うように間合いが取れず、動きやすい海寄りのほうに誘導しようとするも引き離されてしまう。

「ご心配には及びませんわ。こんな状況すぐにも・・・」

と言ったその時だ。

（え・・・）

一瞬何が起きたか分からなかった。

「チェックメイト、ですわ」

「ベスちゃん・・・」

「まさかこのわたくしが・・・負けるだなんて・・・」

「中華鍋だ、なんて言った罰よ・・・と言いたいところだけど、これは完全に神琳さんの作戦勝ちね」

「どういうことですか？」

「あんたもやっててわかったでしょうに。神琳さん、普段から海岸で訓練をして慣れている。つまり・・・」

「自分に有利な戦場に引きずり出して勝ってしまおう、ってことね。あの子見た目に反してやるのがあざといわね」

初花様が話割って入ってきた。

「その・・・とおりで・・・あの初花様・・・普段からレアスキル使

われてます?。」

「何のことかしら?。」

やっぱり。本人は自覚がないらしい。

「さて・・・。」

私も準備するか。

「そういえば・・・もう1組手合わせが組まれていますか・・・どなたが対戦しますの?。」

「さー・・・あたしは特に何も聞いてないぞ?。」

「私もです」

対面——ラズグリーズ（こと「柳隊」）では、

「梨璃、よく見ておきなさい。LG以外の人と手合わせなんてまずできないものね」

「はいお姉様。私は・・・お姉様が負けるだなんて思ってません」

「なーんて言われてるわよ明日香?。」

「え?明日香ちゃんやるの?。」

「実は一度手合わせしたい、とは思ってたのよね。それと・・・これは私自身への課題でもある」

決意

「2人とも準備はいい?」

琴乃様を待たせる形となってしまうているが、心の準備に時間がかかってしまった。

「いつでもいいわ」

「大丈夫です!」

「京夏様、本当にやらせて大丈夫なんですか?」

「これは本人の希望なの。いつまでもこのままじゃダメだ!」

「だからって結夢様とだなんて・・・ムチャじゃありません?」

ベスと京夏お姉様とのやり取りが聞こえる。

「いろいろと噂は聞いているわ尾上さん。よからぬほうもね」

「それは・・・」

よからぬ噂・・・それは手合わせでわざと負けて自分の強さをアピールしているのではないか、ということ。当人からすればとんでもない話なのだが、噂が噂を呼び、関係がないはずの学園ガーデンにまで及んでいた。過去形なのは今私は百合ヶ丘の生徒だからだ。

「誤解です・・・って言っても信じてもらえなそうですね」

言いながらCHARM——タンングズニルを持って構える。

「そうね」

言って構える結夢様。その構え方が独特だ。

「手合わせ2本目。ルールは先程と同じ。危険だと判断したらその場で止めるわ」

ブリューナク——灯音様も使っているが、運用コストが高い、という話もある。それよりも。

さつきベスが苦労していたのは砂地での移動に慣れていなかったからだ。幸いお台場は郊外訓練での模擬戦では砂地移動がメインだったため、こちらとしては好都合なのだ。結夢様がどの程度砂地に慣れているか。

「はあああああああつ!」

キンツ!

先制を仕掛けてきたのは結夢様のほうだ。

「うっ……」

ブリューナクのブレードが重くのしかかる。

これが今までの私ならこのまま受け手に回っていただろう。

ウワサで耳にしたのだが、一柳さんは結夢様から直接指導を受けているとか。それはそれで羨ましい話だ。

なんとか隙を見ぬろうにもタイミングがない。

「はっ!」

こうなったら当たって砕けろだ。正面から正々堂々と行くことにする。

キンツ!キンツ!

CHARM同士がぶつかる独自の音。

正面から行ったところでは競り合いぐらいにしかない。あ。

CHARMだから鏢つばはないか。

実はお台場時代に川村ゆずりは樫様から結夢様に関して基本戦術は聞いていた。

『攻撃はあえて受けて、流して斬る』

その見極めが出来るかどうか。

「2人の動きが止まってしまいましたわ」

「お互いの出方を待っているんでしょう……」

冷静に今の状況を分析する。

「にしても——まさか砂地に慣れてるなんてね」

あえてエリザベスさんのほうを見る。

「な、なんですの?京夏様?」

「他愛ない喧嘩と思って黙って見てたけど……いい課題が見つかったわね」

無理もないだろう。メルクリウス時代、ほぼガンシップでの生活が

メインのはずで、常日頃から海岸と触れ合っている私たちとは違う。

「もしかして……」

エリザベスさんは青ざめているが、

「もしかしなくても、ね。明日から海岸マラソン確定かな」

「今見る限りは……結夢様と……ほぼ互角だね……」

「これが明日香の本来の実力……のはずなんだけど……」

今日の明日香はこれまで見てきた手合わせと違い、明日香本来の実力を見ている気がした。

「これでもまだ誤解です……って言うて信じてもらえませんか結夢様？」

結夢様の攻撃を受け流しつつ喋るも、

「そんな無駄口叩いている暇なんてあるのかしら？」

言葉とは裏腹に攻撃の精度が上がっていく。

(は、早い……！)

このままではいつもみたいになってしまおう。

一方の一柳さんはいかにも尊敬の眼差しという目で結夢様を見ている。妹^{シルト}なので当然の反応ではあるんだけど……。

(一柳さんには悪いけど、この勝負絶対私が勝つ！)

実は今回少し間合いの取り方を変えている。今までは対人戦だから……と少し引いた立ち位置だったのだが……対ヒューズ戦と同じにしている。ただ、これだけ動きやすくなっている、ということは、対ヒューズ戦でももう少し間合いを詰められるということでもあるのだが……。

「明日香の動きが……いつもと違う？」

それに気づいたのは灯音だった。

「いや、違わないわ。ただ、対ヒューズ戦と同じ動きね・・・」
それを琴乃がどう判断するか。

「明日香ちゃん・・・急いでる?というか、焦ってる?」
「どういうことですか?」

明日香のルームメイトでもある円まじかも気が付いたようだ。

「なんて言ったらいいのかな・・・結夢様に必死についていこうとして
自分を見失っちゃってる・・・のかな」

「言われてみれば・・・わたくしと戦った時はもつとこう・・・冷静な
判断をしていましたわね・・・」

気づいてないのは明日香本人か・・・ここは守護天使シュツツエンゲルとして導い
てあげなければ。

「はっ!」

キンツ!

少しずつ結夢様との距離を詰めていく。

私の表情を見てか、一瞬フツと笑ったように見えてしまった。

(こんのおおおおお!)

そして結夢様が一瞬体勢を崩したようにも見えてしまう。

「ストップ!」

私の手合わせは琴乃様からの声で終わりを告げる事になる。

「琴乃様!なんであそこで止めたんですか?」

手合わせが終わった後。

琴乃様に止められてしまったが、結夢様を圧していたので実質私の
勝ちなのだろう(一柳さんは納得しないかもしれないが。

「明日香ちゃん。あれ以上は危険って判断したからよ」

「それはわかるんですが・・・でも危険要素ってどこに・・・」

私はなぜ止められたのか？という疑問と後少して勝てる！という気持ちだけが先走っていた。

「明日香。今のあなたの状態のことよ」

「京夏・・・お姉様・・・」

後ろから声をかけられる。

「でも、私にはあれが危険だなんて思えません！」

「気持ちはわかるわ。けど、明日香。冷静に考えてみて。もしこれが実戦だったらあなたはどうなった？」

「そ、それは・・・」

つまり。冷静さを欠いた行動は正しい判断が出来ないから止められた、ということだが・・・。

「でも、常に冷静な行動なんて・・・私には出来る自身がありません・・・」
「確かにその通りよ。でもね明日香。これだけは覚えておいて」

京夏お姉様は続ける。

「どんな戦いにおいても個人的な感情移入は禁物よ。それはあなたも分かっているでしょ？」

個人的・・・。つい2ヶ月も経たない前の話だ。あの特型ラージ級を倒したときのことを忘れるはずもない。

ここ百合ヶ丘に来る前は個人的な感情移入とは無縁だった（はず）。目標ができ、信頼できる仲間とも出会うことができた。

「はい・・・」

と返事はしたものの、私自身納得は出来ていない。

「・・・って言って納得するわけないわよね。けど、明日香。あなたには前歴がある。それは忘れてはいけないわけではないわよね？」

「もちろんです」

「だったら、なぜ普段感情を表に出さない結夢ちゃんが笑ったように見えたの？」

え・・・。

一瞬私の心が見透かされたように思えてしまった。

「なーんて、冗談のつもりで言ったんだけど、どうやら本当だったみたいね」

「……」

私は何も返せなかった。

「ごめん。みんな……私、寮に戻るね……」

「明日香ちゃん……」

円が声をかけようとするも、エリザベスさんに止められてしまっていた。首を横に振っている。

「今はそつとしてあげたほうがいいですわ。明日香さん、あれでいて繊細な方ですから……」

「京夏ちゃん。あれでよかったの？」

琴乃……。

「……正直わからない。けど、今の明日香は頑張るあまり突っ走るところがあるから」

正直明日香には少し言い過ぎたかな、とも思う。

「けど、昔の京夏ちゃんそっくり。あの時ほどじゃないけど」

「だよね……私も思ったわ。あ、今も……とか思ったでしょ？」

「まさか。今の京夏ちゃんは十分守護天使してると思うよ。結夢ちゃんはどうか知らないけど」

琴乃なりの気遣いなのか、最後の方は向こうに聞こえないように小さい声で呟くような感じだった。

「……明日香の様子見てくるね」

「……まさか京夏お姉様に言い当てられるなんてね」

寮の部屋に戻って最初の一言。私ってこんなナーバスだったっけ？

覚えているのは京夏お姉様にシュッツエンゲル守護天使の契りを結ぶ前もこんな感じで逃げていたような気がする。

実は私ってメンタル弱いのかな？そもそも弱すぎたらヒューズ相手に出来ないでしょ・・・とかいろいろなことが頭の中をグルグルする。

トントン・・・

誰だろう？まどか 円まどかだったらノックはしてこないはず。

ガチャ・・・

予想通りの人物が入ってきた。

「明日香・・・」

「京夏・・・お姉様・・・」

「隣、いい？」

「ダメ・・・って言っても座ります・・・よね」

言って私のベッドの隣に座る。

「そうね・・・」

しばらく沈黙。

ところでお姉様は何しに私たちの部屋に来たんだろう？

「実はね——」

最初に口を開いたのは京夏お姉様のほうだった。

「この部屋、私と初花も使ってたのよ」

え？

「運命って不思議よね。まさかこんな形で引き継がれていくなんてね」

「何が言いたいんですか？お姉様。用がないなら帰って・・・」

いつかの私みたいに後ろから抱きしめてきた。

「やめてください！」

手で振りほどこうとするも、力をギュツと入れて離そうとしない。

「お姉様！」

嫌われてもいい。けど今は誰とも関わりたくない。と思っているが手を離してくれない。

「・・・さつきは悪かったわね。でもね明日香」

京夏お姉様は続ける。

「そこがあなたのいいところでもあって、悪いところでもあるのよ」

悪いところ……。

「自分を変えたいっていう気持ちもわかる。私もそうだったわ」

「そう……だったんですか?」

「洲^{すの}嶺^{のみ}美お姉様と出会う前は私も明日香みたいな感じだったわ。突っ走って……ムチャする前に初花に止められて……なんか、今日の明日香を見ると、その時の私と重なって見えちゃうのよね」

「……」

「琴乃にもそう映ったんじゃないかな? 目標に向かって進むのは悪いことじゃない。けど、行き過ぎるところがある。私もね」

自分はそういう性格じゃない、と思っていたが、周囲からはそんな風に見られていたのか……。ひとりで突っ走って。ひとりで逃げ出して。

「もしかして……気がついてました?」

「ええ……って言っても気づいたのは私じゃなくて灯音だけ……」

気がついたときには京夏お姉様は私からは手を離していた。

「あの……灯音様なんですけど……」

これも私の悪いところだ。本人から直接聞こう。

「あ。いえ……なんでも……ないです……」

「変なの」

「で、あちらはなにをひそひそと話をしていますの?」

明日香ちゃんと京夏様がいなくなった後、一柳隊、ことラーズグリーズの神琳さんと雨嘉さん、楓さんの3人は残ったままナイシヨ話をしている。

「他所はよそ。うちは……うちだよ。エリザベスさん」

「それはそうなのですが……ああっもう!」

「そうだよベスちゃん。私たち負けてるんだから。ほら戻ろう」

とは言ったものの、寮に戻るわけにもいかないし……。

「……って寮の部屋はダメか。ラウンジ?」

ピピピ・・・

携帯端末の呼び出し音？

見ると明日香ちゃんからだった。

『円、ベス　ゴメン。自分勝手に飛び出して。私はもう大丈夫』
「だって」

ベスちゃんに私の端末を見せる。

「よかったですわ。それにしても・・・まさか明日香さんが結夢様となんて思いもありませんでしたが」

「なんて言ってるよ？と・・・」

「ちよっと！円さん！」
すると・・・。

『私の手合わせの当面の目標はアールヴヘイムの天葉様だよ』
「だって」

なんて返ってきた。明日香ちゃん目標高いなあ。私なんて・・・つて口に出したら怒られそうだけど。

「まあ・・・目標は高いほうがいいに決まっていますから、円さんもお持ちになればいいんですよ」

目標・・・かあ・・・。今までは明日香ちゃんが引っ張ってくれて、明日香ちゃんの背中ばかり見ていた気がする。

「あの・・・琴乃様。ちよつといいですか？」

次の日。訓練が終わった後の帰り道。

「なあに明日香ちゃん？」

いつものようにニコニコ顔の琴乃様。

「私に薙刀を教えて下さい」

「・・・昨日京夏ちゃんに何か言われた？」

「・・・昨日の手合わせで思ったんです。今の自分に足りないものは冷静な判断力だって」

今思っていることを素直に言う。

「私はそうは思わないけどな。昨日止めたのはそのときだけの話」

「・・・私はそうは思わないです。今まで何人かのリリイと手合わせしてきました。けど・・・全員と負けてる。止められた理由はみんな同じでした。だから変わらなきゃって・・・思っつて、今まで頑張つてきました。でも、それだけじゃダメで・・・だから自分を変えたいんです」

「どうしたの明日香ちゃん？そんなに結果を急いで。十分實力はあるんだからそれ以上頑張らなくても・・・」

「それじゃ、ダメなんです・・・」

「琴乃様も知ってますよね？私の手合わせの悪い噂。今更払拭・・・できるかかわからないけど、私は・・・実力で正々堂々名乗れるリリイになりたい。ただそれだけです」

「明日香ちゃん。手合わせは指標でしかないのよ？そんなムキにならなくても・・・」

「でも！でも・・・！」

昨日京夏お姉様に言われたばかりなのに何ムキになつてるんだ私。気がついたら大声を出していた。

「明日香ちゃん落ち着いて・・・」

「明日香・・・」

丁度京夏お姉様を通りかかった。

「京夏お姉様からも何か言つてください！私、このままじゃダメなんだって・・・」

「ちよつとごつちにいらつしやい」

強引に右手を引つ張られてしまった。

「あの・・・何を・・・」

「いいからごつち」

京夏お姉様に引つ張られたまま、講義棟から少し離れた小高い丘の上に連れてこられた。

「あの・・・こんなところまで連れてきて何を・・・」

「明日香。昨日から様子がおかしいわよ？どうしたの？」

「別におかしくはないです。私はただ・・・京夏お姉様に追いつきたく

て・・・」

「私に追いついてどうしたいの?」

「・・・」

どうしたいって・・・。私は何も答えられなかった。

「何を焦ってるか知らないけど、焦ったところで結果は付いてこない。あなたもそれぐらいは分かってるでしょ? 初心者じゃないんだから」

「・・・はい」

「明日から明日香はしばらくタングズニル使用禁止。乃莉子さんのところに行って空いてるグングニルにコアを付け替えね」

まさかグングニルを持つことになるとは。ユグドラシル製のCHARMは自分のタングズニル以外使ったことはない。ましてやバランスウエイトがないとなると・・・。

「はあ・・・自業自得とはいええ、何やってんだか・・・」

「初心に戻ったつもりでいればいいんじゃないかな? にしても意外・・・明日香ちゃんがグングニルかあ・・・」

天上の間。いつものメンバーとの会話。

「明日香やっぱスゲーや・・・あんなんで振り回してたのか・・・」

とはみどりだ。そもそもグングニルとは重量バランスが違う。

あの後乃莉子さんの工房に行ったが、

『ごめんなさい。今CHARMの予備も空きもないの。だからみどりさんのやつを使って。私からは京夏様に言っておくから』

ということだ。1週間限定だが、みどりのCHARM——グングニルを使うことになった。

「あんた・・・少しは恥じらいってもものを知りなさいよ・・・よく素っ裸でいられるわね・・・」

ここに居る全員がタオルを巻いているのだが、唯一みどりだけが生まれたままの姿だ。

「だって同性じゃん? 見られたって減るわけじゃないし」

「まあ・・・それはいいわ。で、ベスはどう思うの？」

「どうって・・・別に何も・・・まあわたくしのブラダマンテに比べたら性能なんて雲泥の差ですわ」

「・・・何わけわかんないこと言ってるの。なんで私がグングニル持たされたかって話」

ああ、と相づちを打ってから、

「京夏様はやはり明日香さんの守護天使ですわ。今の明日香さんに足りないものを理解されていますわね」

「そんなの・・・言われなくても分かってるわよ・・・」

だからこそ止められたし、克服したくて琴乃様に教わろうとした。

「そうじゃありませんわ」

えっ？

「それはご自分で考えてくださいな。わたくしからは何も申しませんわ」

翌日。訓練棟で訓練中に出撃命令が出た。出現場所に移動した私たち。

「灯音。ヒュージの数は？」

灯音様がレアスキル——鷹の目で周囲を確認する。

「えっと・・・大したことはない・・・と思うけど・・・ミドル級が5体・・・かな・・・ネストもある・・・真っ先に叩いちやったほうが・・・いいかも・・・」

「じゃあネストの殲滅は・・・円、お願いね」

「はいー！」

「エリザベスさんと琴乃を中心に私たちはサポートへ」

あの時と同じだ。また、私がA Zから外された・・・。冷静に考えれば外されたわけではないのだが、このときの私はそう思ったのだらう。

「・・・さん」

誰かに呼ばれた気がした。

「明日香さん！」

GYAAAAAAAAAAAA!!

キンツ！

咲良ちゃんに大声で呼ばれるまで気がついていなかった。

「うわあっ！」

「大丈夫ですか？いつもの明日香さんらしくない……」

前戦ではベスと琴乃様が筆頭になっている。本来ならばTZの位置にいる私がそのサポートに回らなくてはいけないのだが……。

『どんな戦いにおいても個人的な感情移入は禁物よ。それはあなたも分かっているでしょ？』

その言葉と、扱いに慣れていないグングニルに苦戦していた。

「くっ……」

キンツ！キンツ！

扱えない、と言っても立ち振る舞えないわけではない。が、また私は焦っていた。

本来の使用者がみどり、というのもあるかもしれない。だが、今の使用者は私だ。本来CHARMはコアを通して使用者のクセや扱い方を覚えてその通りに動いてくれるはず。もちろんマジが入らないわけではない。

(え……なんで!?なんで言うことを聞いてくれないの?)

何度やってもヒュージにかすりもしない。距離感は合っているはずだ。

「明日香！一旦そこから離れて！早く！」

それにいち早く気づいたのは初花様だった。え、でも離れるって……。

考えていてもしようがない。レアスキル発動！

シュバツ！

一旦その場から離れる。

「厄介だね」

「うん、そうね……」

「どういうことですか？」

一時近くの廃工場に避難してきた私たちだが、ちよつと話が見えない。

「みんなよく聞いて。あのヒュージは私たちの感覚を麻痺させているわ」

つまり攻撃すればするほど、その感覚に惑わされる、ということだ。

「ヒュージに関する情報は百由さんの分析待ちだけど、それまでは私たちでなんとかするしかないわ。円、ネストのほうは？」

「えつと・・・ネストは破壊したんですけど、その後・・・CHARMがおかしくなつて・・・」

ネストがその効果を抑制していた？ちよつとそれは考えにくい。

「あの・・・京夏様。1体バインド・・・なのかな・・・展開しているみたいです。ネストがあつたときは効果はなかつたみたいですけど・・・」

「咲良ちゃん詳しく」

つまり咲良ちゃんが言うにはこうだ。バインドがCHARMの効果を妨害している、と。通常ヒュージは負のマジを放出することがある。私たちリリイはその負のマジに浸食されると抑止力を失い、暴走する。狂酔の月持ち（特に琴乃様）であればなおさらだ。その類に近いのでは、と。

「だとしたら・・・物理攻撃は・・・一切効かないね・・・」

となると、ノインヴェルト戦術・・・なのだが・・・。

「明日香はどう思う？」

会話は聞こえている。みんなが話をしているときに一昨日からの会話と今の状況ばかりが頭をぐるぐる回っていた。

「・・・」

明日香からの返事は、ない。

「明日香」

もう一度尋ねる。やはり反応はない。

「・・・明日香ちゃん？」

「聞こえてないわね」

琴乃は苦笑いをしている。まったく・・・。

今の明日香は自分のことばかりで周囲のことが全く見えていない。こうなったのも守護天使である私に責任がある。

少し荒療治だが、こうするしかないか。

「明日香！」

私は大声で叫ぶ。

「え？」

次の瞬間。

パンツ！

「京夏様!？」

私は京夏お姉様に平手打ちされていた。しかもみんなの目の前で。もちろん周りのみんなは驚いている。

「いい加減にしなさい！今は何をしなくちやいけない時かわかっているでしょ！」

叩かれた頬を押さえながら私は呆然とすることしかできなかった。

「・・・」

「これは隊長として聞きます。明日香、あなたの、LGでの役目は何？」

本来なら今現在の状況を把握して、それを分析してリーダーでもある京夏お姉様と一緒にどう行動すべきか判断する立場のはず。なのに私は・・・。

今の私はただの冷静さを失った1リリイにしかすぎない。これじゃ、LGサブリーダー失格だ私。

「・・・」

私は無言のまま、その場を飛び出してしまった。

「・・・バカ」

バカなのは私だ。逃げ出したところでなんの解決にもならないのに。何を意地張ってるんだろう・・・。オマケにヒュージだ。倒す方法も分かっていない。

1、2体ならデュエルでもなんとかなるだろうが、なにせ使い慣れていないグングニルだ。少しでもミスすれば間違いなく命の保証はないだろう。

GYAAAAAAAAAAAA!!

考えてるそばから出てきた。幸い例のCHARMに干渉するやつは出ていない。さつき咲良ちゃんが1体だけとは言っていた・・・ということは、

ガチャン！

グングニルをシューティングモードに切り替える。

「おおっと・・・」

重量バランスがわからなくて一瞬体勢を崩す。

(にしても、新しいCHARMはいいなあ・・・)

バランスウエイトなしのCHARMをマトモに扱うのは久しぶりだ。こんなに軽かったっけ？そういういえばみどりは頻繁に乃莉子さんのところに持っていった気がするが・・・もしかしてCHARMの扱い方雑？戻ったら説教だな・・・とか考えしまった。

(・・・戻ったらみんなに謝らなきゃ)

さて、気を取り直し、照準を睨む。

パンツ！

とりあえず1発。

GYAAAAAAAAAAAA!!

反応した。1本腕が私を襲う。

「はあっー」

ザンツ！

1本は切り落とした。やはりか。あのバインド(?)展開外なら一切干渉は受けない。が、群れてないところを見ると一連と関係ない野良か?

だがヒュージには変わりない。

「ジャマよー」

パンツ!パンツ!

牽制のために数発。

GYAAAAA A A A A A A A A!!

レアスキル発動!懐に入り、踏み込んでブレードを下から上へ……あ、あれ?

ブレードが宙を舞う。

(やつぱりダメ……どうしたら……)

完全に空振った。直後、背後からヒュージの腕が来た!

パンツ!

「きやあああああああああ!」

廃ビルの壁に叩きつけられ、そのまま落ちた。

(自分勝手に飛び出して、自分勝手に行動して、やられて……)

多分だけど、今は誰も助けに來ないはず。頼れるのは自分しかない。たかがミドル級1体だ。腕さえ切り落してしまえばなんとかなる。

身体を起こし、構え直す。そして……。

「こんのおおおおおおお!」

このレベルのヒュージだったら間違いなく行けるはず。なのに……。

パンツ!

「……っ!」

何度やつても同じ目に遭う。冷静になれ私。

(けど、ここで戻るわけには……!)

またくだらない意地を張る自分。なんで素直になれない?その時だ。

ピピピ……

え？携帯端末？

慌てて廃ビルの中に入る。見ると京夏お姉様からのメッセージだった。

『少しは反省した？コイツの弱点は私たちの聴覚よ。身近にあるもので耳を塞ぎなさい。そうすれば勝機はあるわ』

まるで見られているような文面・・・もしかして灯音様が鷹の目で私を見てる？まあそれはいい。聴覚？

耳を塞いだところで何か変わるとは思えないけど・・・。耳を塞ぐもの・・・耳を塞ぐもの・・・あれ？

廃ビルの中を見渡すと、見覚えのある光景だった。あれ、ここつて・・・。

一見すると何の変哲もないオフィスだが、よく見ると奥に縦長の機械のようなものが見える。私には馴染み深いものだった。

(そうか・・・ここも・・・ヒュージに・・・)

私がビームライフルをやっていたことは前に話したと思うが、ここはその鎌倉府事務所だったところだ。ん？待てよ？

慌てて3階に駆け上がる。

幸い3階は手つかずで被害はないようだ。ただ、ホコリがすごい。ガサゴソ・・・

とある一室に付き、あるものを探す。あ、あつた！ただ、人数分あるのかな・・・。

ピ。ピ。ピ・・・

また京夏お姉様からのメッセージだ。

『人数分確保できたらすぐに戻ってくることに。攻撃に関しては考えていることがあります』

・・・やっぱり見られてる？まさかね。いくら灯音様が鷹の目を使つたところで建物内部の私の様子までは見えないはず。

「やっぱり京夏様は明日香さんの守護天使ですわね・・・」

「い、いきなり何言ってるの!? エリザベスさん。LGメンバーとして当然のことをしているだけよ」

「そういうことにしておいて差し上げます。心配して損しましたわ」

明日香が飛び出した後——

灯音にレアスキル——鷹の目を使ってもらい、行方を探していた。が、偶然そこでヒュージと戦っている姿を見つけてしまう。

「しかし京夏も素直じゃないわね……素直に言っておけばいいのに」
初花まで……。

「と、とにかく。今は明日香が戻ってくるのを待ちましょう。百由さんの調査に感謝だわ」

「よつと……」

久しぶりの感覚。と言っても半年ぐらいだろうか。お台場にいるとき、丁度ビームライフルからエアライフルに移行する人が多く、私もその流れに乗ろうとしていたが、そのときに予備隊のメンバーと揉めてしまった。それ以来ライフル関係は触っていない。

それはともかく、この事務所はライフルを使用したスポーツ全般を扱っている。私がさつき3階で探していたのはライフル射撃で使用する競技用のサイレンサー（兼耳栓）だ。

メッセージによれば、ヒュージのバインドは耳の三半規管を刺激するらしく、平衡感覚と距離感を麻痺させているらしい。三半規管を刺激させなければ何ら問題ないだろう、ということだった。

（よし……）

サイレンサーを装着し、再びヒュージを撃つために外へ。すると、

GYAAAAA!!

まだいた。もう一度攻撃を仕掛けてみるか。今度は外さない！

再び腕が私を襲ってくる。

もう一度レアスキル発動！懐に入り、踏み込んでブレードを下から上へ。

シユバツ！

(やった！)

ヒュージは真つ二つ。後はもう一度廃事務所に戻ってサイレンサーを取りに……。あれ……。

視界がボヤける。うそ……。こんなところ……。で……。マギ……。切れ……。

バタツ……

「……。明日香が……。倒れた……。？」

明日香！私は我を忘れて明日香の元へ向かう。

「明日香！」

CHARMを放り出し、すぐそばへ。

「明日香！しっかりして！」

気を失ったであろう身体を揺すり、心臓付近に耳を当てる。ビツクリした……。止まっているわけではないようだ。胸を撫で下ろす。以前の私ならここで怒りを爆発させ、暴走していたかもしれない。しかし、今は戦闘中。ましてやLGのリーダーだ。冷静に……。あくまでも冷静に。

「みどり！明日香を中へ！早く！」

「お、おう……！」

「マギを使いすぎたんですわ。まったくムチャなことを……」

症状からしてそうだろう。この症状は主にフェイズトランセンデンス保有者に多く起きる。フェイズトランセンデンスは持っているマギを一度に集中して使用、放出することでヒュージに決定的なダメージを与えられる反面、そのマギを使い切ってしまった、戦闘不能となってしまうことだ。唯一その症状がないとされるSクラス保持者は咲良ちゃんと同じクラスでオールヴヘイムの遠藤亜羅椰^{あらかや}さんだ。

まったく、そんなところまで私そっくりじゃなくていいのに……。

あの頃の自分がなんだか懐かしく感じてしまった。

「それで京夏様。どうなさいますの？」

「作戦を変更します。私はこのまま廃工場に残るわ。みどりは今すぐ明日香が入った事務所へ。わかりやすいところになにかアイテムが置いてあるはずよ。戻ってきたらさっさっきの通りで行くわ。いいわね？」

「はい！」

・・・みんなにも謝れず、勝手に飛び出して、勝手に行動して、拳げ句の果てにマジ切れ。自分勝手のオンパレードもいいところだ。

「・・・私・・・このままヒューズに呑まれちゃうのかな」
思わず口に出してしまおう。

「・・・何勝手なこと言ってるの。明日香」
え・・・。

目を開けると目の前には京夏お姉様。夢を見てるのかな・・・？

「夢・・・だよね・・・？」

「こーら。あなたは夢なんか見ていないわよ。ほら」

ピンッ！

「あいたっ！」

いつかみたいにデコピン。

本物だ。見て安心したのか、目には涙。

「う・・・うわあああああああああああああああああああ！」

そのまま抱きつき、そのまま大声で泣いてしまった。

「ごめんなさい・・・私・・・私・・・！」

「一時はどうなるかと思っただわ。後でちゃんとみんなにも謝りなさい。まあ・・・今回は私にも非があるのだけど・・・」

「なんですか？悪いのは全部私で・・・」

「はいストップ。もしかして覚えてない？私が琴乃とのやりとりに割って入ったこと」

琴乃様とのやりとり・・・あ。

「あのとき……琴乃と明日香がケンカしてるものだと勘違いしちゃったのよね……で、後から聞いたら違うって……」

それでCHARMを使い慣れていないものを使って反省しなさい、ってことだったのか……。そして偶然が重なり今回の事態となつたわけだ。

「私も謝るわ。ごめんね……明日香。自身の技術向上のために習うのであれば私は大歓迎よ。それと——」

一呼吸置いてから。

「なんでそんなところまで昔の私そっくりなのかしら。まったくビツクリしたわ。まさかマジの使いすぎで倒れるだなんて……」

「ははは……」

私は苦笑い。過去に何回かマジ切れはあつた。だがそれはラージ級2体相手とかそういうときだ。以前マジ保有量は個人差が出る、という話をしたと思うが、もし鍛えられるものなら鍛えたいところだ。「私……頭の中がぐちゃぐちゃで、話かけられたときも上の空で……だから怒鳴られたときも、ついカツとなつて……」

あのときは『京夏お姉様に怒られた』というのと、『守護天使を破棄されるんじや……』という想いが交錯していた。冷静になればそんなことはないのだが。

「約束して。私がいるときは決してムチャをしないこと。それと——」

「明日香。あなたは精神面でもう少し大人になりなさい。でなければ私は超えられないわよ」

と、私に近づきおでこにキス。

「えと……あの……え？　えええええええ！」

私はわけがわからないまま。一瞬思考が止まった後、大声で叫んでしまった。おそらく私の顔は真っ赤だろう。

「……ここには冷房はありませんの？　暑いですわー」

「……うん、そうだね」

見るとみんなが戻ってきていた。

「……ベス。もしかして、今の……見てた？」

「そりゃあもう。見せつけられるかのように、ですわ」

混乱してるのは私のほうなんだけどな……とはこの雰囲気では言いづらい。

「明日香ちゃんそういうの好きだったんだ……」

「おー暑い暑い……」

みどり……なんであんなだけ棒読みなのよ……。

「……」

唯一咲良ちゃんだけが無言のまま固まっていた。そして、顔が真っ赤になったかと思うと、

バタツ……

その場に倒れ込んでしまった。え……ちよつと!?

「咲良ちゃん!」

慌てて駆け寄り、たまたま見つけた長椅子に寝かせる。

「あれ……もしかして咲良ちゃんって……」

京夏お姉様も頭を掻きながら困惑しているようだった。

「……京夏、ちよつとやりすぎ。そういう耐性ない子もいるんだから気をつけなつてあれほど」

とは初花様だ。

京夏お姉様はというと、『あー……』とバツの悪い顔をしたあと、顔を真っ赤にして、

「だ、誰もいないと思ったのよ!そしたら丁度いいタイミングでみんなが戻ってきたから……その……」

「あら、京夏ちゃん何の話?」

遅れて琴乃様がやってきた。京夏お姉様は助かった……といった感じの表情の後、

「……なんでもないわ。それよりも明日香。言うことがあるでしょ?」

そ、そうだった……。失神している咲良ちゃん以外謝らなきや……。

「あの……私……」

ベス?

私に近づくなり、

パンツ!

平手打ち……。

え？え？私にはわけがわからなかった。

「ベスちゃん!？」

「……今回はこれで許して差し上げますわ。次はありませんわよ?」
とやや膨れ面で言ったが、その後ボソボソと呟いていた。今回は聞き取れなかったが、あのときと同じだ……。

「明日香ちゃん。ムチャはほどほどにね。ホント、ここまでそっくりだなんて」

「ははは……」

「それにしても……よく気がついたわねこれ」

と、サイレンサーを出した初花様。

「……たまたま逃げ込んだビルが、私の知ってる建物だったんです。それはそれで、ちよつと寂しいし、悔しいですけどね。そうだふと思いつく。」

「今度みんなでやってみます? 射撃の訓練にもなるし、それに……基本は1人の競技だけど、みんなでやると楽しいですから」

「はあ……」

大きいため息。勢いで叩いてしまったが、実は後悔している。

任務が終わり、自室に戻ってからのことだ。素直になれていないのは実は私なのかもしれない。そして、いつか真実を伝えなければ。

トントン……

来客? 誰だろうか?

「開いてますわ」

ガチャ……

予想通りの人物。茶髪のショートボブ――

「……明日香さん」

「ウワサには聞いてたけど、ホントすごい部屋よね……羨ましい」

「わたくしの趣味ではありませんわ。お父様が勝手に……」

私の部屋は通常の寮の部屋2つ分。入る前『広い部屋なんていらな

い』と言ったにもかかわらず、あてがわれた。私を溺愛するお父様が勝手にやったことだ。

「ごめん・・・ベス・・・私のわがままのせいでこんな・・・」
「・・・ワガママなのは私のほう」

しまった！つい口が・・・。

「え？」

「いえ、なんでもありませんわ。ほほほ・・・」

ちよつと待って？今ベスが普通・・・だった、よね？あれ？

謝りに来たのになんか・・・混乱してきた・・・。気を取り直して、

「今回は・・・さ。私が自分勝手に思い込んで勝手に行動して・・・結果あんなっちゃったから、悪いのは私。だから、ゴメン」

頭を下げる。

「いいんですよ、わかっていただければ。わたくしも・・・その・・・顔を真っ赤にしてうつむいている。あー・・・。

「もしかして・・・さつき私をぶったのって・・・嫉妬？」

「う、うるさいですわ！とにかく！これでおあいこですわ。それでよろしくて？」

「ところでさ」

「なんですか？」

「さつきのって・・・」

聞こうと話を切り出すも、

「ところで咲良さんのところには行きました？まだ謝ってらっしゃらないのでしょうか？でしたら・・・」

「これから行くところ。じゃ、また明日。ごきげんよう」

「危なかったあ・・・」

ベッドの上に突っ伏す。明日香さんが部屋を出た後。

口調が違うがこれが普段の私の姿だ。別に二重人格、というわけではない。メルクリウス時代、とにかく私は人との対話が苦手だった。よくこれでここまで来れたものだ、と逆に関心できるぐらいに。

百合ヶ丘なら……ここならやり直しが出来るだろう、と喜んで来たものの、入学式翌日の、私の目に映った明日香さんたちが羨ましくてあんな態度を……。

今にして思えばこんな恥ずかしいことはない。けどこうして、LGに入れて、友達もできて、今私は幸せだと思う。

「ありがとう。明日香さん……」

いつか、面と向かってお礼を言える日が来るのだろうか？

ベスの部屋を出た後。

「あら、明日香さんごきげんよう」

見ると一柳隊、ことラースグリースの楓さんだ。丁度いいタイミングだし、聞いてみることにする。

「ごきげんよう楓さん。ちよつといいですか？」

寮のラウンジ。夕食も終わり、今は誰も使っていないようだ。

「どうなさいました？わたくしと梨璃さんの素敵な時間を……」

「うちのベスについて聞きたいんです」

「……ってちよつと！」

「メルクリウスにいた、っていうのは話してくれるんですけど、それ以上のごとは何も教えてくれなくて……何か知ってることがあれば教えてくださいほしいです」

楓さんは一瞬考えて、

「エリザベスさんとわたくしは違う方舟でしたので直接の面識はありませんが、ウワサでは無愛想な方と伺ってますわ。なんでも必要最低限のことしか喋らないとか」

無愛想？必要最低限？あんなお喋り好きそうなベスが？ちよつと

信じがたい。

「ありがとう。それだけ気になってたから。それじゃごきげんよう」
「だってさ……ちよつと信じがたいんだけど」

咲良ちゃんにも謝り、部屋に戻ってから。

「けどベスちゃん会ったときからちよつと変わった子だなー、って
思ってたけどね」

「まあね」

それはそうだろう、初対面でケンカ売ってくるわ、わけのわからな
いことを言うわ……。

「不器用そうなのはわかるよ。私も……そうだったことがあるから」
「え？明日香ちゃんが？」

「……なんで円が驚くの」

「はは……ゴメン。全然そうは見えないから……」

「けど、リリースってさ……みんな何か悩みを抱えてるんだよ。そして
ヒュージと戦ってる……」

部屋の窓を眺めながら呟いた。

「はあっ！」

夜中、1人訓練棟に足を運び黙々とCHARMを振り続ける私。指
導官に見つかれば確実に懲罰ものだろうが、寝付けずただ無心にCH
ARMを振っていた。

「……エリザベスさん？」

「ひゃあっ！」

う、初花様!?思わず変な声が出てしまった。

「ここで何をしているの?使用許可は取つてあるのかしら?」

「ご、ごきげんよう初花様。初花様もこんな時間になにを……」

「それはお互い様でしょ?……大丈夫よ、誰にも言わないわ」

「それは……そうですね……ほほほ……」

愛想笑い。

「まあ…大方寝付けなくてなにかしていないと落ち着かない、といったところかしら」

「うっ…」

何も返せなかった。

「…凶星ね」

「わ、わたくしにだって悩むことぐらいありますわっ!」

「…何を怒っているの? まあいいわ。どうしてうちの子たちはこう…不器用なのかしらね…」

「え…?」

初花様…。

「…わたくし、明日香さんやみなさんにお話できてないことがありますの」

「それで?」

「どうしたら…それを話せるようになるか…考えましたの」
「で、寝れなくなった、と」

「ええ…」

「…ところで初花様はなぜこの時間ここへ?」

「秘密」

「ずるいですわ。ひとりだけ秘密だなんて…」

「…なんて。私はとある日課の帰りよ」

日課?

「ええ。そっちは何をしてるか言えないわ」

京夏様と幼なじみ、ということ以外謎が多い初花様。ますますよくわからなくなってしまうた。

気分屋のおちこぼれ

いきなりだが、あたしは難しい話が苦手だ。聞いていると眠たくなってくる。

なので講義のときはいつも咲良に叩き起こされている。

「あー終わったあー!」

大きく背伸びする。さて、今日も先輩のところに行くか!

先輩というのは同じレアスキル——縮地——持ちでの吉村・ていThi・梅まいのことだ。同じクラスの中にも縮地持ちはいる。例えば・・・有馬充音みっねさんとか。一切関わりがない(近くの席でたまに話す程度)ので、そんなもんだ。

「みどりちゃん、今日も行くの?今日はやめといたほうがいいと思うけどなあ・・・」

同じクラスでLGレギオンメンバーでもある咲良が止めに入ってきた。

「え?なんで?」

「なんでって・・・特に理由はないけど・・・」

「だったら止める理由なんてないじゃん?あたしは行くよ?じゃ、そういうことで・・・」

LGに入る以前はレアスキルを使って移動していたが、京夏様に止められてからは使わないようにしている。

「あ。みどり。ちよつと、いい?」

途中、一番厄介なりりに遭ってしまった。同じLGで一番口うるさいのが・・・。尾上明日香——京夏様も認める実力者で、京夏様の妹シルトでもある。

「なに?忙しいんだけど?」

「その割には忙しそうに見えないけどね?」

あーこの態度!ほんと毎度毎度腹が立つ!

「とにかく!あたしは急いでるの!また今度な!」

当人の目の前で見せつけるようにわざとレアスキルを使って逃げる。

「うまく撒けたかな？」

いつも梅先輩がいるであろう場所に着いた。ここは野良猫のたまり場になっていて、ここで待っていると大抵梅先輩がつかまる。が、今日は様子が違う。

そこに居たのは――

金髪でポニーテールの、赤い目のリリイだった。そのリリイも猫と戯れている。

「あんた、誰？」

あたしを見るなり一蹴する一言。

「ご、ごきげんよう……」

予想外の人物に、思わずいつも返さない返事をしてしまった。

「えっと……別に怪しくは……」

「そりゃ、見ればわかるよ。同じリリイなんだし」

なんか、調子狂うな……うまく会話が出来ない。

「おっ？なんだ？今日は珍しい組み合わせだな？」

様子を伺ってたかのように梅先輩がやってきた。

「ど、どうも……」

「どうしたどうした。今日は挨拶硬いゾ？」

「いや、その……なんか調子が……」

「梅様、誰です？」

とあたしを指さす。

「おう、鶴紗^{たづさ}は知らなかったナ？紹介するぞ。周防みどり。最近梅のところによく挑戦しにくるやつだ」

「挑戦^{たっせん}って……なんのです？」

「レアスキルだよ。ま、いい暇つぶしにはなるんだけど……いつも梅が勝つから当人は面白くないみたいだけどナ？」

「……変なやつ」

「変で悪かったな！これが普通だし」

喧嘩するつもりはまったくくないが、ついこういう返しをしてしま

う。

「こらこらケンカはダメだゾ？それより今日はどうするんだ？」

「あ……いた！こらみどり！」

まったく、普通に相談しようとしたらいきなり縮地使って逃げるとか……これは本格的に説教が必要だろうか。

「梅様ごきげんよう。えっと……」

椿組の……誰だっけ？名前が出てこない。

「鶴紗……安藤鶴紗」

「安藤さん。ごきげんよう。うちのみどりが迷惑かけてませんか？」

この前の遠藤さんとの一件もあるし、念の為に聞いてみる。

「迷惑？特にはなにも」

安藤さんはややぶつきらぼうに答える。ぶつきらぼうというか感情表現が苦手なのだろうか。そんな風にも見える。

「明日香かーごきげんよう。んーそうだなあ……」

梅様は一瞬考えてから、

「今の所はなにもないナ」

と答える。

「そうですね……で、さつき私の顔を見て逃げたみたいだけど、どういうことか説明してもらえるかしら？あ、逃げそうになったら梅様お願いしますね」

「げっ……」

「げっ、じゃないでしょ？何かやましいことでもあるわけ？」

「いや、そういうわけじゃないけど……明日香の顔を見ると条件反射でつい……」

「それはあんたの日頃の行いが悪いからでしょうに……」

「ところで梅様。この子たちとはどういうつながりで……」

「あー」

安藤さんが尋ねる。

「明日香はみどりと同じLGだナ」

「なるほど・・・」

「すみません梅様。今日はまだ対決してないんですよね？その前にみどりと話がしたいのでいいですか？」

「別にかまわないゾ」

「ありがとうございます」

と軽く頭を下げながら、

「ほら行くよ」

と手を引き移動する。

「えー」

「あんたにえーっていう権利ないから・・・」

ということであつたもの足湯へ。

「へー・・・百合ヶ丘にこんなところあつたんだな・・・」

「私もここを見つけたときはビックリしたけどね。で、今日はあんたにお説教をしたかつたわけじゃないのよ・・・なのに逃げるとか・・・」

「悪かつたからそう怒るなよー」

「まあいいわ・・・で、今日は聞きたいことがあつたのよ」

「聞きたいこと？」

「そ。一般セレクションでここに入ったんでしょ？なんでリリースになりたかつたの？」

「補欠だけだな・・・あたしつてき、運動とかしかとりえがないから、せめてスポーツとかでも・・・つて最初思つてたんだ。けど・・・」

「けど？」

「去年の身体測定のとときにスキラー値も一緒に見てもらったんだよ。そしたらたまたま越えててき・・・もしかしたら！つてダメ元で一般セクション受験したらたまたま補欠で受かつた・・・つてだけの話」

「そう・・・けど、それつてここに入るための理由よね？ホントは違うんじゃないの？」

「なんでそれを今ここで話さなきゃいけないの？いいじゃん、別にな

んでも・・・」

ここで喧嘩する気はないのだが、私としてはちゃんと理由を聞いておきたい、そう思っていた。ただリリイになるだけなら、同じ鎌倉府でやる気とスキラー値があれば入れる相模女子高等学館っていう選択肢もあつたはずだ。

「ただリリイになりたかつたらわざわざ百合ヶ丘には来ないでしょ？ってこと。何か他に理由があるんじゃないの？」

「しつこいな！言いたくないって言ってるんだからいいだろう！」

「そこまで躍起になる理由がわかんないけど、私は・・・別にあんたを怒らせたくてこんな質問してるわけじゃないの・・・同じLGとして・・・みんなのこともっとちゃんと知りたくて聞いて回ってるのよ」

「・・・」

「言いたくないんなら別にいい。けどみどり、これだけは言わせて。自分の秘密と仲間の信頼どっちを取るか問われたら、私は後者を取るわ。だって、今のエリユーズニルには信頼できるだけの価値があるから」

「・・・わかったよ」

まさかみどりが納得してくれるとは。逆にこつちが拍子抜けしてしまう。

「あたしき・・・見てのとおり、バカで脳筋・・・なんて言われたりするけど、小さいときに川で遊んで・・・川って、急に深くなったりするところってあるじゃん？そこに行っちゃって、溺れそうになつたんだよね」

「それとなんか関係ある？」

「そしたらさ・・・そのときに丁度スモール級ヒュージに遭遇して・・・ヒュージにやられる！って思ってた・・・そしたら・・・やられる寸前のところで助かつたんだ・・・」

私は黙って続きを聞く。

「後から聞いたら百合ヶ丘のリリイだったって。それで・・・なんとなくくだけで、助けられたんだから、今度は自分が助けたい！って・・・」

「そう・・・」

「あ。この話他のみんなにはするなよ？すんげー恥ずかしいんだからな」

顔を真っ赤にしながら言うみどり。

「言つてどうするのよ・・・別に誰も得しないでしょ？」

「それは・・・そうなんだけど・・・」

「もうひとついい？」

前々から疑問に思ってたこと――

「なんで梅様とあんな競争じみたことするの？」

実は以前にたまたま見かけてしまった。

梅様とみどりが縮地でどっちが早く行って帰ってこれるかという競争をしているのを。一見するとすぐくくだらなく見えるのだが、当の本人は真剣だ。

「なんでそれを明日香に言う必要があるのさ。ていうかなんで知って・・・」

「偶然見ちやつたのよね・・・あんと梅様がやっていると、ね。ついでだから言つとくけど、梅様・・・縮地でも限りなくSランクに近い人って言われてるわ。そんなリイに挑戦してるんだからあんたも度胸あるわよね」

「え・・・梅先輩そんなすごい人だったんだ・・・」

「けど、それが悪いって言ってるわけじゃない。むしろあんたのためになつてるわよっ！」

「それつとどういう・・・」

「無意識のうちにレアスキルを鍛えることになつてること。特にスピードが命なんだから、やってて損はない。私からは特に言うことはないわね」

「え、じゃあ・・・」

みどりは止められるとでも思ったのか、キョトンとしている。

「むしろ逆。やりすぎはさすがに注意するけど、訓練に支障ないレベルだったらいんじゃない？」

「・・・」

みどりは黙ってしまった。

「明日香に止められるんじゃないかって思ってた。その・・・」
また顔を真っ赤にするみどり。

「礼ならいいわよ。あんたの性格じゃそうなるってわかってるし」
「ううっ・・・」

事実を突っつかれてなにも言えなくなるみどり。

「あら、ごきげんよう明日香さん。珍しい組み合わせですわね」
バスがやってきた。

「おっすお嬢。別にいいじゃんか。明日香と一緒にでも」

L Gメンバーでは唯一バス——櫻子・S・エリザベス——の事
をお嬢と呼んでいる。単純にお嬢様だから、ということだろう。

「あら、そこは別に何も言ってますわよ？ただ、疑問に思っただけで
すわ」

「で、何か用？」

おそらく私に用事があったはずで、でもなければわざわざここまで
足を運ばないはずだ。

「明日休日ですわよね？何か予定とかありますか？」

「予定？特にないけど・・・それがどうかしたの？」

「わたくしに付き合っていただけです？」

「え？なに？別にいいけど・・・」

そんな改まって言われるとかえってこちらが緊張してしまう。

「では詳しいことは入浴のときにでも打ち合わせを。ではごきげんよ
う」

用件だけを告げ、さっさと行ってしまった。まるでいつものみどり
みたいだ・・・。

「なんだったんだ？」

「さあ・・・普段あんなことしないんだけど・・・」

バスの態度が珍しかったというのものもあるが、いつもと様子が違って
いたような。

「さて・・・引き留めちゃって悪かったわね。じゃ、戻りましょうか。」

まだいるかな・・・」

「おう」

「お、戻ってきたナ？」

梅様は普段いる場所にまだ残っていた。ここは野良猫の集会場というところか。安藤さんはいなくなっている。

「梅先輩。今日もお願いでいい？」

「お前も懲りないやつだナ。いいぞ」

「あの・・・ちよつといいですか？」

始める前に梅様を呼び止める。

「いつもこんな感じで？」

「そうそう・・・にしても明日香は保護者みたいだナ？」

え？・保護者!？」

「やめてくださいよ・・・みどりはただのLGメンバーで・・・」

「冗談冗談。じゃ、行つてくるゾ」

と楽しそうに笑う梅様。

梅様・・・嫌がつてるのかと思つたけど、この状況を純粹に楽しんでるように見えた。これならみどりのためにもなるし、まあいいか・・・と思つた。

数分後、

「ああああああまた負けたあああああああ！」

悔しがっているみどり。

「はいはい。行くわよ」

「え？どこに？」

「いいから私についてきなさい。怒るわけじゃないから」

さてやってきたのは山樞館（旧館）だ。多分部屋にいるはず。とある部屋の前に停まり、ノックする。

トントン・・・

「開いてるわ」

やっぱりいた。

ガチャ・・・

「突然すいません。京夏お姉様」

「明日香・・・と、みどり？珍しい組み合わせね。どうしたの？」

「実は――」

と、ここまでの流れを説明する。

「そう。別にいいんじゃないかしら。訓練になるのであれば大歓迎よ。私からは特になにもなし。これでいい？」

部屋から出た後、

「・・・別にあたらしいなくてもよかつたんじゃ」

「そんなわけないでしょ」

とおでこを軽く叩く。

「あたっ！」

「LGに入って最初の命令忘れた？」

「わかった、わかったから」

控え室で私と京夏お姉様との間で最初にみどりと交わした命令――訓練と実戦以外でのレアスキル使用禁止。今回遊びではあるが、

訓練になるのなら、とみどりの自由がまた少し増えたわけだ。

「まったく・・・誰のおかげで公認取ったと思ってるの？」

みどりの両頬をつねる。

「ひゃへれないって（喋れないって）・・・」

「なら、また私のタンクスズニル使う？」

「それはカンベン・・・」

櫻子・S・エリザベス

次の休暇日。

まさかの人物からの誘いだっただので、いつもより早く起きて着いてしまった。普段そんな風になることはないのだが、私はお子様か！
しかも、寮で待ち合わせすればいいのにわざわざ藤沢駅を指定してきた。

ちなみに私はB棟、ベスはC棟なので天上の間以外では会うことはまずない。

「はあ・・・」

オマケに遅刻とかどういう神経してるんだか・・・時間指定しているにもかかわらず、だ。

20分後ようやく誘い主が現れた。

「明日香さんごきげんよう」

ブロンドの髪をなびかせながら歩いてくるその姿が様になつてるのが余計腹が立つ。

「ごきげんよう、じゃないでしょ・・・20分の遅刻。グランギニョルの関連会社の社長令嬢が遅刻って・・・聞いて呆れるわ」

「なっ!?朝から何を訳わからないことをおっしゃってますの?わたくしは・・・昨晚そのまま寝てしまって、今朝は目覚ましが鳴らなくて・・・髪の毛のセットとメイクに時間が・・・って、わたくしのことはいいんですっ!」

なんだ、私よりベスのほうが楽しみにしてたんじゃない。

「ふふーん・・・」

とニヤニヤするも、

「な、なんですか?」

珍しく挙動不審な上に顔が真っ赤なベス。

「はいはい、照れるな照れるな。で、私をどこに連れてくの?」

「じ・・・実はわたくし・・・こういうのが初めてなもので・・・なにをどうしたらよいのか・・・」

言いながらもじもじしている。そこまでお嬢様だったの?という

驚きもだが、結局私が引つ張り回すのか、というガツカリな気持ちのほうが大きかったりする。

私が大きいため息をした後、

「まったく・・・しようがないわね・・・いつも私たちが行ってるころ回りますか」

ということで行きつけのクレープ屋さんへ。その後、最近見つけたアクセサリーショップ。残念ながらここはカエル関連はないが、デザインが可愛いものが多く、良く円と2人見に来ている。ウインドウショッピングというやつだ。

その後鎌倉に戻り、誕生日プレゼントの置いてあつたあの店へ。そこには――

「あ・・・明日香・・・と、エリザベス・・・さん？」

茶髪ショートボブに右サイドテール――灯音様だ。

まあ休日なのでいてもおかしくはないのだが。

「あれ・・・灯音様？ごきげんよう。今日はここに来てたんですね」「ごきげんようですわ」

「なんか・・・珍しい・・・組み合わせ・・・だね。今日はどうしたの？」

珍しいと言われてしまった。確かに私は円と一緒にいることが多いが、それはそれでショックだ。

「あはは・・・今日はベスに誘われたんですよ」

「そう。今日は新作入荷日だから開店前からずーっと待機してた！」

久しぶりに聞く灯音様のマシンガントーク。

やっぱり普段と比較すると違和感を感じてしまう。

「そう・・・ですの・・・おほほほ・・・」

「あ、エリザベスさん・・・私に・・・冷たくするんだ・・・」

珍しい。普段ほとんど表情の変わらない灯音様だが、落ち込むような顔を見るのははじめてだ。

「いや・・・その・・・わたくしはそんなつもりでは・・・」

「あ、灯音様。ベスってこういうお店はじめてみたいで・・・なんか浮かれちゃってるみたいです。あはは・・・」

「そう・・・なら・・・いいけど・・・」

あまり灯音様の機嫌を損ねるのは・・・と思った。琴乃様のことでもある。

ただ、あのあとの灯音様・・・どこか具合が悪そうな、顔色がひどく悪いようにも見えた。

「他のところ・・・案内したので私たちはこれで・・・」

「うん・・・」

「ではごきげんよう」

さて、お昼だ。いつもなら私の希望でラーメン・・・なのだが、ベスにラーメンはなあ・・・。『わたくしの口には合いませんわー』とか言われそうだ。

「ところで、もうすぐお昼だけど、ベスはどうしたい？」

ベスは少し考えてから、

「明日香さんにお任せしますわ」

私任せ・・・うーん・・・どうする？

「え？いいの？いつもお昼ラーメンなんだけど・・・」

すると目の色を変え、

「ラー・・・メン？」

「ベス？」

「いいですね！どこでいただくんです？この辺の美味しいお店教えてください！」

ちよ、ちよつと!?

ベスが突然マシンガントーク。あんた、ラーメン好きだったの・・・

「ちよつと待って！」

「なんですの？早くいただきに参りましょう」

「だから落ち着けて言ってるの！」

思わず大声を出してしまった。

なにやってんだ私。

「あ。ごめん・・・つい・・・」

言われてベスはハツとするも、顔を真っ赤にして、

「あ・・・あああ・・・」

「・・・今更隠したってしようがないでしょ。別にお嬢様がラーメン食べちゃいけないなんて決まりなんてある？それに——」

「私の家ラーメン屋だから味にはうるさいわよ？」

「・・・明日香さん」

見ると目には涙。

「え？なんであんたが泣くの!？」

「泣いてなんていませんわ！目にゴミが入ったんですわっ！」

「はいはい・・・そういうことにしといてあげるわよ」

「明日香さんよくこんなお店知ってますわね・・・」

やってきたのは以前訓練で行った切り通しに近い立入禁止区域手前にあるお店だ。

「昔父さんに教えてもらったの。でも不思議よね。なんでこんな辺境みたいなお店知ってるのか」

そう。不思議なのだ。こんな誰も来ないようなところの店を知っているということは防衛軍カリリイでもなければ知り得ないはず。

「そういえば明日香さんのお父様ってラーメン屋っておっしゃってましたわよね？お母様は？」

「それがね、私に一切何も教えてくれなくて・・・私がリリイになる！って言った時も特に何も言わなかったわ」

ピ。ピ。ピ。・・・

携帯端末が鳴る。

見ると灯音様からだった。

『次の休日、小規模エリアディフェンス地域に水族館あるからみんなで行かない？後で詳細送るよ』

水族館かあ・・・。

「灯音様からね。次の休日水族館行こう、って」

昼食を食べ終わり、この後どうしよう?と思ったときだ。

「あの、明日香さん」

表情は真剣だ。

「学園に戻りましたら・・・わたくしに付き合っただけませんか?お話ししたいことがありますの」

「どうしたの?改まっちゃって。話ならここで・・・」

「どうしても、ですわ」

いつも以上に真剣で、真っ直ぐ私を見る。

「わかった。で、場所は?」

百合ヶ丘に戻り、山樞館(旧館)裏にある広場のようなところに来た。楠が数本あり、そこに寄りかかれるような形で木を半分に割ったベンチが数脚ある。

「よくこんなところ知ってるわね・・・」

「京夏様に教えていただきましたわ」

が、ここに来てからベスの様子がおかしい。

真剣な表情なのは変わらないのだが、両手を握りしめ、その手が震えてるようにも見える。

「・・・」

しばらく黙ったまま。

「ベス?」

「ごめんなさい明日香さん。わたくしも・・・少々勇気が・・・」

その後、またしばらく沈黙が続く。

5分ぐらい経った頃だろうか。ようやくベスの口が開いた。

「・・・わたくしが聖メルクリウス出身なのはご存知ですわよね?」

「あんたから直接聞いたからね」

「では・・・わたくしがそこでひとりだったことは？」

「ひとり？」

「どういうことだろうか。」

「今日明日香さんと一緒にいる間、言うべきか言うまいかでかなり悩みましたわ・・・ひよつとしたらわたくしが嫌われてしまうのではないかと・・・」

「・・・言ってる意味がわかんない。だいたいなんで嫌いにならなきゃいけないの？」

「ですわよね・・・メルクリウスではリリイとしての実力は評価はされましたわ。わたくしが百合ヶ丘に編入できたのもそのおかげ。ですが、それだけ・・・。周りからは『変な子』扱いされていましたわ」
「それは・・・なんとなくわかる。時々理解不能な言動したりすることがあるから『変わった子』とは思ってた」

「変わったって・・・ひどいですわ」

「むくれながらも続ける。」

「メルクリウスの中等部のわたくしはレギオン予備隊にこそ所属はしていましたが、人と接するのが苦手でしたわ。目も合わせられない、喋ろうにも必要以上の言葉が出てこない・・・。とにかくこんな自分を変えたかったのです」

「え・・・そこまで・・・。」

「ていうか、ベスがコミュ障とか信じがたいんだけど。」

「この春百合ヶ丘に来てようやく普通に喋れるようにはなりましたが・・・言うならば灯音様よりもひどい有様でしたわ」

「ゴメン、ベス。灯音様は・・・」

「と、言いかけてハツとなった。」

「決めつけは良くない。実は灯音様は喋るのが苦手なんじゃなくて何かの病気なんじゃ・・・と言おうとしていた。」

（不確定要素で喋っちゃダメよね・・・）

「あ、いや・・・なんでもない。続けて」

「そんな自分を変えようと、わたくし自ら願い出て百合ヶ丘に編入希

望を出しましたわ。ただ・・・一つだけ問題が・・・」

「・・・言わなくても分かってるわよ。入学2日目のことは」

そう——入学2日目。クラス分けの掲示を円と行った時、偶然目が合ったベスが私にケンカを売ってきたのだ。

「あのときは・・・たまたま目が合った明日香さんと円さんを見て羨ましく思いましたわ」

「だからってケンカ売っていい理由にはなんないでしょ？」
すると、

「・・・の」

ベスの声が小さくて聞き取れない。

「今なんて・・・」

「だから！どう接していいか分からなかった！」

いつものお嬢様口調ではなく、私たちと同じ喋り方・・・。目には大粒の涙。

「あの後、明日香さんがCHARMを取りに行ってる間、私は何やってんだ！って自分を責めた。せつかくやり直したために・・・出直すためにわざわざ百合ヶ丘に来たのに・・・って」

「櫻子・・・」

ベスの「本来の」名前で呼ぶ。さらに震え声でベス・・・いや、櫻子は続ける。

「手合わせしてるときも心に迷いがあったわ。お願いだから私の・・・今の気持ちに気がついて！って・・・」

・・・やっぱりそうだった。あのとき受け手に甘んじてしまったが、途中で明らかに刀ち振る舞いがやみくもなように見えた。

「ゴメン・・・ホントは・・・さ・・・私、気づいてたんだ」

「だったらどうして!？」

彼女がそういうのも無理はない。けど、

「やってて分かったでしょ？私・・・対人戦苦手なのよ・・・。あのときは売り言葉に買い言葉で、勢いで手合わせしちゃったけどさ。ホント・・・変だよ。意地張って勝負して負けて・・・なのにこんな仲良くなって・・・」

「・・・そんなこと、ない」

え・・・。

「私、嬉しかった・・・初めて天上の間で一緒になったとき・・・。私にあだ名付けてくれたじゃない?」

「ええ・・・」

「そのときお礼言ったの・・・聞こえてた?」

あのとときだ。手合わせしたその日の夜。円が自信がない、と相談に乗ってたときのことだ。背後からベスがやってきてせっかくメンバーになつたんだから、と私が勝手に名付けた。

実はかすかながらだが『・・・ありがとう明日香さん』と言っていたのだ。

「なんだ・・・せっかく黙つててあげるつもりだったのに」

「聞こえ・・・てたんだ・・・」

「でもさ・・・今更、でしょ?」

「・・・」

「過去は過去。今は今、でしょ?もう十分やりなおし、出来てるじゃない。これで友達いなくて喋るの苦手、とか言わせないよ?」

「明日香さん・・・」

「私もさ、実は・・・中等部時代一人だった時期があるから・・・わかるんだ。意外、とか思つたでしょ?」

「そんなこと・・・」

言葉を遮り、続ける。

「リリイってさ、みんな何かしらトラウマとか悩みとか、目標を持って、そのために頑張ってる・・・。ヒュージってなんなんだろうね・・・」

「そんなこと、わたくしにはわかりませんわ・・・」

そして、正面から櫻子・・・いや、ベスを抱きしめる。

「ちよ・・・明日香さん!?!」

「・・・やつといつもの調子に戻った。やっぱりベスはこうじゃないと」

「なっ・・・なにをおっしゃってますの!?!わたくしは・・・」

「私も・・・不器用なほうだなーと思つてたけど・・・自分よりすごい子は初めて見た。でもこれからは1人じゃない。私たちがいるから」

「明日香さんみたいな人がメルクリウスにいればよかった。そうすればこんな・・・ううっ・・・ううううっ・・・」

そのままベスは声を上げて泣き出してしまった。

「・・・気が済んだ？」

しばらく私のもとで泣いた後無言で頷く。ベスの目元は真っ赤だ。

「こんな姿、他の方には見せられませんわ・・・」

プイと膨れたような顔で言う。

「そうね。特にみどりとかね。『あー！お嬢が泣いてるー！』とか言い出しそうだもんね」

「明日香さん・・・またわたくしのことバカにしてませんか？」

「なんでよ・・・意味わかんない」

リリイでなかったら相応の悩みを持つ普通の女の子でしかない。友達とウインドウショッピングして、カラオケで歌って、アイスやクレープとか食べながら他愛のない会話をして。

もちろんそれはリリイとして生きる今でもできている。唯一違う点は常にCHARMを携帯していないといけないこと。

もし違う世界線があったとして、ベスと出会っていたらもつと仲良くなれていたのかな？とか、そんなことを考えてしまった。

カワイイもの談義

「みんな揃った？」

「いるよー」

「同じくです」

「いますわ」

休息日。

私と円^{まじか}、バスと咲良ちゃん、みどり以外のLGI^{レギオン}年生組。しばらくして、

「・・・ごめん、待った？」

茶髪のセミロング、左サイドテール——灯音様だ。

「いえ。私たちも丁度今集まったところですよ」

制服を着た上で、背中には全員CHARMケースの出で立ちだ。これが私たちの休息日の普段の姿である。

「では参りましょうか」

今日は灯音様の前々からの希望で、学園^{ガーデン}からさほど離れていない、居住区がある海沿いの水族館に行くことになっていた。ここは居住区でもヒュージの出現しやすい場所であり、小規模エリアディフェンスの唯一海岸沿いに設置されているところでもある。

「わあ・・・」

到着するやいきなり展示水槽の前にかぶりつく灯音様。

私自身も水族館は久しぶりなので少しテンションが上がっていたりする。かつて駿府方面には大好きなカエルが展示してある水族館があったそうさ。

もし駿府方面が没落していないのであれば間違いなく行っていたと思うし、いつかアルケミラから外征要請があれば絶対に参加したいと思う。

「私さ、リリイじゃなかったら水族館とか動物園の飼育員になりたかったんだよね」

灯音様は普段は口数が少ないが、こと動物やカワイイものになると途端に早口になる所謂カワイイものオタクだ。

「湯河原には水族館なかったから、鎌倉か駿府に出ないと見れなかった……んだけど、駿府は……もう……」

テンションが高かった灯音様が急に落ち込んでいつもの灯音様に戻ってしまった。

琴乃様との話を聞いた後、少しだけ灯音様にも過去の話を聞いたのだが、灯音様が中等部セレクションで百合ヶ丘に編入して少し経った後、駿府方面の戦いで没落してしまった、と聞いた。

「え?」

表情を変え、急に険しい顔になる灯音様。

「……海からヒュージが……来る」

「どういうことですか?」

「そのまんまの意味だよ……まさかと思って……普段付けてないサーチャーにして……正解だった」

サーチャー?」

よく見ると、普段サイドテールにしている髪飾りの色がいつもと違っていた。ヒュージサーチャーはCHARM同じく様々な形があるが、初めて見る形だ。

慌てて表の海岸へ出る。が、姿は見えない。

「ヒュージなんて見当たりませんか」

「いや……」

言いながらレアスキル——鷹の目を発動させる。というか、ヒュージサーチャーの感度は一般的に半径200m前後が一般的とされているが……。

「ミドル級だけど……いる。ただ……かなり遠いから……実害が出るまでは……どうかな……」

「そうだ」

「どうしたの明日香ちゃん?」

突拍子もないことを思いついてしまった。

「ねえ?その……見えないヒュージを誰が最初に撃つか競争しよっか?レアスキルなしで」

「え……?」

「そんなの・・・明日香さんが勝つに決まってるじゃありませんか。卑怯ですわ!」

「もちろん・・・私もサブスキルは使わないわよ?これなら文句ないでしょ?灯音様はどうします?」

無意識なので使っているという自覚はないが、もしそうなたとしてもわざと外すという選択肢もある。この場にみどりがいたなら真っ先に乗ってきそうだ。

「・・・いいよ」

私たちリリイならではの、の楽しみ方なのかもしれないが、できるなら、こんな形で楽しみたいくはない。

「じゃ私からいきます!灯音様、位置は・・・」

最初に名乗りを上げたのは珍しく咲良ちゃんだった。

「えつと・・・」

再びレアスキル発動。

「あ・・・だいぶこっちに近づいてきてる・・・いや、それどころじゃない・・・円、準備できる?」

「あ、はい!」

慌ててCHARMを構える円。

「どういうことですか?」

「進行速度が・・・普通のヒューズより早い・・・縮地・・・とまでは・・・言わないけど」

特型、か。

「場所は・・・そのまま正面で大丈夫」

「分かりました」

円がCHARMを構え、レアスキルを発動する。天の秤目——ミリ単位で遠くの物の位置を把握できる。が、どうも円の様子がおかしい。

「あの・・・動きが・・・」

(は、早い・・・)

灯音様に言われて慌ててアステリオンを構えたものの、早い上に動きが左右ランダムなため捉えられない。

(ど、どうしよう・・・)

マギが勿体ないけど、もうこれは動きを予測して一発で決めるしかない。

パンツ！

様子見でまず一発。

(だよねえ・・・)

案の定外れた。動きが予想できない分どうにもやりようがない。パンツ！

もう一発。まただ。

「どう？」

明日香ちゃん・・・一発で決まらないよ？

「あのね・・・ヒュージの動きが左右ランダムに動きながら下ってるの・・・だから睨んでも据えられなくて・・・」

明日香ちゃんは少し考えて、

「ねえ円、私でも見える範囲にいる？」

「え？」

「え？じゃないわよ・・・2人で一斉にやろうってこと。それでもダメならみんなしてやれば」

そうだった。明日香ちゃんはそういう考えをするんだった。

特型、か。

私も自らのCHARM——タングズニルを取り出しシューティングモードにして照準を睨む。正直全く見えていないのだが・・・カバンに頼るしかない。

まさかとは思うが、目に見えないヒュージ・・・なんてことはないか。現に灯音様には見えている。

「もうちよつとしたら・・・多分見えてくる・・・と思う」

円にしては珍しく自信のない発言。

当たって砕けろ、だ。

パンツ！

試しに1発。

「待って・・・そんな闇雲に撃つても・・・意味は・・・あれ？」

「どうしました灯音様？」

灯音様が何かに気が付いたようだ。

「でも・・・まさか・・・」

灯音様がCHARMを構える。

パンツ！パンツ！

無言で撃ち始めた灯音様。

「どういうことですか？」

「・・・思ったとおりだ。円、明日香、ド真ん中で大丈夫」

なるほど・・・そういうことか・・・。

「え？どういうこと？」

「いいから灯音様のいうこと聞いて撃つて！」

「どういうことですか？」

「みんなも私と同じ位置でお願い！総当りすればなんとかなるはず」

「えっと・・・」

「あのヒューズ・・・って言っても今見えないけど・・・初花様みたいなことをやってるってこと」

つまり、このヒューズは動いているように見えて実際は動いていない、ということだ。

「無駄口言ってる暇はない・・・」

「あ、そうですね・・・」

そうだった。いくらミドル級とはいえ、実害が出ないとも限らない。

「残り300mぐらいまで来た！明日香ちゃんこれなら見えるはず・・・」

よし、チャンスだ。改めてCHARMの照準を睨む。問題はヒューズの本来の位置がどこか、だ。やはりカン、か。

パンツ！

おそろくここだ！と思うタイミングで撃つ。

「やった・・・」

「明日香ちゃんやっぱすごいー！」

・・・どうやら撃つたらしい。今回はかなり意識したのでサブスキルと思われる能力を使わなかったらしい。

「よかった・・・」

どうやらヒュージはミドル級1体だけだったらしく、特に被害らしい被害もないので、そのまま継続することになった。

一通り回り、さあ百合ヶ丘に戻ろう、となったときのことだ。

「ごめん・・・明日香・・・ちよつと、いい？」

灯音様から声をかけられる。

「何でしょう？」

「百合ヶ丘に戻る前に・・・ちよつと・・・話がしたい」

話？なんだろう・・・と思ったが、いつかの琴乃様のことのことを思い出した。

「ごめん。みんなは先に戻ってて。ちよつと用事ができたわ」

「わかりましたわ。灯音様も早めにお戻りくださいませ」

「じゃ後で。ごきげんよう」

みんなと別れ、場所を移動する。

「あの・・・あのときの話・・・ですよね？」

「よく・・・覚えてるね。そうだよ」

やはりそうだった。琴乃様と話をしたとき――

『私も・・・初等科は・・・アルケミラ女学館にいたからね。いろいろあつて中等部に上がるタイミングで・・・百合ヶ丘に編入してきたけど・・・』

と振られたことだ。

「まず・・・先に・・・なんで私が・・・カワイイものが好きになつた

かつて話」

海岸を眺めつつ、こう呟く。

「アルケミラってさ……海と山が一緒にある……百合ヶ丘みたいなところなのは……変わらない……だから……かな……自然に触れる機会も多かったから……動物とかが好きになるのは……自然な流れだよね……」

動物が好きなのは今日の灯音様を見ていればわかる。

「アルケミラにいたときは……今みたいに……こんな喋りじやなかった……のは知ってるよね？」

「ええ。直接聞きましたから」

「そのときはまだ……もつと明るい性格だった。今の明日香みたいに……言うことはハッキリ言って……だから琴乃とも……仲良くなれた……けど……」

「ヒュージですか？」

「そう……倒した今でも後悔してる……自分が……あんなムチャさえしなれば……って」

普段滅多に表情を変えない灯音様が表情を曇らせる。

「でもそれって琴乃様と知り合った後ですよ？一体何が……」

「当時の私は……今でもそうだけど……特にレアスキルが特異点なわけでもない……ごく普通のリレイ……」

確かに灯音様のレアスキル——鷹の目は最前線で戦うためのスキルではない。それが足かせになるとは思えないのだが……。

「ちようど……訓練中だったんだよ……LG……いや、予備隊編成のために基礎的なテクニクを教わっていた最中だった……」

あれはちようど琴乃との一件が終わって一ヶ月経ったぐらいだった。

指導官立ち会いの訓練中で、たまたま百合ヶ丘の外だったため、そのとき居合わせたリレイでヒュージ討伐をすることになったのだ。

「訓練は一時中止。上級生が来るまでの間、私たちだけで食い止めます。希望者は前へ」

真つ先に手を上げたのは当時の私だった。

「大丈夫灯音？あなたは前衛向きじゃないわ」

京夏が心配するも、

「大丈夫大丈夫。これぐらいだったらなんとかなるって！」

当時の私は怖いもの知らず、と言ってもいいぐらい自信に満ちあふれていた。

まずは現在の状況を確認するためにレアスキルを発動。

「えっ？」

「どうしたの？」

状況は想像していたものよりひどいものだった。

「うそ・・・ケイブが・・・3つ!？」

幸いラージ級はいなかったが、中等部の私たちの実力ではミドル級ですらやっとなのに、それが5体、いや6体もいる。

「指導官！今の状況だとここにいる全員で食い止めが出来るかどうか・・・」

「天の秤目持ちのリリイはケイブの破壊を。レジスタ持ちのリリイは各リリイにかけるように」

ここで私がおとなしく下がってサポートに回ればよかったのだが・・・。

「はあああああああっ！」

当時の私は何を思ったのか、ミドル級に真つ先に向かっていった。

キンッ！キンッ！

ブリューナクを振りかざし、なんとかミドル級の1体を倒そうとする。

レジスタのおかげで普段よりも動きやすくなっていた。

キンッ！キンッ！

が、ミドル級にはかすりもしない。

「このっ！」

(なんで入らないの？私の実力が足りないから？)

その相手が特型だと気づくのにかなり時間がかかっていた。

「違うよ灯音！こいつ特型だよ？」

「え……どういう……」

そのときだ。

「あああああああああああああああああああ！」

不快な音とともに強烈な頭痛が私を襲う。

「どうしたの灯音？」

「頭が……頭があああああああああああああああ！」

しかし、異常を訴えているのは私だけで、他のリリイは何でもない。鷹の目持ちのリリイが当時クラスで私だけだった、というのもあったが、そこが盲点だった。

そのまま私はその場にしゃがみ込む。

その後も症状は収まらないまま、その特型ヒュージが倒れるまで続いた。そして――

「直った……なんだったんだろう？」

その時はただのヒュージの攻撃か何かだろうと思っていた。

「ねえ京夏？初花、琴乃は今どこに……」

言葉を続けようとしたが、

「うっ……」

激痛が走り、目の前が点滅し始めた。

（何?!何が起きてるの?!）

私はわけもわからず、またその場にうずくまってしまった。そして、

パアアアアアアアアアア……

（指輪が……）

点滅した、と思い見た……までの記憶はあるが、それ以降は覚えていない。

私が気がついたときには医務室のベッドの上だった。

「えっ……じゃあ……」

「そう……あの時私が……ムチャするな……って言ったのは……私と……同じ過ちを……して欲しくないから……」

灯音様のこの喋り方は、自然になったものではなく、ヒュージによってもたらされた後遺症だったのだ。

「感情を頭によれば普通に喋れるよ？けど、疲労がすごくて……あ……」

途端に灯音様の表情が曇る。

「ムチャはしないでください」

「ありがとう……明日香……」

灯音様は続ける。

「結果的に……ケイブと……ヒュージは……私たちだけでなんとかなったよ？けど……」

「……」

「私の……この症状は……医学の持てる力を以てしても……どうにも……ならないって……」

普段見せることがない灯音様の涙。

「いつだったか……明日香が……特型ラージ級相手に……フィニッシュシヨット通らなくて……最後……突っ込んだでしょ？」

敵討ちのときだ。

「はい」

「あのときは……私の二の舞に……なるんじゃないか……って……すっごい心配だった……」

「ははは……すみません……あのときは敵討ちに夢中だったので……」

「けど……後で理由を聞いて……納得した……。だから……明日香がムチャしたときも……私は……京夏のサポートに回ったんだよ……」

灯音様……。

「だからお願い。ムチャなことだけは……しないで欲しい。誰かが犠牲に……」

「なんかさせません！絶対」

「明日香・・・」

そして灯音様は涙を拭い、こう言ってくれた。

「絶対、みんな最後までいよう。ヒュージは・・・なくならない・・・
かもだけど」

「ですね」

「灯音様に・・・そんな過去が・・・」

「ちよつと・・・ショックだった。元々そういう喋り方だと思ってたから・・・」

天上の間。

みんなには話しておいたほうがいいだろう、ということとで真実をありのまま語った。

「にしてもヒュージって何でもありですわね・・・許せませんわ・・・」
「ねえ、今度の休息日、灯音様誘って吉祥寺のほう行こう明日香ちゃん」

吉祥寺・・・か。確かあの辺りは神庭女子の討伐担当エリアのはず。
神庭女子・・・か・・・。高嶺様に久しぶりに会いたくなってしまうた。

宮川高嶺——私と同じ御台場女学校にいた、同じレアスキル持ちだ。お台場迎撃戦では船田姉妹とともに最前線で戦っていた。同じ予備隊メンバーで幼なじみの今叶星様と一緒に神庭女子に編入、現在はLGグラン・エプレの副隊長だとか。

「別にいいわよ。ただ灯音様に乗ってくれるかな・・・連絡はしてみるけど・・・」

「そういえば・・・このところ咲良さん見ませんわね。どこで何を・・・」
「ひゃあああああ！」

咲良ちゃんの声？

「あら・・・ウワサをすれば・・・ですわ」

以前も似たようなことがあった気がしたが、今日はなんだろう？

「なあ．．．いいじゃんー付き合ってよー!」

．．．みどり?よく見ると咲良ちゃんを追いかけ回している。
まったく．．．あのバカは何やってるんだか．．．
はあ．．．ため息の後、レアスキル発動。

「明日香!?な、なんか用?」

突然私が現れてビックリしている。

「ちよつとこつちいらっしやい。咲良ちゃんもね」

「あだつ!」

私たちの近くに呼んだ後、真っ先にみどりの頭を背中流しの桶で叩く。

「で、咲良ちゃん追いかけ回して何してたの?」

「そ、それは．．．あたしの課題を手伝ってもらおうかと．．．」

「あー!」

後ろから円の声。ビックリした．．．。

「ゴメン私もだ．．．明日香ちゃん手伝ってー!」

「2人とも自分の力でね」

「えー．．．」

「えーじゃありません。もしかして．．．2人とも後回しにするタイプ?」

「う．．．」

そのものを言われ、固まるみどり。

「わ、私は違うよ?たまたま忘れただけで．．．それより明日香ちゃんとベスちゃんはどうかなの?」

「ぎーんねん。私は御台場にいたときに中等部にいても取れる単位取っちゃったからねー。だから半分復習してるみたいな感じかな」

講義には出ているが、もしこれが百合ヶ丘と提携関係があったならある程度は免除されていたかもしれない。

「わたくしもですわ。メルクリウスと百合ヶ丘は提携していますから、履修した分は免除されていますの」

「う．．．成績優秀．．．うらやましい．．．」

うなだれる円。

「手伝うのは手伝うけど・・・基本は自力でね」

「明日香ちゃん・・・ありがとう」

円が私に抱きついてきた。

「あ・・・こちら・・・！」

「じゃあ・・・私はこれで・・・」

そして1人その場から離れようとしているのを私は見逃さなかった。

「咲良ちゃん？」

「・・・はい？」

「なーに1人抜けようとしてるのかなー？」

「ははは・・・」

「お待たせ・・・」

「ごきげんよう灯音様」

休息日。慣れているとはいえやはり鎌倉から都心は遠い。待ち合わせの駅に着いたが、道中有事かなにかと思われたのか、ジロジロ見られるし・・・。

都心郊外は初めて来たが、なんとというか・・・鎌倉とまた違った雰囲気だ。私の住んでいた地域ともまた違う。日の出町るときは初めての外征任務で景色なんて楽しむ暇がなくてよく覚えていない。今日は楽しんでいきたい。

「よく・・・この辺来ようなんて・・・思ったね」

「円の提案で・・・ってちよつと！」

「あ。灯音様早く行きましようよー」

「ちよつと円さん引つ張らないでくださる？」

珍しく円がはしゃいでいる。そんなに珍しいところではないはず。

「出かける前に調べたんだー・・・そしたら・・・うわっ！」

ドンッ！

余所見をしていたからか、通行人とぶつかってしまった。

「ごめんなさい！」

慌てて謝る円。

「すみません。大丈夫で……高嶺様？」

まさかこんなところで会えるとは。制服のせいか、御台場のとときは大分雰囲気違って見える。

「あら？久しぶり」

「わあ……高嶺様だ！ご無沙汰してます」

「そう……よかったわ」

「明日香ちゃん知ってるの？」

「知ってるもなにも……私の先輩リイよ。中等部時代いろいろ助けてもらったわ」

そして、私のレアスキル——ゼノンパラドキサ——の恩師でもある。高嶺様がいなかったら今頃私はお台場はおろか百合ヶ丘にはいなかっただろう。

「そう……なんだ……ごきげんよう。桃乃灯音です」

軽く一礼する灯音様。

「あの……灯音様はこういう喋り方しかできないので気にしないでください」

「そういえば叶星様は？」

「なに？もしかして……私に妬いてるの？」

「ち、違いますよ！その……いつも高嶺様と叶星様と一緒にいるイメージがあったので……」

「そういえば……百合ヶ丘に編入したって聞いたけど、本当だったのね。ビックリしたわ」

「ははは……」

「ああそうだ……挨拶挨拶……ごきげんよう。その百合ヶ丘で寮のルームメイトの敷井円です」

円も一礼する。

「そう……じゃあ、そこでいろいろしてるのよね？」

いろいろって……。そうだった、高嶺様はそう言うてからかったりするんだった……。

「え……いろいろ……」

それを聞いた円、たちまち顔が真っ赤に。だよねえ……。

「えと……えと……」

「ダメですよからかつちや。耐性のある私ならともかく、今年リリイになったばっかりなんですから」

「あら、そうなの？」

「明日香ちゃん？」

そして後ろから懐かしい声が。

「わあ……叶星様だー。お久しぶりです！」

「明日香ちゃん、この方も知り合い？」

「そうよ。今叶星様。同じ私の先輩リリイで……」

「叶星は幼なじみなのよ」

と高嶺様が付け足してくれた。

「ベス？さつきから静かだけどうしたの？」

ベスが借りてきた猫のようにすっかり静かなのが珍しい。楓さんのとき以来だ。静かというか……冷たい態度、というか……。

「ごきげんよう。櫻子・セイメS・エリザベス……ですわ」

「ちよつと……なんで静かなのよ。別にあんたとは関係ないでしょうに……」

小声で言いながら小突く。最近この行動をよくやっている気がする。

「あら？そうでした？それは明日香さんの気のせいですわ」

「もしかして……またコミュニケーションに逆戻り？」

その一言を言うや否や、

「あーすーかーさーん……」

背中ケースからブラダマントを取り出し、私の喉元にブレードを突き立てようとする。

「こーら。ヒュージも出てないのに街中でCHARMを振り回しちやダメでしょ」

叶星様に怒られてしまった。

「ベスちゃんすっかり馴染んじやったね」

「ベスちゃん？」

「あーすみません。私と円が彼女のことを普段そう呼んでるんです」
「そっか・・・あの頃と変わらないのね」

ニコニコ顔で答える叶星様。あの頃——私がレアスキルに覚醒して半年ぐらい経った頃のことを言っているのだろう。けど、今はその話題に触れてほしくなかった。

「ああそうだ。叶星様たち、どこかに向かわれる途中だったんじゃない・・・」

「そうだわ。早く学園に戻らなくちゃ。灯莉ちゃんたちが待ってるわ」

「そうね。行きましよ、叶星」

「ちよつと、明日香さん」

最初に口を開いたのはベスだった。

「まだわたくしたちに何か隠し事してるんじゃないやありません？あの態度は明らかにおかしかったですわ！」

「え？態度？私にはそうは思わなかったけど・・・」

「よくわかったね・・・エリザベスさん。私も・・・ちよつと・・・不自然に思った」

灯音様まで・・・もう隠し通すのはムリか・・・けど、それはせつかくの休日日が台無しになってしまう。

「せつかくの休日なのに・・・私の話聞いて気分落ち込んだんじゃないの？それじゃ楽しくないよ？すみません灯音様。せつかくお誘いしたのに・・・」

今思ったことを素直に言う。

「それは・・・いいよ・・・明日香。私も・・・気になって・・・きちやっ
た・・・」

「う・・・」

言葉に詰まる私。けど、それでは来た意味がなくなってしまう。

「ど、とにかく！今日はその話はもうなし！で、さつき円が行きたいところがあるって言ってたけど・・・」
「あ。そうだった・・・えっとね・・・」

カワイイもの談義・その2

「どこから話せばいいのかな・・・」

みんなはある程度私の過去については知ってるはずなので、それ以降の話のほうがいいのだろう。

いつもの足湯。

「もったいぶってないで早く教えて下さいな。みなさん過去はさらけだしていますわ」

あれは高嶺様にレアスキルの使い方を指南してもらい半年ほど経った頃だ。

この頃の私とはとにかく訓練バカで、誰かと仲が良かったわけでもなく・・・あ、いや・・・約1名いるが今は割愛、寮と学園、ヒュージ討伐、ビームライフルの練習以外は外出もせずじっとしているようなリリイだった。

そんな私だったが、唯一普通に友達感覚で接してくれたのは高嶺様、叶星様の2人だけだった。百合に対する思わせ耐性がついたのも高嶺様のおかげと言っている。

そこまではまだ良かった。3年生に上がり、レギオンLG予備隊を・・・となったときのことだ。東雲予備隊に入り、技術面では評価されたものの、当時の仲間からは冷たくあしらわれ、メンバーからは『いらぬ存在』とまで言われ孤立したこと。

「・・・」

私が全てを話した後。みんな黙り込んでしまう。

「・・・私ってさ、ついてない・・・っていうか・・・友達運がなかったんだらうね。ベス・・・とはまた違うけど」

「わ、わたくしのごとはいいんですっ!」

「ベスちゃん?」

「あ・・・円は知らないんだっけ。ベスって元々・・・」

「明日香さん? わたくしの過去をえぐるのはやめてくださいます?」

「今更隠したってしょうがないでしょ・・・自分で『みなさん過去はさらけだしていますわ』って言うつといて、出してないのベスじゃん」

「じゃ・・・私も。ホントは百合ヶ丘受けるつもりじゃなかったんだ・・・。リリイになりたかったわけでもじゃないし・・・。あ、今は違うよ？リリイになってよかったって思ってるし。これでおあいこだよベスちゃん？」

観念したのか、

「・・・わかったわよ。言えばいいんでしょ言えば！」

「ベスちゃん!?え?え?」

円が混乱している。口調までさらけ出すことはなかったんじゃないか、と思つたが黙つておくことにする。

軽く咳払いをするベス。

「メルクリウスにいたときはこんな・・・言いたいことをもハッキリ言えませんでしたわ。ですが、わたくしをちゃんと認めてくれて・・・友達として見てくださつたのは明日香さんが初めてでしたわ」

「出会い是最悪だったけどね。私にケンカ売つたの誰だっけー?」

「・・・明日香さん、絶交しますわよ?」

「そつか・・・私たち、もうそんな経つんだね・・・」

出会つて5ヶ月近く。LGの友好関係は非常に良好だ。私個人としては最近京夏お姉様と会う機会が減っているのは少しさびしい。

「・・・妹に付き合つてあげなくていいの京夏?」

「いきなりなんの話?」

寮での会話。

「最近会えてないって、寂しがってたわよ明日香」

このところの私は競技会の準備に追われていて、それどころではなかった。

「・・・わかつてるわよ。言われなくても。けど――」

窓を眺めながら、

「今のあの子たちを見てると、昔の私たちに見えちやつて・・・。今はそつとしておいてあげたほうがいいのかなあ・・・なんて」

「そうね・・・」

中等部に上がって、灯音に出会って、その後琴乃にも出会って。琴乃は・・・まあ・・・最初は大変だったけど、すぐ仲良くなれて。明日香たちも今が一番楽しいのだろう。

戦技競技会の前日。休日となったのでたまには・・・と、1人で久しぶりにお台場近辺まで来た。馴染みのカエルグツズが置いてあるお店もある。実は円も誘ったのだが『ごめーん、咲良ちゃんと約束しちゃった』と言われ断られてしまった。

「あら、尾上さん。ごきげんよう」

後ろから声をかけられた。

黒髪にツインテール、黄色い目をしたリリイ……。一番会いたくなかった子が。

「・・・私になんの用ですか。鬼頭さん」

鬼頭天音……。私を御台場から追い出した張本人だ。ウワサだが高等部に上がり、ロネスネスのメンバーになったのだとか。

「連れないですわ・・・せっかく感動の再会なのに。随分と冷たいのね」と舐め回すように私のほうを見る。

「誰のせいで・・・」

落ち着け……。今ここで問題を起こせば学園間の問題にもなりかねない。だが、

「まあそれはいいわ。敵に塩でも送りに来たの？ 椀もみじ様たちとは大違いだわ」

「あんたには関係ないわ」

私はただ遊びに来ただけだったのだが、彼女と会ったせいで気分は最悪だ。さつきから私を挑発するかのようなことばかり言ってくる。

「にしてもウワサは本当だったのね。あなたが百合ヶ丘だなんて・・・全然似合いませんわあ・・・」

「・・・だったら何？ 私がどこ行こうが勝手でしょ」

「そう。まあそれはいいわ。あなたがいなくなってくれたおかげで私はロネスネスに入ることができた・・・感謝しているわ」

「なっ！あんたは・・・！最後の一言で私の中の堪忍袋の緒が切れた。ふざけるなああああああ！」

背中ならCHARMを取り出し、天音の喉元にタングズニルのブレードを突きつける。

「あら、わたくしは何もしてませんわよ？あなたが勝手に出ていったまでの話ですわ」

「誰のせいでこうなったと思ってるの！誰のせいで・・・何をしても許されるとでも思ったの？さんざん私で遊んでおいて！リリイ・・・いえ、あんたは人として最低よ！」

「おー怖い怖い・・・前々から野蛮な人だと思ってましたが・・・百合ヶ丘でますます野蛮になったのかしら？」

「あんたもCHARM出さない！ここで勝負よ！」

LG代表会議に休日も何もない。その帰りのことだ。

明日香!?!ちよつと何してるの！御台場のリリイと揉めてる!?!

慌てて止めにかかる。

「明日香！何してるの！やめなさい！」

目には涙。いつもと違うのは寂しそうな表情ではなく、怒りに満ちているということ。ライバル関係？

「許さない・・・あんただけは、絶対！」

「いいから離れなさい！」

怒鳴るもまったく声は届いてないようだ。とにかく止めなければ・・・！

レアスキル発動！明日香の手を掴み、その場から離す。

「京夏お姉・・・様?・・・ごめんなさい・・・！」

「たまたま通りかかったの。何があった・・・」
が、その場に明日香はいなかった。

レアスキル発動！今一度天音のところへ。

「待ちなさい明日香！」

「ごめんなさい、京夏お姉様・・・今だけは見逃して・・・。」

「はああああああああ！」

ようやく天音もその気になったのか、アステリオンを取り出す。

キンツ！キンツ！

戦術は前と変わっていないらしい。これなら勝機はある。と言っても公式な手合わせではないのでルールも何もあつたもんじやないのだが。

「あら、前より強くなったのね。けど・・・感情的になるのは相変わらずだわ尾上さん！」

天音のクセは把握している。以前の私なら分かっているところでも踏み込めずに負けていた。でも今は違う！

少しずつ間合いを詰めていく。

キンツ！キンツ！

天音は踏み込むときに一旦タイミングを取ってブレードを振りに来る。大立ち回りのときは特にだ。

キンツ！

「はっー！」

実力は私とほぼ互角だと思っている。そして――

ほんの少しだが大立ち回りのタイミング取りで右足を曲げた！

私はそのタイミングを見逃さなかった！

「これで・・・最後！」

おそらく天音は寸止めする・・・と思ったのだろう。だが私は違つた。

ザツ・・・

CHARMを下から上へ、ではなく腹部を突き刺す。

ツツ・・・

「う……」

その場でうづくまる天音。まるでスローモーションを見ているかのようにうづくまったままその場に倒れ込む。

ブレードの先端には天音の血が。……血？

「私……何を……え……うそ……」

私が落ち着いたときには、自分のしたことが信じられなくてただ茫然としていた。

「う、ううつ……ううつ……」

いくら恨みを持つてたとはいえ、リリイを傷つけていい道理にはならない。

「私……なんてことを……」

その場でしやがみ込み。頭を押さええてうづくまる。

「明日香！」

京夏お姉様に呼ばれた気がしたが、途切れ途切れでしか記憶がない。

「えええええ!?明日香ちゃんが謹慎!?!」

「どういうことですかそれ!」

私も信じたくはないのだが……LGの隊長としての仕事はしなくてはいけない。

「御台場のリリイとの非公式での手合わせ、それと相手に怪我を負わせたからよ。今回の処分は私がたまたま通りかかったからそれぐらいで済んだけど、もしいかなかったら身分を剥奪されたかも……」

身分剥奪——それはリリイにとって死に等しい。そうならないために私は明日香をかばって嘘の申告をした。もちろん相手もそれは了承済だ。

つまり、私が判定人で手合わせ中に明日香が不注意で相手のリリイに怪我を負わせてしまった。ということになっている。

「京夏様は止めに入ったんですよね?だったらどうして……」

「もちろん相手からはすぐに引き離したわ。けど、引き留められなかった・・・これは私の責任よ・・・」

みんなの前で頭を下げる。

「頭をお上げください京夏様。京夏様は悪くないですわ。確かに最近明日香さんとわたくしたちの会話とでひっかかることはありました・・・それと何か関係が・・・」

「それは私にもわからないわ。面会の際に聞いてみるけど・・・言つて話してくれるのかしら・・・」

「明日香さん・・・予備隊のときに冷たくされた、とは伺ってはいますが・・・まさかそれが・・・」

そう考えるのが普通だろう。単なる逆恨み？

「私も・・・それは・・・聞いたよ。でも、本当の理由は・・・そこじゃないのかも・・・」

ただ、あ那时的の明日香の態度は・・・尋常ではなかった。これは面会時間中に聞くしかないだろう。

何も、ない。

目の前に見えるのはベッドと周り一面壁・・・。外の景色すら見ることができない。

その空間の中で私はただぼーっとすることしかできなかった。

リリーの留置場に送られなかっただけマシだった、と思えば幸せなのだろう。けど、天音を手にかけようとしていたことには変わりない。

スツ・・・

突然謹慎室の扉が開く。

京夏お姉様・・・様？どうしてここに・・・。

「誰とも会えないんじゃない・・・」

「守護天使の特権。って言っても話せるのは10分ぐらいだけだね」

「あの・・・私・・・」

京夏お姉様は私を無言でそっと抱きしめてくれた。

「私のこと……かばってくれたんですよね？私のしたことは……こんな程度で済まされないので……」

「……そうね。それと鬼頭さん。深い傷ではなかったそうよ」

「そう……ですか……よかった……」

「明日香はホッと胸を撫で下ろしている。」

「……ねえ明日香。一体……昔御台場で何があったの？私に話してくれない？」

「どうしても……言わなくちゃ……ダメ……ですか？」

「そうね。明日香……シュツツエンゲル守護天使……姉である私には包み隠さず全てを話してほしい。明日香……いえ、私たちのためにもね」

30秒ほど考えた後、

「1年前……私は天音……鬼頭天音に騙されたんです。だから……許せなかった。もちろん自分がしたこと重大さは分かっています」

鬼頭天音——L G ロネスネス所属らしい。明日香の次に期待されていたらリリイであったことには変わらない。

「騙された？」

「はい……。御台場がG・E・H・E・N・Aの実験場にされているんじゃないかって話は京夏お姉様も知ってますよね？」

「ええ。有名な話ね」

「その実験体らしいヒューズが出て……討伐をするときに……彼女は私に嘘の情報を教えたんです」

良識あるリリイとは思えない行動。

「もちろん討伐は成功しました。けど……私はその討伐には間に合わなかった。当時のリーダーからはサボった、とかやる気がない、とか散々言われて……。それも1度や2度だけじゃない……。それで我慢できなくなって彼女に文句を言ったんです。それが……事の始まりでした……。予備隊メンバーに話かけても無視……それを注意するリリイすらいない。私は……その頃から予備隊の中では1人に

なっていました。もう……ここにいないほうがいいんじゃないか……つて。それが私が百合ヶ丘に来た本当の理由……です……」

イジメの典型的なパターンだ。そうか、逃げるためにここへ……。「久しぶりに天音に会って、あんなこと言われて……ついカツとなつて、我を忘れてあんな……リリイ……いえ、人として最低な……。京夏お姉……いえ、京夏様。私と……シュツツエンゲル守護天使の契りを解消してください」

私は再び明日香を抱き寄せる。

「……バカね。その程度で私が守護天使を解消するとも思う？」

「え……？」

「私たちが仲が悪くなったわけじゃないでしょ？友達だったらケンカはして当たり前。違う？」

「けど……！」

「ただ、ケンカのやり方としては褒められたものじゃなかったわね。私、前も言ったわよね？もう少し大人になりなさいって」

「はい……」

「もう一度言うわ明日香。もう少し大人になりなさい。また同じようなことを繰り返すようだったら……本当に守護天使は解消します。いいわね？」

「まったく……うちの妹は問題抱えすぎね……。ホント誰かさんみたいだわ……」

謹慎室を出て一言。明日香はどこまで私そっくりなんだか……。州すの盧美お姉様と守護天使を結んだ直後はとにかく手合わせ外でケンカばかりしていた気がする。仲裁に入った指導官を殴ったこともあった。今回の明日香みたいにリリイに手をかけようとまではしなかったが。

同じ頃、ラーズグリーズ、こと一柳隊では、リリイとしてではなくヒュージとして扱われた結梨ちゃんをかばい逃走した、として梨璃

ちゃんが「形式上」謹慎処分になっていた。その結梨ちゃんは今はもう……。

「で、京夏ちゃん。どうするつもりなの？まさか話聞いておしまい！じゃないでしょ？」

入り口で待つてくれていた琴乃がひとこと。

ロネスネス、か。実は知り合いリイが1人もいなかったりする。

謹慎期間中は携帯端末でも明日香と連絡は取れないし……。

「まさか。けど連絡先を聞かなかったのは失敗だったわ……」

「失敗じゃありませんわ」

「エリザベスさん……」

「その……失敗じゃないって、どういう意味？」

「まったく明日香さんは一人で問題を抱えすぎですわ！」

LGメンバーに事の次第と明日香から聞いたことを最初から説明し直した。

「ちよつと偶然すぎるかな……って気がするけど……」

「ホントそいつバカなんじゃないの？それ、自分の目先だけのことしか考えてないじゃん……」

「みどり。明日香がいたなら怒られてるわよ」

と軽く小突く。

「うげっ……」

「相手の……鬼頭さんはどう思うかわからないけどね。で……問題は……どうやって手合わせを取り付けるか、なのよね……。明日香がいれば知り合い多いだろうから簡単なんだろうけど……」

「それでしたら……高嶺様たちにお願ひするのがよろしいかと」

「高嶺様？」

「ええ。この間休息日に吉祥寺へ明日香さんたちと行きましたときに、偶然明日香さんの中等部時代の先輩リイにお会いしまして。その方経由でしたらなんとかなるのではないかと……」

「ありがとう。助かるわ」

高嶺・・・高嶺・・・どこかで聞いたことがあるような・・・あ・・・
もしかして、あの船田予備隊の・・・。けど明日香とはどういうつ
ながりなのだろうか？

「ホント、バカな子・・・わざわざ自滅しに来るなんて・・・」

東雲予備隊。当時の予備隊格付けではAランクだった。その中で
も特に評価が高かったのは隊長でも私でもなく、尾上明日香・・・あ
の子だった。

それが悔しくて私はあるとき嘘の情報を彼女に教えた。手合わせ
でワザと負けている、というウワサを流したのも私だ。だが、実際ウ
ワサではなかったようだが。

その後私は純様たちに高く評価され、あこがれのLGにようやく入
れることになった。今思えば幼稚で卑劣な手段だ、というのはわかっ
ている。

ピ。ピ。ピ・・・

権様からだ。なんだろう？

謹慎室を出る際、タイミング違いで一柳さんも謹慎処分になったこ
とを知る。「形式上」ヒュージ（と認定された結梨さんを）をかくまい
逃亡した、ということとで表向きの処罰だそうだ。

ガチャ・・・

「明日香ちゃああああああああん！」

真っ先に向かって来たのは円だった。

「ちよ、ちよっとー！」

会うなりわんわんと泣き叫ぶ。

「どうして教えてくれなかったの？いつでも相談に乗るのに・・・」

「ごめん・・・円・・・」

円を落ち着かせ、ソファに座らせる。一方のベスは黙って私のほうを見ている。

「ほーら。エリザベスさんも何か言っておげなきや・・・」

初花様に言われ、仕方ないですわ・・・といった感じで前に来る。

「・・・」

しかし黙っている。そして――

パンツ！

彼女から受ける2度目の平手打ち。前にぶたれたほうと反対からだった。

「・・・3度目はないわよ」

目には涙。私を睨みつけるような表情。お嬢様言葉は、ない。彼女は本気で怒っている。

私は彼女を抱きしめる。

「・・・ホント、どっちがワガママなんだろうね」

「それはお互い様よ・・・」

お互い、ぽつりと呟く。気がつけばこんな軽口を叩ける仲にまでなっていた。

「明日香。早速だけど、ロネスネスの昴様から連絡があったわ。手合わせさせたいリリイがいるって」

川端昴様――琴乃様と同じくマディックアカデミー出身だ。唯一違う点は自らの努力でリリイに上り詰めた点だろう。私の尊敬するリリイの1人でもある。

対戦相手は多分あの子だろう。たとえ恨んだ相手だったとしても私に責がある以上手合わせするわけにはいかない。

「お断りします・・・って言ったらどうします？京夏お姉様」

ため息をして、

「そう言うと思ったわ。残念ながら明日香の想像している相手じゃないわよ」

「え・・・」

と言って連れてきたのは、

「い、い、いきげんよう……」

二川さんだった。

「え、二川さんと……じゃ……ないです……よね？」

二川さんはラーズグリーズ。御台場とは一切関係ないはず。

「違うわ。あなたのことをよく知ってるリリイよ」

と言つて二川さんの持つタブレット端末を指差す。

そのタブレット端末に表示されていたのは、灰色髪に三つ編みツイ
ンテール、頭にはビュージサーチャーが2つ。私より背が低いことを
気にしていたあの……。

「う、うそ……」

思わず口に出してしまった。

「私が嘘をついてどうするの。これでも断るつもり？」

「い、いえ！やります！」

けど、この時期に私と……なぜだろう？

「どなたですか？」

「お台場迎撃戦で活躍した藤田あきが権様ですよ！明日香さんの見守り役
をされていたのは聞いてましたが……」

やや興奮ぎみの二川さん。というか、わざわざ連れてこなくてもよ
かったのでは……。

御台場女学校。高等部は初めて入る。本来ならば私がいたはずの
場所——なんとも複雑な気分だ。

「な、なんか緊張する……」

「なんで円が緊張するの。当事者は私なんだけど……」

「まあ、百合ヶ丘とはだいぶ雰囲気が違うようですから、それに吞まれ
そうになつてるんじゃないかって？」

「まあ……確かに……少し殺伐とは……してるかな……LGの仲でも……悪いのかな……」

今回の同行メンバーは京夏お姉様、灯音様、ベス、円の4人だ。

「それは少し違いますね」

そう声をかけてきたのは――

黒髪ロングヘア、オレンジのヘアバンド――もみじ 椀様だ。

「ご無沙汰してます」

軽く一礼する。

「お久しぶりです尾上さん。百合ヶ丘に編入したとはお聞きしていましたが……お元気そうでなによりです」

「どなたですか?」

「この生徒会長よ。ごきげんよう。LGエリューズニルの隊長京夏です。今回はわざわざ学園外の対抗試合を快諾していただきありがとうございます」

椀様に一礼をする京夏お姉様。そして会長、の言葉を聞いた途端硬直するベス。

「ま、あのへそ曲がりがお受けしますわ」と言わなそうだから……と、後ろからの声。肩にヘッドホンを下げ、いかにも元気そう!な風貌が川村椀様だ。

へそ曲がり……椀様は純様に相変わらずの態度だなあ、などと思っ
てしまった。

「ゆず、お客様相手に失礼よ。事情は叶星から聞きました。うちの学園の鬼頭天音が失礼なことを」

「いえ、私が明日香を止められなかったことにも原因がありますから……」

と言いつつ終わったところで、

「……なーんて、形式上の挨拶はこれぐらいにして、久しぶりね」「ええ」

「え……二人ともお知り合いだったんですか!?!」

「昔、個人的にちよつと……ね」

それ以上のことは教えてくれなかった。

「京夏お姉様。そのことはもういいんです・・・事實は変わりませんから・・・」

「お姉様？」

樫様も驚いていた。

「な、なんですか・・・樫様。私の顔に・・・何か付いてますか？」

「へえ・・・守護天使ねえ・・・」

樫様が私を見てニヤニヤしている。

「ゆーず？」

「へいへい・・・わかりましたよ」

樫様が子供を叱るように樫様を諭す。幼なじみっていいなあ・・・。

「ところで、今回の件とは関係ないのですが・・・結夢がLGを作ったっていうのは本当ですか？」

やはりその質問来たか。その辺りは蚊帳の外なので黙っていることにする。

「ええ。結夢ちゃんがあんなことになって・・・このまま一人になるのかと思ってきましたけど・・・」

京夏お姉様はそれ以上のことは言わなかった。

「そうですか・・・」

「ちよつと、明日香さん・・・」

いつものやつか。

「なに？」

「樫様と樫様ってどういう関係ですか？」

「幼なじみ。京夏お姉様と初花様みたいな？」

「ところで・・・藤田様はどちらに・・・」

訓練場に着く前。

「へえ・・・高嶺さんが明日香の・・・」

「そうなんですよ。ゼノンパレードキサって、私と高嶺様しかいなくてどう訓練してどう鍛えていけばいいかわからなかったの・・・」

京夏お姉様が高嶺様との繋がりを訪ねてきたので答えつつ、現在のお台場のLGの構成について軽く話をしておいた。

船田姉妹が隊長のロネスネス、生徒会長の椛様が隊長のヘオロットセイんツ、弘瀬湊様が隊長のコーストガードの3つだということ。以前は学園の承認制で自主結成LGは認められなかったということも。「御台場って変なところが厳しいんですのね・・・」

「まあ・・・そうなのかな・・・でも、今は百合ヶ丘に来てよかった・・・って思ってる」

中を進んでいくうちに、

「あー!」

後ろから特徴あるの声。

「明日香だーひさしぶりー」

ヘオロットセイんツの元気っ娘、河鍋^{なすな}齋だ。みどりはどちらかというと単純バカなのだが、こちらは万事を楽しむタイプだ。レアスキルはフアンタズム。

「ご、ごきげんよう・・・」

正直言うとこの娘のテンションにはついて行けない。キラいな性格じゃないんだけど・・・。

「あ、そっか。百合ヶ丘に行くって言ってたもんね。制服違うとすごい印象変わるー」

「そ、そう・・・ありがと・・・」

「それじゃねー」

とそのまま行ってしまった。

「・・・お台場の方々ってみなさんこんな感じなんですか?」

「いや、みんながみんなそうじゃないけどね」

「それと・・・その・・・」

ベスが言いづらそうにしている。予備隊のことか。

「今の子・・・齋って言うんだけど、あの子は違うよ?だから普通に接してくれるし」

「あら尾上さん・・・?」

また声をかけられた。が、

顔を見て一安心した。

「ご無沙汰してます」

と一言。私の格好を見るなり、

「百合ヶ丘に編入されたのですね。あちらでの活動はどうですか？」

「おかげさまで順調です。まあ・・・その間もいろいろありましたけど・・・」

ど・・・」

「エリューズニルの夏目京夏です。うちの明日香が大変失礼なことを・・・」

挨拶するなりまずは一礼する京夏お姉様。

「頭を上げてください京夏さん。話は天音さんから聞きました。どうやら元々あまり仲はよろしくなかったようで」

「明日香ちゃんこの方は・・・」

「船田初様よ」

とは説明したものの、正直純様だったら目も合わせたくなかっただろう。

「権さんなら訓練室にいますよ」

「なんかすごい感じのいい人・・・」

「初様はね。純様きいとだったら目も合わせたくないわ・・・」

「誰がわたくしと目も合わせたくないですって？」

ひっ・・・ウワサをすれば・・・。

紫のロングヘアに蝶の髪飾り・・・。

「き、純様・・・ごきげんよう・・・」

・・・最悪だ。できることなら顔を合わせたくなかった。

「あら・・・その制服・・・あなた、百合ヶ丘に行きましたのね」

「はい」

「今日は何しにお台場に来ましたの？」

「えっと・・・今日は権様と手合わせを・・・」

「そう・・・がんばってくださいませ。ではごきげんよう」

それ以上は何も言わなかった。それだけを言っただけでも純様も行ってしまった。

私自身は拍子抜けをしている。もつとなにか言われるかと覚悟していたんだけど……。

「純さんいい人じゃない。樫様がへそ曲がり、とか言っただけ……素直になれないタイプなのかしら？」

「多分……そうなんじゃないかと……」

「ツンデレさんはうちにも約1名……」

と京夏お姉様はベスのほうをチラチラ見ている。

「な、なんのことかわかりませんわ。ほほほ……」

「……心臓止まるかと思った」

今の態度からして純様本人は私のことはなんとも思っていない気がする。

あのとときの台詞は私の思い込みだった、ということでもあるんだけど……。

「百合ヶ丘でもうちのLGはあまり個性がない、とか言われてるみたいだけどね」

「柳さんのところみたいに個性派ばかり、が正解なんじゃないかありません？」

「LGは個性で戦うわけじゃないからそこはいいんじゃないかしら？」

と雑談しているうちに訓練室に到着した。中へ入る。

この雰囲気、中等部時代を思い出す。奥には機械がギッシリ、その周囲を保護する壁が一面を覆っている。

「なんか、仰々しいわね……」

「そう、感じるかもですね。中等部時代はこれが当たり前だと思ってやってたので……」

百合ヶ丘と違う点は訓練弾は使うものの、実際のヒューズに近い形の疑似ヒューズが出てくることだろう。今日は一切関係ないが。

「久しぶりね。明日香」

相変わらずの……口には出さないが私より背が低い。

「権様。お久しぶりです。今日はよろしくおねがいます」
一礼。

「叶星から話を聞いたときはビックリしたわ。まさか明日香が百合ヶ丘に入るなんてね」

「ははは・・・」

「先に言つときますけど、ワザと負ける・・・とかなしですよ？あの頃の私じゃないですから」

「随分な自信ね。もちろん手は抜かないわ」

「この方が・・・ですの？随分と背・・・」

言う寸前のところでつねる。

「いたっ！ちよつと！明日香さん！」

それ言つちやダメ、と目で合図する。

それを見たベスは『あ・・・』と言った感じで、

「な、なんでもありませんわ。ほほほ・・・改めましてごきげんよう。

櫻子・S・エリザベスと申します。以後お見知りおきを」

「権さん今日はよろしくおねがいますね。エリユーズニルの隊長夏

目京夏よ」

「敷井・・・円まじかです」

「ところで明日香。権さんとは何回か手合わせしたことがあるんでしょ？」

「はい。最後は・・・私が予備隊に入る前なので・・・一年半ぐらい前です」

百合ヶ丘のリリイが来ている、というのを聞きつけたのか、ギヤラリーがだんだん増えてきた。見に来ている大半がヘオロットセインの面子だが。ロネスネスは取り付けてくれた(らしい)昴様ぐらいしかない。

灯音様は黙って見ている。

実は権様との手合わせするにあたってある試みを考えている。せっかく琴乃様に教わっているのに取り入れないのは勿体ない気がしていたからだ。もっともCHARMと長竹刀とでは長さが違うのでそれなりにアレンジはするつもりだが。

「それでは・・・始めます」

判定人は灯音様にお願ひした。

「時間無制限・・・レアスキルの使用は・・・なし・・・危険だと・・・判断したときは・・・止めに入るから・・・」

「この子・・・ふざけてるの?」

やはり灯音様の喋り方に反応した。権様の反応が普通であろう。

「あの・・・詳細は割愛しますが、灯音様・・・こういう喋り方しかできないので・・・」

対ヒュージとの後遺症、ということを伏せつつ権様に説明する。

「気を・・・悪くしちやったら・・・ごめん・・・これ・・・戦いの・・・後遺症だから・・・」

「そう・・・私のほうこそごめんなさい・・・」

CHARMを構える。普段なら右から左に振り下ろすようにするのだが・・・。

「あれは・・・琴乃の・・・」

京夏お姉様は気づいてくれたようだ。

そう——鬼龍院流薙刀術の構え。これは単なるハツタリなのだが、権様がどう判断するか。

「ですわね・・・明日香さんどうされるつもり?」

「わかんない・・・」

「へえ・・・構え方変えたのね」

予想通りの反応。もしこれがタングズニルではなく、琴乃様のフリングホルニだったら結構さまに見えているのかもしれないが。

「ここまででは」想定通りだ。権様を欺くわけではないが、どうしても勝ちたい、いや、私の成長を見てもらいたい、そう思ったからだ。

「じゃ私も・・・」

権様も構える。

「じゃ・・・いくよ・・・」

「はい・・・」

カワイイもの談義・その3

少しずつ間合いを詰めていく。

「そこは相変わらずね」

「クセなんて・・・そうそう変えられませんからね」

久しぶりのこの感覚。私は純粹に楽しもうとしている。

「まじか円も良く見ておいて。違う学園間・・・いえ、リリイとの間で戦い方をね」

「はい」

円にはもつと経験は積んでもらいたいと思っている。そのためには見せるだけじゃなくてこういう機会を設けてあげたいのだが・・・。

「はっー」

先制は私から。わざと大きく振り下ろす。

「下ががら空きっー」

いつもならここで懐に入り下から上へ・・・と行くが、今日は——私が背中を向き、宙を舞う！そして背後から刺しにかかる。

「くっ・・・」

かわされた。というか、私がミスをした。距離感を掴めていなかったからだ。

「あの技・・・」

「琴乃様と同じですわ・・・まあ教えてもらってるのですから、出来るのは当然なのですけど・・・」

予想外の動きだったのか、あさがお権様は驚いている。

「明日香・・・変わったわね」

「まあ・・・いろいろありましたからー！」

キントツ！

従来戦法と鬼龍院流薙刀術を組み合わせる——実戦で使うかどうかはわからない、けど試行錯誤していけば・・・。

こんな感じで勝負がつかないまま30分が経過。

「はあ・・・はあ・・・」

「はあっ・・・はあっ・・・」

「なかなか・・・勝負が・・・つかないわね・・・」
「そう・・・ですね・・・」

やはり権様だ。実戦経験が違う。そして息が荒い。お互いの体力勝負になつてきた。

キンツ！

滅多に体勢を崩すことがない権様が一瞬よろめいた！

「はあっ！」

卑怯だとは思うがその一瞬を狙つて下から上へ。

「ストップ！」

その声がかかるや、

「もう・・・ダメ・・・」

私はその場に倒れ込んだ。

訓練室の隅のほう。

「明日香ちゃん・・・」

円・・・。

「どうしたの？そんな顔して？」

「だって・・・だってえ・・・」

突然泣き出した。

「ちよ、ちよつと・・・なんで円が泣くの・・・」

「お疲れ様。よくやったわね」

お姉様・・・。

「ただ、権さん・・・体力オバケね・・・。話を聞いたらLGレキオンの訓練後
だったそうよ・・・」

え・・・。リイにはもちろん体力も必要だが、この場合は体力よりも持久力の問題だろう。

「けど、勝ちも勝ちでしょ？素直に喜びなさい。立てる？」

「はい・・・」

立ち上がり、訓練室の外へ。

「鬼頭さん、拘束されたわ」

「え……」

「明日香には黙ってたけど、彼女……以前からある疑惑がかかっていったのよ」

「どういうことだろうか？」

「明日香以外にも同じような方法で他所の学園に編入させるように妨害していたみたいよ。で、自分がLGに入りやすいように仕向けた、と」

「でもそれって今回と関係ないんじゃない？」

「それがね……神庭女子の叶星さんに聞いたら……同じ理由で編入してきた子がいて、詳しく聞いたら彼女だった……ってね」

「……」

「それでお台場の生徒会が動いた。リリイ同士が傷つけ合ってはいけないものね」

脅迫容疑とリリイの精神的迫害行為だ。処罰は免れないだろう。

「これが明日香にだけだったら拘束はされなかったでしょうね。まあ私もこんなことになるとは正直思わなかったわ」

なんとも後味の悪い終わり方だ。

帰り道。

「ビックリしましたわ。まさか琴乃様と同じ戦い方だなんて……」

「ちよつと……実験的にね。私ももつと強くなりたいし、いきなり実戦投入してみんなに迷惑かけたくなかったから……」

「私も……もつと頑張らなきゃ……」

円……。

「なら……叶星様をお願いしてグラン・エプレの紅巴さんと手合わせ、とかどうか？ちなみにだけど……紅巴さんシユガール持ちだよ？」

「あらそれはそれは……グランギニョルのCHARMとはお目が高いですわ」

「あえて食いつかせた。ただ、シユガール……名前と反比例してかなり見た目がごつい。」

「はいはい……ならばスは灯莉さんね」

丹羽灯莉——私たちと同じ1年生だが、とにかく変わり者らしい。ただ、カワイイモノが好き、と言った点では灯音様と共通するところがあるのかもしれない。

「ちよつと！わたくしはやるともななんともしよ」

「ついでだけど、灯莉さんマルテ使いだそうよ」

「・・・そういうときはばかりずるいですわ」

「・・・いつもどおり・・・だね」

「ええ、そうね・・・」

手合わせで技を使ったことは琴乃様に黙っておこう。後々厄介なことになりそうだ。

ピピピ・・・

翌日早朝。携帯端末が鳴る。誰からだろう？

見ると見覚えのある名前が・・・。

『私、来年ぜったい百合ヶ丘に編入するから待ってて！』

以前、御台場に約1名権様や権様の他に知り合いがいるという話をしたが、その子からだ。詳しくは割愛するが、いろいろ問題のあるリイなので、それはいずれどこかの機会で話したい。

「はあ・・・」

だよなあ・・・そういう答えが来るとは分かっていたが、あの文面だと初日からLG控え室に押しかけて来そうな勢いだ。

「おはよう明日香ちゃん」

円だ。

「珍しい。こんな朝早く起きるなんて」

「ひどい！で、どうしたの？」

「・・・早朝ランニングしようと思って」

「ランニングかあ・・・」

「うん・・・昨日の手合わせで感じたんだ・・・。私には持久力語りてない！って。だから少しでも鍛えたくて・・・」

百合ヶ丘の敷地周りを一周すると約3キロ近くあるらしいので、これを3周すれば持久力アップになるのでは？と考えたのだ。お台場のときは2キロぐらいだったので単純に4倍近く、ということになる。

「円も一緒に走る？」

「え．．．私はいいよ。走るの遅いし．．．逆に明日香ちゃんの足引っ張っちゃうかも．．．」

「そっか．．．じゃ行っってくるね」

校門を出てゆつくり身体を慣らしていく。本格的なランニングは久しぶりなので一気にやると身体に負担がかかる。

今日は初日なのでいきなり3周．．．ではなく1周のみで終了。少しずつ慣らしていこう。

「おはよう明日香」

京夏お姉様だ。

「おはようございませう京夏お姉様」

「額に汗．．．ランニングしてたの？」

「え．．．なんで分かったんですか？」

「そんなの．．．見ればわかるわよ。こんな時期なのに上着まで脱いじゃってるしね」

確かに．．．それはそうか。この時期なら肌寒くてもおかしくない。

「はい．．．昨日の手合わせで改めて持久力がなくなって感じたので．．．だからもつと上を目指したいんです」

京夏お姉様は私を見て、

「そう．．．でもムチャはしちゃダメよ？」

「もちろんです！」

一度寮に戻り、ブラウスを着替えてから学園へ。

「あんたも勇気あるよね．．．権様と手合わせなんてさ」

どうやら週間リリース新聞に掲載されたらしく、教室での質問が絶えなかった。

「あはは．．．」

「明日香ちゃん人気者だね」

「円・・・あなた・・・この状況楽しんでるでしょ・・・」
「少し?」

「ちよつとよろしくくて?」

ベスだ。

教室の外へ引つ張り出される。

「・・・なによ?」

「明日香さん。東京のエリアディフェンスが半崩壊してるのはご存知ですわよね?」

・・・え?

「なに・・・それ・・・嘘・・・よね? エリアディフェンスってそう簡単に解除できるようなものじゃないわ」

それ初耳なんだけど・・・。

「嘘じゃありませんわ。明日香さんが謹慎中の間、生徒会から通達が来ておりましたわ」

どういうこと? 私・・・生徒会から何も聞かされて・・・ない・・・。

「もしかしたらわたくしたちも近々外征要員として駆り出されるかもしれないわ・・・」

「ちよつとごめん!」

ダッ!

私は走り出した。

「明日香さん!」

ベスの声が聞こえたが無視する。

学園の普段誰も来ないような場所まで来た。

ピッピッピッ・・・

携帯端末の通信内の通話・・・ではなく電話としての機能を使い自宅へかける。

(大丈夫だよね・・・?)

『もしもし尾上・・・』

よかったあ。母さんだ。

「母さん!」

『明日香? どうしたの?』

「ううん．．．なんでも。ちよつと．．．声が聞きたくなくなっただけ．．．」
母さんの声を聞いて一安心してしまった。話してる途中で涙声になっっていた。

『もしもし明日香？あなた泣いてる？』

「泣いてない．．．目にホコリが入っただけ．．．」

『そう．．．ならいいけど．．．なにか悩みとかあるなら遠慮なく言いなさいよ？』

「うん．．．けど．．．大丈夫．．．今度．．．いつになるかわかんないけど家には帰るから。それじゃ」

『がんばってね』

「．．．うん」

ピツ．．．

よかった．．．。自宅近辺はまだ大丈夫なようだ。

「．．．こんなところにいましたの」

「べ、ベス!?なに．．．まだ何か用？」

「何か用．．．じゃありませんわ。話はまだ途中ですわ」

「それは．．．ゴメン．．．」

「で、どなたとお話してましたの？」

「べ、別に誰だっでもいいじゃない．．．」

「まさかとは思いますが．．．明日香さんのご実家って．．．」

私はあえて何も言わなかった。

「ならわたくしも何も聞きませんわ。プライベートに深く首を突っ込む気はありませんし」

一旦会話を切るベス。

「で、先程のエリアディフェンスの話ですが．．．おそらくはG・E・

H・E・N・A・が大きく関わってるかと」

「．．．何を根拠に言ってるわけ？もし仮にそうだとしても私たちじゃなくて御台場とかイルマに声かかるでしょ？」

「これはニ水さんからの情報ですけど、御台場はそれとは別にギガント級が頻繁に出没するとかで手が離せないそうですわ。イルマ女子のほうまでは．．．お聞きしませんでしたか」

L G 総出、か……。船田姉妹を始めとする3大L G ばかりきりということは、かなりのものだろう。その合間を縫って手合わせを受け入れてくれたのは感謝しかない。

ピ。ピ。ピ。……

お互いの携帯端末が鳴る。

(来たか?)

「はいビンゴ。来たわね……」

内容はこうだ。

『つい先程エレンスゲ女学院から正式に外征依頼がありました。場所は新宿近辺一帯、ギガント級が多数出没、参加L G はラースグリーズ、ローエングリン、私たちの3組よ。詳しいことは控え室にて説明します。』

「ですわね……」

百合ヶ丘に来てから初めての外征……か。

「みんな来たわね」

L G 控え室に集められた私たち。

「外征……ですか……」

不安そうに尋ねる円。

「そう。私も外征は初めてだけど、うまくいきそうな気がするわ」

「あの……」

「エレンスゲのどこと共闘することになるんでしょう?」

咲良ちゃんが質問する。

「それは……私にもわからないわ。生徒会から話を聞いただけだから」
「私は……すごく楽しみだわ。久しぶりに千香溜ちゃんと会えるかも……」

唯一琴乃様だけが楽しそうにしている。

「千香溜様?」

「ええ? 私の友達よ」

「分かっているとと思うけど遊びに行くんじゃないんだからね？」

私も楽しみといえれば楽しみだ。日の出町の惨劇で一緒になったリイがエレンスゲにいるからだ。

「わたくしは・・・不安しかありませんわ・・・あの悪名高きヘルヴォルの方々と共闘なんてことになったら・・・」

「ヘルヴォルって？」

円は知らないんだっけ。

「LGヘルヴォル。エレンスゲ女学院の序列1位・・・あ、成績優秀者のことね・・・がリーダーで、そのリーダーが指定し4人で構成される、エレンスゲのトップ集団よ」

「で、そのヘルヴォルってあまりいい話を聞かないのよ・・・実力至上主義、作戦遂行のためには手段を選ばない、そのためには犠牲をもちとわない・・・」

京夏お姉様が補足してくれた。

「なにそれ・・・最悪じゃん・・・」

みどりだ。

「ま、まああくまでもウワサでしかないから。年度毎にメンバーも入れ替えになるって話だし・・・序列が入れ替われば、の話だけど」

そして、その悪い予感は的中してしまった。

「え・・・」

送られてきたメッセージを見て絶句する私。

『共闘するLGが分かったわ。ヘルヴォルよ』

お、終わった・・・。

そして遠征日程も確定した。あさってだ。

「あはははは・・・」

乾いた笑いしか出てこない。

ピ。ピ。ピ・・・

携帯端末が鳴る。誰だ？

『ひっさしぶりー！メンバー一覧見てビックリした！あさってヨロシク』

うっそ!?

この軽いノリの挨拶……。

「どうしたの?」

「なんか……複雑なんだけど……」

これってどう返せばいいんだろう?むしろ混乱している。

「円も見ただしょ?」

「うん……そんなにショックなんだ……」

「いろんな意味で、ね」

ピピピ……

あれ?また京夏お姉様からだ。

メール?

中を確認する。

『ヘルヴォルのメンバー一覧よ。会う時の参考にしてね』

とある。どうやら私にだけ来たようだ。もしかしたら琴乃様にも同じメールが行ってるかもしれないが。

見てみると――

『相澤一葉・佐々木藍・飯島恋花・初鹿野瑤・芹沢千香瑠（敬称略）』
とある。

恋花様と瑤様かあ……。今から楽しみだ。

再会

そしてその日がやってきた。その移動中の会話。

「・・・琴乃様。別口でメールって来ました？」

小声で耳打ちする。

「明日香ちゃんのところにも来たの？」

「ええ。私もエレンスゲには中等部時代にお世話になった先輩がいますので」

「そうなの？」

「はい。その先輩がまさかヘルヴォルに抜擢されてるとは思いませんでしたけどね」

と、返した時点で疑問が湧いてきた。

(あれ・・・でも恋花様も瑤様も序列は上位2ケタだったような・・・) そう・・・今回のヘルヴォルに少し違和感を感じていた。

新宿に到着した。が――

「なに・・・これ・・・」

私が知っている新宿とは違う光景が広がっていた。

街並みは一見普通に見える。けど、ところどころ破壊されていたり、あるはずのところが存在していなかったり・・・見るに堪えない景色・・・。

「私も・・・昔一度だけ新宿は来たことがあるけど・・・こんな風景じゃなかったわ・・・」

とは京夏お姉様だ。

(ここが・・・最前線・・・か)

GYAAAAA!!

・・・いきなりスモール級のお出ましか。

「はあああっ！」

ザシユッ!

CHARMを起動させて一気に斬りつける。

「こんなの・・・こんなの新宿じゃ・・・ない・・・っ！」

感極まるって走り出そうとするも、

ガツ・・・

「・・・みどり」

みどりに止められた。

「気持ちわかるけどさ、行ったところで何も変わらないだろう？」

・・・そうだ。冷静になれ私。これじゃ今までと何も変わらないじゃないか。

「そうだね・・・私も・・・くやしいのは・・・同じ・・・その想いは・・・ヒュージにぶつけようっ？」

「・・・はい」

「目的地まで移動するわよ」

目的地は現在位置から徒歩で1時間ほど行ったところだ。

そして背中に見たことのあるリリイを見つける。丁度振り返るタイミングで目が遭う。

「・・・明日香？」

「恋花様、瑤様。ご無沙汰してます！」

近づき、深々と頭を下げる。

「明日香ーひっさしぶりー！」

軽いノリで挨拶するのは飯島恋花様だ。かつて日の出町で一緒になったことがある。そして私の服装を見るなり、

「へえ・・・お台場から百合ヶ丘に行ったんだー。お台場で誰かと揉めた？」

「あはは・・・あれからいろいろと・・・揉めたというか・・・」

「そうだ、今度休みのときにでも実家のお店連れてってよ？楽しみだなー」

「恋花様、再会談義もいいですが、我々の本来の目的を忘れては・・・」
「相変わらず一葉は硬いなあ・・・」

「えつと百合ヶ丘からの外征の皆さんですね。ありがとうございます。」

藍色のショートヘア——「葉と呼ばれたリリイは私たちに一礼。「ほら一葉ー、そう硬くつちやダメだって。あっちの人たち固まってるよ?。」」

恋花様がフランクすぎるのでは・・・というツツコミは置いて、一葉と呼ばれたリリイは困った顔をしていた。

「そうですか?。」

ヘルヴォル——エレンスゲ女学園のLGのうちのひとつだ。エレンスゲ女学園は序列制度というもので格付けされており、順位が上であるほど優秀なリリイとされている。軍隊の序列に似ているところがあるのかもしれない。

「大丈夫ですよ。私たちは普段こういったやり取りをしないので気にしないでください」

とは京夏お姉様だ。

「ヘルヴォル・・・と聞いてどんな方々なのかと思ってましたが、琴乃から聞いてたとおりでだったので安心しました。あ、私はLGエリューズニルの隊長、夏目京夏です。よろしく」

お姉様たちの会話をよそにすでに琴乃様ともうひとりのリリイ・・・おそろくそうであろう人と趣味の話で盛り上がっていた。

「わたくしもビックリしましたわ。ヘルヴォルのイメージというところ・・・おっかないといえますか・・・作戦優先の考えをお持ちとウワサで・・・」

「ちよつと・・・」

ベスを小突く。

「大丈夫ですよ。私はエレンスゲの今のやり方には納得していません。なので私たちがヘルヴォルを変えて行こうと思っています。申し遅れました。ヘルヴォルの隊長相澤一葉です」

ということは序列1位・・・。

「ところで相澤さんってもしかして・・・」

「一葉でいいですよ。1年生です」

え？1年生!?

「どこぞの誰かさんとはえらい違いね・・・」

とチラツとみどりのほうを見る。

「どういう意味だよー!」

「さあ？少しは一葉さんを見習って頑張ったら？そうすれば京夏お姉様の評価も変わるかもよ?」

「お姉様?」

「ここですよやくしばらく黙っていた瑤様が口を開いた。

「へえ・・・お姉様ねえ・・・明日香やるじゃん!百合ヶ丘に来て守護天使まで・・・」

恋花様に肘で小突かれる。

「からかわないでくださいよー!私だってこうなるなんて思ってたなかつたんですから・・・」

顔を赤くして反論する。

「それじゃ軽く自己紹介してもらおうかしら。明日香は知ってる人多いみたいだから円からね」

「えっと・・・1年の敷井円です。よろしくおねがいます」

「ごきげんよう。1年の櫻子・S・エリザベスですわ。わたくしのことはエリザベスと呼んでいただければ」

「同じく1年の周防みどり・・・よろしく」

「ちがるー、おなかすいたー」

あれ、この子どこかで・・・頭の中の記憶を辿るがどうにも思い出せない。

「藍ちゃん大事なお話が終わってからね」

「えー」

藍と呼ばれたりリイは不満そうな顔をしている。

「この子がウワサの藍ちゃんね。後でおいしいものたくさん作ってあげるからね」

と普段と変わらぬニコニコしている琴乃様。

「そういえば千香瑠様とはお料理友達なんでしたっけ?」

芹沢千香瑠——お台場迎撃戦では菱田治様はるや藤田権あきが様達と共に

聞いたと記憶している。噂では現アールヴヘイムの番匠ばんしよつや谷依奈様から百合ヶ丘に來ないか、と引き抜きの話があるとかないとか。

「そうよ。あのときはアドバイスありがとう。明日香ちゃんのヒントがなかったらあのままだったかも……」

「いえいえ。それよりも……藍ちゃん……でしたっけ？ 私たちより多分年下ですよ？」

「そうね。千香瑠ちゃんから詳しい話は聞いてないけど、いろいろ深い事情がありそうよ」

「ごきげんよう。櫻子・S・エリザベスですわ」

「敷井、まじか円です。よろしく」

「紫衣原咲良です」

「……周防みどり」

なぜかぶつきらぼうに答えるみどり。よく分からないことするなあ……。

「あ。上級生のみなさんは千香瑠様からお話は伺っていますので」

ふと思つたが、瑤様と灯音様……雰囲気似てる気がする。本人から言わせれば『……違う』とか言われそうだが。

「それで……今回私たちは何をすればいいのかしら？」

ようやく初花様が口を開く。

「今は小康状態ですが、ギガント級1体と交戦中です。我々だけでは手に負えなくて今回応援をお願いしました」

ギガント級……。今までラージ級まではなんとか頑張ってきた。正直想像がつかない。

エリアディフェンスの一部が機能しなくなっている影響か……。
「それで……私たちはどう展開すれば……」

「ギガント級、かあ……」

初めて対峙する。正直言う不安要素のほうが多い。

「大丈夫よ明日香ちゃん。いつもどおりやれば……って言ってもムリ

よね。私も不安……」

珍しく琴乃様も愚痴をこぼしている。

「これが最後に戦いにならなきゃいいけど……」

「ちよつと円さん！縁起でもないことおっしやらないでくださる？こちらまで不安になつてしまいますわ……」

作戦はこうだ。まず突然発生するケイブから発生する不特定多数のヒュージの殲滅とケイブの破壊、動きがあればギガント級の殲滅、が主な内容になるのだが、ルナティックトランサー酔狂の月持ちの琴乃様と藍ちゃんと共同でスモール級の一掃、私たちがミドル級、ラージ級の一掃という感じだ。

「……出たー！ただ……離れてるね……」

灯音様の声。

ついに私たちにとって初めての最大の戦いが始まる。

「場所は？」

「ここから南東……500mの地点。数は……ちよつとまつて!?え……」
灯音様がビックリしている。

「スモール級多数……2人で……大丈夫なのかな……ミドル級が30体……ラージ級が2体……」

という声を聞いた途端、

「ねえ？もう行っちゃつていい？」

藍ちゃんの声。見るからに待ちきれないといった感じだ。

「私のほうはいつでも大丈夫……あ、藍ちゃんダメ！」

さっさと行つてしまった。

「ヒュージ……ヒュージ……」

まるで子供だ。あ、子供なのか……。精神年齢は低いようだ。

「……いつもあんな感じなんですか？」

「ええ、まあ……」

「藍は……G・E・H・E・N・A.の研究対象なんです」

「強化……リリイ……」

つい口にしてしまった。やはりか……強化リリイ……。みんなにはナイショにしているが、あの大怪我を負った際にブーステッド施術を……という話があったが、私は断っている。むしろ断って正解だったのかもしれない。断ってなくても同じ結果になっていたかもだが。

ブーステッド施術とは、リリイの持っている能力を人工的に強化しようとして試みられた行為だ。当然ながら身体にかなりの負担がかかるため、たとえ成功したとしてもなんらかの後遺症が残ったり、最悪の場合そのまま帰らぬリリイとなることもある。

「強化リリイって……?」

「リリイ本来が持っている能力を人工的に強化しようとする試みよ。百合ヶ丘でも何人かかくまっていると聞いたわ」

「そんな……」

「G・E・H・E・N・A. は常識じゃありえないことを平気でやってのけるからね……。だから私はあるとき断ったわ。あ、深堀りは終わった後に……」

「今は……ヘルヴォルみんなと仲良くしてるけど、それまではひとりだった。だからある程度は勘弁してあげてほしい……」

とは瑤様だ。

「ホント、うちの妹はいろいろありすぎ。とにかく出ましよう」

藍ちゃんと琴乃様にスモール級を任せきりにしてしまうのはなんか申し訳ない気がするのだが……。当の藍ちゃんはすごく楽しそうに狂酔の月を使い次々とスモール級を倒していく。

「はああっ！」

京夏お姉様と2人がかりでミドル級の駆逐。そういえば2人で……というのは初めてかもしれない。

『数が多いわ。とにかく手短に。マジは最小限で。ギガント級のため

に温存すること』

琴乃様から薙刀を教わるようになってから少し太刀回りが変わった気がする。というか楽に感じるようになった。

「すごい・・・やっぱりの2人・・・守護天使と妹だ・・・」

絶妙なタイミングでの時間差攻撃。

「関心するのは後よ！今は目の前のヒューズに集中して！」

「あの2人やるじゃん！あたしもっと」

恋花様あまりムチャは・・・とは言えなかった。

一葉さんが挟まれそうになっている。どうする？無理やりでもここから撃つか？

パンツ！

その心配はいらなかった。背後から円がカヴァーに回った。

GYAAAAA・・・

「助かりました敷井さん！」

「明日香ちゃんに鍛えられましたから。後私のご事は円でいいですよ」

と円。

「じゃ・・・助かりました円さん」

一方のみどりは――

「やーい、やーい！こつちだよー！」

GYAAAAA!!

ミドル級を煽っていた。

まったく・・・何やってんだか。遊びじゃないっての。

「おりゃー！」

パンツ！

だが、確実に仕留めている。

まあ本人が楽しそうにやってるからいつか。この状況で文句を言っても仕方ない。

「やああっ！」

咲良ちゃんも確実に仕留めに行っている。

GYAAAAA!!

なんて見ているうちに固まってやってきた。どうする？

京夏お姉様は別な集団と交戦中だ。

正直苦手なのだが・・・やらかなきや片付かない。マギを・・・集中！

ババババババツ！

所謂マシンガンの要領で連続流し撃ちだ。

GY A A A A A A A A A A !!

よし！

心の中でガッツポーズ。

単発撃ちは得意なのだが、ビームライフルをやっていた影響で流し撃ちはほとんどやったことがない。

ヒュージの残りは？

「あと・・・半分！」

灯音様が教えてくれた。

GY A A A A A A A A A A !!

ミドル級がこつちに向かってくる。まだ京夏お姉様は交戦中だ。仕方ない・・・デュエルで・・・！！

「はああああああつ！」

両足にマギを入れ、右足を合図にジャンプ！

ミドル級はよくいるルンベルなので大したことはない。

ガンツ！

が、何こいつ！力が半端なく強い!?

「うっ・・・！」

タングズニルが押される！踏ん張れるか？

仕方ない・・・マギは温存しておきたかったが・・・。さっさと決着を付ける！

「こんのおおおお！」

レアスキル発動！本体の目(?)に向けて右から左へブレードを刺す！

ザッ・・・

GY A A A A A A A A A A . . .

「はあっ……はあっ……」

息が上がる。本来こんなことで上がってはダメなのだが。

「明日香ちゃん! うしろ!」

円? 声をかけられ、後ろを向く。

GYAAAAA!!

ラージ級の触手!? どうする? マギを温存すべきか?

ヘルヴォルの人たちはもう1体のラージ級とすでに交戦しているらしい。余力があれば加勢したいところだ。

「はっ!」

パンツ!

触手の上を這うように移動、ラージ級の本体の目(?)へ牽制弾。

「みんな大丈夫!?!」

京夏お姉様だ。

「これからノインヴェルト戦術を始めるけど、マギの量は少し抑えめでね!」

え? それって……。

「まさか2回やる気ですか!? ムチャですよ!」

いくらなんでも私たちが持たない。お姉様は何を考えてるの!?

「円!」

シユバツ!

円にマギスファイアが渡る。

「は、はいっ!」

グンツ!

「うっ……」

受け取るも、

「えっと……えっと……」

有効範囲内に誰もいなくて困っている。

たまたま近くにいた藍ちゃんを見つけ、

「ごめんっ! 藍ちゃんお願い!」

シユバツ!

ノインヴェルト戦術の基本はLG間で完結させるのだが、今回の場

合はたまたま近くにいた藍ちゃんに渡すことに。

グンツッ!

「もらったー! つぎだれになげればいいのー?」

「一番近い人でいいわ! 1度ももらった人には投げちゃダメだから!」

京夏お姉様教え方が優しいなあ……。

「じゃ、ことのにパスス!」

シュバツッ!

マジスフィアは扱い慣れてるのか、ルートも悪くない。的確な位置で渡る。

グンツッ!

「ありがとう藍ちゃん!」

ニコニコ笑顔で返す琴乃様。

瞬間真剣な顔へ。

「みんな随分離れちゃってるわね……京夏ちゃんどうする?」

ベスはミドル級とデュエル中。みどりは……どこ行った!? 見える限りのところにいない。灯音様も見当たらない。初花様、咲良ちゃんも見えず……。

「くっ!」

キンツッ!

なんてやつってる間にラージ級から攻撃!

「このっ!」

カンツッ!カンツッ!

今は避けるだけで精一杯だ。

琴乃様が何かに気づいたようだ。

「千香溜ちゃん!」

グンツッ!

「うっ……」

ヘルヴォルのみなさん全員ノインヴェルト、もしくはフンヴェルトの訓練をされている? 受け取り方も渡すルートも的確だ。

さて、千香溜様は誰に渡すか?

ザシユツッ!

よし！ラージ級の腕1つ落とせた！
パンパンッ！

一時的に離れるために牽制でマギ弾を撃つ。

「明日香さん！」

シュバッ！

しかないよね。咲良ちゃんいた！ルートも問題なさそうだ。

グンッ！

「咲良ちゃん！」

シュバッ！

「えっ!?待っ・・・ひゃああ！」

自分のリスク回避のためマギを込めずにそのままパス回し。常套手段がどう出るか。

「咲良ちゃん！この状態でフィニッシュショット撃って！これ以上はだれもマギは回せないわ！」

「ええっ!?私フィニッシュショットなんてやったことないですよ!？」

「いいから早く！直接投げて！」

「はい！」

ナグルファールの場合はモードが切り替わらないので直接投げることになる。

「ええええええええい！」

ドドーン!!

私たちの撃ったほうは一応成功したようだ。

一方の一葉さんは・・・。

「一か八かですが・・・ノインヴェルト戦術いきます！」

悪い予感的中してしまった。

ズガンッ！

「うわあっ!？」

え？私のところ!？」

グンッ！

「ちよ・・・待ってください！」

しかも重い・・・！

一葉さんのマギは真っ青だ。見ると丁度ベスがミドル級を撃つて離れるところだった。ここはノインヴェルトを撃つてない人に渡して逃げる方が得策だろう。

「ベスーみどりがあんたのことを乳おぼけって言ってたわよ！」

シュバツ！

「はあっ!？」

ちなみにだが、私のマギの色は灰色と桃色が混じったような見た目分かりづらい色だ。

「いいから受け取る！」

「・・・仕方ありませんわ」

グンツ！

「ううっ・・・で、どなたに渡せば・・・」

「今回特殊だからルートがよくて受け取れば誰でもいいわよ！」

この際贅沢は言ってられない、か。

私なら・・・とたまたま目を合わせたのが恋花様だった。

「恋花様！いきますわ！」

・・・同じことを思ったようだ。

シュバツ！

ルートも申し分ない。

グンツ！

「うわっ！おもっ!？」

すると、

「おーい！恋花様ーこっちこっち」

丁度みどりが来た。ナイス！

「んじゃあの元気っ子に投げればいい？」

みどりのことを元気っ子とか、恋花様らしい言い方だ。

「お願いします！」

「あいよー！いっけえ！」

シュバツ！

さて、みどりだ。

グンツ！

「よっ、と・・・」

相変わらず機動力はいい。

「要はまだ回してないやつに回せばいいんだよな？じゃ瑤様任せた！」

シュバツ！

みどり・・・かなり際どいルートから投げたな・・・。

GYAAAAAAAAA!!

残っている腕が襲う！が、

ガンツ！

「こんにやろー！変な動きしやがって！」

何を思ったのか、

カンツ！

ラージ級の腕に向かって蹴りをくれる。

直後にレアスキル発動！

ザシュツ・・・

瞬間移動して根本から腕を切り落とした！

ナイスアシスト！

ガンツ！

「受け取ったよ」

残りは交戦中のラージ級1体のみ。今のところギガント級の動きはない。

「そのままうちの灯音に投げて！」

京夏お姉様の声。

「わかった！」

頷くなりそのまま投げようとする。

「え？」

初花様!?

京夏お姉様は気づいたのか、ニヤニヤしている。

レアスキル？なんの意図が？

GYAAAAAAAAA!!

ヒュンヒュンヒュンヒュン・・・

飛翔体が初花様のシャドウめがけて飛んでくる。
そうか！

「瑤様！無視して灯音様に投げてください！」
私の掛け声に一瞬戸惑ったみたいだが、

「わ、わかった！」

シュバツ！

マジスファイアはそのまま灯音様へ。

グンツ！

「・・・フィニツシュショットが、初花なんて・・・予備隊のとき以来だね！」

初代エリユーズニルの他に仮で予備隊でも組んでたのかな？そんな話は一切聞いてないのだが。

シュバツ！

「かしらね。フィニツシュショット！」

初花様が宣言し、照準を睨んでラージ級の腹めがけて撃つ！

ズガンツ！

初花様のフィニツシュショットなんて滅多に見る機会がないので新鮮を感じる。

「みんな離れて！」

お姉様の掛け声と共に足にマジを入れ一斉に離れる。

私はビルの影へ。

ドドーン!!

衝撃がすごい。爆風がビル越してもかなりある。

「うっ・・・」

思わず手で覆いそうになる。

「一段落した・・・のかな・・・」

「いえ、まだよ！」

GYAAAAAAAAAAAA!!

今まで動きのなかったギガント級が動いたのだ。

大量のマジ弾。

「一旦退避！」

避けるので精一杯だ。

「どうしよう・・・マギが・・・」

さっきのラージ級駆逐で私のマギはほぼないに等しい。この状態での攻撃は非常に危険だ。

だが、ギガント級の反応があったのはそれだけで以降小康状態に戻る。

「この繰り返しなんです。なので手の打ちようが・・・」

半ば諦めたように一葉さんが言う。

「あります。もしかしたらこの方法なら・・・ちよつと強引ですけど」

京夏お姉様のところへ。

「京夏お姉様。ちよつと・・・」

とある作戦を耳打ちする。

「危険よ！私は認めないわ」

「けど・・・待ってたら同じことの繰り返しになります。それこそ私たちのほうがマギ切れでやられてしまう・・・ヒュージが・・・そんな知能を持つてるとは思いたくないですけど、けどそれしか考えられない・・・」

「というところ・・・」

「一葉さん。ヒュージの出現パターンって、昼間ケイブから大量発生して夕方にギガント級が動き出すんですよね？」

「ええ、そうですね・・・」

「だったら、そのパターンを逆転させちゃえば。ただ、その分リスクは高まります」

ギガント級一点集中は可能なはず。ただ、その間ネストが出現したらアウトだ。

「それともう一つ。以前一柳隊・・・いえ、ラーズグリーズのみなさんが面白いことをやっていたので、それを応用出来るんじゃないかなって・・・恋花様もいますし」

「・・・あたし？」

不意に名前を出されビックリする恋花様。

「レアスキルの・・・多重・・・合成・・・」

「そうか・・・その手が」

私の謹慎が解けた後に円から聞いたのだが、一柳さんが身につけている四つ葉のクローバーの髪飾りを探すのに、二川さんの鷹の目を神琳さんのテストメントで範囲を広げ、ミリアムさんのフェイズトランセンデンスでマギを供給してレアスキルの多重合成で探した、というのを聞いた。

最終的に百合ヶ丘の生徒全員と接触して探したようなのだが。

問題は誰のレアスキルをそうするか、なのだが・・・。

狂酔の月（1人はS級相当）が2人、ゼノンパラドキサが（私含め）2人、レジスタが2人、縮地が1人、ブレイブが1人、テストメントが1人、ヘリオスファイアが1人・・・。

「けど、ノインヴェルト戦術よりも危険度は高いよね？」
と瑤様。

「だから併用するんです。カヴァー出来るだけの人数もいる。ヘルヴォルのみなさんでレアスキルを。私たちでノインヴェルト。どちらも失敗したらアウト・・・リスクはかなり高い。どうします？」

「私は・・・賛成です。確かにリスクは高い。けど有効な方法だと思います」

一葉さんは賛成してくれた。

「ただ・・・問題は・・・昼間のケイブを・・・どうするか・・・だね・・・」
出ないことを祈るしかない、か。

翌日。

灯音様を監視役にケイブが発生するか否か待機することにした。

「・・・動き、ないね」

ないに越したことはないが、今まで動きがあっただけに不自然に思

えてしまう。

「ねえーつまんないー。らんとあそぼうー?」

待機時間が退屈なんだろう。

「藍?遊びに来てるんじゃないんだよ?」

一葉さんが藍ちゃんを諭す。

「・・・待つて。動きがあった・・・けど・・・」

灯音様が困惑している。

「どうしました?」

「小型のケイブと・・・スモール級1体・・・だけ?」

昨日までの動きからすると確かにおかしいといえはおかしい。

「明らかにおかしいですね・・・」

「一葉。どうする?」

とは恋花様。

「みどり。お願いね」

「えー」

「えーじゃない。さっさと行くー!いつものやつからしたら楽でしょ?」

「いつものって・・・」

「様子見・・・というか、偵察はいつもみどりにやってもらってるんです」

数分後、みどりが戻ってきた。

「ケイブとスモール級やってきたぞ・・・これでいいだろ?」

ややふてくされ気味に言う。

「すいません・・・みどり、こういう子なので・・・」

みどりの頭を持って下げさせようとする。

「灯音様何か動きありました?」

「いや・・・特には・・・」

みどりはともかくとして、何か嫌な予感がする。

ギガント級

さて夕方だ。

昨日は全てのヒューズを駆逐後にギガント級が動き出した……のだが、今日は……。

ゴゴゴゴゴ……

地響きのような音がした後、

ガタガタガタ……

地面が揺れている。

「何？地震？」

「違いますわー！ギガント級が……！」

それまで一切動きを見せなかったギガント級が動き出したのだ。進行速度はかなり遅いのだが、威圧感がとてつもない。

(これが……ギガント級……)

触手の数がとてつもない。見て確認出来るだけで1000以上はあるだろうか。さらにリフレクターを展開するためであろう飛行体も多数。

「う……ううっ……うううっ……」

琴乃様の様子がおかしい。リフレクターじゃない。負のマジカ……。

「瑤さん。琴乃をー！」

「わかった」

琴乃様を瑤様が建物の中へ。

レアスキルが発動する前になんとか止められたはず。

「琴乃……よかった、止められて……。けど、私たちも時間がないわね……。いつ負のマジに浸食されるか……」

パンツ！パンツ！パンツ！

恋花様たちが飛行体を落とそうも、

「うわあ……。こいつら厄介だな……。キリがない……。撃っても撃つても出てくる……」

落とした分だけ湧いて出てくる。触手はいまのところ私たちに攻

撃してくる気配はない。

「発生源が特定できれば・・・」

発生源——か。CHARMを構えようとしたときだ。京夏お姉様が私の手を掴む。

「明日香、やめなさい。あなたの考えてることは丸わかりよ」
う・・・。

「でも・・・今までそれで全部成功してるじゃないですか。今回だつて・・・」

「ダメよ。今回は私たちが主導ではないわ。勝手な行動は許しません。わかった？」

作戦考えたの私なんだけど・・・と言いたかったが、黙っておく。

「一葉さん・・・どうします？」

黙って見てろ、と言われてじっとしてられるわけがない。

こっそり攻撃を仕掛けるタイミングを見計らうつもりでした。

「京夏！うしろ！」

初花様の声。

「えっ？」

レアスキル発動！寸前のところで間に割って入る。ギガント級がマジスファイアを投げてきた!?

「くっ・・・！」

カンッ！

なんとか弾き返す。が、

「うそ・・・信じられない・・・」

飛行体が巨大化したかと思うと、まるでお手玉で遊ぶかのように飛行体同士で(負の)マジスファイアをパス回ししてるではないか。ただ、見た目上は威力はなさそうに見える。

「どうなってるのこれ・・・」

油断してるといつあのマジスファイアが来るかわからない。

ヒュン！

「来た！」

「みんな避けて！」

が、唯一藍ちゃんだけがそのマギスファイアに向かっていく。

「あ……から藍ー！」

一葉さんの静止も聞かずそのままギガント級へ。

「あはっー！」

モンドラゴン（藍ちゃんらんのCHARM）で受け止めるも、

「わーいー！」

負のマギの影響を受けて……ない？ そのままギガント級に投げ返す。

GYAAAAA AAAAAA AAAAAA!!

ギガント級が反応した。

「藍……あの子……ヒュージを呼び寄せる体質なんです」

呼び寄せる？

「ええ……けど、一度も傷ついたことがない……どういふことかわかりますか？」

概ね察しはついている。

「ヒュージ細胞……ですよね」

「ヒュージ細胞!?!」

「ヒュージ細胞を埋め込んで強化しようって試みよ。リリイもヒュージも同じマギを使うからね」

「藍の身体は……ヒュージ細胞が埋め込まれていて、同族とみなしてヒュージが近寄ってくるんだそうです……」

やはりG・E・H・E・N・A・は人道無視の卑劣な団体だ。

「実は私もヒュージと戦って負傷してブーステッド施術を勧められましたが、怪我をしてそれを補うための施術だから理にはかなって。けど、私は断りました。お台場は昔からG・E・H・A・N・Aの実験場にされているんじゃないか、ってウワサもあつて信用ならなかったんです。いくらヒュージのためとはいえ、私の身体をいじられなくなかった。リリイ、いえ人として当然ですよ……」

「明日香ちゃん……」

有名な強化リリイではルドビコ女学院の岸本ルチア来夢さんだが、彼女の場合は事情が少々違う。

一方の藍ちゃん——例のマギスファイアのやり取りを続けているが、藍ちゃんに攻撃しようとはしていない。同族と見ている？

「で、どうされますのー一葉さん？まさかこのまま待機ということはありませんわよね？」

「恋花様には犠牲になつてもらいましよう」

犠牲つて……言い方……。

「ちよつと一葉！犠牲つて……」

「みどり。藍ちゃんと場所交代ね」

「あたし!？」

「はい文句言わない。いつものやつお願いね」

「なんであたしばかり……」

しょうがない……といった感じで藍ちゃんに近づいていく。

「おいー藍ー！あたしと交代な」

「えー？なんでー？」

「いいから。一葉が呼んでるぞ？」

「藍ちゃん、終わつたらたいやきいっぱい作つてあげるから」

モノで釣ろうとする千香溜様。

「そういえば……琴乃様を選ばなかった理由つて……」

「ええ……琴乃は結夢さんと同じで精神的に不安定になるのよ。発動したときはいいけど、その後のケアが……ね」

初花様が説明してくれた。リリーの精神安定にはカリスマやブレイブと相性がいいとされている。

「オマケにうちのLGレギオンにはカリスマやブレイブ持ちがない。だから滅多なことでは使わせないようにしてるの」

「そういうことだったんですか……」

「日頃からマギ交感はしてますけどね。他のLGからどう映ってるか知らないですけど……」

「かずはー、らんのことよんだ？」

「らん。思いつきりやつちやえー！あたしが許可する」

「ちよつと恋花様！勝手なことを……」

「やったあ！」

藍ちゃんが大喜び。そのまま飛び出そうとするのを京夏お姉様が止めた。

「ごめんね藍ちゃん。その前に……」
「……?」

それはそうだろう。恋花様以外のヘルヴォルメンバー全員手を繋いでいるのだから。

「ベス！お願い！」

「行きますわ！テストメント！」

パアツ……

レアスキル発動！

「ねえまだー?」

藍ちゃんも待ち切れず酔狂の月を発動。今にも飛び出そうとする勢いだ。

「今です！恋花様！」

「オツケー！」

ガンツ！

恋花様のCHARMが振り下ろされて、マギが入っていく。

「みんないっけえ！」

「みなさん。時間は限られます。動きだけは気をつけて！」

「了解です！」

「わかった！」

「わかったわ」

フラフラの恋花様。

「おっと……」

慌てて私が支える。

「サンキュー明日香」

「それにしてもうちのメンバー全員狂酔ルナティックトランサーの月って見ててちよつと異様……」

「確かに……」

キンツ！キンツ！キンツ！シユバツ！

普段の戦闘ではお目にかかれないような光景が広がっている。

狂酔の月使い（にわか）が3人も同時に暴れているわけだ。

個人的にだが、狂酔の月は体験してみたさはある。もちろん訓練もなにもない時に、だけど。

私の読みが間違っていないければ、理論上個々のマジは消費されないはずなので、狂酔の月が切れた時点でもノインヴェルトでマジを入れられるはず。

さて問題は琴乃様だが……。建物から出てきた。

「みんな……ごめんね……」

「負のマジのほうは大丈夫ですか？」

「ええ……なんとか……で、この状況は……どういうことかしら？」

「例の作戦よ。琴乃じゃなくて藍ちゃんね」

ギガント級だが、触手の半分近くが切り落とされ、飛行体のほうは消え去ったように見受けられる。

ヘルヴォルの、恋花様以外全員が暴れているのを見て不自然に思うのは当然だ。

「みんなやるわよ！準備して！」

「はいー！」

足にマジを入れジャンプ。一斉に散らばっていく。

「行くわよー！」

バンツッ！

まず最初に渡ったのは、

「くっ……！」

咲良ちゃんだ。

「初花様！」

シュバツッ！

外周ぐるっと回していく感じだろうか？けどそれだと陽動にならない。

グンツッ！

「エリザベスさん！」

シュバツッ！

相変わらずルートが的確だ。

グンッ!

「お、重いですわっ……」

さて、ベスはどこに回す？

「琴乃様!」

シュバツ!

最初の頃に比べるとかなりパス回しは上手くなったと思う。しかも速い。

グンッ!

「上手くなったわね……灯音ちゃん!」

シュバツ!

「受け取ったよ……円!」

ヒュージは今のところヘルヴォルの皆さんに意識が向いている。

グンッ!

「ううっ……!」

円がマギスフィアをギリギリ受け取る。

「あ、危なかった……」

「待って!」

初花様が声を上げる。

「レアスキルが切れた……」

予想より早く終わった!?

「みなさん早くそこから離れて!」

ヘルヴォルの皆さんに向かい京夏お姉様が叫ぶ。その後どう判断するか。

「円!一葉さんに投げて!」

え?確かにいち早くヒュージからは離れたが……どう考えてるのだろうか?

「はいっ!」

シュバツ!

が、ヒュージの触手がマギスフィアにかかりそうになる。グンッ!

「よつと・・・」

やはりこういうとき頼りになるのがみどりだ。

「よかった・・・」

一葉さんもひと安心しているようだ。

「京夏様一旦下げるぞ?えつと・・・瑤様!」

シュバツ!

ヒュージの触手を上手く避けるように瑤様へ。

グンツ!

「お・・・重い・・・」

普段ならフィニッシュシュョットを撃つてもいいぐらいにまでマギスファイアは溜まっている。

「千香溜!」

シュバツ!

そして千香溜様へ。

グンツ!

「確かに・・・重いですね・・・あつ・・・」

ミシミシ・・・

ブレードにヒビが入る音。

「CHARMが限界・・・」

「千香溜様!」

そこへ――

「一葉ちゃん!」

一葉さんが来て共押さえでマギスファイアを支えている!?

「う・・・重い・・・」

そこへ違う触手が襲いそうになる。

シュバツ!

「誰でもいいので受け取ってください!」

グンツ!

みどり!?再びマギスファイアを受け取った!?

「うっ・・・お・・・も・・・いつ・・・!うぬぬぬぬ・・・これ・・・
どうしたら・・・」

ミシミシとグングニルにヒビの入る音。

「これ以上は無理よ！明日香！お願い！」

京夏お姉様の声。

「こんのおおおおおおお！」

シュバツ！

叫びとともにCHARMのコア部分が赤く光る。そして、

ガツシヤーン！

派手にブレードが砕ける音とともに白い煙が。それは持ち手にまで行っていた。

「オーバーヒート……」

一葉さんがぽつりとつぶやく。

「明日香！受け取れええええええええええ！」

これ以上回すのは危険だ。

ルートも問題ない。

グンツ！

「ううっ……」

今まで感じたことがないマグスファイアの重み……。手首が痛い。ブレードは？

……とりあえず大丈夫らしい。

ガチャーン！

目標は……ギガント級の腹下！

「これで！最後よ！」

ズガンツ！

撃つたときの衝撃がすさまじい。

「きゃああああああああっ！」

瞬間、身体が吹き飛ばされて地面に叩きつけられた。

「みんなここから離れてっ！早く！」

CHARMで円を描きその中へ。とにかくできるだけ遠くへ逃げ
る。そして、

ドドーン！！

「うっ……！」

衝撃と爆風がとてつもない……。もしこれでもまだ動いているよ
うならもう打つ手はない。
爆風はしばらく続いた。

「……大丈夫。残ってる……。ヒュージもない……。はず」

灯音様が鷹の目を使って周辺を確かめる。よかった。どうやら大
成功したようだ。

それにしても――

「な、なんだよ……」

「普段やる気のないみどりがねえ……」

まさかCHARMを破壊した上にオーバーヒートさせるとか……。

「あ、あのときは必死だったんだよ！」

「CHARMのオーバーヒートなんて初めて見た……」

とは瑤様だ。

「でも今回は不可抗力ね。みどりに非はないわ」

「あれだけのマジを無理やり受け止めてさらに足して渡せば当然です
ね」

「オーバーヒートは二振り目ですけどね」

と円のほうをチラ見する。

「明日香ちゃんそれ言わないでよー！」

「……待って」

「……灯音様？」

何かに気づいたらしい。

「あ……まだ……。1体残ってるね……。見逃してた……」

灯音様が見逃していたようだ。

「どこです？」

「丁度正面400mぐらい……」

タングズニルを構える。

「明日香さん、ムチャですよ！天の秤目持ちの方ならともかく……」

慌てだす一葉さんだが、恋花様はニヤニヤしている。

「まあまあ・・・見てなって一葉」

照準を睨む。丁度障害物がなくてかろうじてスモール級が見える。タイミングを見計らいトリガーを引く。

パンッ！

GYAAAAAAAAA!!

少し遠くで悲鳴が聞こえる。上手く駆逐できたようだ。

「もうこれで安心で・・・」

突然フツと目の前が暗くなり、一瞬意識が飛んだ。

バタツ・・・

「明日香！」

倒れる寸前に京夏お姉様に支えてもらったおかげで気を失わずに済んだみたいだ。

「ははは・・・ごめんなさい・・・今ので・・・マギ切れみたい・・・です」

フラフラする・・・。

「それにしてもすごいですね！レアスキルなしであの距離を狙えるなんて」

一葉さんは興奮気味に語る。

「あたしも初めて見た時はびっくりしたよ・・・こんなスゴイことする子がいるんだー！って」

「あはは・・・あのときはホントありがとうございました」

改めて一礼する。

「あのときっ？」

口にしたのは咲良ちゃんだった。

「詳しくは言えないけど、私たちにとってもあまりいい思い出じゃないからね・・・」

と瑤様。

「あの時はまだ御台場に入って半年ぐらいで・・・右も左もわからなかったですし・・・」

丁度レアスキル（ゼノンパラドキサ）が覚醒してすぐの頃だ。覚醒

はしたものの、上手く扱えなかった。

「あたしらの仕事は一段落かな」

「そうですね。そろそろ戻りましょうか」

「ちかるー、帰ったらたい焼きたべたい」

藍ちゃん元気だなあ……。

「そうだ。京夏ちゃん、帰る前にエレンスゲに寄って帰るから生徒会
上手く誤魔化してね」

「そういえば琴乃様、藍ちゃんにたい焼き作ってあげる、とか言ってみ
したもんね」

琴乃様……誤魔化すって……。

京夏お姉様はため息をついてから、

「……わかったわよ。私からは上手く濁らせるからなるべく早く戻っ
てきてね」

「いいなあ……あたしもたい焼き食いたい……」

みどり……あんたね……。

「はいはい。じゃあ今度クッキーじゃなくてたい焼きにしようかな」

確かに琴乃様の作ったもので洋菓子以外を食べたことがないので
興味はある。

「やったあー！」

「ほんつとみどりって単純よね……それぐらい日頃の訓練で張り切っ
てくれればいいんだけど」

「ううっ……」

凶星だからか、何も言い返せないみどり。

「とにかく私たちも戻りましょ。ヘルヴォルのみなさんのお力になれ
て本当によかったです」

京夏お姉様が一礼。

「また何かの機会のご一緒できればいいですね」

「はい」

今回の遠征でヘルヴォルのイメージがガラリと変わった。私たち
も今回の任務で相当スキルアップが出来たんじゃないかと思ってい
る。

いずれ私がこのLG——エリユーズニルを引き継ぐことになる
だろう。そのためにはもっと私が頑張らなくちゃ。

番外編置き場

はっぴいばれんたいん

「うーん・・・」

どうにもうまくまとまらない。

実習室借りられたのはいいとして、湯煎の段階でどうしてもダメになっちゃってしまう。最初から琴乃様に聞いてアドバイス受けるべきだったのかなあ・・・。

「明日香ちゃんどう？」

円が様子を見に来た。

「どうって・・・見ての通り。ぜんっぜんうまくいかない・・・で、なんでみどりがここにいるの・・・」

「いいじゃん別に。減るもんじゃないし」

「いや、どう考えてもおおぼれもらう気満々でしょ・・・」

「しっつれいだな。あたしが食いしん坊みたいじゃんかー！」

「明日香さんの言う通りですわ。ここは黙って見届けてあげるべきではなくて?..」

ベス・・・あんたまで・・・。

「お嬢まであたしに意地悪すんのかよ・・・」

「日頃の行いじゃないかな・・・」

円も同じことを思っているようだ。

「他の実習室も覗いてみましたが・・・他の妹シルトの方々も考えてることは同じなようですわね。皆苦労されてますわ」

「ああっ！もう無理！琴乃様にヘルプ求めるわ・・・」

携帯端末を取り出し、琴乃様を呼び出してみる。

程なくして琴乃様が出た。

『ふふっ、そろそろかかってくるんじゃないかって思ったのよね』

・・・完全に私の心を読まれてる。

「ひどいですよー。それよりも限界です。助けてください琴乃様あ・・・」

『ごめんごめん・・・ちよつと準備してから行くね。場所は・・・』
「第3実習室です。咲良ちゃん以外全員いますよ」

『じゃあ昨日クッキー作りすぎちゃって部屋に余ったやつが置いてあるからそれも一緒に持つてくわね』

「お願いします」

ピッ・・・

「う・・・私の行動パターン完全に読まれてた。シヨック」

落ち込む私。

「まあまあ明日香ちゃん」

「で、昨日クッキー作りすぎたらしくて余ってるから持つてきてくれるって」

「え？クッキー？やったあ！」

「ホントお子様ですわねみどりは・・・」

「誰がお子様だよー」

むくれるみどりは置いといて、特別寮からここまでは10分以上かかる。それまでは待ちだ。

10数分後。

「お待たせー」

琴乃様がやってきた・・・のはいいのだが。

「あの・・・その大荷物は・・・」

言っていた通り、手には余ったクッキーを持っている、のはいいのだが、背中のリュックが・・・。

「あ、これ？自前のお菓子作りの道具全部持つてきたの。いつもそうよっ。」

・・・すごい気合入りすぎなのは。

「あ、ありがとうございます。で、早速なんですけど・・・湯煎してもダメになっちゃうんですよ・・・」

今の状況を説明する。

「あー」

見るなりすぐに把握したようで、

「えっと・・・チョコがまだ大きいかな。もっと細かくしないと。それと温度が高すぎ・・・熱が入りすぎちゃうところなるわ」

・・・やっぱり最初から琴乃様に相談すればよかった。

「でも分離してないからそのまま使えるわね。してるなら最初からやり直しになるかも」

「・・・みどり。もしかしてそれを知っててわざと言わなかったでしょ？」

「そんなん知るかよー！偶然だよ偶然！」

・・・どうやら本当に偶然らしい。

「ごめんごめん冗談だつて。もし失敗しちゃったらそのままあげるから」

「え？いいの？やったあー！」

ホントみどりは純粹というか単純○カというか、だ。

そうこうやり取りしているうちに琴乃様は必要なものを取り出して準備していた。すごい手際の良さに関心してしまう。

「あんまり遅いと訓練に遅刻しちゃうしね」

「え、遅刻つて・・・もしかして訓練前に仕込みしてたんですか!？」

「ええそうよ。時間かかっちゃうやつは前日に食堂を間借りして事前に下地だけ作っておくんだいけどね」

と、いつものようにニコニコ顔で答える。

「それと――」

私のほうを向き、

「今日のことは京夏ちゃんにはナイショにしてあげるから安心して」

順調に進み。事前につけておいた型に流し込んだところで、

「お疲れ様。じゃ、休憩にしましょうか」

約束どおり、ダメになって失敗したチョコ（かなり前に作ったやつ

当日。訓練……のはずだった。昼過ぎにヒュージの出撃警報が鳴ったが今日は私たちは当番ではないので待機している形だ。

「え……どういうことですか？」

レギオン
LGリーダーでもある京夏お姉様から言われたのは意外な理由だった。

「だからそのままの意味よ。このところ訓練やりすぎてる気がしてるからたまにはこういうのもアリかなって」

「う……」

なんかキツネにつままれた気分になってしまった。

もうヤケだ。強制的に行くしかない。

「あの！京夏お姉様！」

「どうしたの？」

「これから付き合ってもらえませんか？」

ということとでLG控え室。当然だが私と京夏お姉様2人しかないない。

「わざわざここに呼び出したりして、どうしたの明日香？」

隠してあった場所に取りに行く。

「はい。お姉様」

と、キレイに包装した包み紙を渡す。

「え……」

「え、じゃないですよ。今日何の日か忘れてませんか？」

「あ……」

ようやく思い出してくれたようだ。

「ごめん明日香。すっかり忘れてたわ……ありがとう」

「LGのことを考えてくれるのは嬉しいですけど、肝心なことを忘れるなんて……お姉様らしくないですよ」

いつかのように背後から抱きしめる。

「そうね……でもホントはちゃんとサプライズしたかったんでしょ？」

これだけでも私にとっては十分サプライズよ」

抱きしめている手をそっと握ってくれた。

「早速食べて見てください。特に仕掛けとかしてあるわけじゃないですけど……」

京夏お姉様が包み紙を開ける。

「あ……CHARMの形」

実はチョコの形は正直悩んだのだが、一番無難だろうと思うCHARM——ダインスレイフ・カービン——の（大体の）形に落ち着いた。

「カエルでもよかったですけど、それだと私の趣味になっちゃうので……」

「それも明日香らしくて見たかったけどね」

「それじゃ面白くないですし……誰かとかぶってる気もしますけどね」

工廠科の誰とは言わないが、今頃どこかでクシヤマをしてそうである。

などと言っている間に割って一口食べてくれた。

「うん、おいしい」

そう言つて、口を付けた食べかけのチョコを私に……え？食べかけ？

「あの……え？」

今度は私が固まってしまった。それでももしかしなくても……。みるみるうちに私の顔が真っ赤になっていく。

「ダメですよ！せ、せっかく私がお姉様のために作ったのに……」

「……なーんてね。冗談よ」

「もう！からかうのはやめてください」

CHARM持ち替え

「うわあ・・・派手にやってくれたわねー・・・二振り目のオーバーヒートなんて・・・」

工廠科の乃莉子さんの工房にて。

グングニルの現状を見ての一言。もちろんみどりも同伴だ。

「けど今回は完全な不可抗力よ。まさかノインヴェルトのマジスフィアを2回受け取ってさらにマジ注入するなんて思わなかったから・・・」

「あ・・・あの時はとにかく必死だったんだよ！ギガント級倒せたんだからいいじゃんか・・・」

「で、みどりさん。使いたいCHARMの希望なんてある？」

みどりは少し考えて、

「んー・・・なんかカツコイイやつがいいな」

みどり・・・抽象的すぎる・・・。

「ちよつと待ってね・・・」

乃莉子さんは工房の後ろへ。

「これと・・・これと・・・後これと・・・これか」

戻ってきた・・・と思ったら机の上に四振りのCHARMを並べた。した。

グルヴェイブ、テイルフィンク、ブリューナク、もうひとつは・・・ボルソルン・・・か？

「あれ・・・ボルソルン・・・これ新品？」

ボルソルン——今年から量産されている、ユグドラシルの第3世代目のCHARMだ。グングニルの使いやすさを継承しつつ、ブレードのデザインや銃芯など見直しが図られている。

「新品だけど、今度新入生のCHARMはこれも選択肢に入るからーって、そのサンプルで来たやつね。他は部品取り用に入れた状態のいい中古。で、この中でどれがいい？」

「んー・・・」

顎に手を当てて悩むみどり。

まあみどりのことだ、直感で「これ！」とか言い出しそう。

「これ・・・かな」

・・・ホントにそうだった。

指差したのはテイルフィン、か。椿組の安藤鶴紗さんと色違いだ。

「オツケー。じゃ1週間ぐらい待っててね。一度バラして状態見ないとなんともだから」

「じゃ、後は任せた」

と言ってみどりは工房を後に。

「で、明日香さんも一緒に来てるってことは・・・」

「察しがいいのね。その通り。みどりにナイショでバランススウエイト仕込んでほしいの。ただし」

「ただし？」

「仕込むだけで動作はさせないで。いろいろ考えてることがあるから」

「りよーかい。後はノーマルでいい？」

「そうね。ブレードの強化をギリギリ限界まで、かな。テイルフィングって弾速度いくつ？」

「確か秒1500・・・だったかな」

1500かあ・・・結構威力あるほうだ。

そこはまあ・・・いじらなくてもいいか。

「で、私のタングズニルだけ・・・」

百合ヶ丘に戻ってきて真っ先に工房に出してきたのは私だ。

「一通りチェックしたけど特に問題なかったわね。念の為ブレードと銃芯は新品にしてあるわよ」

「ありがとう。今回ちよつと数多いけどまあがんばって」

1週間後。

「おおー！」

珍しくみどりのテンションが高い。

「いやー見たら結構ガタ来てたわ・・・完全にオーバーホール状態だから新品に近いわよ」

あえてバランススウエイトのことは伏せてもらった。

早速右手をかざして起動させる。

フォン・・・

「こら。室内でCHARM振り回すんじゃないの」
軽く小突く。

「なんだよー！試し振りぐらいいいじゃんかー」

話を聞くとどうやらみどりのクラスメイトで仲のいい子たちの大半はグングニルを使っているらしく、テンションが上がるのも無理はないか。

「んじゃあ・・・私と手合わせする？」

「・・・は？明日香とやって勝てっこないじゃんかよー！」

「そんなのやってみなきゃわかんないでしょ・・・今週いっぱい訓練ないし、私も暇なの。それに少しでも使い慣れてないCHARMに慣れたほうが後々楽よ」

実のところ、みどりとマトモに手合わせをしたことがない。なので真の実力は未知数だと思っている。

「・・・明日香がそう・・・言うなら」

「で、どういう経緯で突然手合わせなんてことになりましたの？」

「私からよ。乃莉子さんの工房で突然振りはじめたから、やるなら・・・って」

「なるほど・・・」

判定人はベスにお願いすることにした。

「それではよろしくって？」

「オツケー」

「早くしろよー」

「時間は無制限、レアスキルは使用禁止ですわ。危険な攻撃、行動は見つけ次第わたくしが止めます。かまえて」

お互い構える。

ティルフィングのほうがグングニルよりブレードが短いのでどう対処するか。

「あれ、エリユーズニルの尾上さんと周防さんよね？」

「どうして手合わせしてるの？」

「さあ？」

にわかにリリイ達が集まってきた。ま、別にいいんだけど。

「明日香ちゃんど．．．みどりちゃん？あ．．．CHARMティルフィングにしたんだー」

誰かから聞きつけたのか、円も混じっていた。

しばしの静寂。

「はじめー」

お互い不動の状態でしばらく睨んでいる。

(みどり、どう動く?)

先に動いたのはみどりだ。

．．．横移動？

ブンッ！

ティルフィングの空振りする音。

「うわっー」

その空振った風が私に当たる。

ブンッ！

もう一度来た。今度は当たらないように避ける。

「おりゃー」

．．．え？

私の後ろに．．．いた。

(うそ!?)

ルール上サブスキルも禁止のはずだが．．．。
キンッ！

「おおっとー！」

後ろから振りかざされるも上から防ぐ。

「はっー！」

振り返り左脇から入れるも、

「よつと．．．」

避けられた。反応が早い。みどりはほぼ初心者に近い。ただし、スピードの速さと要領の良さでカヴァーしている。おそらく私より動体視力はいいのだろう。

「明日香ちゃん．．．みどりちゃんに遊ばれてる？」

「ようにも見えますが．．．違いますわ」

ベスたちにはそういうふうに見えるのか。一旦離れる。

「んーなんか違うんだよなあ．．．」

みどりがぼやいている。

「デザインで選ぶからよ。機能性も見ない．．．とっ！」

足にマジを入れ、つま先を合図に軽くジャンプ。

「ちよ．．．おま．．．それズルいだろ！」

「ズルくないわ。飛んじやいけないってルールはない」

そして、上から下に振り下ろす．．．と見せかけて、ブレードを支えに一旦降りてみどりの背後へ。

「はっー！」

そして背中から突き。

「うわっー！あつぶね．．．」

さすがはみどり。避けられた。

「だからあたしじゃ勝負になんないんだって！」

「なーんて言ってる割についてきてるじゃない．．．！はあっー！」

キンッ！キンッ！キンッ！キンッ！キンッ！

上から左、右、左、下、斜め左から右上、左から右下．．．といった具合に高速攻め！

「とととととと．．．」

これも全部避けられた。

テクニク上では私のほうが上だ。けど、速度と動体視力とかでは

みどりのほうが圧倒的に早い。

一旦距離を取る。

(最近琴乃様に教えてもらったばかりだけど・・・上手く出来るかな・・・)

そこからみどりの右脛めがけて寸止め!

ちなみに本来はその状態から相手を押して突く「掠め突き」という技だ。

「そこまで!」

「だからあたしはヤだって言ったんだよ・・・絶対かなうわけないじゃん・・・」

終わってから。

「けど、確実に強くなってるわ。で、テイルフィンクの使い勝手はどう?」

「んー・・・灯音様のブリューナクに近いのかなあ・・・グングニルよか短いからなんか違和感・・・」

みどりの素直な感想だろう。

「すぐ慣れるわよ。それとも・・・またタングズニル使う?」

「ヤだ」

即答・・・。

「あんた・・・タングズニルになんか恨みでもあるの?」

「べっつにい・・・」

はぐらかされた・・・。

まあみどりらしいといえらしいのだが。あるときバランスウエイトをいじらずにそのままCHARMを入れ替えて使ったからなんだとは思うが。

今後私たちがどうなるかはまったくわからない。けど、どうにかなる気がする。どうにかなりそう・・・とか言ったら京夏お姉様に怒られそうだけど。

第二章（2年生編） 幼なじみの新入生

1年前——私は自分の過去を清算するためにここ、百合ヶ丘女学院に編入してきた。LGにも入り、頼もしい先輩リレイや仲間にもめぐり逢い、そしてなにより、私を導いてくれた、守護天使シュツツエンゲルでもある夏目京夏お姉様にも出会うことができた。

そんな、もうすぐ学年が変わる直前のある日。それは突然言い渡された。

「来月、新学年になるけど・・・私たちはスーパーサブに回ることにしたわ。隊長権限も、明日香に譲るわ」

スーパーサブとは、LGから離れフリーランスで臨時に入る要員のことを指す。例えば人数足りなくなったり、増員要請があつたときに入ったりするわけだ。

「待ってください京夏お姉様！じゃあ・・・エリユーズニルはどうなるんですか？」

「心配しなくても大丈夫よ明日香。一応籍は置いたままになるわ。解散になるわけじゃない。新入生の受け皿がどこかにないと困るでしょ？」

聞くところによると一柳隊、ことラズグリーズはメンバー増員はしないらしい。となれば自主結成するか、どこかが門徒を開かなければLGに入ることができない。

京夏お姉様曰く、その受け入れ先になってほしい、ということだろう。

「それはそうなんですけど・・・私たち、ほとんど元外部生でLGに入ってくれそうな知り合いなんて・・・」

「いるわけない？だったらどうしなきゃいけないの？」

「う・・・」

痛いところを突かれるなあ・・・。つまりは甘えるな！ということだ。

「困りましたわね．．．」

入学式翌日のLG控え室にて。

先月末に言われた衝撃的な出来事を今だ受け入れきれない私をよそに、すでにみんなは悩みモードだ。

「ねえ咲良ちゃん？中等部の下級生で知り合いって誰かいなの？」

「すみません．．．交友関係はあまり広くないので．．．一応1人いますけど、あの子は．．．」

何やら言いづらそうにしている。何か理由ありな予感がする。

仕方ないか．．．あの事を話すしかない。LGの今後にも関わってくるし。

「うーん．．．実は私も．．．と、言いたいところなんだけど、実はいないことはないの」

「なんでそれを早くおっしゃってくれませんか！そうならそうと．．．」

「いやね．．．それが．．．ちよつと．．．ねえ．．．」

「明日香ちゃん．．．なにか隠してる？」

う．．．^{まじか}円するどい．．．。

トントン．．．

控え室のドアをノックする音。

訪ね人の正体は予想がついている。が、まさかこんなに早く来るとは．．．。

「空いています．．．」

ガチャ．．．

バスが言い終わる前にドアが開き、満面の笑みで私に駆け寄ってきた。

「．．．ってちよつと!?!」

うーん．．．言いづらいなあ。まさか私を追って百合ヶ丘にまで来るとは．．．。私以上に無鉄砲、腕は悪くない。ただひとつの欠点を除いては．．．。薄い紫色で私と同じショートボブのリリイ。制服は

真新しい。

開口一番に言った台詞――

「約束どおり来たよ明日香姉様!」

そして私に抱きついてきた。

「姉……様……?」

全員が目が点になっている。

「あ、こちら!離れなさい!」

「嫌です!離れません!約束、果たしてもらうまではぜーったい離れません!」

「ちよつと!そこのあなた!いきなり入ってきてなんですの!」

ベスが怒るのも当然なわけで。仕方ない。少々強引な手段だが、

「ゴメンみどり。頼んだわ」

「あいよ!」

みどりのレアスキルが発動。

その場から離す。

「え?なんで?」

「なんで、じゃないでしょまったく……ここをどこだと思ってるの?

御台場じゃないんだから、最低限の挨拶と礼儀はしっかりしなさい」

まるで私が京夏お姉様になったかのような台詞を言うことになるとは……。

「なんだかこの2人を見てると」

「守護天使と妹みたいですね……」

ああ、やつぱり……。言われてしまった。

「違うから……断じて違うから!」

みんながニヤニヤしている。ああっもう!

「ああそうだ……挨拶挨拶……大変失礼しました!ごきげんよう!

私、御台場女学校から来た瀬能如來ゆきって言います。これからよろしくおねがいします」

一礼。

「……私は如來をLGに入れるとは一言も言っていないわよ……それと、守護天使もね」

正式な契約をしていない以上今はただの先輩後輩関係でしかない。
「明日香ちゃん。如來ちゃん……だっけ？とはどういう関係なの？」
「如來は……私の一つ下の後輩なの。出身も同じ、レアスキルも同じ。
唯一欠点があるとすれば……私にベツタリなのよ」
「えー！ひどいー！」
「ひどい、じゃありません。とにかくこの通りの子なのよ……。私が
百合ヶ丘に来た時点で大方予想はしてたんだけどね」
と苦笑い。

「でもよかったですわ。さっそくメンバーが……」
「見つかってません」

ベスの言葉を一蹴する。
「どうしてですか？明日香さんの知り合いなら文句ないじゃありませんか」

「それだけじゃないわ。あの頃と変わってなければ、如來には重大な欠点がある」

「そんなこと……ないもん！」

膨れ顔の如來。

「それはどうかしらね……」

言いながら円のほうを見て、

「じゃあこれからLG入隊のための手合わせをするわ。そんなわけで円、悪いけど如來の相手をお願い」

さて、修練場だ。今日は誰も使っていないらしい。

「え……あの……明日香姉様？」

「今はその呼び方禁止ね。守護天使でもなんでもないのでしょ……」
とにかく誰かに見られて誤解されては困るので釘を刺しておく。

「……訓練室……だよね？」

「そうね。それがどうかした？」

「なにも……ない……」

御台場の感覚ではそう感じるだろう。

「百合ヶ丘って、もつと進んでるのかと思ってた・・・」

「むしろ逆よ。私たちが知恵を絞って、どうやってチームワークを強化してヒューズと戦っていくか・・・おかげさまで随分と鍛えられたわ」

「おまたせー」

円がCHARMを持ってきた。

「・・・アステリオン？」

如來の悪い癖——CHARMで相手の実力を判断しようとする。判定人は私がすることに。

「それじゃ、構えて」

如來が右手の指輪をかざし、CHARMケースから取り出す。え？

「如來、CHARM持ち替えたの!？」

御台場にいた時はクルツジを使ってたと思ったが・・・どこまで如來は私にべったりなんだ？色違いではあるが、私と同じタングズニルではないか。

「うん！百合ヶ丘に来るときに絶対同じにしようって決めてたから！」

おそらく彼女のことだ。バランスウエイトも仕込んでいるだろう。

「姉妹愛・・・ですわね・・・」

「あのね・・・あの子が勝手にやってることであって私は無関係よ」

咳払いをして、

「時間は無制限。レアスキル使用禁止。危険だと判断したら止めに入るわ。準備はいい？」

「いいよ明日香ちゃん」

「はい！」

「それじゃ、はじめ！」

「やあああああああああああつ！」

真っ先に如來が突っ込む。そして——

上から振り下ろす・・・と見せかけて左から斜めに行こうとする。

キントツ！

「・・・相変わらずの戦い方か」

「如來さんの戦い方、少し独特ですわね・・・」

「対人戦はね。さつき聞いてて分かったと思うけど、あの子CHARRMを見て判断するところがあるのよ。相手にいい印象与えないからやめなさいって言ってるんだけど・・・」

ただ円は少し圧されている。うちのLGにこういうフェイントを使うリリイがいなかったというのもあると思うが。

「うっ・・・」

今見ている限りではアックスモードのないアステリオンだからか、殴りたい衝動にかられているようにも見える。

「あれー？円様もしかして・・・私より弱い？」

円が弱いわけではなく、対リリイ戦としての経験が浅いだけなのだが、如來はそれに気づいていない。

「それは・・・どうかな？」

この時点で円があれをやるとは思わなかった。

円が「わざと」背中を向く。

「あの技・・・鬼龍院流薙刀術奥義・・・」

思わず口にする私。それを見た如來が円に向かって突っ込んでいく。そして――

その体勢からジャンプ！如來の背後に回った円はアステリオンを振り下ろし、

「そこまで！」

結果、如來は普通に負けになった。

手合わせが終わった頃には他所のLGのメンバーも見学に来ていた。

「新入生惜しかったわね。残念・・・」

「太刀筋はいいのね・・・」

という声が聞こえてくる。

「ううっ・・・なんで・・・」

悔しがっている如來。

「お疲れ様如來。結果を言うわ」

言おうとしたときだった。

「あら・・・終わっちゃったのね・・・残念」

私はここに呼んだ覚えはないのだが・・・そこには私の守護天使である京夏お姉様が来ていた。

「京夏お姉様? どうしてここに?」

「ごめんなさい明日香さん。私が呼んだの・・・」

咲良ちゃんの仕業か・・・。

「明日香姉・・・明日香様。この方は・・・」

私の言うことはちゃんと聞いてくれているようだ。

「私の守護天使で先代隊長よ」

と、京夏お姉様を紹介する。

「はじめまして如來ちゃん。夏目京夏よ。LGエリユーズニルの先代隊長です。よろしくね」

私が出会ったときと同じようにニコニコ笑顔で答える。

「あの・・・京夏お姉様・・・? この子をLGに入れるって決めたわけじゃないですよ?」

「あら、そうなの?」

「それを決めるのに今手合わせをさせたところなんです」

「それで? 明日香はどう判断したの?」

「如來・・・あなたは円とやってみてどう思った?」

逆に質問をする。

「え?」

「最初のうちは・・・私のほうが・・・とか思ってた。けど途中から動きとか読まれてる気がして・・・最後は動きが全く読めなかった・・・

悔しい!」

「そう。じゃあどうして負けたと思う?」

「え・・・?」

「私が中等部時代に如來に言ったこと覚えてる?」

「あ・・・」

私が中等部時代、如來に言ったこと——『如來、戦法、戦略は常に鍛えて進化させなきゃダメ。ヒュージも日々それに対応しているわ。臨機応変に戦えるようになりなさい』と。

「そっか・・・私・・・」

「昔教えたことを全く守れてない。もしかしてわざとやってる?」

「そんなわけ・・・」

如來は言いよどむも、

「だって、明日香姉・・・明日香様に近づきたくて・・・射撃練習ばかりしてたから・・・」

まったく・・・。気持ちはわからなくもないが、この子はどこまで私にべったりなんだか・・・。

「・・・ホントは甘やかすつもりはなかったんだけど、もういいわ。L Gへの参加を認めます」

「ありがとうございます明日香姉・・・明日香様!」

如來が私に抱きつく。

「あら・・・これは近いうちに守護天使かしらね・・・」

「もう・・・京夏お姉様までやめてくださいいよー!」

「けど、そうなる私としては嬉しいわ。百合ヶ丘にノルンってほんどいないのよね」

「ノルン?」

「初耳ですわ」

守護天使は有名だが、ノルンは聞き馴染みの薄い言葉だろう。

「世代を継いで守護天使になることね。例えばだけど・・・京夏お姉様と私、私と如來・・・って感じ。あくまでも例えだからね?」

「へえ・・・」

ノルンかあ・・・。確かに百合ヶ丘でも数えるぐらいしかいないと聞く。

「あ、そうだ。如來」

「なに?」

「デコピン。」

「いたっ!」

「呼び捨て？ 如來には敬語もみっちり教える必要がありそうね？」
「ううっ・・・なんでしよう明日香様？」

「如來が負けた要因まず一つ目。如來がガツカリするお知らせよ。円はリリイになってまだ1年しか経ってないわ」

「え・・・!?!」

如來・・・あなたは円のこと何だと思ったの、というぐらいビツクリしている。

「なんでそんなに強いんです円様？」

「強いつていうか・・・鍛えられたから？」

全うに答えればそれしか出てこない。まあ太刀に関しては鍛えたのは私ではなく京夏お姉様なのだが。

「御台場にいたときに教えたこと覚えてる？」

「えっ・・・『戦法、戦略は常に鍛えて進化させろ』だったかな・・・」

「全然出来てない。私が教え始めたときのままじゃない。あんた御台場で何やってきたの・・・」

「うっ・・・」

正論をつかれ、何も言い返せない如來。

「二つ目。如來、相変わらず対戦相手をCHARMで見るクセ・・・いい加減やめなさい。相手にいい印象与えないわよ？」

「だって・・・」

「だって、じゃない。わかった？」

「・・・はい」

ということとでLG契約書にサインをし、指輪をかざしてルーンの捺印。

「あれ？ 守護天使・・・」

「如來、しつこいわよ？ 守護天使の契りは結びません」

「うううう・・・いじわるう・・・」

泣きそうな顔になるも、

「泣き落とししようとしても無駄よ。私の気が変わらない限りはね」

翌日。

講義棟の私とベス。

「明日香さん……これじゃわたくしたちストーカーじゃありません？」

「まあ……怪しい上級生リイにしか見えないでしょうね」

ついこの間まで教わっていた1年の教室前にいる。

取れる単位と講義は1年のうちに取ってしまった私たち。ただラウンジでぼーっとしていているなら……と新入生を勧誘しに来たわけだ。

周囲からはひそひそ声。もしかしたら別の意味で目立っているのかもしれないが。

「ならこんな……悪目立ちすることおやめになりませんか？」

「そう何日もやらないわよ……生徒会に目付けられたくないし」

待つこと1時間。

悪目立ちの影響か、誰も私たちのところに近づこうとはしない。

「誰もこないね……」

「ですわね……」

翌日も。

教室前で待機はしたがやはり誰も来ず。

「……戻ろっか」

「どうしたらいいと思う？」

急遽2年生組だけ集まって会議。

「どうしたらいいって言われてもなあ……」

「うちは特段目立ってるLGじゃないですから……」

「そうなのよね……」

実績がないわけではない。ただ、厄介な討伐などは格付けが上なLGに任される事が多い。要は実力不足、というわけだ。

「で、ベスいないけど、どうしたの？」

「えっとね、それが用事あるから今日は無理って……」

まあいいか。珍しいこともあるもんだ。

次の日。

私は李組の教室に来ていた。もちろんLGメンバー探しという大事な目的はある。が、その他に気になった子がいたからだだった。

講義が全て終わり、皆寮に戻るか移動しよう、というタイミグ。その中でただ1人、いつまでも残っている子がいた。

(あの子・・・まるで昔の私みたい・・・)

誰とも会話せず、言葉は必要最低限のみ。

次の日も。その翌日も。窓の外をじつと見つめている。

1週間もずーつと見ている私もどうかと思うが。

今日も窓の外をじつと見ている子を見に来ていた。が、今日は違った。

スツ・・・

「あなた・・・先輩ですよ？なんなんですか。私のこと・・・じつと見て」

気配なしに私の側に来たのだ。この子ユーバーザイン持ち？いやサブスキルのステルスかもしれない。

しかし、この誰も居ない状況では『なんでもありませんわ』とは返せない。

「ごめんなさいね。なんだか・・・あなたを見ていると中等部時代のわたくしを見ているようで・・・」

「・・・だったら、なんだっていうんですか。私に付きまとわなないでください」

まるで誰とも関わりたくない、という感じで突き放そうとしている。一匹狼のつもりだろうか？

スツ・・・

そして彼女はレアスキルを使ったであろう、その場からいなくなっていた。

「ベスちゃん最近1年の講義棟でなにやってるの？」

突然円が言い出した。

「え？なんのこと？」

私にはなんのことだかさっぱりだ。

「如來ちゃんがね・・・ベスちゃんが李組の教室の前に毎日いるとかなんとか・・・」

ホント、なにやってんだか。私が1年の教室にいたのは最初の何日かだけで、悪目立ちするだろう、という理由から早々に撤退したのだが。

「まったく・・・」

やれやれと言った感じだが、ベスも何か考えがあつてのことだろう。何もなければいいのだが・・・。

ピピピ・・・

携帯端末が鳴る。

見ると如來からだった。

『櫻子様与李組の子が言い争いのケンカしてる！私じゃ止められない！なんとかして 〽 』

「ゴメン円。ちよつと1年の講義棟行ってくる」

「どうしたの？」

「ベスと1年生が言い争ってるって・・・」

「ええ!？」

「・・・しつこいです。来ないで!」

李組の教室に来てみたのだが・・・この状況は何？

ベスと黒髪セミストレートロングの下級生リイが言い争って

る。しかも背中にはCHARMケース。

「ちよつと！あんななにやってんの！」

ベスの腕を掴む。

「明日香さん。ちよつとよかったですわ。この聞き分けのよくない子をしかつてやってくださいまし！」

「・・・あんだ。まさか強引にLGに誘おうとしてないわよね？」

「違いますわ！大体、わたくしの話を一切聞こうとしないこの子が悪いんですわ！」

ベスの言っている意味がよくわからなかったが、大方レギオン勧誘話を切り出してそれ以前に断られたパターンなのだろう、と思っていた。

「とにかく私にかまわないで！」

黒髪の子の前に立つ。そしてその子の腕を掴み、

「何があつたかわからないけど、話を聞かないっていうのはちよつと違うんじゃない？」

「あなたもなんなんですか！人のことを寄つてたかつて・・・」

「私はあなたとうちのメンバーとのケンカを止めに来ただけよ。何か特別な理由がありそうだけど、話す気はない？」

「・・・あなたには関係ない」

「そう。ならいいわ。ベスもほら、さつさと謝る！」

当のベスは納得していないようで、

「どうしてですか？わたくしは納得いきませんわ！」

「はい、いいから戻るわよ。ごめんなさいね・・・なにかあつたら私のところに来て」

「あんだ・・・相変わらず人との接し方が下手よね・・・」

「仕方ありませんわ。みなさんと違って人と触れ合う機会が少なかつたですもの・・・」

LG控え室までベスを連れ戻したのだが、

「どうして何も話してくれませんか? どうして・・・」
と、ぶつぶつ言っている。

「・・・あのね。ああいうときは無理やり聞き出そうとしても話してくるわけじゃないでしょ。逆効果よ」

「なら、逆にお尋ねしますが、明日香さんはどうやってあの子から聞き出そうと思ってますの?」

「私からは聞かないな。本人が言う気になるまで待つ。ああいう子は過去になんかあって・・・それで自分の殻に閉じこもっちゃってることが多いからね」

トントン・・・

控え室をノックする音。

「ほら、ウワサをすれば、ね」

「あ、あのー!」

如來から場所を聞いたのであろう、さっきのリリイだ。

「どうしたの?」

「えっと・・・先程はすみませんでした! あの・・・ご相談したいことが・・・」

「おっ・・・2人目ゲット?」

みどりが話に乗ってきた。

「残念ながら違うわよ。ただの相談」

「ちえっ・・・なーんだ・・・」

「私は・・・はいばらのの榛原蘆乃はいはらののって言います。中等部からの上がり組です」

「ごめんね。さっきは気を悪くさせてしまって。私は尾上明日香。エリューズニルの隊長、2年生よ」

名前を聞いた途端、目を丸くさせた。

「天の秤目リリイ・・・」

「どうやら私のレアスキルなしの射撃の実力は中等部でも有名なよ
うだ。」

「その呼ばれ方はあまり嬉しくないかな。ははは・・・」
できれば実力で通り名が付いてほしいところだ。

「で、蘆乃さん。相談って何？」

「私を・・・このLGに入れてくれませんか？」

え？

「それは・・・願ったりで嬉しいんだけど、けどいきなりどうして？」

「私・・・LGに入るつもりはありませんでした。ソロでもやっていける、そう思っていました」

「どうしてここに来ようと思ったの？如來から何か言われた？」

私が如來の名前を出した途端、表情を変える。

「如來のこと・・・知ってるんですか？」

「知ってるもなにも・・・私の前学園からの後輩だからね」

「そう・・・なんですネ」

しばらく何も言わずうつむいていたが、

「・・・」

小さい声で何か言っている気がしたが良く聞き取れない。

どうしてこう、うちのLGに来る子達はみんな似たりよつたりなんだろう？

「明日香隊長。私を入れてくれますか？」

しばし考えた後、

「ちよっと待つてもらえる？そうしたら如來経由であなたに伝えるわ」

「わかりま・・・」

蘆乃さんが立ち上がろうとしたときだった。

トントン・・・

控え室のドアをノックする音。

「どうぞ」

ガチャ・・・

「失礼しま・・・あれ・・・蘆乃・・・？」

そのリリーの顔を見た途端。

ダッ！

この場から走り去ってしまった。

「え、ちよつとー！」

私は追いかけてようともせずただ黙って見ているだけだった。それよりも――

咲良ちゃんと一緒のこの子のほうが気になった、というのもあるのだが。

「ごきげんよう。1年櫻組の斯波しば因悦いえるです。あの・・・明日香様、今蘆乃が部屋を出ていきましたけど、知り合いですか？」

バツの悪い顔をしてから、

「知り合いつていうか・・・ちよつと話を・・・ね」

明日香さんと因悦さんとで話をしている間。私は蘆乃さんを追いかけることにした。

百合ヶ丘で一人になれそうな場所の心当たりはあそこしかない。

案の定、いた。

「因悦・・・そっか・・・みんなLG入るよ・・・ね・・・」

しばらくうつむいていたが、

「私・・・どうしたらいい・・・？」

そのまま泣き出してしまった。

このタイミングで卑怯だと思う。けど、こうでもしないと話は出来ないだろうと思った。

「隣・・・よろしくて？」

蘆乃さんの隣に座るも、

「・・・しつこいっ！」

こともあろう、私に向けてCHARMを抜いてきた

「・・・っ！」

ブラダマンテ・アイ――私のブラダマンテを元にブラツシユアツプした新鋭CHARMだ。しかしまだ一般リイには一振りも作られないはず。

「この子・・・グランギニョルの関係者？」

「せっかく高等部に来て懲罰だなんて・・・生徒会に連絡すればすぐですわ。それと——」

「我がグランギニョルのCHARMをそんな使い方だなんて、わたくしが許しませんわ!・・・と楓さんならおっしゃるでしょうね」

「楓・・・さん?あなた一体・・・」

「櫻子:S・エリザベス。グランギニョル関連CHARMマテリアルのエリザベート・ファクトリーの娘ですわ」

「櫻・・・子?」

名前を聞いた途端、私に手をあげようとする。

が、私はそれを止める。

「あなたのせいであつ・・・!私は・・・!」

私に対しての怒りだろう、敵対心むき出しの表情。目には涙を浮かべている。

「何をわたくしに向けて怒ってるのか皆目検討がつきませんが、手を上げていい理由にはなりませんわ」

「・・・覚えてませんか?」

私には何のことだかさっぱりだ。

「あの子・・・もしかして、あの事故のことをまだ・・・」

「・・・事故?」

「はい・・・私と蘆乃は同じ予備隊だったんです。野良ヒュージ討伐のときに、もう1人も一緒だったんですけど・・・彼女は崖から落ちて・・・そのことを蘆乃は自分のせいだと思いきこんでるんです」

そういうことか。さて、蘆乃さん問題は片付いて・・・はいないが、本題のほうに戻らなくては。

「えっと・・・ありがとう。で、本当に私たちのLGでいいのね?」

「はい」

よっしゃ!心の中でガッツポーズ。

「じゃあ・・・実力をみたいからバス・・・つてあれ？」

私の隣にいたはずのバスの姿がない。どこ行つた？

「咲良ちゃん。バスどこ行つたかわかる？」

「それが・・・」

「まったく・・・」

因悦さんには控え室で待つてもらい、バスの搜索をすることに。みどりならともかく、まさかバスを探しに行くことになるとは・・・。学園中のあらゆるところを歩き回る。工廠科にはしばらく用がないのでそこ以外だ。

そして私たちがよく行く場所に彼女は、いた。

「ううっ・・・うわああああああああああん！」

蘆乃さんが大泣きしている？！どういうことだろう？

しばらく遠目で様子を見ていることにする。

「我慢する必要はありませんわ・・・自分に素直になればいいんです」
さて、どうしますか・・・。蘆乃さんが泣き止んで落ち着いたところで、

「バスは何ここで油売ってるのかなー？」

私の声で一瞬動きが止まった。

「あ、明日香さん!?!ご、ごきげんよう・・・ですわ」

「ごきげんよう、じゃないでしょ！なーんて・・・ホントはあんたを叱りに来たんだけど・・・今の見てたらそんな気分じゃなくなつたわ」
「い、今の・・・って・・・見えましたの!?!」

「途中から・・・だけどね。けど、よかつたじゃない・・・良い守護天使になれそうね」

「言ってる意味がわかりませんわ。そっくり明日香さんにお返ししますっ！」

「素直じゃないなあ・・・ホント。で、悪いけどバスはこれから因悦さんと手合わせしてもらおうわ。蘆乃さんは私とね」

修練場へ。判定人は円だ。

まずは私からだ。CHARMを構える。琴乃様と同じ構え方。

「え……構え方が違う……」

如來が私を見て一言。

「鬼龍院流薙刀術の構えですわ」

とはベスだ。

「鬼龍……え？」

名前を聞いたが覚えられず固まっている如來。

「明日香さんは……百合ヶ丘に来てからもっと強くなりたいから、と元LGメンバーのリリイから薙刀を教わっているんですわ」

「そ、そうなんだ……」

「えつと……なんだっけ？」

そっか、円は判定人初めてなのを忘れていた。訓練以外で手合わせはしたことがないからだ。

「いつも私が言ってること思い出せば……」

「制限時間はなし……レアスキル使用禁止、危険って判断したら止めます。構えて」

お互いCHARMを構える。

ブラダマンテ？確かユニーク機だったはず。ベス曰く、生産の手間の都合で量産がむずかしい、とか聞いた記憶があるが……。

とするとグランギニョルの関係者、ということになるが……蘆乃さん本人から聞かないとなんともなのだが。

「はじめー！」

無言で私目掛けて走ってくる。正攻法か？

ここで一旦しゃがむ。円は気づいたらしい。本来は地面に対して行うのだが、修練場の床を地面に見立て、持ったまま宙返り。

「えっ!？」

蘆乃さんが驚いている。だが、すぐに我に帰り、ブラダマンテ（と思われるCHARM）を上から下へ振り下ろす。

ブンッ！

すかさず下から突き刺すような形で「わざと」離して入れる。

「明日香相変わらずすげーな・・・」

とはみどりだ。

だが、如來よりは太刀ち筋はいい。

からせり合いとなる。

キンッ！キンッ！

元のポテンシャルは高そうだ。半分気合だけで乗り切ってきたよ
うな如來とは違う。

「それに付いていつてる蘆乃ちゃんもなかなかですよ」

咲良ちゃんの声。

蘆乃さんならA Zでやっていっても問題はないだろう。さて、そろ
そろか。

一旦蘆乃さんから離れる。

足元にマギを入れ、右足つま先を合図にジャンプ。

「え・・・」

見ている一同唾然としているが、ルール上飛んではいけないとは
言っていない。過去何回も飛んでいる。

(あ・・・マギの加減間違えた！)

少し飛びすぎだがまあいい。蘆乃さんのすぐ近くへ。

頭から振り下ろす。

「ストップ！」

円からの声。

当の蘆乃さんは納得行っていない様子だが。

「・・・やり直しを要求します」

予想通りの答え。

「蘆乃さん。これは手合わせだけど、手合わせじゃないわ。そこは勘
違いしちやダメ」

「その通りですわ。明日香さんはどの程度の実力かを見るために手合
わせしてますわ。LGのポジションも」

「さて次は——」

ベスがブラダマントテを取り出す。

「さ。準備なさって?」

因悦さんがケースから取り出す。

・・・因悦さんはボルソルンか。ユグドラシル製CHARMの中ではグングニルの扱いやすさをさらに追求した、と言われている。いずれ百合ヶ丘でも初心者向けはボルソルンになるのでは、という話さえある。

「・・・ボルソルンか。まだ百合ヶ丘には数振りしかないって聞くけどね」

「うきやあつー!」

如來が突拍子もない声を上げる。

「ごつきげんよう。気分転換に見に来ただけど・・・この子たちね。今度LGに入った子たちは」

気配を消して突然出てくるな、と言いたくなってしまった。

「あの・・・この方は・・・」

「どもー初めまして。私は工機科2年の我妻乃莉子です。これからヨロシク」

軽いノリで挨拶する乃莉子さん。

「乃莉子さんはうちのほぼ専属のアーセナルよ。CHARMのメンテ出すときは乃莉子さんをお願いしてね。で、うちの子たちを驚かして・・・何したいの?」

乃莉子さんを睨むも、

「ほぼってなによ・・・ほぼって。特になにもないわ。この時期って工房にいてもやることなくつままないし・・・」

「気持ちわかるけど・・・今度やったらメンテ出し全部止めるわよ?」

「え?!それはやめて・・・」

乃莉子さんにはこの台詞が一番効果がある。

「ま、私的には、初めて会った時よりはだいぶ丸くなってくれたからありがたいんだけどね」

「丸くなった・・・とは?」

「この子・・・CHARMオタクなのよ・・・だから下手にCHARMの話題降ると2時間は捕まるわよ?」

と軽く脅しをかける。

「え……」

「ただし、腕はいいわ。私もシューティングモードの射撃出力限界より少し上げてもらってるし。あ、如來」

「何……じゃなくて、なんででしょう？明日香様？」

「後で乃莉子さんのところ持ってってね」

「え？いきなり!?百合ヶ丘来る前にメンテと調整してもらったばかりだよ？」

「……乃莉子さん」

小声で耳打ち。

「え、なにになに？」

「この子のタングズニル、バラして中見てもらっていい？もし同じ機構が載ってたら私に連絡してほしいの」

「なにになに、御台場で疑似姉妹の契約でもしてたのかな？」

「なんで如來のこと知ってるの？」

「咲良からバッチリ聞いたやつだ」

咲良ちゃんか……。乃莉子さんに誇張して話してる気がしてきたが、今はいい。

「いや、御台場にも似たような制度あるけど、百合ヶ丘と違ってちよつと……じゃなくて！とにかくそういうことだからヨロシク。何もすることなくて暇だったんでしょ？それと、今年も例のアレやるから百由様に話通しといて」

ベスと因悦さんは結果としてベスの勝ちだが、全体的に因悦さんが押し気味だったこと、対応の早さなど評価する点が多かった。ただ、なんとなくきこちないところもなくはなかった。因悦さん何か隠してる？

「く、くやしい……」

「因悦さん。さつきも言ったけどこの手合わせは勝敗を求めてない

わ。どの程度やれるかを見るため。けど合格よ」

「あ、ありがとうございます！」

深々とお礼。

「後1人かあ・・・ところで因悦さん。レアスキルは？」

「私は・・・ブレイブです」

よっしや！

またしても心の中でガッツポーズ。琴乃様をサブで入れられるのは大助かりだ。

「ブレイブ？」

「精神安定系のスキルです。狂酔ルナティックトランサーの月のリリイと組むと安定した

力になるって言われてますね」

「けど狂酔の月持ちなんてLGにいるんですか？」

「なあに？私の話？」

「ごきげんよう琴乃様。今日はみなでビックリさせる日ですか？やだなあもう・・・」

「あの・・・」

如來が訪ねる。

「ごきげんよう如來ちゃんとおんな。で、狂酔の月がどうかした？」

相変わらずニコニコしている。

「出撃命令出ても琴乃様は心置きなく大暴れ出来ますって話を」

「まさかカリスマ!？」

「残念ブレイブです。カリスマだったら他所のLGから引き抜かれちゃいますよ・・・多分」

と、因悦さんのほうを見て苦笑い。

「ですよね・・・でも予備隊では狂酔の月の子と組んでたのでそこはバツチリです！」

それは心強い。

「それじゃ——」

LG契約書にサインをしてもらい、指輪をかざしルーンの捺印。

「これで後1人ですわね」

「はあ・・・立ち上げの時より苦労してる・・・」

ポンポンと琴乃様に肩を叩かれ、

「そんな弱気じゃだめでしょ？新隊長の明日香ちゃん」

琴乃様と言ひ、京夏お姉様といい、みんな厳しい……。

「そういえばちゃんとした自己紹介がまだだったわね。私は尾上明日香。今はこのLGエリユーズニルの隊長よ。レアスキルはゼノンパラドキサ。先代隊長とは守護天使と妹シルトの関係よ。はい次は如來」

リレー形式で自己紹介させることにする。

「えつと……瀬能如來です。前は御台場女学校にいました。レアスキルは同じくゼノンパラドキサ、昨日明日香隊長と守護天使の契りを結びました。これからよろしくおねがいます」

如來珠が一礼。

「次は円ね」

「はい。敷井円です。明日香ちゃ……明日香隊長とは百合ヶ丘に入ってから知り合いました。一般編入からの新米リレイです。レアスキルは天の秤目。リレイ歴はみんなより浅くてまだただけよろしくね。はい、次はベスちゃんね」

あからさまに嫌そうな顔をするベス。

「こら。何そのあからさまに嫌そうにしてんの」

「別にそういうわけでは……まあいいですわ。ごきげんよう。櫻子せーぬ・

S・エリザベスですわ。わたくしのことは櫻子でかまいませんわ」

「へえ……名前呼び嫌なんじゃなかったっけ？」

わざといじるも、

「もう過ぎたことですわ。レアスキルはテストAMENT。つい先日、蘆乃さんとは守護天使の契りを結びましたわ」

「なにそれ聞いてないわよ……そんなの……」

「へえ……お嬢がねえ……」

みどりがベスを小突く。

「別に、誰が何をしようと勝手ですっ！次は蘆乃、あなたの番ですわ」と、蘆乃さんがポンつと肩を叩かれる。

「……榛原蘆乃です。中等部の予備隊のときはTテクニカルゾーンZでした。レアスキルはユーバーザイン、因悦とは同じ予備隊でした、よろしくおねが

いします。次は因悦」

軽く会釈をする蘆乃さん。なんかそっけないというか。そのうちLGに馴染むだろう。

「斯波因悦です。蘆乃からもあったとおり、中等部では同じ予備隊でした。レアスキルはブレイブ、これからよろしくおねがいます」

「斯波・・・斯波・・・燈様？」

「こーら。それは御台場のリリイでしょ」

痛くない程度に軽く如來珠を小突く。それはLGロネスネスの力リスマ持ちの強化リリイだ。

「よく聞かれるんですけど・・・同性なだけで無関係です」

「ごめん・・・」

「いいのいいの。中等部でも同じこと言われて慣れっただから」

ポジティブ思考だなあ。

「はい次はみどり」

「周防みどり。あたしも円と同じで高等部の一般編入。レアスキルは縮地。なんか知らないけどやたら明日香があたしのこと目の敵にすることあるけど気にすんな、ってことでヨロシク」

まあいいか。昔に比べたら大分マシな自己紹介なので多目に見ることにする。

「で、最後は咲良ちゃんね」

「はい・・・紫衣原咲良です。同学年メンバーの中では唯一中等部からのリリイです。あまり目立ちませんでしたがね。レアスキルはレジスタ。最近書籍棟の司書になったので訓練以外ではあまり見ないかも・・・よろしく」

「書籍棟の司書？」

咲良ちゃんいつの間にな・・・。

「リリイに関する書籍ならここに来ればいつでも勉強できるよ」

「へえ・・・戦術理論の教本よりもっと解説してる本とかある？今度借りに行くかも」

私が乗ってしまった。

「明日香ちゃん勉強熱心だなあ・・・」

「誰かさんと違って私はLG背負ってますから」

「誰かさんって誰のことだよ・・・」

「はいはい。で、明日香ちゃん私は？」

「ああ忘れてたわけじゃないですよ？紹介しないわけじゃないじゃないですか。みんなちよつとまってて。元メンバーの先輩方呼ぶから」

携帯端末を取り出し連絡を入れる。

しばらくして、

「メンバー揃ったの？」

「すみません突然呼んでしまって。メンバーは後1人集まっています」

「後1人なのね」

「ごきげんよう」

京夏お姉様はともかく、初花様と灯音様は初顔合わせになると思うので紹介しておく。

「改めて紹介するわ。左から先代隊長の夏目京夏お姉様。私の守護天使よ、その隣が佐野重初花様。2人は幼なじみよ。で、最後は桃乃灯音様。灯音様は・・・」

やはり灯音様の行で言いよんどんくんだりでしまう。

「いいよ明日香・・・ありのまま・・・話して。いずれ・・・知られるだろうし・・・」

「灯音様がそれでいいならかまいませんけど・・・」

私自身が納得言っていないが、本人がいいと言っているのです。そういうことにする。

「灯音様はね・・・中等部時代に特型ヒュージの被害に遭って・・・こういう喋り方しか出来なくなったの」

「え・・・」

1年生が皆驚いている。無理もないか。

「外征とか行ってよく言われちゃうのよ。その度に説明が大変で・・・」

「明日香。私に・・・気を使わなくて・・・いいよ・・・慣れっこ・・・だから・・・」

「心して聞いてほしいんだけど、私たちリイは常に危険と隣合わせなの。過去に私も命を何回も落としかけてるわ。命に変えてでもヒュージから守りましょう。初心忘れるべからずね」

琴乃様をえらい待たせてしまっている気もするが……。

「明日香ちゃん演説は終わった?」

「……すみませんお待たせしてしまって。最後に京夏お姉様から順に簡単な自己紹介とレアスキルを」

「わかったわ。明日香からもあったと思うけど、先代隊長の夏目京夏です。このエリユーズニルは二代目なの。長くなるから割愛するけど解散なんて絶対ダメよ?レアスキルはゼノンパラドキサ。よろしくね」

「佐野重初花よ。明日香からもあったけど、京夏とは初等科からの幼なじみなの。レアスキルはユーバーザイン。よろしく」

「あの一!」

蘆乃さんが声を出す。

「榛原蘆乃、です。初花様は……ゴーストを操るときにマジの配分とかどうしてるんですか?」

なんか具体的な質問だな。まあ先輩に聞くことは悪くないが。

「蘆乃さん、同じレアスキル持ち少ないのはわかるけど、そういう質問は後でね」

釘を刺してしまった。さすがに流れを止めるのは……と思ったからだ。

言われてハツとしたのか、顔を赤くして、

「す、すみません……後で個人的にお伺いしてもいいでしょうか?」
「かまわないわよ」

とりあえず一安心。

「桃乃灯音とうのです。私が……こういう喋り方なのは……明日香から……説明があった通り。レアスキルは……鷹の目。よろしく」

「鬼龍院琴乃です。名前を聞いて知ってる人もいるかもしれないけど、私よりはCHARMのほうが有名かな?鬼龍院流薙刀術第152代当主よ。レアスキルは狂酔の月。LGにいたときは私が控え室の

お菓子とか作ってたのよ?」

「そうそう。琴乃様のクッキーまた食べたいなあ・・・」

「あのLGのお菓子って買ってきたんじゃないんですか?」

「私がいたときはね。今は誰が作ってるのかしらね」

とはぐらかした。私が作ってるんだけどな。そのうち誰か気がついてくれるだろう。

結成当初ほどすんなりは行っていないが・・・私の代で無くさないようにしなければ。

2人の妹（シルト）

「……」

「……」

朝から如來ゆきと蘆乃のがお互い口を聞かないのだ。訓練中にもかかわらず、だ。LGはチームワークが重要になってくる。

「ちよつと……ベス？」

「なんですの？」

「あの2人ケンカでもした？」

「さあ……？わたくし存じませんわ。プライベートはノータッチですから」

これは隊長として何か言わなければいけないのだが……。

「ちよつと2人とも。ケンカはいいけど……訓練中に私情を挟むのはいただけないわね」

「だって……蘆乃が……」

「私は……悪くない……如來が姉様の悪口言うから……」

……なんとなく読めてきた。2人して子供か！といった感じ。お灸を据えてやるか。

もう少し訓練をしてから……と思っていたが、LG恒例レギオンのアレをやるしかない。

「咲良ちゃん。乃莉子さんに連絡取って。予定を切り上げて今からやるって」

「わかった」

「え……明日香ちゃん……もしかしてアレやるの？」

円がビツクリしている。

「もちろん。去年私とベスもアレで苦勞させられたからね。後で思いつきり京夏お姉様に怒られたけど」

「そういえばそうでしたわね。あのときは2人して揉めたのを思い出しましたわ」

「じゃ、午前中の訓練はここまで。午後から如來と蘆乃さんは修練場ね」

食堂にて。

「まったく如來と蘆乃とで何ケンカしてるのかと思つたら・・・」

改めて如來に話を聞いたところ、昨日天上の間で私とベスのいいところの話となり、そこからヒートアップしたらしい。最終的に個人間の罵り合いとなり、現在に至る、と。

「わたくしたちのときはそんなことになりませんでしたのに・・・ホントお子様ですわ」

「ねえ？それだけ・・・私たちが成長してるってことなのかな？」

「だ挺好的ですけれど・・・」

乃莉子さんからの連絡が来た。

『いつでも準備は出来てるわ。ただ2体あるけど、どうする？』

「え？2体・・・!？」

マジか・・・百由様気合入れすぎ。去年の戦術競技会の結梨ちゃん
のメカルンベルシュベルツシエンくん破壊がよほど悔しかったのか、
さらにパワーアップした上での2体・・・。

うーん・・・これは私たちもやるべきなのかな・・・？

いやいや、これはあくまでも訓練だ。戦技競技会ではない。百由様
のことなので暴走もパワーアップしているに違いない。これは1体
で十分だろう。

「どうしまし・・・2体!？」

メツセージを見て、さすがのベスも声を上げている。

「今の如來たちにはムリ・・・よね。どの程度のヒュージ設定になつて
るか分からないけど」

「ですわね・・・」

さて、昼食を済ませ、私とベスは修練場へ。そこには――

「ごつきげんよう明日香さんエリザベスさん」

うちの（ほぼ）お抱えアーセナル兼リリーの彼女がすでに待機していた。

「ごきげんよう乃莉子さん。今更だけどうちのLGに入る？」

「え？どうして？」

「お姉様たち今はスーパースブで主要メンバーからは外れてるのよ。いろいろ実験とか付き合っただけからどう？」

今更知らない仲ではないので聞いてみる。

「んー・・・私はいいかな。リリーとして戦えはするけど大して実力ないし・・・」

「そうかなあ？私は全然ありだと思うけど・・・ヘリオスファイア使いがいてくれるだけでLGとしてはすっごいありがたいんだけど」

「でもごめんなさいね。ホント戦えるっただけだから・・・っていうか、去年も同じような質問された気がするんだけど？」

「あれ？そうだった？覚えてないわ・・・」

うーん残念。元々純粋なアーセナルを希望していた彼女に聞か
け無駄だったかな・・・。

「ああそうそう。2人ともシュッツエンゲル守護天使になったんだって？おめでとう」
え？このタイミングで？

「あ、ありがとう」

ほどなくして2人がやってきた。無言で。

「来たわね2人とも」

2人同時に頷く。

「中等部上がりの蘆乃なら知ってると思うけど、これからメカヒュー
ジと模擬戦をやってもらいます」

「え・・・」

「模擬戦・・・」

「それも1人ずつじゃないわ。2人1組でね」

「イヤです」

真っ先に如來が言う。

「私も・・・」

遅れて蘆乃もだ。

「さつきも言ったでしょ。訓練中は私情を挟むな、って。これは隊長命令です。いいわね？」

2人の今現在の対ヒュージ討伐能力を見たいというのものもあるが、私としてはこれで仲直りをしてもらいたい気持ちのほうが大きい。

「で、乃莉子さん。設定ってどうなってる？」

小声で聞いてみる。

「あー・・・今回はゴリゴリになってます・・・ラージ級相当・・・」
「はあ？ちよつと待って!?!ラージ級って・・・」

「って言ってもミドル級よりちよつと大きい想定みたいです」

・・・なんだ。それならよかった。ラージ級相当だとあの2人では到底手に負えなくなる。ノインヴェルトまで必要なくても、LGメンバー総がかりになるかもしれない。

2人のレアスキルはゼノンパラドキサとユーバーザインだ。修練場で発動させても問題ないだろう、という判断だ。だが、百ゆ様のことだ。暴走も想定に入れておかないといけない。

「一応これだけは言っておくわ。これは去年私も言われたけど、壊しちゃってもいいけど、「あくまでも」壊さないようにね」

姉様は何を考えているかわからない。

訓練ならなおさらだ。たかが誰かが作ったメカヒュージ。私一人で十分なのに。

「レアスキルは使ってもいいけど、シューティングモードは禁止ね」
という声が聞こえる。

「関係ない・・・」

つい口に出たらしい。

「・・・ちよつと、バカじゃないの?訓練弾でも撃ったら建物壊れるわよ」

冷静に考えればその通りなのだが、そのときの私はそれすら耳に入

らなかった。

「・・・チームワークゼロですわね。明日香さんどうなさいますの?」

正直見ていられなかった。それでも私はあえてやらせていた。

とにかく動きがバラバラ、連携が取れていない。それと――

あの2人には百由様の暴走仕様のことを一切伝えていない。

「まだやらせるわ。暴走したときにどうするか・・・それと気になってただけど・・・」

私もこれは気になっていたので聞くだけ聞いてみる。

「蘆乃とベスって元々知り合いだったの?」

「違いますわ」

あっさり否定された。

「じゃあ・・・なんで同じCHARM使ってるの?」

「同じじゃありませんわ。明日香さんよくご覧になって?」

同じじゃない? 私にはブラダマンテにしか見えないのだが・・・ん?

「あ・・・」

よく見るとブレードの形状が一部違う?のと、少しブレードが厚く
なっている気がする。それと持ち手の部分が細くなっていた。

「わたくしのはブラダマンテ。蘆乃のはブラダマンテ・アイですわ」

「改良型? 改造機?」

「グランギニョルの機密事項なのでノーコメントですわ」

後で乃莉子さんから聞いたが改良型のプロトタイプらしい。グランギニョルの関係者には変わりなさそうだ。

今私は明日香隊長の言う通り私情は一切挟まず行動しているつもりである。問題はその明日香隊長の妹の如來だ。

メカヒューズを誘導してブレードを刺そうとするのだが、如來がそ

れに反した動きをするのだ。

「ちよつと如來！いい加減にしなさいよ！」

声をかけるも無視。レアスキルを使おうにも使えない。

GY A A A A A A A A A A A A A A A A!!

まったくこのメカヒューズ・・・鳴き声まで完全再現とは・・・百
由様どこまでお熱なんだか。

が、今までと動きが違う？

腕の動きが変わった!?

「このっ！」

カンッ!

腕に当たるもマジが足りなかったのかかすりともしない。

「うっ・・・！」

私に向かって突進してくる。え・・・なに？

レアスキル発動！如來の背後に回る。

GY A A A A A A A A A A A A!!

私の残像を見て腹を立てた(？)のか、

ドンッ!

「あああああああああああああ！」

如來を払いのけ、修練場の壁へ。

「うっ・・・！」

それでも明日香隊長はまだ黙って見ている。助けはなし、というこ
とだ。

「やってるわね。けど・・・あの2人ケンカ？」

ウワサを聞きつけたのか、琴乃様が見に来た。

「ごきげんよう琴乃様。訓練は訓練なんですけど・・・見ての通り」

「チームワークの取れなさはあなた達以上ね・・・蘆乃ちゃんのほうは
気がついてるみたいだけだ」

「それ言われると痛いなあ・・・確かに如來は子供っぽいところがあり

ますけど・・・そろそろ連携が大事って気づいてくれれば・・・」

「まだまだああああああ！」

如來はまだ一人で向かおうとしている。もう一度レアスキル発動！

キンツ！

「えっ・・・」

目の前に私が出て驚くも、

「ちよつと！どいてよ！」

私を言葉を見殺ししてなおも前に出ようとする。

「如來、あんた・・・まだわかんない？なぜ明日香隊長が私たちを止めないか。それもわからないバカだとは思わなかったわ」

火に油をそそいでどうする。

「はあ？誰がバカよ！あんたのほうこそバカなんじゃないの？」

「バカはどつちよ！ここまで言われて気づけないなんて・・・頭のネジでも飛んでるんじゃないの？」

「頭のネジが飛んでるのは蘆乃じゃん。いい加減私の邪魔しないでくれる？」

まったくあの子たちは・・・訓練だということを忘れて本格的にケンカを始めてしまった。

「ごめん咲良ちゃんレアスキルお願い。ベスにもね」

「は、はい！レジスタ！」

パアアア・・・

修練場を破壊する前に処理をしなければ。隊長の立場というものもある。

「私があの子たちを止めに入るから、あっちをお願い」

「まったく・・・世話が焼けますわ・・・」

「だいたい、蘆乃がお姉様の悪口言ったのがわるいんだから！」

「なによ！如來・・・あんただって櫻子姉様のことあんな風にいうなんて！」

レアスキル発動！2人の腕を掴みその場から離れる。代わりにベスにはメカヒュージの相手をしてもらっているが。

「はっ！」

カンツ！

「えっ・・・」

「あ・・・」

突然離され驚いている2人。

「・・・私情は挟むなって聞いてなかったの？」

「すみません明日香隊長。如來に指示を出そうとしてたんですけど・・・ついカツとなってしまう・・・」

蘆乃は真っ先に頭を下げてきた。この訓練のことを理解しているようなので何もしないでおく。

「蘆乃。あなたはベスと合流して訓練をそのまま続けて」

言うなり素直にベスのほうに向かっていく。

改めて如來の前に立ち、

パンツ！

思いつきり平手打ち。如來は頬を押さえ、なんで？といった感じの顔。

「如來！いい加減にしなさい！今は訓練中よ。何度言えばわかるの？」

LG隊長尾上明日香としての一言。

「だって・・・」

「だって・・・じゃないでしょ。私は私情を挟むなって言ったわ。私情を挟んでもいいときもあるけど、今はそうじゃないでしょ？」

「なんで・・・なんで蘆乃だけ鼻屑に・・・」

「してないわ」

「じゃあ・・・なんで・・・」

「それがわからないようなら如來はしばらく訓練に来なくていい。今日はもう戻っていいわ」

「・・・っ！」

無言のまま如來は走り去ってしまった。

「ここにも明日香ちゃんそっくりな子が・・・」

「何言ってるんですか！やだなあもう・・・如來と私と一緒にしないでくださいよー」

琴乃様にからかわれるのが納得行かないが、これで如來が少しでも頭を冷やしてくればいいのだが・・・。

「けどあの子・・・ホント私にべったりで・・・甘やかしてるつもりはないんですけどね」

「そうね・・・京夏ちゃんと明日香ちゃんは割と淡泊っていうか・・・割り切ってる？」

「そうですか？」

なんで？どうして私だけ？

他所のLGなら間違いないく除隊されてもおかしくない今の行動。そんなことも考えず、ただ悔しいというだけで飛び出してしまった。おまけに訓練に来なくていい、だなんて。

「あれ？如來じゃん。訓練はどした？」

偶然みどり様に会う。

「うっ・・・わああああああん！」

「おいおい・・・」

みどり様の顔を見て安心しきってしまったのか、私は思いっきり泣いてしまった。

「・・・そっか。明日香がなあ」

事の次第を話す。

「そりゃ明日香も怒るよ。如來ほど付き合い長くないけど、それぐらいはわかるぞ」

「みどり様……」

「あたしもさ……LGに入りたての頃は訓練サボってばっかでしょうちゆう明日香に怒られてたんだよ。けど、あの日たまたま明日香が訓練外でレアスキル使うな！って言われてたのを無視して梅先輩と競争してたの見つかっちゃってさ……」

「……それって今の話と関係なくないです？」

「まあ話は最後まで聞きな。あたしも怒られる！って思ってたんだけど、怒られるどころかやっついていいって言われて『えっ？』って」

「……」

「縮地ってさ、ここではあたしと梅先輩しかいないんだ。だから競争して鍛えられるなら……で許してもらったんだ」

「けど意外……みどり様が訓練外でレアスキル使うな！って……」
「う、うるさいな！そのときはそうだったんだよ！それだけ明日香はLGのことも仲間のことも考えてるってことだよ。だから京夏様が隊を引退して引き継がせるとき明日香に任せただ。ちゃんとみんなのことは見てる」

「……」

「ん？どした？」

「私……姉様に謝ってきます。そこまでLGのこと考えてるだなんて思ってもなかった……」

ホントに私バカだ。姉様のことを馬鹿にされたのが悔しくて……怒りに任せて蘆乃とケンカして……。オマケに訓練に私情を挟むな、と言われてたのにそれを無視して……。

「それじゃ、ごきげんよう！」

「で、妹を追いかけないんだ？随分冷たい守護天使ね」

琴乃様の言う通り私は冷たいのかもしれない。けど、これも如來のためなのだ。

「違いますよ？私は……将来このLGを如來に任せたい。そのために

は1人前のリリイとして成長してもらいたい……じゃ答えになりません?」

「明日香ちゃん……随分変わったわね」

「私は……変わったつもりはないですけど……」

「随分変わったわ。会ったばかりのときは京夏ちゃんに追いつきたい!ばっかり言っただけじゃなかったっけ?」

「やっぱり私……あまやかしてると思います?」

「え?どういうこと?」

「あの子……如來は、中等部に上がる前に両親を亡くしてるんです……実家も近いっていうのもあって……だから私が実の姉みたいに彼女の面倒を見てました。その感覚でつい……」

「だからあんなにべったりなのね……」

「ええ。私が百合ヶ丘に編入するって話したときもしばらく口も聞いてくれませんでしたからね……。でもまさかCHARMまで同じにするとは思わなかったですけど……」

「私も見てビックリだわ。仕様も同じなのよね?」

「ただ……あの子には教えてないはず……。あ。友葵子様か……。あの人おしやべりだからなあ……」

兵藤一友葵子——お台場女学校にいるアーセナルの1人だ。バランスイイトの基本システムを考案した人でもある。

さて、ベスと蘆乃だが……。

カンツ!

(私たちの攻撃パターンを読まれてる?)

いや、ヒュージがリリイの攻撃パターンを読んでくる、なんていうのは聞いたことがない。

過去色々なヒュージと戦っては来たけど、まさかね……。

「蘆乃、あなたはうしろから、わたくしは前から行きます!」

「はい!」

ガンツ!

両方向からの挟み撃ち。が、左右から挟み撃ちにされるように触手が来た!

ちよつとこれ百由様さすがにやりすぎ……。

「やあああああつ!」

シュバツ!

触手が切り落とされた? 明日香さんが止めに……来たわけではないらしい。

「櫻子様! 蘆乃! ゴメン!」

如來さんが戻ってきた。

「ナイスアシストですわ。それにしても……この暴走モード……ホントに厄介ですわね……」

「暴走!」

カンツ!

「ええ、しかもこのメカヒュージ……去年より強くなってますわ……如來さん!」

「は、はい!」

「破壊しても構いませんわ!……ちよつと手に追えないぐらいにまでなってます。明日香さんもそれでよろしくて?」

「まあ……仕方ないか……ちよつとまってる」

明日香さんもそれで納得してくれている。

だが、明日香さんは何か考えているようだった。

「あのCHARM……」

「はあああつ!」

ガンツ!

全長六尺五寸、琴乃様のためだけに作られた「あの」フリングホルニだった。実物は初めて見た。けど、なぜ明日香隊長が使ってる? (使えて?) るんだらう?

「蘆乃！残像って何人までいける？」

「はい！えつと・・・今のマギ残量だと・・・3人ぐらい・・・です」
「オツケー。今その場でお願い。1人欠けてるけどフンベルトを今からやるわ」

明日香隊長!?

「ダメですよ！修練場破壊しちやいますよ！」

「いいから指示に従う！」

明日香隊長が何を考えてるかわからなくなった。

「百由様には悪いけど、建物壊す前に止めないとね。ごめん、ちよつと時間稼ぎお願い」

ポケットからノインヴェルト用の訓練弾を取り出す。ん？見た目は訓練弾なのだが色が違う。これは一体？

「了解ですわ」

「??？」

私には言ってる意味がわからなかった。が、明日香隊長の動きを見て理解した。なるほど、そういうことか。

ガツチャン！

モード切り替えがとにかく遅い。

そして全員メカヒューズから全員少し離れる。

パンツ！

まず最初にパスをもらったのは私だ。

「蘆乃！ベスに渡して！」

「わかりました！櫻子姉様！」

明日香隊長の指示どおり櫻子姉様にマギスファイアを渡す。

シュバツ！

「ルートも的確ですわ。フィニッシュショットは任せます！」

シュバツ！

「おっと・・・」

如來のマギの受け方を見て少しビツクリした。

「御台場式の受け方ね。私も最初直されたわ」

とは明日香隊長だ。マギスファイアを受け取る時は引いて受ける

と教わった。如來は逆なのだ。

そして、

ガチャン！

「フィニッシュシヨット、いきます！」

何も考えなくても当たる距離。

ズガン！

そして――

「・・・何も」

「起きませんわね・・・」

てつきり粉々になるものだと思っていたが、機能が停止しただけだった。

「はい。お疲れ様」

「ちよつと明日香さん？」

「なに？」

不満そうな顔のベス。

「もしかして・・・知っててこういうことやらせましたの？」

「そんなわけないでしょ・・・乃莉子さんに聞くまで知らなかったわよ」
後で百由様に聞いたところ、破壊されるのが嫌だったから強制停止装置をちゃんと作った、とのことだった。その起動源がマジスファイアだということでフンヴェルトまがいのことをすることになったわけだ。
「・・・」

肝心の如來のほうだが・・・私のほうを見てじっとしている。

「如來。何か言うことあるでしょ？」

蘆乃にポンポンと肩を叩かれている。

「う・・・うわああああああああああああん！」

泣き出してしまった。ホント、あの頃と全然変わらないなあ。

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

「ごめんなさい、だけじゃ何のことかわからないわよ・・・」

そつと如來を抱き寄せる。

「それと、先に謝るのは私じゃないでしょ?」

と、蘆乃のほうを指差す。

そして、

「・・・今度明日香姉様の悪口言ったらただじゃ済まないから」

ただし、それは悪意がある口調ではない。

「如來・・・あんたもよ」

これでよかった・・・って言っているのかな。切磋琢磨してお互い良いライバル関係なら。

「ようやく丸く収まりましたわね・・・」

「まったく・・・しようがない子たちね・・・」

新生エリユーズニル結成にはまだ遠いが、これでようやく動き出したのかな。

「ところで明日香隊長」

「何? 蘆乃」

「さっきのCHARM・・・琴乃様のFRINGINGホルニですよ? ユニーク機で扱えるのは琴乃様だけって伺ってましたけど・・・どうして明日香隊長が扱えたんです?」

やはり聞かれた。

「そうか・・・知らないんだっけ。私、琴乃様から薙刀を教わっているの」

「薙刀?」

「そう。今はそのつもりはないけど、いずれ訓練にも取り入れるつもりよ」

「なるほど。それで・・・」

琴乃様のCHARMは学園内ではかなり有名なので知らないリイはいないほどだ。

「CHARMはコアを付け替えれば誰でも使うことはできるわ。けど、「使える」のと「使いこなす」のはまた別ね」

「教わってるのは明日香ちゃんだけじゃないよ。実は私も・・・」

円?! いつの間にな・・・。昼からそうさく倶楽部じゃなかったの?

「え……それ初耳なんだけど……」

「だって誰にも言ったことないし……琴乃様にも黙ってもらってたから」

後ろで琴乃様がニコニコしている。いつもどおりの光景なのだが、なんか怖くなってしまった。

「私は……別にいいんだけどね、円ちゃんが『言っちゃダメ』って言うもんだから……」

口止めか。

「まあいいわ。今日の訓練はここまでね。みんなお疲れ様」

LGとしてまだまだ課題は多い。そこは私がつっかり指揮を取っていかなくてはいけない。もっとがんばらないと。

「あと1人……あと1人……」

「明日香ちゃん……唱えたところで来るわけじゃないよ？」

その日の夜の部屋での会話。

「分かってる……分かってるけど……ううっ……」

ベッドに突っ伏す私。

山 梔館くちなし(旧館)は向かい合わせにベッドが設置してある。新館のときは二階建てのロフトみたいな感じだったが、ちよつとまだ慣れない。

「まあいいや……明日のこと考える……」

起き上がって自分の机に向かい、あるノートを取り出す。

「そういえば明日香ちゃん、最近よくそのノート書いてるけど何？」

……やっぱり聞かれたか。

「これ？LGのことをまとめているの。訓練で何したーとか、訓練メニュー考えたり……アイデア帳みたいな感じかな」

「これすごいね……なんか講義のメモ見てるみたい……」

「みんな誤解してるみたいだけど……私頭いいわけじゃないよ？」

「えー……あんなに成績いいの？」

円にジト目で見られる。視線が痛い……。

「成績と戦略はまた別だから！テストは教本と講義の内容覚えれば受かるわよ」

「それが出来たら苦労しないって……」

苦笑いの円。

「私は……京夏お姉様に比べたらまだまだだよ。訓練も穴だらけだし……」

「そうかな？私はそうは思わないけどな」

「え……」

「私は……京夏様も明日香ちゃんもどっちもすごいなあって思ってるよ？お世辞なんかじゃなくてね。だって、訓練メニューとか訓練方法とかあんなしつかり決められないから……」

「それは……円がダメなだけなんじゃ……」

「ひっどーい！そうかもしれないけど……」

円が膨れる。

「でも……ベスちゃんも、みどりちゃんも、咲良ちゃんも……如來ちゃんたちだつてみんなそう思ってるはずだよ？」

「私はおもむろに立ち上がり、円のすぐ近くへ。そして――」

「明日香ちゃん!?!」

背後からそつと円を抱きしめる。

「ありがと円。そう言ってもらえるとうれしい……」

「うん……」

百合ヶ丘に編入してから1年。同じ部屋、同じクラス、同じLGで苦楽を共にしてきた円。円は円でベスとはまた違う安心感がある。

なんだかんだ私はまだまだメンタル弱いんだなあと思ってしまうた。

LG再始動

さて問題は最後の1人か……。

今は灯音様に入ってもらっているが、新入生で鷹の目持ちを探すのは容易ではない。覚醒者で多いのはテストメント、レジスタだ。

因悦いえるがブレイブ持ちということもあり、十分LGレギオンの戦力としては機能する。

ちなみに現在の仮編成は——私とベス、咲良ちゃんがTZ、如來ゆきと蘆乃ののがAZ、因悦と咲良ちゃん、私とベスがTZ、残りテクニカルゾーンがBZ、残りバックゾーンがBZだ。

「……困ったなあ」

「何がですか?」

「何が……じゃないわよ。もうすぐLGのランク査定があるでしょ? どうすんの?このままじゃランク下がるわよ?」

現在エリユーズニルはかろうじてAランクにはいるものの、それは京夏お姉様たちがいたからだ。

「そうでしたわ……忘れてましたわ。明日香さんどうしますの?」

「どっかのLGから引き抜きする?」

「誰をですか?わたくしは反対ですわ」

「そう言うと思った。だよねえ……」

「あの……すみません」

ん?1年生リリイが私の元にやってきた。

「はあ?ケンカ!?!」

またか……。LG内でもケンカして、学園内でもケンカして……。よく生徒会から注意されないものだと思う。

「このままだと2人としてCHARM持ち出して暴れそうな勢いで……」
それだけはなんとしても避けたい。レアスキルなんか使おうものならなおのことだ。ちなみにだが、私も以前生徒会にはさんざんお世

話になっているので悪い意味で伝統にはしたくない。

で、校庭にいるというのでかけてつけてきたが・・・ケンカをして
いる様子はない。

「ちよつと！今度は何の争い？」

「あ・・・明日香姉様。実はその・・・」

「じゃあケンカしてたんじゃないやなくてメンバー探ししてたってこと？
まったく紛らわしい・・・」

「ごめんなさい・・・」

如來が言うには蘆乃とケンカしてるフリをして注目を集めようと
していたらしい。

「でもそれで仲良くなった子もいるから問題はない・・・はずだよ」

と、1人リリイを連れてきた。

「あの・・・ご、ご・・・」

「ごきげんよう。あなた名前は？」

「えと・・・あの・・・」

「私から言うね。この子人と会話するの苦手だから・・・せがわあい 穎川藍ちゃん

コミュ障か。うちに元がつくのが約1名いるけど。

「LGに入りたいけど言い出せなかったんだって」

それはそうだろう。ここまで極度だと今まで友達とかどうしてた
の？と逆に心配になる。

「大丈夫。うちのLGにも下手な子いるから」

「はじめまして！よ、よろしくおねがいますっ！」

ようやく喋ってくれた。

「さて、どこから話せばいいかな・・・」

話そうとしたときだった。

ゴーン・・・ゴーン・・・

うわ・・・マジか・・・出撃命令・・・しかも今日はうちのLG
が当番だ。

「このタイミングで・・・話をする前だけど、臨時メンバーとして入っ
てもらえる？今日スーパーサブが誰もいないのよ」

「は、はいっ！」

記憶が曖昧になるリリイは数多くいる。特段気にすることもないのだが……。

「ねえ藍ちゃん。記憶が曖昧になることは別に気にしてないわ。酔狂の月持ちの子は大抵そうだからね」

「それだけじゃない……んです……」

藍ちゃん？

「書類書き終わったら私のところに来てくれる？」

「はい？」

「すみません琴乃様……わざわざ付き合わせちゃって……」

「いいのよ。私結夢さんと仲がいいってわけでもないから」

意外……琴乃様コミュ力オバケなのかと思ってた。

何の話かわからないと思うが、同じレアスキル持ち同士ならお互いの苦労点を相談し合えるのでは？ということでお呼びだてしたわけだ。

「あ……」

藍ちゃんが来た。

「はじめまして藍ちゃん。鬼龍院琴乃です。よろしくね」

「えと……その……(ぎゅ、ぎゅ)……」

今の藍ちゃんには挨拶はむずかしいかな……。

「すみません……この子人見知りが激しいので……」

「え、そうなの？」

「えと……明日香隊長！」

わあっ！急に大声出さないでほしい……。

「私が……その……こういう喋りになったのって……レアスキルに覚醒してからなんです……」

レアスキル覚醒後の後遺症ともいえる反応か——私の場合は覚醒する前に比べて感情起伏（特に怒り）が激しくなったことだ。

「藍ちゃん……私もね、百合ヶ丘に来た時は大変だったのよ？」

琴乃様が口を開く。

「そう・・・なんですか？」

「ええ。うまく制御できなくて傷つけそうになったりね・・・」

「レアスキルの弊害って人それぞれなの。私の場合が短くなったわ・・・今は大分良くなったけどね。リリイを傷つけちゃったこともある」

「明日香隊長・・・」

「だから自分だけ！と思う必要はない。みんな通ってきてる道だからね」

「・・・はい。ありがとうございます」

喋ってて気になったのだが、藍ちゃんにあるその首の傷・・・。触ろうとしたときだ。

バツ！

「・・・触らないでっ！」

手で弾かれてしまった

「ご、ごめん・・・気になったから・・・」

藍ちゃんはしまった、と言った感じの表情をして、

「す、すみません！明日香隊長！つい・・・」

「明日香隊長・・・気づた・・・かな・・・気づいた・・・よね・・・」

少しあからさますぎたかもしれない。まだG・E・H・E・N・A・の呪縛から開放されていないのだ。いや、開放されていないと思いきこんでるのかもしれない。

私はブーステッドリイだ。もちろん百合ヶ丘には同じくG・E・

H・E・N・A・からかくまわれているリリイはたくさんいる。

「私だって・・・なりたくて・・・なったわけじゃ・・・ない・・・ううっ・・・」

その日は一晩中泣いていた。

翌日。

ルームメイトは先に出てしまったので準備をして学園に向かおうとしたときだ。

ガチャ……

「藍ちゃん。ごきげんよう」

「おはよう、藍ちゃん」

LGのみんなが部屋の前で待っていてくれた。

「え……なんで？」

「なんで、じゃないよ？明日香姉様の言ってたこと忘れた？」

如來ちゃん……。

「私たちはさ、チームワークが大事だと思ってるから。ほら行こう」
学園に向かう途中、

「ねえ藍ちゃん……その首の傷って……」

あ……隠すのを忘れてた。

「……なんでも……ないよ？昨日明日香隊長にも同じこと聞かれたけど。去年戦技競技会でケガしちやって……そのときにね」

咄嗟に嘘をついてしまった。事実去年の中等部の戦技競技会的棒倒しで足を挫いたので、内容は違っても嘘は言っていない。

「そっか……」

如來ちゃんはそれ以上追求はしてこなかった……そのときは。

講義が終わり、LGの訓練に行こう、となったタイミングでのことだ。

「ねえ藍ちゃん」

如來ちゃん？

「訓練前に……ちょっと、いい？」

呼び出されたのはLG控え室のある棟の裏だ。

「・・・朝、どうしてあんな嘘ついたの？」

「・・・どうしたの如來ちゃん？」

目が真剣だ。

「・・・ねえ、それって、強化リリイがブーステッドスキルを外すときに付くキズ・・・だよね？」

如來ちゃんは私のことを知っている？

「え・・・なんのこと？」

シラを切ろうとした。

「とぼけないで！」

また・・・この雰囲気・・・だからLGに入るのは嫌だったんだ・・・

その場から走り去ろうとするも、

スツ・・・

「・・・」

ステルス——ゼノンパラドキサのサブスキル・・・如來ちゃんが私の進路を塞ごうとする。

「・・・どうして逃げるの？自分が強化リリイだから？」

しばしの沈黙。

「私が強化リリイだって言うときみんな優しくしてくれる。けど、それだけ・・・誰も・・・私となんて仲良くしようなんてしてくれない・・・

ごめん如來珠ちゃん。私・・・」

「・・・それが、何だっていうの？」

え？まるで私の心を読まれてるかのようだ。

「・・・」

違う。そうじゃない！私は泣きそうになっている。

「なんで私たちのことそんな風に思うの？ねえ、どうして!？」

「だって・・・」

「じゃあ、逆に聞くけど、どうして明日香姉様は藍ちゃんのことをLGに入れてくれたと思うの？」

考えたことがなかった。

「ゴメンね藍ちゃん。いきなり勝手なことして・・・私さ、二水様ふみにお願いして調べてもらったんだ・・・」

——二川二水様——百合ヶ丘屈指の情報網を持つ戦略やリリーの知識が豊富な先輩だ。中等部にいた頃からそのウワサは耳にしていた。

「そしたら強化リリイだっていうから・・・もしかしたら隠してるんじゃないのかなって・・・。けど、隠したからってどうもなるわけじゃないよ」

如來ちゃんは私のことを変えようとしてくれてる・・・？

「他のLGの子はどう思ってるか知らない。けど強化リリイとかそんなの関係ないでしょ？だって仲間だもん」

如來ちゃん・・・。

「でも・・・なんで分かったの？」

「私の周りさ、強化リリイばかりだったんだ・・・。御台場女学校ってG・E・H・E・N・Aの実験場・・・とか言われてるでしょ？実験体ヒュージにやられてブーステッド施術を受ける子も多いの。だからそういう情報も自然と入ってきちゃうんだよね。あはは」

如來ちゃんは今まで接してきた他のリリイの子とは違った。なんで同じだ、なんて思いこんじゃったんだろう・・・。

「ありがとう・・・如來ちゃん。私・・・正直に話すね」

「そう。ありがとう正直に話してくれて」

LG控え室にて。明日香隊長は私のことは特に言及もしなかった。

「ようやくこれで落ち着いてたくさんケーキが食べられますわ」

「・・・櫻子姉様。あんまり食べると太りますよ」

蘆乃は妹らしく櫻子様のスタイルを気にしているようだ。

「大丈夫よ蘆乃。このケーキ砂糖ほとんど使っていないから「え？」

使っていない・・・？

「あ、そっか。みんなに言っていなかったわね。みんなのケーキとかクッキーは全部私が作ってるから」

「え……明日香隊長が……ですか？」

「琴乃様から教わってね。他のLGでは報酬で買ってるって話も聞くけど……やっぱり報酬ってみんな自分で自由に使いたいでしょ？まあ私が作ってる理由はそれだけじゃないんだけどね」

「そうだったんだ……。明日香隊長いつ休んでいるんだろう？」

「初耳……。明日香姉様って確か料理苦手……」

「そ・れ・は。ここに来る前の話ね」

「い、痛い……。痛いつて明日香姉様！」

「……如來ちゃん余計なこと言っつて怒られてるよ。明日香隊長に脇腹を抓られている。」

「琴乃様に比べたら味はまだまだだけどな」

「みーどーりー……。！ちよつといいかしら？如來」

「はーい！」

「明日香隊長はみどり様を拘束するも、

「みどり、今年の戦技競技会のコスプレ部門出てもらうから、覚悟していてね」

「えええええー！やだよー！」

「じゃあ、当分の間みどりのケーキとお茶はなしで」

「もつとやだよー！」

予備隊のときはこんな感じじゃなかった。百合ヶ丘は個性的なLGが多いとは聞いてはいたけど……。和気あいあいとして雰囲気は悪くないと思った。

「ところで……。隊長たちって元々どういう関係だったんですか？」

この子たちにはまだその話はしていなかった。いい機会なので話をしておく。

「そうね……。私たちはこのLGを立ち上げるときに知り合ったわ。昔からの付き合いいなわけじゃないの。私は……。如來だけね。御台場からほぼずーっと一緒だったし」

「私と明日香ちゃんは元々新館にいたときに同じ部屋だったんだ。入学式のときに校門の前でばったり会って、クラスも同じで」

「へえ・・・」

「で、入学して2日目に初対面なのにベスが私にケンカ売ってきて・・・そのとき京夏お姉様にはじめて会って」

「そ、そうでしたわね・・・」

ベスの顔色が悪い。

「いつだったか私の前で大泣きしたこともあったわね・・・」

ベスと私以外全員呆気にとられている。当人はというところ・・・顔を引きつらせて今にも私に飛びかかってきそうな感じである。

(やば・・・怒らせたかな・・・)

「え？それ初耳・・・」

「あたしも・・・」

「そうね。誰にも言ったことがないし」

その後顔を真っ青にしたかと思えば、

「・・・」

バタツ・・・

白目を剥いて倒れてしまった。え・・・そんなに言っただけじゃなかった？

「櫻子姉様！」

蘆乃はベスの元へ。言いすぎたつもりはないのだが・・・困ったな。

「い、意地悪するつもりで言ったわけじゃないんだけど・・・ははは・・・」

10分後には気がついたが、この後ベスは1時間近く口を聞いてくれなかった。

「ほんっとゴメン！話の流れでどうしても・・・ね」

「謝って済むのなら防衛軍もいらなそうですわっ！しかもみなさんの前で・・・！」

手を合わせて謝るも許してくれる気配はなさそうだ。

「釘を刺すようで悪いけどさ、ホントの自分を曝け出したほうがいいんじゃないの？」

「・・・残念だけど、もうその話なら蘆乃にしたわよ。今度駅前で売ってるあのいっちばん高いスイーツおごってもらうから」

久しぶりに聞いた本来のベス。

「だからゴメンってば・・・けど、妹^{シルト}だったらなおさら隠し事はよくないよね・・・って自分か・・・」

「え・・・？」

少し驚いている。

「私さ・・・御台場に居たとき・・・如來に『百合ヶ丘に行く！』って言う前からずーっと隠してるんだよね。いつか言わなきゃ・・・とは思ってる」

「明日香さん・・・」

「・・・怖いよ・・・今の関係が崩れちゃうんじゃないかって。もう過ぎたことではあるんだけど・・・それでも・・・ね」

如來に対してはなんでもできる姉を演じているところはある。だからなおのことだ。

「私は・・・如來ちゃんはそんなに気にしないと思う。確信はないけど・・・」

「櫻子・・・」

久しぶりのこの呼び方。

「あ、いたいた。おーい明日香ー！お嬢ー！」

みどりだ。

「一葉さん来てるぞー」

え？

「明日香さんご無沙汰しております」

「^{かずは}一葉さんが一礼する。」

「堅苦しい挨拶はいいですよ。で、どうして百合ヶ丘に？」

「はい。梨璃さんに会い来たんですが、明日香さんがエリユーズニルの隊長になったと伺ったのでごあいさつに……」

あのとときは私ではなく京夏お姉様が隊長だった。副隊長が隊長になるのはまあ順当だと思う。

「はい。相変わらずメンバーは騒がしいですけどね」

「一葉さんごぶさたしてますわ」

「エリザベスさんもお久しぶりです。梨璃さんから聞きましたよ。お二人とも守護天使シュツツエンゲルになったそう。おめでとうございます」

一柳さんお喋りだなあ……。

「あ、ありがとうございます。ははは……」

「そういえば……他の方々は？」

「円は多分そうさく倶楽部に……咲良ちゃんは書籍棟にいます」

「あら……一葉さん。おひさしぶりです」

みどりが連絡したかな？お姉様まで来た。

「京夏様。おひさしぶりです」

「あ。ここだ……へえ……こんなところあったんだ……」

如來まで……。

「百合ヶ丘でも穴場なのよ。なぜか利用者が少ないみたい」

「明日香さん。この方は？」

「あーすみません。妹の如來です」

と紹介。

「一葉様ごきげんよう。瀬能如來です。よろしくおねがいますっ
！」

「こちらこそよろしくおねがいますね」

「……みどり様に呼ばれて来ましたけど……あの……これって」

蘆乃まで来た。……みどり、あんた何したいの。奥のほうでニヤニヤしている。

「わたくしの妹の蘆乃ですわ」

「ごきげんよう。榛原蘆乃はいばらです。よろしく……です」

「如來と蘆乃もLGにいるんですけど、訓練中しよっちゅうケンカして困ってますけどね」

「明日香姉様ー！それ言わないでー！」

「はいはい・・・うるさいわね」

「京夏様。他の方々は・・・」

「初花は今丁度誰かに教えてるわね。修練場のどこかにいるんじゃないかしら。灯音と琴乃は休暇日申請して実家に戻ってるわ」

「どうりで・・・お見かけしないとと思ったら。」

「私たちも・・・リリイとして戦えなくなる日が来る・・・心の準備はしてるつもりなんですけどね」

一般的に私たちリリイは年齢とともにレアスキルとその使用できるマギ量は少しずつ減っていく。ピークは私たちの今いる2年生の17歳頃とされ、学園を卒業する頃には多くのリリイがその役目を終える、と言われている。

船田姉妹のいなくなつた今、世界レベルのトップに立つのは天葉様だ。今年こそは戦技競技会で対決したい。

「おっと、時間だ。では私はそろそろ学園ガーデンに戻ります」

「ごきげんよう」

一葉さんを送った後。

さて。私も腹をくくるか。京夏お姉様が私に過去を語つたように。

「ねえ、如來。京夏お姉様もいいですか？」

「姉様？」

「いいけど・・・どうしたの急に？」

「実はね・・・今まで如來に黙つてたことがあるの・・・」

急に如來が真剣な表情になった。

「それと如來にも知っておいてほしい——私がどうして京夏お姉様と守護天使の契りを結んだのかも」

「ここに来るのも久しぶりね」

「そうですね・・・」

「あの・・・ここは・・・」

「リリーの墓地よ」

「リリーの・・・」

約半年ぶりに訪れたここは相変わらずの佇まいだった。唯一違うのはいつの間にか設置された「CHARM使用禁止」の看板が増えたことぐらいだろう。よくここで野良ヒュージを何体この距離から撃てるか、とか遊んでいたのが生徒会に伝わったのだろう。

「こんなところに連れてきて何をするんです？まさか私を・・・」

「あのねえ・・・私が如來に手をかけてどうするの・・・」

「違うわよ如來ちゃん。ここは私の守護天使だったお姉様のお墓があるの」

「・・・」

急に黙り込んでしまった。

「いいのよ。もう4年前のことだから」

「4年・・・前？」

「州すの盧み美様はね・・・中等部時代守護天使だったの。日の出町の惨劇は如來も知ってるでしょ？」

「話・・・だけは・・・明日香姉様も行ってきましたよね？」

「そう。そこで先代メンバーだった先輩方は外征に参加した。けど・・・生きて帰ってこなかった」

「先輩方？」

「前も言ったでしょ。このLGエリユーズニルは二代目なのよ。一度解散してるわ」

「そうだったんですね・・・」

京夏お姉様は続ける。

「それだけならよくある話ね。けど、その先輩方は全員お姉様の幼馴染だった・・・」

「あの・・・それが・・・私になんの関係が」

「話は最後まで聞いてね。普通なら、隊長が残った私たちと今後どうするか、話し合うはずよね？」

「そう・・・ですね」

「それをする事もなく私の前からいなくなつたわ。自らね」

「え・・・自殺・・・」

「もちろんシヨックだったわ。それが元で私が大暴れして琴乃や灯音たちにも迷惑もかけた・・・それを心配してか、御台場で唯一仲が良かったもみじ椀ちゃんからも連絡があつたの」

え？椀様？初耳だ。

「あの・・・京夏お姉様？それ・・・初めて聞きましたけど・・・」

「ごめん明日香。初めて語るわね・・・あのときはとにかくLGを元に戻したいって思いが強かつたからね。で、私が高等部上がつたときに椀ちゃんから『前に言つた面倒見てた子が今度百合ヶ丘行くから』って連絡が来て、あ・・・つて」

なるほど。でももっと早く教えて欲しかった。

「私たち・・・なんだかんだ繋がつてたんですね」

「そうね。で、明日香はそんな私の過去を如來ちゃんに聞かせたかつたわけじゃないんでしょ？」

もちろんそれもある。けど私にとつての「本題」はここからだ。

「・・・如來。今から私が話すことを聞いても怒らない？」

「・・・言つてる意味がわかんない」

真顔で言う。

「そうよね・・・でも如來も薄々気づいてたんじゃない？」

「・・・」

「私が予備隊に入つてからのこと、よ」

「え？なんのこと？」

本当に如來は知らないようだった。

「天音・・・いたでしょ？」

「明日香姉様にやたら絡んでた・・・あの人・・・だよな？」

「ええ。その子に私は御台場から追い出されたようなものよ。天音自身がロネスネスに入りたいがために、ね」

「え・・・」

「天音が・・・私に嘘の情報を教えてヒューズ討伐に来られないように

仕向けたり、予備隊のメンバーと一切口を聞かないようにしたり、ね。予備隊の中でどんどん居場所がなくなって・・・だから・・・私は百合ヶ丘に来たの」

「うそ・・・私・・・そんなこと一言も・・・聞いてない」

「そんなの・・・言えるわけ・・・ないじゃない・・・！だって・・・私は・・・如來にとって姉みたいな存在なのに・・・弱音なんて・・・」
「いつか京夏お姉様が私に過去を話してくれたときの最後に最後のほうは泣きそうになりながら必死に声を出していた。」

「私じゃ・・・ダメ・・・だったんだ・・・」

ぽつりと呟く。

「如來？」

そうじゃない、と言おうとした。その時だ。

ダツ・・・

その場から走り去ろうとした。が、その方向は・・・！

「待って如來！そっちは・・・！」

レアスキル発動！間に合うか？

ギユツ・・・

・・・危ない。なんとか間に合った。もう少しで如來が崖下に転落するところだった。が、

バンツ！

その手をはねのける如來。

「来ないでっー！」

それでも私は如來を抱き寄せ、

「離して！離してよ！」

逃げようとする如來を離すまいとする。

「違うの！如來のこと・・・信じなかったわけじゃないの・・・私が・・・私が勇気を出せなくて・・・如來に話せなかった・・・だから・・・ごめん・・・」

最後の方は涙声になりながら如來をギユツと抱きしめた。

「明日ねえ・・・」

懐かしい・・・。私が御台場中等部に入る前に如來から言われてい

た呼び名だ。

「如來がLGに来たときから・・・いつか・・・言わなきやつて・・・思ってた。このままじゃ、如來を騙すことになるんじゃないかって・・・」

「・・・」

「昼間、藍ちゃんの件の後・・・私がベスとケンカしたじゃない？そのときに話したの。正直に話したほうがいいよね・・・って」

「・・・もつと」

「・・・」

「もつと私を頼って欲しかった・・・！いつも近くにいたのに・・・。明日ねえが百合ヶ丘に行くって言ったとき、すつごい嫌で・・・あのときは強がつて『1人で頑張れるよ！』なんて言っちゃったけど・・・ホントはすつごい寂しかった」

「如來・・・」

「だから私・・・無理を言つて百合ヶ丘に来たんだよ？明日ねえに会いたくて・・・コーストガードからの誘いも断った」

如來の実力だったらツ御台場の3大LGでも十分やっていけただろう。けど私のために・・・。

「ねえ明日ねえ・・・約束して？もう如來から離れない・・・って・・・」

「ええ。約束するわ・・・」

そして――

「うわああああああああああああああああん！」

私の腕の中でしばらく泣きじやくっていた。

「・・・落ち着いた？」

「・・・」

無言で頷く。

「もうひとつ話しておくわね。私と京夏お姉様がどうして守護天使を結んだのか」

入学式2日目に手合わせを申し込まれたこと、LGに入り初陣で京夏様に助けられたのが決め手になったこと。明日ねえが昔負傷させられたヒュージがレストアとして再び現れて駆逐した際、マジを使い切って倒れてしまったこと。明日ねえが精神状態不安定で任務中に飛び出してしまい、またしてもマジを使い切って倒れてしまったこと、など、いろいろ聞いた。

「如來ちゃん・・・この1年寂しかったのね」

「・・・だと思えます。それに気づくのによつと時間かかっちゃいましたけど」

如來が落ち着いて寮に戻った後。まだ私たちは墓地にいた。

「ところで明日香？」

京夏お姉様のこの目は・・・なにか悪巧みを考えてる時だ。ロクなことがない。

「はっ？」

「新館のあの事はもう教えたの？」

「・・・先に釘刺しておきますけど、如來に変なこと教えちゃダメですよ？あの子純粹だし・・・私より鶺鴒呑みするタイプだから」

「なーんだ・・・」

あからさまにガツカリしている京夏お姉様。

「なーんだ、じゃありません。あの子そういうのホントダメですから。例えるなら咲良ちゃんと同じぐらいかな」

実は1度だけ京夏お姉様とその・・・したことがあるのだが、とにかく激し・・・じゃなくて！

「確かに恋愛感情に走るリリイもいますけど・・・私と如來は・・・今の関係のままでもいいかな・・・って」

私は普通の恋愛もだが、リリイ同士の・・・そういう関係もありだと思っっている、所謂両方^{バイセクシャル}いける側の人だ。如來はどう思っているかわからない。けど、誤った方向には向かってほしくない・・・というの

が長年彼女を見てきた私の意見だ。

親友

ようやくLGメンバーが全員揃った私の代のエリユーズニル。運がいいことに入った全員が経験者という恵まれた環境だ。チームワークは良好・・・ということにしておこう。如來と蘆乃は相変わらずだ。

如來と蘆乃が揉め始めると因悦か藍ちゃんが止めに入るのがお決まりとなっている。

ホントあの2人、仲がいいんだか、悪いんだか・・・。

「今日の訓練はCHARMを持ち替えてもらいます」

訓練・・・というよりは遊びに近い感覚かもしれない。

「持ち替え・・・?」

「円、覚えてる?私とみどりがCHARM入れ替えて使ってたときのこと」

「もちろん。あのときみどりちゃんはグングニル使ってたね」

「明日香隊長と・・・ですか?」

ちなみにだが、現在みどりはグングニルではなく、テイルフィングを乃莉子さんが魔改造したものを使っている。

「どういう訓練ですか?」

「ヒュージとの距離感を掴むためね。今日は対リリイだけど、どういう状況でもそれに惑わされないためよ」

「あのときですわよね?・・・わたくしたちの距離感がまったくつかめなくなっただけですわ。その後明日香さんがマジ切れで倒れて・・・」
「う・・・具体的に言われるとちよつと・・・」

思い出しただけでも恥ずかしい・・・。バス・・・完全に仕返ししてきたな?というか、完全に墓穴を掘ってしまった。

「この前の仕返しですわっ」

「・・・明日香隊長、実は問題児でした?」

因悦のツツコミが痛い・・・。

「と、とにかく。今日は全員が入れ替えて使うわよ。乃莉子さんにも来てもらってるしね」

さてコアの付け替えが終わり全員入れ替わったわけだが・・・具体的にはこうだ。

私と如來はブラダマンテとブラダマンテ・アイ、ベスと蘆乃はタングズニル（バランスウエイトは無効化。円は因悦のボルソルン。因悦は円のアステリオン・ブリッジ。みどりは咲良ちゃんのナグルファール・・・といった具合だ。にしても。

私自身グランギニョルのCHARMは初めてなのでちよつと感覚に戸惑っている。

「自分で課した訓練だけど・・・あんた、よくこんなの扱ってるわね」
起動したときに思ったのはとにかく軽い。グランギニョルのCHARMは剣がモチーフになっているものがほとんどだが、これなら納得が行く。

「北歐の田舎メーカーのCHARMはただごっついだけですわ」
と批判気味のコメント。

「ちよつと・・・！タングズニルバカにしてる？」

「そうではありませんわ。CHARMは一長一短。それぞれに良さがあります。各々が使いやすい、と思うならそれでいいじゃないですかの」

・・・めずらしくベスが正論を言っている。何か起こらなければいいのだが。

「・・・不思議。なんか扱いやすい」

一方の蘆乃は関心している。

「どういうことですか？」

「私・・・元々マルテを使っていたので・・・」
マルテ？

ということとは高等部に上がったからCHARMを乗り換えた、というのだが・・・にしても不自然と言えば不自然だ。

グランギニョルのCHARMはマテリアルネーム（CHARMメー

カーとマテリアル元)と使用者のルーンが本体のどこかに刻印されている。ちなみにベスのブラダマンテは持ち手のすぐ裏だ。

蘆乃のCHARMにはそれらしき刻印が見当たらないのだ。

訓練が終わり、コアを元に戻した後だ。

「明日香さん」

ベスだ。

「なに、改まって。まさか訓練前に言ったこと根に持って・・・」

「違うわ」

普通の口調?もしかして怒ってる?私にはわけがわからない。

バンツ!

誰も居ないラウンジにベスの携帯端末を叩きつける音だけが響く。

「・・・これ、どういうこと?」

「え・・・」

メッセージ内容を見るとベスに対する罵詈雑言が使える文字数限界まで羅列されていた。当然だがこんな文章を送る必要もなければ送った覚えもない。

「何これ・・・こんなの知らないわよ?」

しかし、送信元は私の名前になっている。考えられるのは、私の名前を偽って送信したイタズラなのだが・・・。

「ホントにそう?なら、端末見せて」

「・・・なんで!?!」

端末の送信履歴に送ったことのない内容で送信したことになっていた・・・。ベスが怒るのも無理はないが、頭の中は「??」だらけだ。

端末はメールも使えるのだが、内容は生徒会(学園管轄の7号由比ヶ浜ネットの専用サーバ経由)で検閲されているため、LG間の連絡や生徒会からの重要連絡で使われ、むやみに送信することはできない。

最近学園内で携帯端末経由の不可解な事件があるとは聞いていたが、まさかこのことか?

「二応、聞くけど・・・今学園内で携帯端末経由で変な事件起きてるのは知ってるわよね?まさか鵜呑みになんて・・・」

「し、してないっ！そんなことするわけないって・・・信じてる。でも・・・」

「落ち着きなよベス。こんなの・・・誰かのイタズラに決まってるでしょ。だいたい、私があんたにこんなことする必要性なんてある？するにしたって私なら後でうそー、とか返すわよ」

「・・・」

表情は納得出来てない様子だ。

「大体心配しすぎ。守護天使シユツツエンジェルになって少しはその辺良くなったかなーと思っただけど、それじゃあの頃と全然変わってないよ？」

「私が不安なのっ！蘆乃に・・・ちゃんと姉として接してあげられてるか・・・」

「・・・いい加減なんとかならないの？そのわけがわからない言動」

その前フリがだんだん巧妙になってきている気がする。ていうか乃莉子さんまで巻き込むな！彼女だって忙しいんだから。

「・・・だって」

まるで子供のように指いじりを始めたベス。

「そのメッセージだって、乃莉子さんに送信元偽装して作らせたんでしょ？まったくネット犯罪者でもあるまいし」

「このところ・・・そのことばかり考えちゃって・・・頭から離れなくて・・・」

・・・そういえばベス、いや櫻子が弱音を吐いてきたのは初めてな気がする。

「それはお互い様。私は・・・ちゃんとできてると思うけどな。私以上に」

「私から言わせてもらえば明日香のほうが全然できてるよ・・・」

初めて櫻子から呼び捨てされた。なんか、嬉しい。

「ねえ・・・初めて・・・だよね」

「なにが？」

「・・・なによとぼけちゃって。今、私のこと、呼び捨てにしたでしょ？」

「・・・言っていない。私は言っていないから！」

「はいはい・・・照れるな照れるな。さてっと・・・そろそろ追い出されそうだからいこつか・・・」

「そういうえば・・・昼間の轟貞の話」

「なんですの急に?」

天上の間。円と咲良ちゃんは半休暇で自宅に戻っている。みどりは・・・来たり来なかつたりなのでまあいいや。

蘆乃の台詞のことが気になってしようがなかった。

「前に如來と蘆乃が大ゲンカしたとき。如來に轟貞してるって言われてたのよ。で、今日、蘆乃にも言われちゃったからやっぱりそうなのかな・・・って」

以前はルームメイトの円にこういう相談もしてもらっていたが、学年が上がって、円は入浴途中で良く抜け出してどこか行く事が多くなってきました。

今ではベスがすっかり相談相手となっている。

「わたくしはそうは思いませんわ。以前汐里さんにもちらつとうちの訓練の話がありましたからお話しましたわ。汐里さん曰く『うちよりしつかりしてる』だそうです」

しつかりしてる、かあ・・・あの隊長さんずぼらそうには見えなだけで・・・汐里さんが討伐のたびにCHARMを破壊して帰ってくるからその後ろめたさもあるのかもだが、あまり参考にはならなかった。

「やっぱり閑しずさんに聞いてくる・・・汐里さんじゃ参考になんないわ」「ちよつと明日香さん。それ、汐里さんに失礼じゃありません?」

「最初に言ったの誰だったっけー?」

と背後からベスのお腹をくすぐる。

「ちよつとやめてくださいます!?!ああんっ」

なんちゆう声を出すんだ・・・。

「こらっ、変な声だすな!勘違いされるでしょ・・・まったく・・・」

咳払い。

「で、蘆乃とは・・・もうそういうことしたのかなー？」

聞いた途端顔を真っ赤にして、

「な・・・なななななななっ!?何わけのわからないことを・・・」

その様子だとまだか。

「私だって京夏お姉様とその・・・したんだから、どうなの・・・って」
私まで顔が真っ赤になってしまった。それはそうだろう。女子会でもないのにこんな時間から何言ってるんだ、と自分を突っ込みたくなるがまあいい。

「明日香さんこそ・・・その・・・どう・・・なんですの？」

「え？私？」

「これだけわたくしに言うんですからなにかしたんじゃありません？」

「ごめん・・・裏切るようだけど、如來とはそういう関係になりたいって思えないのよね・・・。中等部入る前から知ってるし・・・実の妹みたいな感じで面倒見てきたから・・・」

やっとバスに話す機会ができた。

「京夏お姉様にも話したんだけど、あの子・・・両親いないのよ。物心がつく前に亡くなって・・・。店に母親変わりの祖母と一緒に良く食べに来てたのよ。家も近所だからすぐ仲良くなって・・・私がリイになりたい！って言ったときも一緒についてきて・・・スキラー値測ったら御台場の基準値越えてたのよね」

ちなみにだが、百合ヶ丘のスキラー値は50あれば誰でも受験できるが、御台場は最低70以上だ。

「そう・・・でしたの・・・」

「ごめん・・・私から振つといて・・・。けど知っておいてほしかったから」

「なにになに？お互いの妹の話？」

珍しい。乃莉子さんが来た。

「なにその・・・世間話大好きなおばさんみたいなノリで入ってきて」
普段CHARMのメンテナンスのときにしか工務科に行かないの

で、CHARMの話題以外の話に乗ってくるのが珍しく感じてしまうのだが……。

「いやね……その……」

珍しく乃莉子さんがどもっている。

「今年入ってきた子がやたら私に絡んでくるもんだからその……守護天使の先輩としてアドバイスを……」

「へえ……乃莉子さんが……ねえ……」

「な、なに……?」

「ふっふっふ……」

入浴後。山榎館くちなし(居室棟旧館)のラウンジ。

「守護天使の話をする前に乃莉子さんが大喜びするお願いを」

何事も掴みは大事だ。

「如來のタングズニルに乗ってるバランスウエイトって、アレ改良型よね?私のも同じようにしてくれない?今度乃莉子さんの好きなラーメンおごってあげるから。なんなら実家に来たらただにしてもいいし」

「え?明日香さん家ってラーメン屋だったの!?知らなかった……」

「ただし、月島まで来れば、の話だけだね」

「つ、月島……うち、八王子だからなあ」

さすがに好きなモノでは釣れなかったか。乃莉子さん実家八王子かあ……。

「明日香さん……随分わたくしと待遇違いすぎませんか?」

「なんのこと?」

「はいはいどうぞ……」

いつもなら円がそういう役なのだが、今日は乃莉子さんだ。

「わたくしは馬ではありませんっ!」

「で、乃莉子さんはその子とどうしたいの?」

「正直言うとよくわからなくて……。今までCHARMと機械いじり

ばっかりやってきたから」

根本がわからないのか。

「その子と一回会ってみたいな。離れてるんでしょ？だったら工房教えて」

翌日。

乃莉子さんの事前連絡もあり、工場科へ。

なぜか如來も一緒に来ていた。

「で、なんで如來もいるの・・・」

「どうしてって・・・面白そうだったから？」

「別に遊びに行くわけじゃないのよ？乃莉子さんに頼まれた用事を済ませるだけ」

でもまあいいか。いたからって何かあるわけではないだろう。

「その前に——」

乃莉子さんの工房へ。

「はい。部品を交換するだけだから2時間もかからないしね」

「ありがとう」

ガチャン！

試しに切り替えてみる。バランスウエイトの欠点が見事に解消されている。3年近く付き合ってきた「あの」感覚がなくなるのは少しさびしい気もするが。

「へえ・・・ここまで改良されてるんだ・・・」

「ウエイトシステム？」

「そう。今度円がメンテ出しに来たら一緒にそっちもお願い。私からも話しておくから」

「りょーかい。で、例のモノは用意した？」

「当然。うちには究極のクワイイもの好きがいることを忘れた？」

と、胸元から取り出してペンダントを見せる。

「へえ・・・これが・・・」

LGメンバー以外に見せるのはこれが初めてかもしれない。去年私の誕生日のときにLGメンバー全員が出し合ってくれた純金のモリアオガエルのペンダント。大事な宝物だ。

「明日香姉様？これは？」

「私がつってるカエルグッズの中で一番高いやつよ」

「え・・・いくらなのそれ・・・？」

乃莉子さん食いつきすぎ。

「えつと確か・・・CHARM一振りと同じぐらい？」

「マジか・・・」

これには乃莉子さんもビックリ。

「LG入りたてのときにある店でたまたま見つけて、討伐報酬もなく買えない！って円に嘆いてたら京夏お姉様に言ったらしくて、誕生日のときにサプライズでもらって・・・私のためにみんなで出し合ってたんだ、って。だから・・・これはLGみんなを繋ぐ大切な宝物」

「私も・・・誕生日のときになにかほしい」

そっか。如來の誕生日。私と2日違いだ。

「大丈夫。ちゃんと用意してあげるわ」

「・・・楽しみに待ってるね。明日香姉様」

「じゃ嗣埜よしの芥さんのところ行きますか」

工廠科は乃莉子さん、ミリアムさん、百由様の工房以外行ったことがない。アールヴヘイムにも何人か工廠科リリイはいるが、全く接点がない。

今日の訪問は乃莉子さん以外の、次のアーセナルへの引き継ぎも兼ねてるのかな、とも思う。

『川端嗣埜芥』と書かれた工房の前。

トントン・・・

「はーん」

えらい元気な声。

ガチャ・・・

「ごきげんよ・・・あれ？」

百由様やミリアムさん、乃莉子さんの工房は散らかっていかにも工廠科！という感じなのだが、入った感じキレイに整頓されていて、一角に私の部屋の机の上のような空間が広がっている。

「どうもです明日香様！お待ちしてましたー！・・・あれ？そちらのリリースは？」

「ごめんなさいね。ホントは私だけのはずだったんだけど、うちの妹シルトが勝手についてきちゃって・・・」

「いえいえ・・・ウワサは乃莉子様から聞いてますよ。瀬能如來さんですよね？まるで本当の姉妹みたいに仲がいい守護天使だって」

「嬉しい・・・ホントの姉妹みたいって」

「私たち一緒にいた時間が長いからね。さて」

本題に入る。

「知ってると思うけど、普通守護天使は私たち上級生から申し出るわ。で、そこのところはどうなの？」

「実は・・・私のほうから一方的に・・・」

・・・やっぱり。如來と一緒にだ。まあ私たちは元々知った仲で、だから特別だ。

「そっか。あ、これ挨拶代わりに持ってきたの」

と、やや大きめの紙袋を渡す。実は事前に乃莉子さんから聞いてりサーチ済だったりする。

「・・・なんかおつきいですね。今ここで開けちゃってもいいですか？」
「遠慮なくどうぞ。そのために持ってきたからね」

タネ明かしをすると、彼女はクマガグッズが大好きだ、というので急遽前日に灯音様にお願いで探してもらったのだ。なんかこの子私ソックリだな・・・。

よくみると工具やメモのための筆記具等々至るところがクマガグッズで統一されている。そこは如來も気づいたみたいで、

「・・・この子明日香姉様ソックリ」

と小声で言ってきた。

まあ乃莉子さんもまんざらではない感じだし、時間が来れば・・・という感じだろうか。後は乃莉子さん次第か。

「わあ・・・」

開けるなり、

「これ、限定生産のアリスカンパニーのスイートベアシリーズじゃないですか！え!?なんで明日香様が私の欲しかったもの知ってるんです?」

テンションマックスの嗣埜芥さん。

「ちよつと・・・ね。うちの元LGMメンバーにこういうグッズ好きな先輩がいて、こういうのがいいんじゃない?って」

「ありがとうございますー!うれしい・・・」

喜んでもらえたようでなによりだ。

「で、ひとつお願いがあるんだけど、いいかな?」

「なるほど・・・蘆乃さんの誕生日・・・ですか。如來さんじゃなくて?」

説明したとたん如來が機嫌を悪くする。ネタばらしをするわけにはいかないので黙っておく。

「明日香姉様、ちよつと」

ほらやっぱり。うまいこと誤魔化さないと。

工房前の廊下。

「・・・蘆乃ってどういうこと?」

「ごめん如來。今はまだ言えないのよ・・・忘れてるわけじゃないから」
「なら、いいけど・・・」

如來も納得してくれたようで安心。

「ごめんなさいねいきなり。如來をなだめてたの」

と、工房外に行った理由を話した上で、

「それで内容なんだけど——」

「なんじゃ、お主ら揃いも揃ってわしに何か用か？」

私自身普段あまり深い関わりはないのだがミリアムさんの工房にいた。

「突然押しかけてしまつて申し訳ありませんわ。お願いがあつてきましたの」

「CHARMのメンテなら隣に行けばいいじやろ？わしは忙しいんじや」

「・・・チャーミイリイの数量限定フィギュアあげます」

蘆乃のその一言で、

「お主、チャーミイリイ好きなのか!？」

明日香さんの言う通り、ミリアムさんが食いついてきた。ここまでとは・・・。

「はい。アニメのDVD出てる分全部とフィギュア。それから・・・」と、チャーミイリイに関する話題をマシンガントークしている。

お互いの守護天使がお互いの妹のプレゼントを選ぶ、と明日香さんがいいはじめたときは「何言つてんるの？」と思った。だが、実際はお互いのプレゼントが本命ではなく、本人から直接言わせるためのもの、ということに気づいたのだ。蘆乃がチャーミイリイ好きだったとは。

「わざわざ付き合わせてしまつて申し訳ないですわ」

「いや、わしや構わんど。チャーミイリイの良さが分かつてくれる者が少なくてな。寂しかったところじや」

「それはよかったですわ。ところでミリアムさん」

「なんじゃ櫻子」

「ミリアムさんは守護天使にしたいと思うリイはいらっしゃいますの?」

「わしか?」

ミリアムさんは少し考えてから、

「残念だがわしにはなついてくれているリイがおらんからのう・・・」

「そうですね・・・ではわたくしは所用がありますのでこれで。ではごきげんようですわ」

工房を後にする。蘆乃はミリアムさんのところにまだいるようだ。なら都合がいい。蘆乃に見つからないように携帯端末を取り出し、明日香さんへ連絡する。

『こちらも終わりましたわ。後は例の場所で』

足湯・・・ではなく、山榎館の裏の楠。

「で、どうだった？」

「私が言う前に・・・蘆乃が気がついたらしくて、すっかりミリアムさんと打ち解けていたわ」

な、なるほど。そこまで好きなのか。

如來の好きなものは聞くまでもないんだけど・・・御台場にいる頃と変わらなければウサギグッズ集めのはずだ（本人は隠してるつもりなんだろうが。

携帯端末のストラップを見れば一目瞭然。

「で、明日香さんのほうはどうだった・・・って聞くまでもないか。元々如來さんの好きなものは知ってるんでしょ？」

「まあね。ただ、今年はサプライズしようかと思ってるわ。しばらく実家に帰ってないはずだし」

「え？実家に戻るの？だったらラーメン食べさせてよ！話聞いてからずーっと気になってたのよ」

・・・やっぱり食いついてきた。

「あのね・・・私と如來の貴重な帰宅の時間に割り込まないでくれる？いろいろ台無しじゃない・・・」

「ならこうしてよ。私と蘆乃はオマケ。それでもダメ？」

「しつこいなあ・・・ダメなものはダメ」

結局、このやりとりは消灯時間ギリギリまで続いた。部屋の入口近くまでついてきて騒いでたもんだから、祀様に怒られてそのまま部屋

に連れ戻されていた。なにやってんだか。

明日は私の誕生日だ。

ピ。ピ。ピ。...

携帯端末が鳴る音。

『如來。休暇日申請書いて。日付は明日。理由は実家の用事、でいいわ』

え？明日？

明日香姉様は何をしたいんだろう？

遅れてLGの連絡メールが来る。

『明日の訓練はなしにします。理由は私が不在なため（実家に一時帰宅）。休みとはいえ自主練は忘れずに』

櫻組の教室にて。

「ねえ如來。明日って・・・」

因悦いえるだ。

「ごめん。明日休暇日で申請出してて学園ガーデンにいないんだ」

「明日香隊長も明日いないらしいけどそれと関係・・・」

「ないない・・・多分」

「多分って・・・バレバレじゃん。明日香隊長とどっか行くんだ？」

「私と明日香姉様の実家って近所なの。ただの里帰り」

とはいえしばらく実家・・・というか実家同然に住んでいるばあちゃん家には戻ってない。

「里帰り・・・近いって羨ましい・・・私仙台の多賀城だから・・・」

「え・・・因悦って東北出身だったの!?!」

これにはビックリ。確か東北には学園がなかった記憶がある。

「けどいいなあ・・・姉と妹で水入らずの誕生日会、とかかな?」

明日香姉様がそんなストレートなお祝いをするとは思えないんだけど・・・。

翌日。

「……で、どうして蘆乃たちもいるの?」

明日香姉様の他に櫻子様と蘆乃まで……。

「ごめんね。ベスと蘆乃はオマケだから」

と明日香姉様は言っているが、

「オマケって……そういう扱いですか?」

「昨日散々私の部屋の前で騒ぎ立てて生徒会の祀様に怒られてたの誰だっけー?」

櫻子様は一体何をしたんだろう?

「あ、あれは……明日香さんの部屋に入ろうとドアを開けようとしたら偶然ゴキブリがいてビックリしただけですっ!」

ゴキブリねえ……。後で真相を聞いておこう。

「私は……櫻子姉様に誘われただけで……別にあんたのことをお祝いするとか、そういうんじゃないから」

ホント素直じゃないなあ。

「早速行こうと……思っただけど、先に寄りたい所があるのよね」
「寄りたいところ?」

「そ。行けば分かるわよ」

明日香姉様の後を着いていく。

着いたのは――

門構えが立派な平屋建ての建物の前に。

『鬼龍院流薙刀術 総代道場』

と書かれた大きな木の表札が掛かっている。

「あれ……ここって……」

鬼龍院といえは……。

「明日香ちゃん、みんな。いらっしやい」

袴姿の琴乃様の姿が。すぐく凛々しく見える。

「すみません。わざわざ私の予定に合わせてもらっちゃって」

「いいのよ。私もしばらく実家に顔出せてなかったから
相変わらず笑顔が絶えない。」

「あ。そういえば・・・アレは届きましたか？」

「ええ。後で門下生たちにも配るつもりよ」

配る？

「琴乃様。早速ですけど、着替えてどこで・・・」

「更衣室は左奥にあるわ。そこに準備してあるから」

更衣室？それってまさか・・・。

「実は楽しみだったのよね。普段LGメンバーとしかやったことがなかったから」

明日香姉様の目が輝いている。間違いない。

「訓練はお休みだけど、これは自主練の一環だからみんなにも付き合ってもらおうわよ」

結局袴に着替えさせられた私たち。

「・・・こんなの聞いてませんわよ」

「それは私も同じです。直接実家に行くと思ってたのに・・・」

「それじゃ道場の方に案内するわね」

と案内されるまま、一番大きな建物へ。

そこは畳が敷き詰められていて、色の違う畳が囲むようになってい
る。そこに――

私と同じぐらいの歳の子たち数人と男子が10名ほどいた。

「初めまして。鬼龍院大裕だいうです。姉がいつもお世話になっています」

と挨拶してきたのは、琴乃様の弟さんだ。しかもカッコいい。

「今日はよろしくおねがいします」

明日香姉様が一礼。

その中でも1人ポニーテールの子が突然立ち上がり、

「1本組試合よろしいですか？」

と明日香姉様を指定してきた。

・・・この子か。道場に通う同年代でも一番強い子、らしい。琴乃様曰く『まだまだ』とのことだが、普段知った顔としか組試合をしたことがないので楽しみだったりする。

「尾上さん・・・ですよね。尾上月島亭の」

「よく知ってるわね。と言っても今はそこに住んでるわけじゃないけど」

「話は総代から聞かせてもらってます。総代と同じリリイなんだそうで」

リリイ、と聞いて門下生たちがざわついている。

「初めまして。横尾綾子って言います。正直、遊びでやってるのかもしれませんが武道をなめてもらったら困りますよ」

完全に敵意の目だ。

「あなたがどう思おうと勝手だけど、私は遊びでやってるわけじゃないわ」

と、自分の長竹刀ちようちくどうを取り出し、立ち構え線へ。

「構えー」

琴乃様の声。

初めての百合ヶ丘外での組試合。正直自信もない。

(いつもどおり・・・いつもどおり・・・)

暗示のように自分に言い聞かせる。

「はじめー」

鬼龍院流薙刀術は元々剣から身を守るための護身術が発展してこの形になったんだそうだ。奥義も教えてもらっているが、まだ一部しか会得できていない。

合図がかかってから30秒は動いてはいけないルールになっている。顔面への攻撃は禁止だ。

長竹刀を使った組試合の基本はどちらかが必ず攻撃を仕掛け、鏝競り合いでタイミングを見計らって、お互いが技を決めていくことになる。畳に手をついたり、試合線からはみ出たり、倒れたら負けだ。

30秒後、すり足で少しずつ間合いを取っていく。取る、と言ってもCHARMとは違い2メートル近く離れてはいるのだが。

「やつ！」

綾子さんのほうから仕掛けてきた。そして鏝競り合いへ。

(動きが読めない……)

さあどう仕掛けるか。

パンツ！

右脚に綾子さんの長竹刀が当たる。直後、左肘を狙って突き。

やはりLGメンバー相手では練習にはなっていないか。けど、

(琴乃様より遅いつ！)

すかさず払い除け、袴越しに左脛を思いつき「わごと」掠める。掠め突きという技だ。

門下生たちがざわつきはじめた。

「ウソだろ……掠め突き……」

「あんな高度な技……」

綾子さんも一瞬顔を歪めるものの、すぐに真顔に戻る。

「あんな技見たことありませんわ……」

ベスも驚いている。

「やつ！」

さらに右肘を狙って突き。

(さすがにこれはあからさますぎたか……)

もう一度掠め突き。右からだ。

ザツ！

「っ……！」

綾子さんの顔が歪む。

「やつ！」

そして左から脇腹への一撃。

「っ……！」

綾子さんが右手を付いた。

(よし！)

「やめー！」

琴乃様の掛け声。

一安心。初めての対外組試合で勝てたのもそうだが、今までやって

きたことが実りになっていくことが実感できて一番うれしかった。

一礼をして戻る。

「綾子さん。これで私が遊びでやってるんじゃないって分かってもらえました？」

「馬鹿にしたことは謝ります。ではお訪ねしますがどうして薙刀術を？」

「ヒューズと戦うため、かな。元々私は武道を習ってたわけじゃないから自己流で戦ってたけど、ある時から自己流に限界を感じたの。それで総代にお願いして直接指導してもらっているわ」

(明日香姉様強い……)

琴乃様が強いのは言うまでも……だが、それに負けず劣らずの強さ。文武両道とはこういうことなのかな……。

「強いですね。さすがです」

蘆乃の一言。

「どうして薙刀を訓練に組み込んだのかが分かった気がします」

「精神修養ね。無の心で見えてくるものもあるわ。さ、次は如來珠の番ね」

私はというと――

同じぐらいの実力の子と対戦したのだが、こてんぱんにやられて惨敗してしまった。

「くやしいいいいい！」

「まだ始めたばかりだから仕方ないわ」

と明日香姉様は言うが、くやしいものはくやしい。

対戦結果。私と蘆乃が負け、明日香姉様と櫻子様が勝ち、という結果となった。

「すみません。ありがとうございました。じゃ、私たちは実家のほうに向かいますので。ではごきげんよう」

琴乃様の実家でご馳走になってしまっただか申し訳ない感じがしてしまった。

「そういえば・・・都心ってこんなに静かなんですね」

移動中の蘆乃の一言。

「この辺りはまだエリアディフェンスが機能してるからね」

とは明日香姉様だ。そっか・・・エリアディフェンス・・・。

去年新宿一帯は崩壊して大量発生したとかで大変だったらしいが、その渦中に姉様や櫻子様たちも行ってたんだ、と思うと少し感慨深い。

そして見慣れた風景。最寄駅に到着。

「わあ・・・」

到着したときは昼を少し回っていた。聞いた話では、エリアディフェンスの境界が丁度この辺りになったとか。

あの時と全然変わってない。唯一違うのはヒュージ警報の看板があるぐらいだ。

「そっか、如來は3年ぶりになるのよね」

「そんなに帰ってなかったの？」

蘆乃はびっくりしている。

「帰ってない・・・っていうか・・・おばあちゃん機械音痴で・・・連絡しても出てくれなくて・・・」

確かに如來の祖母は高齢ではある。まさか・・・ね。

「ま、まあ・・・とにかくこっち」

見えてきた。幹線道路沿いから少し外れたところにある。『尾上月島亭』の文字。

「ただいま」

「ただいま」

さすがにお店側から入るわけにはいかないので家の玄関へ。

「あ。姉ちゃんおかえり。如來ねえだー！如來ねえもリリイになったんだねー！」

弟の彰彦だ。

「弟さんなんていましたの？」

「まあ・・・聞かれなかったし？」

これは円も知らなかったりする。唯一知ってるのは京夏お姉様ぐらいだ。

「ご無沙汰してます。亜沙香さん」

如來が会釈をする

「あら明日香おかえり。如來ちゃんも久しぶりね。あら？」

母さんは如來の制服を見るなり、

「如來ちゃんも百合ヶ丘に編入したのね」

「まあ・・・いろいろあつて明日香ねえと同じ学園に・・・」

と私のほうをチラ見する如來。

こら如來、目で訴えるな！

「で、こちらの2人はどういう関係？」

「えっと・・・べ・・・櫻子は私と同学年で、蘆乃は如來の同級生。一緒に戦ってる仲間よ」

とざつくり紹介。

「えっと、榛原蘆乃です・・・」

「櫻子・S・エリザベスですわ」

「櫻子さん・・・もしかしてあなた、エリザベートファクトリーの・・・」

「ええ、ロクセツト・エリザベスの娘ですわ」

え？ちよつとまってる!?

「今・・・なんて・・・」

「今まで黙ってたけど私もリリイだったのよ」

衝撃の事実。蛙の子は蛙だった。

「あは、あははは・・・！」

「明日香ねえが壊れたー！」

う・・・なんか、気持ち悪くなってきた・・・。
玄関先で倒れそうになる。

「まったく・・・玄関先で倒れそうになるだなんて・・・」

「普段の明日香隊長とは思えないです・・・」

私の部屋に3人。御台場から送った段ボールの箱がそのまま山積みになっていた。まあ、出したところで・・・ではあると思うけど。

「ほんっと、実家もすごいですわね・・・ビックリしましたわ」

壁から何から全て埋め尽くされているカエルグッズ。自分の部屋にいる、という安心感。

「ちよつとまって。今用意してもらおうから」

階段を降り、お店のほうへ行こうと廊下を歩いているときだ。

弟と母さんがなにやらひそひそと話をしている。

「やっぱ言わないほうがいいよ・・・」

「けど、身辺整理の問題もあるし・・・」

まさかとは思っていたが的中してしまったようだ。

「ゴメン。ちよつと・・・いい？」

母さんによれば去年この辺りで小規模ながらケイブが大量発生したらしい。この辺りは御台場・・・ではなくイルマ女子の管轄なので殲滅は成功したが、ミドル級に襲われて・・・だそうだ。

イルマ女子、か。私は芸術に長けているわけではないので、実力的にも場所も近かった御台場を選んだが、あの一件がなかったら私は御台場にいたままでこの辺りを守っていたかもしれない。

「もうちよつと時間かかりそう、だって。如來・・・ちよつと」

部屋から如來を呼び出し、近所の公園へ。

「こんなところまで引つ張り出して何？」

「ゴメン・・・如來。ホントは誕生日だからサプライズのつもりで連れてきたはずなんだけど・・・吉江さん、去年ヒュージに襲われたって・・・」

「え・・・うそ・・・」

「私だって信じたくないわよ・・・だって、あんな元気だった人だよ？杖振り回していじめっ子追いかけ回すような・・・」

「明日ねえ・・・」

私は如來を思いつきり抱きしめる。

別れはつらい。だからこそこれ以上犠牲を増やさないためにも私たちが頑張らなければ。

「うわああああああああああああん!!」

唯一の身寄りを亡くしてしまった如來。

「・・・百合ヶ丘に戻ったら私のところにおいで」

まさか如來にそんな感情を抱く日が来るとは思ってもいなかった。

「うんっ・・・うんっ!」

「・・・みんなが心配するから戻ろっか」

「ごちそうさまでした」

「おいしかったですわ」

「それはよかった」

ラーメンは好評だったようでベスへのもてなしには満足できた。

「ところで如來さんとは何をお話してましたの?」

「ああ・・・如來の実家に顔出しに行っただけよ」

ベスはなんだ、といった感じでつまらなそうにしていた。あの後確かに如來の実家には顔を出しに行ったが、真実は言い出しづらい。

帰り道。

「えへへ・・・」

如來はいつも以上に私にべったりだ。

「・・・ホントに何もありませんでしたの?」

「何も無いわよ。いつもどおりじゃない」

「その割にべったりしてますが・・・」

蘆乃のツツコミが珍しくするどい。

「わ、私にべったりなのはいつものことですよ。驚く要素なんてどこ

にも」

「本当にわたくしに隠しごとしてませんか？」

「しつこいわよ。ていうかあんたには関係ないでしょ……」

学園に戻ってから。食堂で夕飯食べた後も、天上の間ですらしつこく聞いてくる。

「どうも……如來さんの態度が気になってしまつて……」

ちなみにだが今日も円は一緒ではない。

「はあ……」

ため息の後、

「……後で私の部屋に来て。ここじゃ話づらいから」

天上の間から出た後そのまま私と円の部屋へ。

「……で、何を隠してらっしゃいますの？部屋に呼んでまで……となると、相当言いづらいことですか？」

「……そう。私もちよつとショックでね」

「ショック、とは？」

「……如來の親變わりの祖母が亡くなっていたそうよ。私もいろいろ教えてもらつてたから。それで帰り寂しくて私にべつたりだったんだと思うわ」

「そう……でしたの……」

「それもただ亡くなったわけじゃない……」

「まさか……ヒュージ……」

私は無言で頷く。

「如來が御台場に行つてからは人が変わったように態度が豹變したそうよ。近所の人からも嫌われるようになったらしいわ」

だからといって周囲も助けないのはどうかと思うが、如來がいなくなつて相当寂しかったんだと思うと胸が痛い。

「……私が心配なのは、これで如來が壊れちゃうんじゃないかって。結夢様みたいにはなつてほしくないの」

「・・・変わったわね。あの頃とはまるで別人みたい」

「そんなことないって。櫻子だつてそのうちなるわよ」

「そんな・・・言い過ぎ。それと明日香さん」

急に真剣な目になる櫻子。

「LGに夢中になるのはいいけど、そのうち体調壊すよ？最近ちゃんと休んでる？」

「何急に？母さんみたいなこと言い出して」

「・・・気づいてないでしょ」

「え・・・何が？」

はあ、とため息をつく櫻子。

「この際だからハッキリ言っておくけど明日香さん、あなた夢中になると自分のことを犠牲にしがち。特に体調。1日のスケジュールは？」

なんなのこの展開・・・。

「えっと・・・朝起きて学園のまわり1周マラソンして・・・円と一緒に朝食。それから食堂行ってケーキとかクッキーの仕込み。講義棟着いたら控え室に行つて訓練メニューの確認。それから・・・」

「・・・もういい。少しは自分で抱え込まないで周りに任せたら、と言つてるの！」

言われてみれば確かに少しスケジュール詰め込みすぎかな、とは思っている。ただ、この状況も苦に思っていないのも事実だ。

「わかった。今度みんなと相談するね」

とは返したものの、

（心配してくれるのは嬉しいけど・・・正直私自身全然苦になってないのよね・・・）

これがキツカケになろうとは思ひもしてないのだが。

守護天使と妹

トントン……

「来たわね」

ガチャ……

時間より少し早く如來ゆきがやってきた。

「いらっしやい。円は咲良ちゃんの部屋にいるわ」

「……咲良様？」

「女子会だつて。元々そういう話があつたみたい」

「へえ……」

「……如來。こつちおいで」

ベッドの上に来るよう布団上を叩く。

「明日ねえ……ううっ……うあああああああああああああああああああああああ

ああああああああん!!」

そのまま私の膝の上に顔をうずめて泣き出してしまった。

かつての結夢様のように。如來には自分の気持ちを閉じ込めずに

いてほしい——そうなってほしくない。だから部屋に呼んだのだ。

「私……どうしていいかわかんないよおおおおおおおおおおお

!!」

「……ホントはね。今日、2人きりで過ごすつもりだったのよ。昔の

思い出とか話しながら今後についてとか……さ。そしたらベスが食

いついてきてさー。『わたくしも連れて行ってくださいまし!』だつ

てさ」

「……なんで」

泣きそうになりながら如來が口を開く。

「琴乃様のところも最初から行くつもりだったけど、綾子さんにいき

なりケンカ売られるなんてね……」

「なんで明日ねえはそんな落ち着いてられるの!なんで……」

如來を抱き寄せる。

「バカ!……そんなわけないでしょ。泣きたいのは私だつて同じ……

何年一緒だったと思ってるのよ」

「え……」

「けどね如來……前に京夏お姉様に言われたことがあるの……。『もう少し大人になりなさい』って」

「うそー!」

「うそじゃないわよ……。如來にも前に話したでしょ? リリイを殺めそうになったこともあるって……」

「……」

「如來も、もう少し大人になりなさい。今の如來は情に入りすぎる。今のままじゃ如來も……。私みたいに同じ過ちを繰り返してほしくないの」

「私……。今でも明日ねえがあんなことしたって信じられない……。」「それでも……。信じられないのなら生徒会の誰かに聞いてみたら? 祀様なら教えてくれると思う」

生徒会の名前を出した途端黙ってしまった。

「それともうひとつ——」

如來のおでこにキス。

「えええええっ!?!」

顔を真っ赤にする如來。

「誕生日おめでとう。こんなドタバタになるなんて思いもよらなかつたわ……」

再び如來を抱き寄せる。

「あ……。あ……」

口をパクパクさせている。あのとときの私と同じだ。

明日香さんと話した後。私は部屋の中で一人悶々としていた。

確かに明日香さんのことをライバル視はしている。と同時に良き友人でもある。

部屋はお父様を説得して普通の部屋にしてもらったことには。それでも相部屋ではないのだが。

トントン・・・

「ベスちゃん」

・・・まどか 円さんの声？

「開いてますわ」

ガチャ・・・

「ごめんね。急に押しかけて」

「・・・よっ、お嬢」

円さん・・・と、みどりさん？

「珍しい組み合わせですわね・・・」

「珍しいって・・・あたしは腫れ物扱いかよ・・・」

「そういうわけでは・・・で、何か用ですか？」

「あさつて蘆乃ちゃんのの誕生日だよね？」

「それがどうかしまして？」

「実はね・・・」

と私に耳打ちしてきた。

「なるほど・・・」

実はすでにプレゼントは確保していて、後は渡すだけ・・・のつもりでいたのだが・・・。

「ベスちゃん周りから見てバレバレだよ？」

「何が・・・ですか？」

「ほんつと自覚ないんだな・・・」

「だから！何が・・・と聞いてるんです！」

「そういう素直じゃないところだよ。お嬢だって自覚してるんだろ？」

「う・・・」

私自身は隠せてるつもりでいたのだが・・・やはり私は人と接するのが下手ということだ。

「・・・私だって」

さすがにもう限界だろうか。

「私だって好きでこんなになつたわけじゃないわよ！」

「べ、ベスちゃん!？」

「お嬢!？」

普段明日香さんにしか見せない素顔。

「ごめんなさい・・・驚かせて。普段お嬢様ぶってはいるけど・・・これが素の私」

「そ、そう・・・なんだ・・・」

「普段とのギャップが・・・」

みどりさんをキツと睨みつける。

「いや、だからって馬鹿にしたりしねえよ・・・ただ、意外・・・だったからさ・・・お嬢つてもつとこう・・・人付き合い慣れしてるのかと思った」

「人付き合い慣れなんか・・・してない・・・今はもう平気だけど・・・メルクリウスにいた頃は最初の頃の藍さんみたいな感じだった」
「え・・・」

「百合ヶ丘に来て・・・初めてできた友達が明日香さんと円さん。だからすごい嬉しかった。LGレギオンに入れたのも奇跡だと思ってる。そんな私が蘆乃を見て、自らの殻に籠もろうとしているのを見て『変えてあげなきゃ』って思ってる・・・」

まさか円さんたちに守護天使になった経緯を話すことになるとは。

「だからあんな・・・1週間も李組の教室でストーカーまがいなことしてたんだ・・・」

「え・・・そんなんしてたのかよ・・・さすがに引くぞ・・・」

「正直あれはやりすぎた、と思ってる。けどおかげでグランギニョル社内で問題になっていたことも分かったから・・・」

「問題?なんの?」

「円さんたちには関係ないわ。楓さんにも黙ってもらってるから」

さすがにあのCHARMの話を大事おわいどにしたくはないので濁しておく。二川さんにでも聞かれたら一大事だ。

「・・・話が反れましたわね。そんなわけで、わたくしの性格はそんなですから、今更変えるだなんて・・・」

「そんなこと一言も言っていないぞ?」

「別に悪いともなんとも言っていないよ?」

「ほんと、勝手な思い込みするところもお嬢の悪いとこだよなー」
「だからそれはっ!」

明日香さんにも散々注意されているが、そこを直せ、ともなんとも
言われないのでそのままにしていた。

「なんだ・・・結局妹シノブののろけ話で終わるんじゃない・・・心配して損
した・・・」

「ベスちゃんは蘆乃ちゃんとうとうしたいの?」

「私は・・・」

私は・・・蘆乃とうとうしたいんだろう?」

「で、明日香隊長のところにお泊りした、と」

「別にいいじゃんかー」

翌日の会話。

「そうか・・・明日香隊長とそういう関係なのか・・・」

「だから何もなくて言ってるでしょ!」

朝から因悦いえるにからかわれている。

「ホントかなー? 私たちに黙ってるだけでホントは激しい夜を・・・」

「因悦・・・しつこいよ?」

「ダメだよ如來ちゃん! CHARM出しちゃ!」

藍あいちゃんに怒られてしまった。

いくら悪ふざけとはいえCHARMはやりすぎた。昨日も明日ね
えに注意されたばかりじゃん・・・。

「・・・おはよう」

蘆乃は相変わらずそっけない挨拶だ。同じLGなんだからもう少し
馴れ合いをしてもいいと思うんだけど・・・。

「おはよう蘆乃。なんか冷たいー」

「別にそういうつもりはないわ。ただ、ベタベタするのは違うって
思ってるだけ。ていうか、だいたい、如來が明日香隊長とベタベタし
すぎなのよ」

「どうだか。実はこっそり櫻子様とベタベタしてたりして？」
「・・・」

冷たく刺さるような視線。蘆乃が本気で怒っている時の目だ。
(やっぱ・・・言い過ぎた)

「冗談・・・冗談だつて・・・」

「ふんっ・・・」

とパイとそっぽを向く蘆乃。

これは後で何かお詫びをしないと。

昼食の時間になり、藍ちゃんと合流。

「蘆乃ちゃんに謝らないの？」

「謝らないもなにも・・・どこにいるかわかんないもん・・・」

「教室隣だよ？それに演習時間もかぶつてないし」

とは言うが、結局訓練前まで蘆乃を見なかった。

「・・・私も、自分を出せばいいのに」

2年生のラウンジにいた。

櫻子姉様と守護天使シュッツエンゲルの契りを結んでから妹らしいことは一切して

いない。というよりは言い出せなかった。

形式的に仲がいいように見せているだけなのかもしれない。

「・・・蘆乃。どうしてここに？」

櫻子姉様に会いに来た、なんて素直に言えない自分が悔しい。

「一緒にお昼食べようと思ったので」

「・・・ほんと、誰かさんそっくり」

櫻子姉様!?

「素直になれないところはそっくりだと言ったんです。会いに来たなら来たとはつきりおっしゃればいいのに」

今日の櫻子姉様は違う気がした。

みるみるうちに顔が真っ赤になる。

「で、どうしましつて？」

「えと・・・あの・・・ここじゃ話にくいので・・・後で足湯へ」
食事を済ませ、櫻子姉様と足湯へ。

「すみませんわざわざ」

「いいんですのよ。気にすることはありませんわ」

そして、姉様の後ろから抱きつく。

「蘆乃!？」

「・・・ごめんなさい姉様。今朝、如來の話を聞いてたらその・・・羨ましくて、つい」

「如來さん?」

「私・・・如來みたいに感情を表に出すのは苦手なので・・・だからこんな形でしか・・・」

「それは・・・私も同じよ・・・」

「姉・・・様!？」

今なんて・・・!?

「ごめんなさい・・・驚かせたわね・・・これが本当の私。蘆乃には知っておいてもらいたいから」

「・・・はっ」

櫻子姉様の素顔をやっと初めて知った気がする。

午後の講義が始まるまで一緒に過ごしていた。

「まったく・・・如來と蘆乃はどこ行ったの?」

訓練の時間・・・なのだが、いつも一番乗りで控え室にいる如來と蘆乃の姿がない。

「さあ・・・そのうち来るんじゃないですか?」

その様子だとベスも知らないようだ。困ったな・・・。

携帯端末の位置情報から探るか・・・と思ったが2人とも位置情報を切っている。

「みどり、悪いけど探しに行ってもらえる?」

「えー、やだよめんどくさい」

「みどり……今日は特に蘆乃いないと困るのよ。どういう意味が分かるわよね?」

とベスのほうをちら見する。

「え……お嬢関係あんの? ならしやあないか……ちよつと行つてくる」

レアスキルを使いそのまま探しに行くようだ。

「……明日香さん、みどりさん騙すの上手くなりましたわね」

「騙すつて……」

「いいのいいの。あれぐらいやらないとみどり乗つてくれないから。1年のときはあれよりもつとひどかったのよ?」

「そうなんですか?」

「とにかく訓練はサボる、訓練中は非協力的、で、運動神経いいから余計たちが悪かったのよね」

「なるほど……」

自分で作ったクッキーを食べながら喋る。琴乃様みたいにもつと美味しくできないかなあ……。

とりあえずはみどり待ちだ。

「まったく世話が焼けるなあ……」

あたしが1年のときは自分が探される側だったが、2年に上がり逆の立場になるとは。

ラツキー。灯音様発見。

「ごきげんよー灯音様」

「みどり……? どうしたの?」

「ちよつとお願いが……」

事情を説明する。

「なるほど……」

「ただ縮地使用して闇雲に探しても見つからないと思うんで探す手伝いを……」

「わかった」

といい、目を赤くしレアスキルを発動してもらおう。

「いたよ・・・山くちなし櫃館の・・・裏の楠のところ・・・」

旧館の裏？あんなところに用なんてないだろうに。

「ありがとう灯音様」

礼を言い急行する。

現場に着いた。やっぱりケンカしている。CHARMを抜かない言い争いならまあいいか、と思っていた。

「知らないわよ！」

が、いつものケンカと様子が違う。

「私だって・・・あの出来事がなかったらこんな風にはならなかった！あんだだってそうだったでしょ？」

「・・・わかんない」

「わかんないってなによ！」

「・・・言葉の通りだよ。私さ、小学校上がる前に両親亡くしてるんだ。それでおばあちゃん家に引き取られて・・・近所に住んでた明日ねえと初めて会った」

そっか・・・如來が明日香にベツタリなのはそういうことなのか・・・明日香が如來に熱を上げ気味な理由も。

「だから明日ねえはホントのお姉ちゃんみたいな存在。憧れもだし、私の理想」

「だから何！自分だけ悲劇のヒロイン気取り？冗談じゃないわ！」

「なら蘆乃にとって櫻子様はどういう存在？自分の母親から逃れるための緩衝材？なら聞いて呆れるわ・・・守護天使も偽りってことよね？」

どうする？これ以上は最悪の事態になりかねない。

「偽り？意味わかんない！話が跳躍してるし。大体私の守護天使とあんたと関係ないじゃない！」

仕方ない、少々強引だけどやるか。レアスキル発動！

2人に近づき、

バツ！

「みどり様!?!」

お互いの両手を掴み、無言のままLG控え室へ。

「ほい。連れてきてやったぞ。なんかまたケンカしてたけどな。お前
らよくするよなあ……」

またケンカしてたの……。怒りを通り越して呆れてしまう。

「ベス。悪いけど今日は隊長代理お願い。2人と話すわ」

「え……。わたくしは一緒じゃないんですの?」

「あんたがいると事がややこしくなりそうだからダメ。ホントは今日
ノインヴェルトの訓練するつもりだったんだけど……。別メニューに
するわ」

と、メモを取り出し簡単に箇条書きして手渡す。

「わかりましたわ。全くいつもいつも面倒事ばかり……」

ぶつぶつ言いながらも素直に従うのはベスらしいというか。

「他のみんなも準備して?」

2人ともしょんぼりしている。

他のLGメンバーを見送り、3人だけになった控え室。

「ど?」

「……」

2人とも黙っている。

「蘆乃、お母さんのことでも言われて頭に血が上った?」

「……なんで知ってるんですか」

「私はLG隊長よ。LGメンバーのことを知る権利があるわ」

ホントは二水さんからおおまかなことを聞いたのだが。

「如來、あんたもあんたよ。言っつていいことと悪いことがあるわ」

「私は何も言っつてない!ただ蘆乃が素直にならないからその……」

私がため息するなり、

「……如來は如來、か。たかだか1年ぐらいで変わるとは思っつてなかつ
たけど」

「なんの話ですか？」

「これから1週間2人には私のやつてることに付き合ってもらおうわ」
「え……」

2人とも声を上げる。

「如來は早朝ランニング、は蘆乃は私の秘密の特訓にね」
「……ヤだ」

最初に文句を言ったのは如來だ。

「私も秘密の特訓がいい……」

そっちの文句か。ダメダメ！ここで折れたら如來を甘やかすことになってしまう。怒ろうとしたときだ。

「うっ……」

少しくラクラした。立ち眩み？ベスの言うとおり少しムチャしすぎてるのかな私。

「明日香姉様大丈夫？」

如來に心配だけはかけさせたくない。

「大丈夫……ただの貧血よ」

気を取り直し、

「如來。それじゃあんたへの罰にならないから意味ないわ。蘆乃もそれでもいい？」

「はい……問題ありません」

「むう……」

如來は納得行っていない。

「とにかくこれは隊長命令よ。分かった？」

「はい……」

如來はともかく、蘆乃からいろいろと聞きたいことがある。

翌日。

新館の如來の部屋の前。ちなみにだが、私が使っていたB棟の45室だ。

ガチャ・・・

いかにも眠そうに目をこすりながら如來がでてきた。

「おはよう・・・眠い」

「眠いのは私だって同じ。さ、行くわよ」

これは前々から思っていたのだが、如來は基礎テクニクはあるものの、持久力がからつきしダメということ。京夏お姉様が隊長のときは訓練の半分を体力作りに時間を割いていた。これは私の至らないところだとは思っている。

1周走り終わってから。

「あの・・・一ついい?」

「なあに?」

「これ毎日やってるの?」

「そうよ。それがなにか?」

「う・・・」

言葉に詰まる如來。

「如來の欠点。短時間でなんとかしようとしてるところ。30分・・・とは言わないけど、せめて連続で15分は戦えないとね」

「さ、30分って・・・」

「去年対外手合わせであさがお権様と久しぶりにやったことがあって、30分CHARM振りっぱなし。最終的に私が勝ったわ。さすがに終わった後は身体が動かなかったけど」

「す、す(すぎる)・・・」

「で、今の私に足りないものは・・・って考えたときに持久力だ! っつことに気づいて、それから毎朝走ってる」

「・・・やっぱりかなわないや。なんでもこなして、みんなのことをちゃんと見てて」

「私は・・・天葉様みたいな才能もないからね。さ、走るわよ」

「はい・・・」

百合ヶ丘の学園の敷地は一周すると3キロ近くある。2周もすれば大体30分ぐらいだろう。

走って戻ってきた時だ。

「あ、足が動かない・・・」

「ホントだらしないわね・・・ヒュージと長期戦になったときどうするの。こんなもんじゃ済まないわよ?」

「それはそうなんだけどさ・・・やっぱリスパルタだあ・・・」

言いながらそのまま倒れ込む如來。

今日の訓練は実は軽めにしてある。少し緩めかなーとも思っているがまあいい。

訓練後、蘆乃と一緒にとある場所へ。

「あの、ここって・・・」

以前ノインヴェルト戦術の初練習をしたときに訪れた切り通しだ。ただし、狭いところではなく、穴がある広いところがあるのだが、そっちだ。

「切り通しね。大昔の通路だったところよ。はいこれ。普通の訓練弾じゃなくてこつち使ってたね」

「・・・?」

蘆乃は不思議がつているが、とある特殊弾を渡す。

「普段はいつも1人でやってるけど、蘆乃なら平気かな」

「・・・意味がわかりません」

「まあいいわ。私が手本見せるから。何をどうやってるか見ればわかるわよ」

ガチャン!

タングズニルをシューティングモードにして。切り通しの壁に向かって、

ダンッ!

1発撃つ。通常壁に激突すればそのまま爆発するのだが、瞬間マギスファイアを帯び、跳ね返ってきた。

私のほうに飛んでくる。

「ふっ!」

上手くかわす。そして別の壁に激突し、跳ね返って再び私の元へ。グンッ!

今度は避けずにそのまま受け止め、切り通しの通路へ投げる。

マギスファイアはそのまま消滅していく。

「これって……」

「反射神経を養う訓練ね。いずれ組み込むつもり……なんだけど、この特殊弾……数があまりないのよ……。蘆乃の欠点は攻撃のテクニクは申し分ないけど、攻撃の判断で躊躇して防御まで回らないところがあるわ」

蘆乃はテクニクは抜群なのだが、反撃のとき一瞬迷うところがある。

「……よく私のこと見てますね。櫻子姉様がライバル視するだけはありません」

ここでベスが出てくるとは思わなかった。

「と、とにかくこんな感じ。やってみて」

「はい」

ダンッ！

蘆乃が特殊弾を撃つ。

壁に激突しマギスファイアに変化。ちなみに失敗して当たっても怪我をすることはない。

「ひゃあー！」

バンッ！

「いったー！」

そのまま腹部に直撃した。

ああそうか。サブスキル恩恵もあるのか。レアスキルでも鍛え方次第ではサブスキルが覚醒することもある。

「そのうち慣れるわ。もしかしたらサブスキルが覚醒するかもね」

持ってきた特殊弾を使い終わり、その帰りでのことだ。

「あの……明日香隊長」

「何？蘆乃」

「私にこんな訓練させる……以外の目的もあつたんですよね？」

……この子には嘘は通用しないらしい。

「そうね。ベスから聞いたわ。お母さんと仲が悪い、って。如來と揉めたのもそのことでしょ？」

「それは・・・ちよつと違います」

蘆乃が口を開く。

「確かにあの人とは仲が悪いです。けど、如來とケンカしたのは・・・如來の誕生日に隊長の実家に押しかけたじゃないですか。それで・・・私と櫻子姉様が偽りの守護天使なんじゃないかって・・・突然言い始めて・・・それで・・・」

「

偽りねえ・・・。

「あの子時々突拍子もないこと言いだすからね。気にしないで」「いいえ。そこは気にしないので」

「で、明日だけど・・・訓練同様なしでいいわ」

「え・・・いいんですか?」

「ええ。元々そのつもりだったしね。せつかくの誕生日なのに台無しでしょ?」

「そんな・・・命令は命令なので・・・」

「私もね・・・少しやりすぎてるな・・・って思ってるところがあつて・・・あ、訓練じゃなくてね。ちよつと見直したいのよ」

「はあ・・・」

「だから遠慮しなくて大丈夫よ」

「・・・はい。ありがとうございます」

「何かいいことあるといいわね」

今日は私の誕生日だ。

「おはよう蘆乃ちゃん」

藍? 珍しい子が私の部屋の前にいる。

「お、おはよう・・・」

「如來ちゃんは明日香隊長と一緒にランニングした後でクタクタだから遅れるって」

「そ、そう・・・」

明日香隊長そこは甘やかさないんだ……。もしかすると怒らせると怖いタイプなのかもしれない。

「ねえ、今日訓練以外で何かある……。とか聞いてない？」
「どうしたの急に？」

ダメだ。完全に不思議がられてる。藍は今日私が誕生日だってこと知らないんだった。

「ごめん、なんでもない……」

「変なの」

今日は講義より演習が中心だ。けど、

「あいたつ！」

「榛原、今日はどうした？集中できていないぞ」
はしばら

指導官に注意されてしまった。櫻子姉様から何もなくて集中出来ない、とは言えない。

「蘆乃ちゃん」

……。円様？

「なんでしよう？」

「ちよつとこつち来て」

と、円様に2年生のラウンジまで引つ張ってこられた。

「はいこれ。お誕生日おめでとう」

え？少し大きめの包み紙を手渡される。

「……私の誕生日知ってたんですか!？」

「ベスちゃんから教えてもらったの。去年は明日香ちゃんにカエルの置き物作ってプレゼントしたんだよ？」

「中、空けてもいいですか？」

「いいよ」

とニコニコしている円様。

包み紙を開ける。

すごい！チャーミイリリーのぬいぐるみだ。こんな大きさのぬいぐるみなんてどこにも売ってない。デフォルメされているので愛嬌もあって、しかもかわいい。ということは円様の手作り？

「ありがとうございます！あの……。チャーミイリリーが好きって誰か

ら……」

「ミリアムさん？」

……何日か前に桜子姉様と一緒にミリアム様の工房には行つたが、それにしては作るの早くないですか？

そこはツツコミどころではないのでまあいい。

「でもうれいしです。大切にします！」

円様と別れ、桜子姉様を待つも来る気配がない。

その後。

「……どうしたの？」

明日香隊長……。

「あの……桜子姉様は？」

「え、今日ベスと会ってないの？」

私は泣きそうになりながら無言で頷く。

「ベスならさつき1年のラウンジに行つたわよ？」

私は明日香隊長に一礼をし、ダツシユで1年のラウンジへ戻る。

1年のラウンジなんていつぶりだろう。よくここで明日香さんと円さんでお喋りしていた。

普段何もないときはここで蘆乃は勉強をしていると聞いたが……。

「……いませんわね」

「あ。ごきげんよう桜子様」

藍さんだった。

「蘆乃を見かけませんがどちらに？」

「蘆乃ちゃんならさつき円様と2年生のラウンジへ行きましたよ」

円さんと？。そういえばプレゼントを用意してたはず。

仕方ない。向こうに戻ろう。

「・・・あれ？」

大急ぎで戻ってきたが、いない・・・。

「あ。蘆乃だ。櫻子様と一緒にじゃないんだ？」

如來・・・一言言われたくないセリフ。頭に血がのぼる。

気がついたらCHARMを抜いていた。

「・・・何か文句でも？」

「ちよー！待った待った！なんでCHARM抜くの!？」

「あ・・・ごめん・・・」

完全に周りが見えていない。慌ててCHARMを元に戻す。

「つまり、櫻子様とすれ違いで今日全く会えてない、と」

泣きそうになりながら無言で頷く。

「あのさ蘆乃。なんのための携帯端末？」

あ・・・今の今まで忘れていた。普段使うことがないというのもある。

「もしかして・・・使ったことがないとか？」

如來を睨みつける。

「冗談だって・・・じゃあ今まで予備隊とかの連絡ってどうしてたの？」

「どうって・・・」

予備隊のときは・・・直接集まるか、近くに因悦が居ることが多かった。それは今も変わらないのだが。エリユーズニルに入ってから端末で連絡をもらってはいるが、メッセージではなくメールで見ることが多い。

「因悦から直接聞くことが多くて・・・どうやってたかは知らない」

如來がため息をつくなり、

「しようがないなあ・・・端末貸して？」

と私に端末を出すように促してきた。この際文句言ってもしようがないので素直に従うことにする。

「・・・」

無言で端末を渡す。

すると如來自身の端末を見ながら勝手に操作しだした。

「ちよつとー」

「はいはい……いいから」

そしてぶつぶつと言いだめる如來。

「うわ……これじゃ誰からも連絡来るわけないじゃん……これをこ
うして……」

しばらくしてから、

「これでよし。後は……」

「ちよつと。返して!」

「うるさいよ。もうちよつと……」

如來にあしらわれた……。

「返してって言ってるでしょ!」

如來に言うも、

「あのね……勘違いしないでよ? あんたのためにやってるの!」

「……私?」

「そうだよ。ていうか、なんでLG入ってるのに誰とも連絡先交換し
てないの?」

確かにそのとおりで。何も言い返せなかった。

「……ごめん」

「……謝るぐらいなら最初から交換すればいいのに。はい終わったよ。
他のLGメンバー全員分登録したから」

扱い乱暴だな……。如來のやつ、端末を投げ返してきた。予備隊
時代、因悦と亡くなった麻友、当時の予備隊隊長ぐらいしか連絡先は
交換しなかった。

「じゃ私は明日ねえの所行くから。後は自分で頑張れ。今日誕生日で
しょ?」

とだけ言い残し、如來は行ってしまった。自分で頑張れ、か。

しばらく端末と格闘すること10数分。ようやく文章を打ち終え
たときだ。

「……蘆乃」

櫻子姉……様?

「どうしてここが……」

「何をおっしゃいますの。自分でここだって言ったじゃありません

か」

「え……私何も……」

慌てて端末の送信履歴を見る。すると――

『如來から連絡先を聞きました。今1年のラウンジにいます』

如來の仕業だ。まったく私に黙ってこんなことまで……。すると、

「あの……姉……様!? 周りが見てます……」

櫻子姉様が私を抱きしめる。

「別に恥ずかしがることはありませんわ。わたくしたちは守護天使と妹なのでから」

「……それでも恥ずかしいものは恥ずかしい、です」

顔が真っ赤になっていくのが自分でも分かる。

「……嬉しいのよ。あなたがはじめて私にメッセージくれたことが」

小声で私に囁く。一昨日私に見せてくれた素顔。素直に喜んでくれているのだ。

「……はい」

これは如來から私へのプレゼントだ、ということにしておく。

「なんだ、蘆乃デレツデレじゃん」

今日思ったこと。藍ちゃんはキツカケがなかっただけで、普通に会話できるようになった。今では友達もできたらしい。対して蘆乃は自分から話しかけない、メンバー以外とは必要最低限の会話しかしない、と言った感じだ。

本人曰く自ら断った、とは言っているが……。

「……覗き見とか趣味悪いわね」

「うわあつ！ あ、明日ねえ」

私がかつちのラウンジ行こう、と声をかけて呼んだのだが……。まさかこんな展開になってると思ってもいなかったので、つい物陰に隠れて見ていたところを降りてきた明日ねえに見つかったわけだ。

「予想外の展開だった、つてところかしら?」

「う……」

明日ねえするどい……。

「連絡先までにするつもりだったの！どうせ蘆乃のことじゃすぐ入れないと思ったから、つい……」

「ケンカしてる割にそういうお節介好きよね」

「う、うるさい！いいじゃん別に……」

「はいはい……夫婦喧嘩はなんとやら、ね」

「ひどい……」

ともあれ、私と蘆乃は姉同士が親友であり、お互い妹だ。そしてLメンバーでもある。明日ねえは私を次期隊長にしたいらしいが、それはどうなるかわからない。これからの私次第というところだろうか。

だからといって甘えていいわけじゃない。私自身リイとして……人としてまだまだだと思っっている。もっとがんばらなきゃ。

休日

今日は百合ヶ丘に来て初めての休日だ。

休日とは、CHARMの携帯と制服着用義務はあるものの、講義レキオンやLGの訓練等一切ない日のことで、基本的には一般的な休日と何ら変わりはない。

「・・・なんで私まで」

蘆乃のを引つ張り出してきた。

「えー。普段訓練以外は引きこもりなんだからたまには外に出なきゃ」

とは因悦いえつだ。

「私、百合ヶ丘来てロクに観光とかしなかったから楽しみなんだよねー」

明日ねえに教えてもらったクレープのお店とか、灯音様に教えてもらったグッズのお店とか、それ以外にも行ってみたいところが山ほどある。

「そういえば藍あいちゃんは？」

「今日は明日香隊長と一緒にだって」

珍しい組み合わせだ。明日ねえと藍ちゃんが一緒かあ。

「で、如來はどこか行きたいところある？」

「えっとね・・・」

まず最初に来たのはケーキのお店だ。リリイに限らず女子なら甘いものに目がないはず。

「んーおいしい」

「でしょ？次は・・・」

因悦に連れられてやってきたのは明日ねえに教えてもらった所とは違った雑貨屋だ。

「鎌倉周辺は何件かあるけど、ここは最近できたんだって」

へえ。最近かあ・・・。

一方の蘆乃はつまらなそうにしている。

「蘆乃、そんなにつまんない？」

「違う。そういうわけじゃ・・・」

「気にしなくていいよ。蘆乃、こういう子だから」

え・・・因悦の言ってる意味がわかんないんだけど・・・。

「こうやって黙ってるときは蘆乃も楽しんでるんだって。私たち付き合いいから」

そ、そうなんだ・・・。

店内に入りいろいろ見て回る。お、これは。

こっそり画像を撮影して明日ねえに送る。

『因悦たちと一緒にいるけど、こんなの見つけたよ』
しばらくして、

『如來買つといて。代金は後で払うから』

と返ってきた。

因悦が私の取ったものを見て、

「・・・なに？何か気に入ったものあった？」

「あ、これ？明日香姉様にね」

「へえ・・・カエルかあ」

「因悦は知らないんだっけ。明日香姉様、カエルグッズ集めるのが趣味なの。部屋見たらびっくりするよ？」

「確かに明日香隊長の実家の部屋すごかった・・・壁から天井、部屋の至るところにカエルグッズがあった」

やっと蘆乃が話に乗ってきた。

「蘆乃はそういう趣味とかないの？」

・・・知っててわざとやってるのだが。本人から直接言わせたいし。

「・・・別に私のことはいいじゃない」

「別にいいじゃん。今日ぐらいは普通に答えてよー。ケンカしたくないし」

「まったく、素直じゃないなあ蘆乃は」

と、因悦がとあるグッズを蘆乃の前にちらつかせる。

「・・・因悦わざとやってるでしょ」

「素直じゃない蘆乃が悪い」

「う・・・」

「あれ？如來と蘆乃と・・・因悦。ごきげんよう」

そこへ灯音様が来た。ニコニコしている。

「ごきげんよう灯音様」

訓練以外あまり灯音様に会うことはないのだが、明日ねえからいろいろ話は聞いている。

「如來。今日は・・・明日香と一緒に・・・じゃないんだ？」

「えと・・・今日はそう・・・ですね。別にケンカしたとかじゃあないです」

ホントにたまたま別行動なだけです灯音様。

「そう。なら・・・良かった。で、因悦は・・・なんでチャームイリリイの・・・ストラップ持つてるの？」

「あ。これは蘆乃が・・・」

と言いかけて、

「いえ、因悦が好きらしいです」

慌てて蘆乃が因悦を指差す。

「そう・・・なんだ」

灯音様完全に誤った認識したな。

「じゃ私は違うお店行くから」

と言つてその場を立ち去ってしまった。

「蘆乃は罰として私たちに何かおごりなさい」

「・・・なんでよ!」

「私に濡れ衣着せたのは？」

しばらくしてから、

「・・・わかったわよ」

渋々答える蘆乃。

明日ねえに頼まれたストラップの会計を済ませ、次のお店へ。

「私、行きたいところあるんだけど」

「へえ・・・長いこと鎌倉にいるけどここは知らなかった」

「明日香姉様に教えてもらったんだ」

「明日香隊長が・・・」

少し街から離れてはいるが、ヒュージ警戒区域に近いラーメン屋にやってきた。

「まあ・・・ラーメンなのがちよつと残念だけど」

「別にいいじゃん。私にとってはラーメンとは切っても切れない縁なの！」

「櫻子姉様も前にここに來たつて聞いたことがあるわ」

「へえ・・・で、学園戻つて大泣きしたとか？」

ガッツ！

「いったあー！」

蘆乃に頭の上から思いつきり殴られた・・・。

「ひどい・・・誰も櫻子様のことだなんて言つてない・・・」

これ以上は蘆乃の機嫌を悪くしそうなのでやめておく。

「如來。これ以上蘆乃からかうのはやめときなよ。またケンカになるよ？」

小声で耳打ちされた。

「でもここホントに美味しいらしいから」

一度來たかつたのは事実だ。だから蘆乃たちを連れてきたのだが。

實際食べて見ての感想。確かに美味しい。太麺なのが残念だが、スープの絶妙な絡み具合と味のバランス。尾上月島亭のあの味と比べるのはどうかと思うが、それに負けないぐらいなのは確かだった。

「あー美味しかった」

店を出てから。結局ラーメンの話となり、

「明日香隊長の実家がラーメン屋で、如來の誕生日の日に食べたんだけど美味しかった」

「そ。それはよかつた。じゃあ・・・」

「あんた達リリースだろ？助けてくれ！」

えっ？

GYAAAAA!!

突然呼ばれ案内されたのだが、確かにスモール級とおぼしき野良ヒュージが暴れている。ただ、場所が――

「・・・どうする如來？」

「どうするって言ったって・・・」

複数体確認できるのだが、肝心の場所が少し離れている。

オマケに視覚系レアスキルじゃない3人が揃いも揃っている。とはいえ迷っている時間はない。

「・・・私がなんとかする」

「何とかするって・・・ちよつとー!」

フォン・・・

右手をかざしCHARMを起動させる。

ガチャン!

シューティングモードへ切り替え。

「この距離じゃ無理だよ!命中するかどうか・・・」

私だって明日ねえに鍛えられてるんだ。照準を睨む。

「あそこまで行く方法考えよう?」

「いいから黙って!」

つい2人を怒鳴ってしまった。後で謝らないとな。集中・・・集中・・・

今だ!トリガーを引く。

パンツ!

GYAAAAA!!

よし。1体命中。

「・・・すごい。命中した」

因悦がボソツと言う。

この調子で残りも・・・と思った時だ。

パンツ!パンツ!

「え・・・」

音だけが聞こえ、残りも駆逐されていた。一体誰が?

「あ。如來ちゃんたちだ。ごきげんよう」

円様・・・と、灯音様？

「ごきげんよう。どうしたんですか？」

「あれ？どうしたの？・・・あそこの・・・ラーメン屋にいたの？」

そのものズバリを言われ一瞬動揺。

「ま、まあ・・・」

「丁度・・・食ベに行こうって思ったら・・・偶然そこで・・・円と会って、店の前通ったら・・・ヒュージが出たって・・・いうから・・・来たん・・・だけど・・・」

なるほど。偶然か。

「如來ちゃん、やっぱり明日香ちゃんの妹だね。レアスキルなしでここから撃つちゃうんだもん」

褒められてるのか馬鹿にされてるのかよくわからないがまあいいや。ちなみに円様のレアスキルは天の秤目だ。

「明日香姉様にも鍛えられたけど・・・半分は自分の努力ですよ。姉様にも言われたけど・・・努力なしじゃ立派なリイにはなれないし・・・」
「けど・・・驚いた・・・けど、ここからあそこまで・・・400mは・・・離れてるよ？」

蘆乃たちは驚いている。

「けど・・・それでも勝ててない・・・ですよ？」

「どうしてそう思うの？」

円様が私に尋ねる。

「別に明日香ちゃん関係なくない？だって如來ちゃんは如來ちゃんだよ？」

「そうだね・・・」

「灯音様・・・」

「それにしてもビックリした・・・いきなりここから撃つ！とか言い出すから・・・」

因悦だ。

「あはは・・・」

私は苦笑いしながらも蘆乃のほうを見て、

「明日香姉様がすごいって思うのは・・・私が単に憧れてるだけじゃないくて・・・常に努力する人だからだったんだ。だから少しでも近づきたい！って思ってた必死で射撃の練習やって・・・。結局百合ヶ丘まで追いかけてきちゃったけど、それでもかなわなくて・・・だから私もつと頑張らなくちゃ」

「明日香は・・・ホントすごいよ・・・今のLGを・・・引っ張ってる・・・京夏より・・・スゴイかもね」

とは灯音様だ。

「ところで円様」

「どしたの蘆乃ちゃん？」

「さっき如來が勝ってない・・・って言ってましたけどあれってどういう意味ですか？」

「あー・・・」

円様が言いよどんでいる。蘆乃の負けず嫌いが始まったよ・・・。

「言葉通りの意味だよ。あんただってウワサは知ってるでしょ？」

天の秤目リリイ——LGに入るとき明日香隊長に言った言葉だ。高等部の先輩でレアスキルなしで寸分違わず肉眼で見える範囲の射撃を命中させるリリイがいるという・・・のは中等部の風のウワサで聞いていた。

如來の能力にも驚いたが、灯音様のさきほどの話ではそれ以上だということだ。

「けど、そこまでだなんて思ってなかった。私も・・・あなたに負けないから」

ただ如來相手に悔しいだけではない、お互いのいいライバルとしての言葉。

私も・・・もつとがんばらなきゃ。「あの人」に認めてもらうために。

「あんっ！あああっ！いやああっ！」

今私は信じられないことに明日ねえに自分の胸を触られている。

「気持ちいい！気持ちいいよおー！」

しかもめちやくちや気持ちいい。

私も明日ねえもあまり胸は大きいほうではない。櫻子様が羨ましい。

「・・・如來」

誰かの声が聞こえる。

「・・・如來ってば！」

バツ！

「待つて！それ以上は！」

というところで目が覚めた。・・・なんだ。夢か。

「・・・何口走ってるの？さてはそういう夢でも見たな？」

ルームメイトからのするどいツツコミ・・・。

「な、なに朝からくだらないこと言ってるの！なんか用事あったんじゃないの？」

「後30分で朝食時間終わっちゃうよ？」

・・・は？

慌てて携帯端末の時計を見る。

「なんでそれを早く言ってくんないの！着替え・・・着替え・・・」

「私はずーっと起こしてたけど？なんか幸せそうにニヤニヤしながら寝言言ってた」

みるみるうちに顔が真っ赤になっていく私。

「忘れて！今すぐそれ忘れて！」

「幸せボケ？」

「違うって！」

慌てて制服に着替えてルームメイトと一緒に食堂へ。

「・・・ねえ安芸乃。そんなに私そういう風に見える？」

川端安芸乃。私のルームメイトだ。初等科からの生粋のリリイで蘆乃とはライバルだと思っていたらしい。蘆乃本人はどう思ってる

かわからないが。

安芸乃は少し考えて、

「そう・・・かな」

「う・・・」

そのものズバリを突っ込まれた・・・。やっぱり・・・。少し明日ねえから距離置いたほうがいいのか・・・。

「おはよう如來。安芸乃さん」

因悦だ。

「おはよう因悦」

「どした？元気ないじゃん」

いや、元気はありあまっているが。

「・・・そういう風に見える？」

「どう見てもそうだよ。いつも朝一番に声かけてくるのにポケーつとしてるし」

「・・・ようやくから元気だって自覚したんでしょ」

蘆乃・・・。

「何？朝からケンカでも売ってんの？夜中にこっそり寮抜け出して櫻子様のところに会いにでも行ってたんじゃないの？」

「はあ？根の葉もないデタラメ言わないでくれる？あんたのほうこそ行ってたんじゃないの？」

「昨日は戻ってすぐ寝たよ。証人なら目の前に」

と安芸乃を指差す。

「如來ちゃん寝るのめちやくちや早かったね。単位大丈夫？怪しいんじゃないかったっけ？」

う・・・安芸乃・・・それ今ここで言う？

「・・・おい副隊長」

因悦に睨まれてるよ・・・。

「な、なに・・・」

「明日香隊長に言っただけで訓練止めてもらって。今日は勉強会やる」

逃げよう。なんか適当に言い訳を・・・。

ピピピ・・・

携帯端末が鳴った。明日ねえからだ。

『今日の訓練は中止にします。急遽LG代表会議が入ったわ。お台場へ行かなきゃいけないの』

なにその・・・狙ったようなタイミング。

「はい決まり。蘆乃って成績は・・・どうだったっけ？」

「一応・・・学年1ヶタ台」

う・・・優等生め・・・。

「あ。そういえば明日香隊長も櫻子様も成績で競争してるとか聞いたよ？まあお互い負けず嫌いみたいだし・・・」

「藍ちゃん・・・は今どこにいるの？」

なんか安芸乃を置いてきぼりにしてる感じがするな・・・。

「ごめん安芸乃。LGメンバー集まるといつもこんな感じだから」

「いいよ。にしてもいいなあ・・・ここは仲良しで」

「え・・・安芸乃のそこはそうじゃないの？」

「そうじゃない・・・というか・・・変？」

「へえ・・・勉強会かあ・・・。私たちはやったことないなあ」

昼食後たまたま廊下で会った円様との会話。

「意外です・・・仲がいいからってつきり・・・」

「あ。1回だけやったかも。私とみどりちゃんが課題やるの忘れててみんなで集まって教えてもらったことがね」

課題だけなら明日ねえにしょっちゅう教えてもらってるけど・・・。

「まあがんばって。エリユーズニルの次期隊長さん」

それいわれるのが一番きついんですけど・・・。

「あ。藍ちゃん」

藍ちゃんも来た。

「ごきげんよう。メッセージ見た？」

「聞いたよー。またケンカしたんだって？」

いや、ケンカはしてないけど・・・。

「それ誰情報？蘆乃と軽くそんな話はしたけどケンカにはなっていないよ。」

「如來ちゃん・・・私より成績悪いってホント？」

「だから！それ誰情報・・・」

「今日私のルームメイトが休暇取ってていないから部屋で勉強会ね」

なんか事が勝手に進んでるし・・・因悦のやつめ・・・。

そして夕食が終わり天上の間で入浴を済ませた後、

「・・・」

エリユーズニルの1年生全員が藍ちゃんの部屋にいるという珍しい光景。

「・・・」

そして無言であるノートを差し出してきた蘆乃。

「・・・これ、戦術理論のわかりにくそうなところまとめてあるから」

「・・・どういう風の吹き回しよ。私に恩でも売って何かする気？」

「私はっ！明日香隊長みたいに指示したり、みんなを牽引するのが上手く出来ないって思ってるだけ」

「はいはい。で、他の成績は？」

冷たい因悦の視線。

「一般教科はまあまあ・・・。戦術理論とかとかが・・・」

はあ・・・とため息の因悦。

「まあ今までの言動から大方予想はついてたけど・・・少しは明日香隊長見習ったら？」

「う・・・それ言わないで・・・一番気にしてるんだから・・・」

「うー・・・頭がパンクしそう・・・」

こんなに頭を使ったのは久しぶりかもしれない・・・。

「さて・・・」

因悦が切り出す。

「藍・・・ねえなんでそこまで過去を隠そうとするの？」

「え・・・如來ちゃんじゃなくて・・・私!?!」

急に振られて固まってしまった藍ちゃん。

「如來に教えたかったのは事実だけど・・・」

確かに藍ちゃんは強化リリイだ。けどそれ以上のことを話そうとはしてくれない。

「どうしても言わなくちゃダメ?」

突然始まった女子リリイ会。

「・・・私、G・E・H・E・N・A・のルドビックラボにいたの」

「G・E・H・E・N・A・の!?!」

思わず口にしてしまった私。無言で頷く藍ちゃん。

ルドビコ女学院。下北沢や世田谷などが担当の学園だが、指導官の大半が亡くなり、残っているリリイはごくわずからしい。

没落した今でもラボから逃げ出した実験体ヒューズが繁殖・攻撃していると聞く。

「だったら百合ヶ丘に来る必要なかったんじゃない?・・・百合亜様とか幸恵様たちだっているのに・・・」

つい口を挟んでしまう。

「私はある人たちとは一切関わりがなかったから・・・とにかく実験が嫌で必死に逃げ出して鎌倉まで逃げてきた・・・」

他の学園でかくまってもらうっていう選択肢もあったと思うが、なんで百合ヶ丘だったんだろう?」

「え・・・藍って強化リリイだったんだ・・・」

因悦は驚いている。

「別に隠すつもりはなかったんだけど・・・なかなか言い出せなくて・・・明日香隊長と如來ちゃんは知ってるよ?」

藍ちゃんは続ける。

「私は特別寮に入る予定だったけど・・・無理を言って普通でいたいからって・・・」

特別寮、か。

確かに事情を考慮したら普通はそうなる。かの琴乃様のように。

「ごめん。もうひとついい?」

「ブーステッドスキルのことだよね？」

「ブーステッドスキルって？」

因悦が私に尋ねてくる。

「ブーステッドスキルは何を強化されたのかが分かる目安みたいなものなの。もちろん外すこともできる。例えばラースグリースの安藤鶴紗様とか」

鶴紗様の名前を出した途端顔を歪め出した藍ちゃん。

「え・・・藍ちゃんリジエネレーター・・・」

無言で頷く。

「私は・・・死にたくても死ねない身体・・・みんなも嫌だよね・・・化け物みたいでしょ？予備隊のみんなからは嫌われて・・・エリユーズニル入ってからも・・・みんなと上手くやっていけるのかずつと考えて・・・だから！・・・だから・・・ううっ・・・」

突然泣き出してしまった。

「・・・」

他のみんなは黙り込んでしまう。けど私は違った。

「・・・前も言ったじゃん！だから何？って」

「うっ・・・うっ・・・」

泣き続ける藍ちゃん。

「・・・ひとつ聞いてもいい？」

因悦が口を開く。

「如來は・・・何とも思わないの？」

「じゃあ逆に聞くけど・・・因悦はどう思う？」

「どうって・・・」

因悦は言い渋る。

「今初めて聞かされて・・・ビックリはしてる。けど、だからって藍をどうしようとか思わない」

「結論出てるじゃん」

私は続ける。

「確かにみんな最初は同情の目で見るかもしれない。その子たちはそうとしか思えなかった・・・他の子たちはそれで離れちゃったんだよ。

それでいいじゃん」

「如來ちゃん……」

「前も話したけど、御台場はき……そんな悩みを抱えてるリリイばかりなんだ。明日香姉様も……そんなリリイをいっぱい見てるから受け入れてくれてる」

百合ヶ丘にはG・E・H・E・N・Aから逃げてきたリリイを多くかくまっている。かといって特別扱いしているのか、というのはまた別の話になってくるが。

「だからさ、自分が強化リリイだから……とかなしだよ？藍ちゃん。ここではみんな同じ仲間なんだから」

「ごめん……私……うっ……ううっ……うわああああああああああああああああああああああああああああん！」

また泣き出してしまった。

「だから……なんで泣くの……」

藍ちゃんの背中をさすりながら尋ねる。

「私……今までこんな……優しくしてもらったことなんて……なかったから……だから嬉しくて……」

藍ちゃん……。

しばらくそのままわんわんと泣き続けた。

次の日の講義後。

「ごきげんよう瀬能如來さん。わたくしと手合わせいただけないかしら？」

櫻組の教室から出ようとしたときだ。

入口前で待ち構えていたのは見ない顔のリリイだ。

「誰？名前も名乗らないなんて、失礼にも程があるでしょ！」

「おーい如來、そろそろ訓練……ん？誰？」

後ろから因悦に声をかけられた。

「こつちが聞きたいんだけど？いきなり私の前に現れて『手合わせし

ろ!』だつてさ」

別に手合わせは構わないのだが、せめて名前ぐらいは名乗ってほしい。

「で、名前は?」

「如來、ちよつといい?」

明日ねえだ。

この状況どうしたらいいんだろう?

「あ。明日香ねえ!ちよつと待ってて・・・」

茶色髪に軽くウエーブがかかったサイドテールのリリイ———どこのクラスだろう?

「これは失礼。LGパルパスの隊長瀬戸煌麿です。というか、覚えてないみたいですよわね」

クラスは名乗らなかつたが、LGの隊長か。覚えてない?

「なら、これなら思い出してもらえるかしら?」

と、髪をほどき、後ろでまとめ、前髪を上に向けてピン止め・・・

あ!

「あんた・・・!煌麿!でも名字・・・」

「思い出した?最近親が離婚して今は旧姓を名乗ってるわ」

瀬戸煌麿・・・旧姓は田村———御台場時代・・・特に予備隊のときやたら私に絡んできたリリイだ。百合ヶ丘にまで私を追いかけた?流石にそれはないと思うが・・・。

「あなた・・・煌麿?へえ・・・百合ヶ丘に来たのね」

明日ねえも知っているので当然そういう反応になる。

「明日香様ご無沙汰してます。近々LG会議でお会いするかもしれません」

なんか腹が立つ。LG立ち上げたのか・・・。

「まあいいけど。因悦、代わりにやる?」

「はあ?受けたのは私じゃなくて如來じゃない。受けたものは責任取つてよ」

「私は煌麿とやるの飽きたからもうやりたくない・・・」

だって、相手していると疲れるし・・・とは本人の前では言わないが。

「ならこうしましょうか。修練目的の手合わせでLGの誰かもう1人参加させる」

明日ねえの提案なら・・・まあ仕方ないか。

「わかりました・・・明日香様がそうおっしゃるなら・・・」

「ということで急遽訓練は中止、LGパルパスとの修練目的の手合わせとなったわけだが・・・」

如來の相手はピンク髪ツインテールのリリイの子か。

「そういえば明日香様との手合わせは初めてですね。楽しみです」

とはパルパス隊長の煌麿だ。

京夏お姉様がいるとき無理を言って結夢様と手合わせしたなあというのを思い出す。勝てなかったのが今だに悔しい。

煌麿にも同じように努力してもらいたい気持ちもある。

「帆さんねえ・・・」

如來がチラチラと横目で見ながら気にしている。

「帆はうちのクラスで一番成績のいいリリイです・・・」

とは因悦だ。

だが演習で一度も手合わせしたことがないという。

「だからさつきから気になってるのね・・・」

判定人は私（上級生）がいるのでルール上向こうが指定できないため、こちらが行うことになる。

「それでは始めます」

今回は咲良ちゃんだ。

「制限時間はなし、レアスキルは使用禁止。なお、今回は特例としてサブスキルの使用は認めます。CHARMはグングニルを」

・・・はっ。

「ちよつとまって。私は聞いてないわよ？どういうこと煌麿？」

「紫衣原先輩にだけ事前に言いましたから」

事後承諾・・・まあいいか。

「事後承諾はトラブルの元だわ。他のLGでやったら苦情ものね」
あくまでも冷静に対処せねば。

「・・・そうですね。仰るとおりです」
元々対如來を想定していたからであろう、素直に謝罪。

「・・・煌麿のやりそうなことだわ。だから相手したくなかったのよ」
とは如來だ。私は彼女たちがどういふ関係かよく知らないの、こ
ういうやりとりで情報を得るしかない。

にしてもグングニルかあ・・・。去年使った以来だ。
乃莉子さんにコアを付け替えてもらい、煌麿を待つ。

「お待たせしました」
・・・グングニルの魔改造機か。まあハンデと思えばどうってこと
はない。

「構えて」

お互いCHARMを構える。

ピンと張り詰めた空気。

「はじめー」

!?

いきなり目の前に彼女が現れる。ステルス持ちか！

咄嗟に離れる。

「ふっー」

まるで張り付くかのようにピッタリと付いてくるではないか。

(なにこの子!?)

思わずシューティングモードにして訓練弾を撃つ。ただし特殊弾
だ。

パンッ!

撃った直後ブレードに戻し、修練場の床を支えにジャンプ。

「うっ・・・」

一瞬煌麿が声を上げるが、なおも私にピッタリ張り付こうとする。
(手合わせは技の見せ合いの場じゃないんだけどな・・・)

「あの弾・・・」

誰かが声を上げる。

グングニルで円を描き中に入ってジャンプ。今度はマジも入り過ぎてない。

訓練場の端のほうへ「わざと」移動する。

「えと……」

咲良ちゃんは混乱している。一般的な射撃と違い害のない牽制のマジスファイアだからだ。

そして——煌麿の背中に周り、しゃがんでから再びジャンプ、煌麿の喉元にブレードを突きつける。

「ううっ……」

「そこまで！」

挨拶のときに言われた一言。

「さすがですね。マジスファイア撃たれたときは文句言おうかと思いましたが……それでも勝てなかったのは悔しいです」

「そうね……反則まがいの行為だから私にも落ち度はあるわ。だから今回は私の負けよ。ただ、最初も言ったけど、事後承諾の手合わせは決している方法とは言えないわね」

さて、私の番だ。

相手は……同じ櫻組でパルパスメンバーの帆ほのかさんだ。

最近蘆乃としか手合わせしてないので丁度相手が欲しかったところでもある。

(まああざとい煌麿とやるよりはマシか……)

「で、如來ちゃんはなんか策とか考えてるの？」

藍ちゃん……策もなにもないでしょうに……。

「私は相手が誰だろうが全力でやるだけだよ」

「それでは2本目始めます」

判定人は明日ねえと同じ咲良様だ。

「制限時間はなし、レアスキルは使用禁止。危険だと判断した時点で止めます。構えて」

お互いにCHARMを構える。相手も同じCHARM——タン
グズニル同士だ。

(やったことなかったけど・・・ちよつとやってみようかな?)

明日ねえや琴乃様と同じ鬼龍院流薙刀術の構え。私自身の実力は
まだまだだ。

(集中・・・集中・・・)

自分自身、今まで手合わせのパターンで「これだ!」っていうのが
今までなかった。自分のステップアップのためにも。

「はじめ!」

咲良様の合図。

いつもならここで真っ先に向かっていくのだが・・・。

少しずつ帆さんとの間合いを詰めていく。

「はあっ!」

先に来たのは帆さんだ。

懐に入られる前に少し手前へ引いてブレードを入れて避ける。

キンッ!

お、重いつ!帆さんってパワープレイヤー!?

すかさず頭から振り下ろす。

ブンッ!

かわされた。当たり前といえば当たり前だが、こんな単純な手段で

引つかかかるとはわけがない。

からの——足にマジを入れてジャンプ!

後ろ向きから左上に向けてブレードを突きつける!

ブンッ!

・・・これもかわされた。まるでパターンを読まれているかのよう
に。

(うそっ!?!もしかして・・・私、負ける!?)

如來の動きがいつもと違う?

普段なら真つ先に相手に向かっていつているはず。しかも相手——帆さんに圧されている。

「・・・動きが裏目に出てるわね」

「そうですね」

とは蘆乃だ。

「いつもどおりやればいいのに・・・」

と少し呆れ顔。

「それは・・・違うわね」

「え・・・」

「如來は・・・自分を変えようとしている。去年の私よりはマシかな・・・」

「え・・・」

「去年の同じ時期にね・・・結夢様と手合わせしたのよ。そのときは自分の戦い方を見失いかけて止められちゃったけどね」

と苦笑い。

「でも如來は冷静に自分を見ている・・・成長したわね・・・」

さて如來はどうするつもりだろうか？

(なにか策を・・・今まで通りに戻す?)

ふと思った。戻したら負けな気がする。

戻したら煌麿の思うツボなんじゃないかとも思ってしまった。

相手は煌麿全く関係ないはずなのだが、なぜか頭をよぎる。

(なんで煌麿のことが頭に浮かぶの私? 関係ないじゃん!)

ていうかかすりもしてないこと自体がなんかくやしー!

「こんのおおおおおっ!」

ブレードを右から・・・にみせかけて左から上へ。

キンッ!

あ・・・つい、いつもどおりやっちゃった。
が、

(え・・・帆さんが体勢崩した!?)

え?逆にいつもどおりやったほうがよかったのか!?

それなら・・・。

懐に入るフリをしてしやがむ。

からの立ち上がって上から下へ!

「そこまで!」

なによ・・・結局いつもどおりやってるんじゃない。

そう言っつてやるつもりでいた。

ポンポン・・・

明日香隊長?

「如來の作戦勝ちね」

「あの、それって・・・」

「あの子はね・・・1度パターン化させるとそれしか出来なくなる
ことがあるけど・・・それ以外は今みたいに応用力があるのよ」

「やっぱり明日香隊長は如來の守護天使だ。妹のことをよく見て
いる。」

「櫻子姉様は私のことをどう見ているのだろうか?」

知識

「今日は訓練・・・というよりはちよつとしたお遊びに近いわ」

百合ヶ丘近所の海岸。一柳隊ごと、ラーズグリーズの一柳さんさん經由でミリアムさんもお借りした。ただ、その前日――

「わしのレアスキルをなんと思つとるんじゃ！マギの供給のためではないぞい！」

「お怒りはごもつともなんですけど、うちにはいないので・・・一柳さんからも許可をもらっちゃってますし、そこをなんとか・・・」

「ダメなものはダメじゃ。わしは手を貸さんぞ」

「これでもダメです？」

と以前と似たような作戦に打って出る。

「なっ!？」

「モノで釣るのは卑怯かと思つたんですけど、確保するの大変だったんですよね。嫌というならうちの蘆乃のに無償提供しようかと・・・」

「・・・お主、ずるいぞ」

「後・・・うちのLGレギオンのOGでお料理作りが好きな先輩がいるんですけど、当分の間、その作つたお菓子食べ放題・・・とかどうです？神琳さんもお菓子を気に入ってたみたいなので」

ミリアムさんが無類の甘いもの好きというのを事前にリサーチしていたので、これも少々ずるいがあえて釣ってみる。

「・・・よかろう」

・・・という流れがあった。ベスからは、

『完全な買収行為ですわね・・・よくまあそんなあざとい方法・・・』
とまで言われたが、私の狙いは実際に体験して、知識として覚えておいてもらいたい、という思いもあるからだ。

現に去年のギガント級討伐ではそれが役に立っている。

私個人としては遠藤（亜羅椰あらかや）さんにだけはお願いしたくなかったのだ。いつかの件のこともあるし、許すまじ行為だからだ。

「遊び・・・というの？」

「藍ちゃん、こつち来て？」

「はい？」

何も知らない「藍ちゃんが私の元へ。」

「みんなはレアスキル多重合成って知ってるわよね？」

「言葉だけは・・・」

「知識だけあっても実戦で役に立たなかったら意味がない。だからどういふものかを実際に体験してもらおうわ」

「え？」

2年生以外全員目が点になっている。

「え・・・じゃないわよ。1年のみんなは知らないと思うけど去年実戦で実際に討伐してるのよ」

「明日香・・・それは本当か？」

ミリアムさんまで疑心暗鬼になっている。

「あれ、この前一葉さんから何も聞いてないんですか？ギガント級討伐の遠征で、ベスがテストタメントで範囲広げて、恋花様がマギの供給元で、藍ちゃんの狂酔ルナティックトランサーの月をヘルヴォルの皆さんにやってもらいましたよ？」

「なんと・・・！いつだったか梨璃の髪飾りを探すのに使ったことはあったが・・・まさか実戦で応用できたとは・・・後で詳しく聞かせてもらえんじやろか？」

「それは・・・構わないですけど・・・」

すっかりミリアムさんの目が輝いてしまった。

「ただ、この方法も欠点があるの。それは供給するリリーのマギ量に依存するわ。今回の場合、ミリアムさんの持つてるマギ量を人数分で割って分散して使うから、使える時間も限られてくる。逆にそれを上手く使えば短時間で効率よくヒューズの倒すのに有効な手段になるわ」

「なるほど・・・」

蘆乃は納得してくれたようだ。

「・・・なあ明日香よ」

ミリアムさんが小声で耳打ちしてきた。

「だったらわしではなく、亜羅椰でもよかったんじゃないかなの？」

「ミリアムさん。お菓子の件、なしにしてもいいんですが？なんなら、昨日のやつも返してもらいますよ」

私の顔がよほど怖かったのか、

「待て明日香、わかった・・・わかったから落ち着くのじゃ！」

「あの件のことか・・・今聞いただけでも腹が立つ！」

とはみどりだ。彼女も私と同じ被害者だ。

「え？なんのこと？」

「円まどかさん・・・あなたは知らないほうが身のためですわ」

「明日香姉様」

「どうしたの？」

珍しく如來ゆきが質問。

「原理は分かるんだけど・・・それをどうやって？」

「それはわしから説明させてもらおうぞ」

終わってから。

「訓練・・・とか言ってた割には明日ねえもちやつかり楽しんじゃってたじゃん。なんかずるい！」

・・・バレたか。自分も体験したかったのもそうだが、本音は戦術の可能性の広さを如來たちに覚えてもらいたいからだ。

「あのね・・・何のためにやらせたと思ってるの？ただ遊びでやったわけじゃないわ」

「じゃあ何？なんか根拠でも？」

・・・ダメだ。如來ゆきの為にはなっていないかったようだ。

「問題です。今ここでミドル級が10体出現しました。リリイは自分を含めて4人います。それぞれのレアスキルはテストAMENT、ヘリオスファイア、フェイズトランセンデンス。自分のマジはほとんどありません。さあ如來ならどうする？」

「えと・・・」

急に振られて考え始める如來。

「例えばそういうことよ。戦略の選択肢としてね。自分のマジがなくとも、多重合成でその分は使えるからなんとか戦える」

「・・・やっぱり明日ねえにはかなわないや。咄嗟にそんな考え出てこないもん」

「私もね・・・ただ闇雲にいろんなことをさせているわけじゃない・・・如來にいろんなことを覚えてもらいたい。そう思ってるだけよ」

「明日ねえ・・・私にいろいろ教えてくれるのは嬉しいよ？けど・・・それを指示して実践できるだけの自信ない・・・」

如來にデコピン。

「う・・・」

「1人で抱え込め、なんて言っていないでしょ？蘆乃たちのことはどう思ってるの？」

「どうって・・・蘆乃は・・・私のことを敵対視してて・・・」
「違うでしょ。如來だつてもう分かっているんじゃない？」

「・・・やっぱりかなわないや。確かにケンカばかりしてるけど、それで結局お互いが羨ましいんだと思う。お互い素直になれなくて・・・けどホントは何でも言い合えるようになりたいんだけどね」

「なれるわよ。私とベスみたいだね」

明日香隊長はすごい。レアスキルの多重合成まで・・・。机上の理論のことだと思っていたが、実践で・・・。

私には雲の上の人のように思えてならない。

今の私のLG内の目標――

1. 如來とケンカをしない
2. 思ったことはハッキリ言う
3. みんなと仲良くなる

4. 櫻子姉様ともっと親密になる

最後は私の欲望でしかないが、努力はしているつもりだ。
翌日の朝。

「うーん……」

いつもより早く目が覚めてしまった。そういえば明日香隊長、この時間はもう走ってるはず。散歩がてら外行くか。

制服に着替えて校門前へ。いた。

「……蘆乃？」

「おはよう……ございます。明日香隊長」

「おはよう蘆乃。こんな時間に珍しいわね」

「なんか……目が覚めちゃって……」

「そう……うううっ……」

「明日香隊長！」

すごいフラフラしてる……。

「大丈夫ですか!？」

慌てて抱きかかえる。

「だい……じょう……ぶっ……ただの貧血だから……」

「大丈夫じゃないですよ！医務棟行きましょう！」

私が肩車をして医務棟へ連れて行くこうとするも、

「ホントに大丈夫だから心配しないで」

平静を装いそのまま行ってしまった。

その後の朝食の時間。

「……」

私が無言で機嫌悪そうにしていると、

「どした蘆乃。また如來とケンカした？」

因悦いえるだ。

「……違う」

「じゃあなんでそんな機嫌悪いの？」

「明日香隊長……何か隠してるんじゃない？」

「明日ねえが隠し事？そんなのするわけないでしょ……あんた朝から

何寝ほけたこと言ってるのよ?」

如來はおそらく何も知らない。

「あんたホントに気づいてないの?」

「へ?なにが?」

「今朝・・・ランニング帰りの明日香隊長に偶然会ったのよ・・・そしてたらすごいフラフラで・・・。私が医務棟に連れて行く!って言ったから「大丈夫だから」ってそのまま戻っていったわ」

「たまたまなんじゃないの?前日寝不足で走ってフラフラになった・・・とかよく聞くじゃん?」

ホント如來は樂觀的というか、何も考えてないというか・・・。

「あの一!」

昼食が終わり、午後の講義と演習が始まる前。

思い切って2年の講義棟に来てみた。

「あ。蘆乃ちゃん」

円様がいた。

「ベスちゃんだね。ちよつと待って・・・」

「今日は・・・明日香隊長を呼んでもらいたいです」

「明日香ちゃん?別にいいけど・・・」

と呼びに行き、しばらくして、

「ごきげんよう蘆乃。珍しいわね」

明日香隊長だ。普段となんら変わらない。

「ごきげんよう。あの一・・・今朝は大丈夫でしたか?」

「大丈夫よ。今朝のはホントただの貧血だから・・・」

と笑っているが、私にはそうは思えない。

「それと・・・お聞きしたいことがあるので付き合ってくださいますか?」

ラウンジへ。

「明日香隊長っていつも忙しそうにしていますよね?一日ってどうい

スケジュールで動いてるんですか?」

「朝起きて・・・学園の周り2周6キロランニング。これは蘆乃も見ていたから分かるわよね?それから・・・円と一緒に朝食を済ませて、訓練するときは控え室行つて部屋の掃除してから訓練内容の確認、講義棟の食堂行つてお菓子の下準備、で、講義出て、演習出て、お昼食食べて・・・食堂でオーブン借りてクッキーとスポンジの焼き具合をみて・・・、演習の後食堂寄つてケーキの仕上げ、それから・・・」

「・・・もういいです」
何この鬼スケジュール・・・。休憩する暇がない。平静を装つてはいるが、これは間違いなく過労の前兆だ。

「あの・・・また私たち勉強会したいので、今日の訓練お休みさせてもらつていいですか?」

つい嘘を言う。

「別にいいわよ。特に約1名成績の悪いリリイもいるしね」
と苦笑いする明日香隊長。

「それじゃ失礼します。ごきげんよう」

訓練前のラウンジ。

「で、何を話に行つたのかなー?」

とニヤニヤしながら因悦が突っ込んでくる。

「今日は訓練はなしよ」

「え?なんで?」

ハテナ顔の因悦。

「は、はにぶんほによー! (な、なにすんのよー!)」

と、隣にいる如來の口に人差し指と中指を突っ込んだ後、

「あんた明日香隊長の妹でしょ?そんなことも気づけないの?」

背後に回り、如來の両耳前付近をグーでグリグリとやりながら、

「痛い!痛いっ!痛いって!」

「明日香隊長の1日のスケジュール聞いてきたの。過労の疑いがある

わ。だから勉強会やるって嘘ついてきた。だから訓練はなし」

今朝の明日香隊長のフラフラ具合は貧血だけで片付けられるものじゃない。明らかに疲労から来ているものだ。

「そんなこと・・・ないもん！」

「いい加減そのくだらない意地張るのなんとかしなさいよ。大体そんなんだから明日香隊長に子供っぽいって言われてるのわからない？」
「それは・・・わかってるけど・・・けど納得行かないものは行かないの！」

と、如來はサブスキル——ステルスを使い、私の背後に回り込み、私のスカートを・・・えっ!?

「きやあああつ!？」

いきなり上に捲ったではないか。あんたは子供か！大人げないにも程がある。

「なにするのよ！」

如來のほうを向き、思いつきりグーで顔パン。

「ぶべっ・・・」

ガツシヤーン！

そのまま隣のテーブルに当たり、椅子が倒れた。

そして起き上がった如來も蘆乃に負けじと腹に向かって蹴りを入れる。

「このおおおおお！」

ガンツ！

「くっ・・・！！！」

ガツシヤーン！

如來に蹴られた私はそのまま吹き飛びテーブルにぶつかる。当然椅子もだ。

起き上がった蘆乃が如來の上に馬乗りになり、胸ぐらを掴む。

「いい加減にしろ！いつまで変な意地張ってんだ！」

蘆乃も負けじと如來の髪の毛を引っ張りだしたではないか。そしてそのまま殴り合いへ。

「それはあんただって同じじゃない！いい加減櫻子様にも素直になりなさいよー！」

「ちよつと！2人ともやめなよ！」

「ふざけんな！明日ねえがそんなムチャするわけないじゃんか！」

「ふざけてるのはあんたじゃない！」

今まで口ゲンカはしよつちゆうしている2人だが、取っ組み合いのケンカははじめてだ。

2人を引き離そうと蘆乃を羽交い締めにしようとするが、

(なんでこんなときにレアスキル使うのよ!?)

蘆乃や如來の姿はその場にはない。

フォン……

「いつかあんたとマトモに勝負付けたいと思ってたんだよね……」

「望むところよ！」

ちよつと!?

CHARM抜き出した!?

キンツ!

お互いのCHARM同士が交差する音。

バツ!

効くかどうかはわからないが、お互いの腕を掴み、

パアアアアア……

レアスキルを発動。

「いい加減にしろ！生徒会来るぞ？」

が、

スツ……

蘆乃のやつレアスキルまで使いやがった。

如來は如來でゼノンパラドキサで蘆乃に近づき、

キンツ!

蘆乃に再び攻撃。

(つたく……)

「藍！明日香隊長に連絡して！」

「う、うんっ！」

藍が通信端末を取り出して連絡を取る。もちろん通話機能で、だ。私も通信端末を取り出す。止めるなら・・・と、すぐにみどり様が出た。

『どした？因悦？』

「すみません！今すぐ1年の講義棟のラウンジに来てください！如來と蘆乃がまたケンカを・・・」

ピピピ・・・

携帯端末が鳴る。しかも通話機能だ。藍ちゃん？

なんだろう？

『どうしたの？』

『あの・・・大変です！如來ちゃんと蘆乃ちゃんが取っ組み合いのケンカ始めちゃって！』

「えっ!?場所は？」

『1年のラウンジです！早くしないと生徒会の人たちが来ちゃう・・・』
「今行くからなんとか2人を引き離して！」

『は、はい』
ピッ・・・

あの2人何やってんのよ！勉強会やるって言ったのにケンカ!?
全くもって意味がわからない。

ラウンジに着いてみると――

「離せっ！離せっ！離せっ！はーなーせー！」

「ダメだよ如來ちゃん！」

「今日という今日は絶対許さない！」

「いいから落ち着け蘆乃！」

因悦と藍ちゃんに羽交い締めで押さえられた2人の姿があった。
みどりもいる。

「で、なんでケンカ始めたの？」

「あ、明日香隊長！実は——」
はあああ……。

私はため息をついた。
つまり。

今朝の私を見た蘆乃が気を使って私を休ませようとした……のはまだいい。それを如來が気づかず蘆乃が怒った末に取っ組み合いの大ゲンカ、拳句の果てにCHARMを抜いて非公式の手合わせをしようとした、ということらしい。下手に私が口出しすると事が大きくなるだけだ。

「今回ばかりは私の手に負えない……か」

周囲には他のリリイも見に来ていた。仕方ない。通信端末を取り出し、祀様のところへ。

「ごきげんよう。明日香です。実は……」

結局2人には謹慎3日の処分が下った。処分としては重いほうだろう。今までは私が止めて事なきを得てきたが、ケンカだけならともかく、非公式の手合わせの制裁、ということだ。

その2日目。

まさか私がこういうことをする日が来るとは。

スツ……

謹慎室のドアが開き、如來の横へ。当然当人は驚いている。

「明日ねえ……」

「守護天使の特権ね。10分だけだけど……私が天音を殺めそうになったときもこうやって京夏お姉様が来てくれたわ。まさか自分が同じ立場になるだなんて思わなかったけど」

「……ごめん……なさい。悪ふざけが過ぎたって……思ってる」
涙目の如來をそっと抱きしめる。

「ホントはね……お互い手合わせさせようかとも思ったの。けどLG隊長としての体裁もあるからそういうわけにもいかなかったのよ」

「ところで明日ねえ・・・ホントに体調なんでもないの?」

万全・・・と問われると嘘になるが、ここは如來を安心させるほうが優先だろう。

「ええ。あの日はたまたま徹夜明けで・・・ちよつと寝不足だっただけ」

1つ向こうの謹慎室は如來がいる。私は巻き込まれた側なのが・・・。カツとなって真つ先に如來を殴つたのは事実なので罰を受けることにした。

私のリリーの履歴に汚点を付けてしまったが仕方がない。

スツ・・・

突然謹慎室のドアが開く。

え?なんで??

そこにはブロンド髪のサラサラヘアに緑の瞳——櫻子姉様がいた。

「あの・・・」

何も言わないまま私を抱きしめる。

「・・・バカね」

「・・・バカなのは如來のほうです。守護天使の・・・姉の明日香隊長の体調を気にしないなんて信じられない!」

「もしかして・・・あなた気づいてたの?」

「はい。遠回しに如來に言ったつもりだったんですが・・・軽くあしらわれてしまって・・・それでカツとなって・・・つい・・・」

その口ぶりだと・・・櫻子姉様も明日香隊長の疲労具合は知っていたみたいだ。

「それにしても・・・怪我がなくてよかったわ・・・」

「・・・すみませんでした」

「いいのよ」

スツ・・・

ドアが閉まり、再び謹慎室は闇に包まれた。窓もない金属で覆われ

たベッド以外なにもない部屋。おそらく部屋自体にも術式があつて出ようすると何かしら働くようになっていたのだろう。
「・・・ホント、どっちがバカなんだろうね」

謹慎室を出て、ベスとばったり会った。

「あれ？」

「明日香さん・・・」

「なんだ・・・」

「なんだとはなんです！失礼な」

お互い笑う。

寮に向かつて歩きながら、

「・・・蘆乃は明日香さんのこと気づいてたみたいね」

「何のこと？」

「前に言ったでしょ！『LGに夢中になるのはいいけど、そのうち体調壊すよ？最近ちゃんと休んでる？』って」

ベス・・・いや、櫻子は続ける。

「蘆乃が気づいたってことは・・・あなた相当疲れてるわよ？例えるなら首の皮一枚で繋がってる」

「え・・・私そんな疲れてるように見える？」

「ええ・・・だから問題起こしたわけじゃないと思うけど・・・このままだとホントに倒れるわよ？」

・・・釘を刺された。

いや、まだ大丈夫。無理はしてない・・・はず。

別れ。そして心身不安定

GYAAAAAAAAA!!

「い、いや……」

目の前にヒュージの触手が襲いかかる。

「大丈夫!? 因悦いえる?」

蘆乃が駆けつけてくれた……。

「右足が……」

思うように動いてくれない。

「はああああっ!」

ザツ!

蘆乃のがヒュージの触手を切り落とす。

(なんで……こんなところで……)

「くっ……!」

必死に動かそうとするが激痛が走る。

そして、ミドル級が私に近づき、足(と思われる部分)が襲いかかる!

「いやあああああああああ!」

久しぶりにこの夢を見た。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

あの時以来だ。この夢を見たのは。背中が汗でびっしょりだ。

「因悦ちゃん大丈夫!」

びつくりしたのか、ルームメイトの吉野亜美ちゃんが声をかけてきた。

「あ……ごめん……。起こしちゃった? ちよつと、怖い夢を見たから……」

結局この後、目が冴えてしまって朝まで寝れなかった。

「因悦大丈夫？目真つ赤だよ？」

翌日の講義中のことだ。

同じLGメンバーでもある瀬能如來ゆきが心配そうに私のほうを見る。

「……大丈夫じゃない。眠い」

机の前に突っ伏す。

「夜ふかしでもしたの？」

「いや、違う……ちよつと……怖い夢をね……」

「ならいいけど……訓練中に倒れるとか、やめてね？」

「多分大丈夫……」

と返したものの、実は怪しい。

ゴーン……ゴーン……

ヒュージ出現の鐘が鳴る。今日の担当は私たちだ。

え……このタイミングで？

よく明日香隊長が言っている『ヒュージは時間と場所を選ばない』
というのは間違っていると思う。

「行こう。因悦、藍あちゃん！」

一柳さんと結夢様が由比ヶ浜近くのアルトラ級ネストを殲滅して
から随分経つが、今だにケイブは発生し続けている。

今回はちよつと4人だけに任せてみるか。私たちが出るまでもな
い、という判断だ。

「今回はスモール級10体、ミドル級8体ね。ミドル級って言っても
いつものミドル級ほどじゃないから苦労はしないはずよ。全体の指
揮は如來、あなたに任せるわ。私たちは今回見るだけね」

「え？私!?って……それと、見てるだけって……!?!」

如來が驚いている。

「何言ってるの。副隊長でしょ。しっかりね」

如來がどういう指示を出すか、というのを見るためでもあるが、このときは私の読みの甘さ……いや、判断ミスに気づいていなかった。「えっと……私と蘆乃でミドル級4体相手するから、残りお願い」

「わかったわ」

「うん」

藍ちゃんにレアスキルを使わせてスモール級を一気に殲滅する作戦か……悪くはないが、因悦たちの負担が高くないか？という疑問もある。そのときはサポートに回るか。

「明日香さん、今回1年生だけにやらせて大丈夫なんですか？」

心配になったのか、ベスが訪ねてくる。

「と思ってやらせてるんだけど……ちよつと様子見かな」

予想通り、藍ちゃんは狂酔ルナティックトランサーの月でスモール級を順番に駆逐していく。一方の因悦はというと――

「……っ！」

足が震えている。普段ならなんなくミドル級に向かっていくはずなのだが……。

「う……」

少しずつ後ろずさりしていく。

GYAAAAA!!

ミドル級のうち1体が因悦に向かっていく。

「い、いや……」

まずい、完全に逃げ腰だ。

腕が因悦に伸びる。

「因悦さんの様子がおかしいですわ！どうなさいますか？」

因悦どうしたの？いつもこんなことは……。

「みどりー！」

「お、おう……！」

みどりのレアスキル発動！因悦の目の前に現れ、

「みどり様!?!」

ガンッ！

ミドル級に向かつて一撃！

「どうした因悦！いつもの因悦らしくないぞ？」

「あ、あれ？私たちだけでやるんじゃない？」

「いいからあたしについてきな！」

「は、はい！」

するとどうだろう、途端に普段通り戦えてるではないか。

(そうか……)

「一体どういうことですか？」

ベスが尋ねる。

「見てわかんない？因悦がどうして戦えなくなったか」

「わたくしにはさっぱりですわ」

「円はどう思う？」

円は少し考えてから、

「えっと……1人でヒュージと戦うのが怖い、とか？」

「そう。因悦は何かのキツカケで対ヒュージ戦のデュエルを怖がってる……」

「……私の予備隊仲間にも同じように戦えなくなっちゃうリイがいました。『これじゃヒュージと戦えない……』って。その子はリイをやめる道を選びましたけど、今何やってるかはわかりません……」
咲良ちゃんの話が本当ならば、このままだと因悦は……。

「このままでは因悦さんは同じように戦えなくなってしまいますわ……何か良い解決策があればよいのですけど……」

討伐は成功したが、因悦は終わった後も下を向いてうつむいている。

終わった後のLG控え室にて。
レキオン

私と因悦2人残って話を聞くことに。

「……」

しばらく無言の後、

「どうしたの？今日は様子が変だったわよ？」

「……明日香隊長」

「中等部時代になにかあった？」

「野良ヒューズ討伐のときに・・・私が足を負傷して・・・蘆乃が私のことをカヴァーして・・・腕を切り落として、さらに迫ってきて・・・やられる寸前のところで麻友ちゃんが助けてくれたんですけど・・・その麻友ちゃんが上から振り下ろして足を下ろした先が崖だったんです。それで・・・崖の岩場が崩れてそのまま下に・・・蘆乃は自分のせいだと思いこんでたみたいだけど」

「それで？」

「もし誰かが自分をかばって・・・同じことになるんじゃないか・・・って・・・一人で戦おうとするとそればかり頭に浮かんできちゃって・・・だからあんな・・・」

「そう・・・」

明日香隊長は私をそっと抱きしめてくれた。

「え！あの・・・」

「私もね・・・同じぐらいの時期にミドル級の討伐で失敗して死にかけてたことがあるの」

「明日香隊長がですか!?!」

びつくりした。まさか明日香隊長にそんな過去があつたなんて。

「そんなに驚くことはないでしょ・・・私だって完璧超人じゃないわよ」
「すみません・・・」

「御台場の当時のやり方ね。今はわからないけど、引率で先輩リリイがいて、攻撃は私一人・・・手出しせずに見守ってるだけ。そこで私は撃ち漏らして背中から攻撃食らって大怪我・・・全治6ヶ月。強化リリイになる道もあつたけど断ったわ」

半年!?留年しててもおかしくない期間だ。けどどうして・・・。

「とにかくG・E・H・E・N・A.に関わりたくなかった・・・自分の手で敵を取るんだ! って必死に努力したわ」

明日香隊長・・・。

「その逃したミドル級は百合ヶ丘にレストアとなって私の前に戻って

きた」

「レストア・・・」

「今のエリューズニルが結成して2ヶ月ぐらいの話ね。私ひとりで暴走して、京夏お姉様に怒られて・・・最終的にはマジを使い切っちゃって、みんなに迷惑かけちゃったんだけどね」

「・・・」

「確かに1人で向かってくのは怖いかもしれない。でもね因悦、それはリリイなら誰だって同じ。怖くないリリイなんて1人もいないわ・・・」

「はい・・・」

「それと、誰かがかばうのも当たり前。だって同じLGよ？犠牲に・・・だなんてさせないわ。それを考えるのが隊長の役目よ」

「そう・・・ですね」

「そういえば・・・如來から聞いたんですが、もし百合ヶ丘に来なかったならへオロットセイנטツにいたかも、って」

「それはもしも・・・の話ね。ロネスネスからも誘いがあったけど、私は断ったわ・・・」

「けどどうして・・・」

「船田姉妹は知ってるでしょ？私、純きいと様が苦手でね・・・後で自分の勘違いだってわかったけど、いろいろあつて百合ヶ丘に来た。御台場に残ってたら、こんなに頑張れていなかったかもね」

「明日香隊長・・・」

「それと今回ね、如來に副隊長としてどこまで正しい戦略判断ができるかってテストもしてたの」

「そうだったんですか？」

「ええ。まさかこんなことになるとは思わなかったわ。私の判断ミスでもあるんだけど・・・あ、そうだ因悦」

「はい？」

「如來に伝言伝えてほしいんだけど・・・明日、講義前に私のところに来るように伝えてもらえる？メッセージするつもりだけど忘れそうだから」

「あ。わかりました」

「因悦、明日ねえと何話してたの？」

「個人面談・・・」

ブクブクブク・・・

天上の間でのひとコマ。私は浴槽に潜る。

「あーあ・・・私・・・何やってんだろ・・・」

「え？今日のこと？」

「うん・・・明日香隊長、如來に何か聞きたがってたみたいけど・・・明日講義前に来てほしいって」

「あ・・・」

私が明日香隊長のことを出すなり、ぼつの悪そうな顔をして、

「うー・・・どうしよう・・・絶対怒られるやつだ・・・」

「それはどうだろうね・・・長い付き合いなんですよ？如來ならそれぐらいわかってるんじゃない？」

翌日。講義棟のラウンジ。

珍しくガチガチに緊張した如來が私の前に座っている。

「えっと・・・」

「なーに緊張してるの。如來を叱るために呼んだわけじゃないわよ」とデコピン。

「いったー！」

「ちよつと・・・昨日の反省をね」

「反省？」

「昨日の指示は私の読みの甘さだったわ・・・それに関しては謝るわ」「そ、そうなんだ・・・」

怒られると思ってたらしく、安堵の表情。

「ところで如來」

「はい？」

「あんた・・・戦術理論の成績はどうなの？」

「うっ・・・」

その様子だと・・・いい返事は期待できなさそうだ。私の記憶では、こ
と一般勉強に関してあまり優秀ではなかったと記憶していたが・・・
リリイになってもそこは変わっていないのか・・・。

はあ・・・とため息をついたあと、

「だと思っただわ。昨日の指示の仕方がね・・・」

「・・・どうせ頭良くないですよーっだ」

「こーら」

軽く頭を小突く。

「話は最後まで聞きなさい。そこを叱りたいわけじゃないわ」

「じゃあ何のために？」

「何年一緒にいると思ってるの？それぐらいわかるわよ・・・如來なりに
考えられることはあるでしょ？」

「京夏様も、明日ねえも・・・みんな成績優秀で・・・ダメなのは私だ
けで・・・」

「もちろん戦術理論は大事。それ以上に副隊長なんだから他にやらな
きゃいけないことがあるでしょ？」

「えっ？」

「私が副隊長のときはみんなの相談をしてたわ。というか、もうして
るでしょ？」

「・・・知ってたんだ」

「けど、因悦だけは私も想定外だった。後は恐怖心をどう取り除くか、
ね」

如來をそつと抱きしめる。

「ええっ!?!何？」

小声で、

「如來。訓練終わったら私の部屋に来て？」
すると、

「・・・はっ」

同じく小声で返してきた。ただし、顔は真っ赤だが。

えっ!?!ちよっと待って!?!明日ねえの部屋に呼び出して・・・!?!
確かに百合ヶ丘は名門だし、そういう関係になるリリイもいるって
いう話も聞く。

(ど・・・どうしよう!?!心の準備が・・・)

講義が終わり、訓練の時間。上の空で全然集中できない。

「如來！集中できてない。どうしたの今日は？」

そのせいか明日ねえに怒られてしまった。私の思い違い？

「えと・・・この後・・・だよね？」

「何勘違いしてるか知らないけど、今日は部屋に円もいるわよ」

そ、そうなんだ・・・。ビックリした・・・私の勘違いかあ・・・。

訓練が終わり、明日ねえと円様と一緒に山くちなし樞館へ。

ガチャ・・・

この前の私の誕生日のときは部屋の様子を見る余裕はなかったの
だが・・・改めて部屋を見て、相変わらずだったので安心してしまっ
た。

「あれ？ぬいぐるみは？」

「実家の私の部屋。百合ヶ丘の寮は狭いって聞いてたからかさばる大
きいやつはみんな送ったわ。この前部屋に段ボール積んであったで
しょ？あれよ」

「へえ・・・ぬいぐるみかあ・・・」

円様が興味津々だ。

「御台場にいたときに・・・ね。座って」

部屋中央に置いてあるラグの上へ。

「さて、もうすぐ来るかな・・・」

トントン・・・

「円様、明日香隊長。よろしいですか？」

え？ 因悦の声？

「開いてるわ」

ガチャ・・・

「失礼します・・・ 円様ごきげんよう。あれ？ 如來？」

「なんで？」

失礼にもストレートな質問。

「私が呼んだからよ。因悦も座って」

「はい」

私の隣へ。

「えと・・・ 因悦呼んでまで話って・・・」

「明日の訓練の前に2人に話しておきたくてね」

「はい？」

「明日の訓練で2人のポジションを入れ替えるわ。如來はBバックZゾーン、因悦はAアタックZキングね」

「え！ちよつとまって!?!ポジション入れ替える・・・って・・・」

少々強引なやり方ではあるが、訓練なので問題はないだろう。

「私が・・・ですか・・・？」

「そ。如來は御台場の予備隊でポジションどこだったの？」

「えつと・・・AZ・・・」

今まで本人に確認したことはなかったが、だからか。私がポジション指定してすんなり馴染めたのは。

「因悦は？」

「私は・・・BZでした・・・自主結成の予備隊で・・・麻友ちゃんのサポートがしたくて・・・」

例の亡くなったリリイの子だ。ということは狂酔の月持ちだったのだろうか？

これでヒュージが出ないのが一番いいのだが、ヒュージは時間を選んではくれない。

「拒否権はないわ。1日だけだから安心して」

如來と因悦を新館へ返し、ため息。

「どうしたのため息なんて。部屋でらしくないよ?」

「そうかな?」

と返したものの、なんか様子が変わった。頭がクラクラする……。つい先週も蘆乃たちに心配かけたばかりだが……。

「ゴメン……ちよつと横にな……うっ……」
バタツ……

身体が思うように動かせない。返そうにも言葉が出てこない。だるい……頭がボーッとする……。

「ううっ……」

「明日香ちゃん!どうしたの?」

円が右往左往している。

「明日香ちゃん!?ええつと……生徒会、生徒会……」

身体がだるい。風邪でも引いたかな……。

「ゴメン円……身体が動かない……みんなに明日の訓練は中止って連絡して?」

「わかった!」

意識が薄れていく……。

「あと……如來と……京夏お姉……」

まで言ったのは覚えているが、以降の記憶がない。

「……ねえ」

如來?

「明日香!」

京夏お姉……様?

バツ!

「あっ……!」

目を開けるとそこには泣いている如來と泣きそうになりながら見

守っていた京夏お姉様がいた。医務棟のベッド・・・久しぶりの光景だ。

「よかったああああああ・・・！」

わんわんと泣く如來。

「・・・なんでそんな泣いてるの。ただ倒れただけよ」

「円から連絡来たときはビックリしたわ。最近少し頑張りすぎたみたいね」

「京夏お姉様・・・ごめんなさい。心配かけて・・・ただの過労です」
「ただの、じゃ済まされないわよ？LGのことを真剣に考えてくれるのは嬉しいけど、あなたが倒れたら本末転倒だわ」

「はい・・・」

「・・・」

遅れてベスもやってきた。が、無言のままだ。

パンツ！

平手打ち。いつ以来だろう・・・。

「・・・嘘つき」

ボソつと呟いた。本気で怒つてるときだ。

「私何回も警告したわよね・・・？私に嘘ついてたの!？」

胸ぐらを捕まれた。

「嘘は・・・ついてない・・・」

如來と京夏お姉様は呆氣にとられている。

如來と京夏お姉様がいるのに気づいたのか、慌てて胸ぐらから手を離し、咳払い。

「・・・見られてしまったら今更ですわ。二重人格ではありませんが・・・仲のいい方としか素の自分は見せませんし」

「そ、そう・・・」

ベス・・・いや、櫻子の突然の告白に困惑をみせている京夏お姉様。
「それはさておき、最近頑張りすぎてましたものね。少し分担させたほうがいいんじゃないやありません？例えばお菓子づくりとか」

確かにLG控え室では一切のケアを私がやっている。京夏お姉様が隊長のときは琴乃様が一切をやっていたから負担になつていな

かったのだ。

「なら、私の代わりにベスがやる？そうしてもらえると私の負担がかなり減るのよね・・・」

「・・・明日香さん、わたくしが料理下手なのわかっててわざと振ってらっしゃいませんか？」

私はただ振っただけなのだが・・・。

「さあ？なら妹の蘆乃にでも相談したら？」

「あの・・・明日香姉様」

如來？

「なあに？」

「私。琴乃様から教わります！」

確かに願ったりではあるが、確か如來は・・・私以上に不器用だった気が。

「気持ちだけ、もらっておくわね」

「えー・・・」

京夏お姉様は悟ってくれたようで、

「明日香が言うってことは・・・よっぽどのね」

「まあ、そういうことです・・・けど、冗談じゃなくて分担は考えなきゃいけないわね・・・」

「とにかく。明日は安静にしててください。また倒れられても困りますっ！」

ベスに一喝された。

「ということですので、今日はわたくしたちの分担役割を決めますわ」
翌日のLG控え室にて。明日香さんはまだ医務棟で療養中だ。副隊長の如來さんに代わり私が指揮を取ることに。

「えっと・・・具体的には控え室のお菓子作り、訓練時間外のメニュー編成、CHARMのメンテ依頼、あとは・・・」

円さんが内容説明する中、

「ちよつといいか?」

珍しくみどりさんが声を上げる。

「どうしまして?」

「なあ・・・あたしたちもおんぶにだっこしすぎたんだよな?」

「みどりさん・・・人の話聞いてまして?それを今から決めるんじゃないですか!」

「う・・・」

みどりさん・・・明日香さんが頭を抱えるのも分かる気がした

「確かに・・・それはあると思います。少し明日香隊長に甘えすぎ었습니다。それに――」

ゴーン!ゴーン!

ヒュージの出現の合図だ。

「如來さん。先に明日香さんに確認を」

「はい。櫻子様!」

ホントにバス・・・いや、櫻子のいうとおりになってしまった。

「私・・・そんなにムチャしてたのかな・・・」

今は安定しているが、1週間は安静にしている、と言われるだろう。

何事もなければ、の話だが。

ゴーン!ゴーン!

ヒュージの出現の合図。今日の当番は私たちだ。

ピ。ピ。ピ・・・

携帯端末が鳴る。生徒会からだ。

「ラージ級1体が近づいてきています。場所は由比ヶ浜もアルトラ級ネストがあつた海岸跡地の3キロ先。今のところ実害はないものの、特型の可能性があるので注意するように」

特型ねえ・・・。京夏お姉様に入ってもらえれば私の出る幕はないと思うけど・・・。

ピ。ピ。ピ・・・

さらに端末が鳴る。如來からだ。

『明日ねえどうしたらいい?』

どうしたらいいって・・・なんというか・・・内容が簡潔すぎて何を言いたいのか伝わってこない・・・。

『それを考えるのがあなたでしょ。しっかりしなさい隊長代理!』

ノインヴェルトのバレットは如來に渡してある。ただ、ノインヴェルトの訓練を一切していないのが仇となるとはこの時思ってもいなかった。

「櫻子様・・・私・・・どうしたら・・・」

「少々不安ですわね・・・京夏様に連絡取ってみますわ」

今の如來さんには指揮能力がない、と判断した私は京夏様に連絡を取ることにした。

程なくして京夏様が控え室に。

「仕方ないわね・・・明日香がいけないのは心もとないけど、やれることはやりましょう」

「はー」

3ヶ月ぶりのヒュージ討伐だ。不安はあるが腕は鈍っていないはず。

「ところで如來ちゃん。ノインヴェルト戦術の経験は？」

「えっと・・・お台場でフンヴェルトやっただけで一度も・・・」

明日香のツメの甘さ? まあそれはいい。マギスファイアの扱いに慣れていないわけではなさそうだ。

「ラージ級1体よね? 1発で決めるわ」

あまり手間取りたくないというのもあるが、今は明日香の側にいてあげたい、という気持ちのほうが強い。おそらく如來ちゃんもそうで

あろう。

CHARMで地面に円を描き、その中へ。

マギの力で跳躍することができる。

ノインヴェルトのバレットは如來が持っている。まず誰にパスを渡すか。

「えっと、ノインヴェルト戦術、いきます！」

ガチャン！

ノインヴェルトの弾を装填、そして――

ズガンツ！

「円様！」

円か・・・軌道ルートも悪くない。

ちなみだが、私がノインヴェルトを指揮していたときの基本陣形はAZからBZ、BZからTテクニカルゾーンZ、が基準だ。基本的に忠実だ、ということでもある。

「えっと・・・」

円が躊躇している。

「私にまわして！」

すかさず声を上げる。TZ同士で回して最後咲良ちゃんから蘆乃に回す方法を取る・・・つもりでいた。

シュバツ！

円からマギスファイアが来た。

(よしっ・・・あれ?)

この時点で違和感を感じていた。

(マギスファイアが・・・少ない?)

どうする?このままではフィニッシュショットをしたとしても失敗する可能性が高い。

ここはイチかバチか賭けをすることにした。下手をするとこの時点で私のマギがなくなるかもしれないが。

「TZ同士で回すわ!エリザベスさん!」

シュバツ!

「わかりましたわ!」

グンッ!

「お、重い……この感覚久しぶりですわね……」

私が今出せるだけのマギをマギスファイアに込めたからだ。

エリザベスさんが導き出したルートは——

「藍さん任せましたわ!」

賭けに出たようだ。だが、ラージ級の触手が来る!

「バカお嬢! 違うだろ!」

みどりは気がついたようだ。レアスキル——縮地を使い、触手に当たる寸前のところで見事キャッチした。その辺の目の良さとルートを読み(とカンの良さ)は相変わらず良いようだ。

「なっ!? バカとは失礼なっ!」

「今のはそっちじゃない! あたしか因悦だよ! 守護天使になったからノロけて思考おかしくなった?」

オマケに舌まで出して煽る始末。

「なんですって!」

「ケンカしてる場合じゃないでしょ! 急いで!」
牽制する。

「ほら藍! 行くぞー!」

「は、はい……」

シユバツ!

マギスファイアはみどりから藍へ。
が、しかし……。

「あああああつ……」

まずい。取りこぼした!

もしかして藍はノインヴェルト初めて?

明日香……ノインヴェルトの指導はどうしたの?
しかし……。

グンッ!

……マギスファイアを受け取る音?

「危なかったわね……ラージ級かあ……」

その声は……。

念のためなにかあっても困る、と思つて飛んできたが、やはり飛んできて正解だった。終わった後は要安静なのは覚悟している。

「ナイスですわ！明日香さん！」

「明日香姉様!?なんでここに……」

「話した後！今はノインヴェルトを繋げるほうが先よ！」

この位置からラージ級を陽動できるルートの最適解は……。

「行くよ！因悦！」

シュバツ！

「はいっ！」

グンツ！

「わわわっ！重い……」

少々危なげなかつたが、なんとか受け取つたようだ。

「もしかして……ノインヴェルト初めて？」

「はい……中等部でも……フンヴェルトまでしかやつたことがあります

ません……」

マジか……大丈夫かな……。これは私に責任があるのだが。

少々不安だが、残るは咲良ちゃんか蘆乃のどちらか。もしくはCH

ARM破壊覚悟で多くマギスフィアを貯めてぶつけるか。

「咲良ちゃんに投げて！フィニツシュショットは蘆乃に任せるわ！」

少々マギスフィアの量は過多になるかもしれないが、失敗するより

はマシだろう、という判断だ。

「はいっ！えと……」

「棒の中にカゴのついたボールを投げるときと同じような要領よ！」

聞いて理解したのかその場で領き、

シュバツ！

「で、できた！」

マギスフィアは咲良ちゃんの元へ。

「お、重い……蘆乃ちゃん！フィニツシュショットお願い！」

ガッ！

「ああっ！」

投げる際にグルヴェイブのブレードの一部が欠けた音がした。

「CHARMの限界!? 9人・・・よね? どうして・・・」

ギガント級討伐の際、みどりがムチャをして膨大なノインヴェルトのマグスフィアを強引に受け止めた上、(グングニルの)ブレードと本体を跡形もなく破壊したことを思い出してしまった。

問題は受けたときに蘆乃のCHARMが持つかどうか・・・。

シュバツ！

「うっ・・・お、重い・・・」

ミシミシ・・・

ブラダマンテ・アイにヒビが入る音。やはりマグスフィアの量が多すぎるか？

「え・・・!?!」

グランギニョルのCHARMはノインヴェルトを受けてもシューティングモードにはならない。

「CHARMが限界よ！早くフィニッシュショットを！」

「はいー！」

ガッ！

軌道は間違いなく問題ない。

ドーン!!!

ラージ級はものすごい爆風を受け、駆逐されてい・・・ない!?

「やああああああああああああっ！」

バカ！如來！こともあろうにラージ級に向かっていくではないか。なんでそんなところまで私そっくりなの!?

「みどり！」

「あいよ！」

ガシッ・・・

「やだっ！離してっ！」

みどりに腕を捕まれ、身動きが取れない如來。

「バカッ！それじゃ明日香と変わんないぞー！」

「え……」

「無鉄砲にもほどがあるだろ！昔な、撃ち漏らしたラージ級に向かってトドメ刺してマジ使い切って倒れたことがあるんだよ……お前は今同じことをしようとした。それでいいのか？」

みどりに言われ、うつむいてしまった。こんな形で私の恥を出されるとは思わなかったが。

「で、どうなさいますの？まだ動いていますわ」

マジ量を考えて余裕があるのは藍ちゃんなのだが……。

「私が行くわ」

京夏お姉様!?

「ダメですよ！お姉様！それに、マジだって……ノインヴェルト戦術……」

「大丈夫よ」

私が言い終わる前に一言だけ言い、ラージ級に向かって行ってしまった。

「お姉様！」

タングズニルで地面に円を描き、慌てて京夏お姉様の後を追う。

「明日ねえー」

如來の声が聞こえたが、ついてこないのを見ると誰かが止めたのだろう。

最悪の事態だけは避けなければ……それだけだ。

「はあああっー！」

ザシユツ！

ラージ級の本体とおぼしきところを左から右へ。

GYAAAAAAAAAAAA!!

ラージ級の動きは止まる。いずれ形を保てなくなり無機質化していくであろう。が、

「え……何?!:ううっ……」

バタツ……

と同時に京夏お姉様も倒れてしまう。

「お姉……うそ……なんで……!?!」

目の前の光景が信じられない。

「みどり！京夏お姉様を医務棟へ！早く！」

「わ、わかった！」

このときはまだ、ただのマジ切れだろう、という判断をしていた。

「あの・・・お姉様の容態は？」

お姉様の収容されている医務棟には生徒会役員の秦祀様と担当も同席していた。

「大丈夫・・・と、言いたいところだけど、様子がおかしいわ。ただのマジ切れで倒れただけなら回復していてもおかしくない。それが：負のマジに浸食されているの・・・」

負のマジ・・・。

「あの・・・私たちって浸食されにくいんじゃ・・・」

「一般的にはね。狂酔の月のリリイは負のマジに影響されやすいってされてきたわ。けど、その負のマジの量が異常なのよ・・・カリスマやブレイブのリリイが浄化を試しても全く効かない・・・明日香さん、何か心当たりは・・・」

「ラージ級を倒すときにお姉様が・・・斬りつけて・・・それからいきなり倒れた以外は特に・・・」

「明日香さん。心して聞いてね。京夏さんは・・・元々余命宣告されていたの」

「え・・・そんなこと・・・私には一言も・・・」

はあ、と頭を抱える祀様。

「その様子だと・・・誰も知らないみたいね・・・もしかしたら、ただど・・・京夏さんはわかっててヒューズにとどめを刺しに行ったんじゃないかしら？」

そんな・・・。

それから私は毎日様子を見に医務棟へ足を運んだ。最初は落ち着いていた容態が日を追うごとに悪化していく。

1週間経過しても京夏お姉様は目を覚まさない。

「なんで……どうして……」

やはり行かせるべきじゃなかったんだ。そのことばかりが頭の中をぐるぐるしている。

(私のせいだ……)

今まで様々なヒュージと対峙してきたが、こんなのははじめてだ。もし、大量発生していたのなら……と思うとゾツとしてくる。

(ヒュージって細胞分化したりリイだ、なんて話もあるけどそうなのかな……)

思考がどんどんネガティブになっていく。

「明日ねえ……」

如來が話かけてきた。

「ねえ……なんで如來のこと相手にしてくれないの？ねえ！」

大声を出して私のことを揺すってくる。

「……ごめん」

事実が受け止めきれず『ごめん』の一言すらやっと言えている状況だ。

ボタンツ！

医務棟の待合室のドアが開く音。

「明日香さん！京夏さんが！」

慌てて私の元に駆けつけてきたのは祀様だ。

そして今、目の前に広がっている光景が信じられない。

「うそ……だ……よ……ね……？」

ベッドの上には白い布が被せられたお姉様の姿。

祀様は首を横に振っている。

LGメンバー全員集まっていた。

「京夏ちゃん……」

「あんな強い京夏が……どう……して……」

「一体なにが・・・」

幼なじみの初花様、中等部時代から友人関係の灯音様と琴乃様が涙を流している。

「先週のあのヒュージ・・・CHARMのブレードからヒュージに送り込まれたらしい負のマジの痕跡が見つかった、って・・・」

信じたくはない。けど事実は事実だ。みんなに報告する義務がある。

「そんな・・・まさか!」

「残念だけど、そのまさかよ」

後ろからの声。

「しばらくね」

百由様だ。半年近く会った記憶がない。

「百由様、どういうことですか!?わかるように説明を・・・」

「簡単に説明すると、あの特型は負のマジを大量に保持していて、触れるとその余剰分を接触者に放出する・・・つまりは触れば誰でもなった可能性があるってこと。だからあのとき京夏さんの判断は正解だったのよ」

後から聞いた話では最初からノインヴェルトをやったとのことだが、判断は正解だったのだ。

そして京夏お姉様に向かい手を合わせ、そのまま工廠科のほうに戻っていった。

「お、姉様・・・うっ・・・ううっ・・・うううっ・・・うわああああああああああああああああああああああんっ!!」

今は言葉よりも感情・・・言葉なんて出てこない。

私が泣き出すとみんな黙り込んでしまった。唯一、如來だけが私に話かけてくる。

「明日ねえ・・・」

「なんで?どうして!?あのとき私のことを無視してまで!」

今回は誰かが悪いわけではない。誰も予測ができなかった、誰にでも起こりうる出来事だった。

「・・・明日ねえは悪くないよ」

「わかってるわよ・・・！そんなの・・・！けど・・・」

（ごめん！みんな・・・でも今は・・・無理・・・）

如來は後ろから私を抱きしめてくれる。

「私は・・・そんな明日ねえなんか見たくない！いつもみたいに私を叱ってよ！」

ドンッ！

けど、如來を突き飛ばしてしまう。

「・・・明日ねえ」

そしてそのまま遺体安置所となった医務室から飛び出してしまう。

いつか私にもこんな日が来るんだろう、とは思っていた。去年亡くなった結梨ちゃんときは謹慎中だったこともあって実感が湧いてこなかったのだ。今だに結梨ちゃんは行方不明なだけで本当はどこかで生きてるんじゃないか、と思う時さえある。

けど、目の前の現実が今だに信じられなくて・・・。御台場から逃げてきた私を快く受け入れてくれて、LGで一番に私のことを見てくれて・・・油断していた私のことを助けてくれて。リリイを殺めそうになったときも私のことを責めることなく許してくれて・・・。

思い出が次々と出てくる。そのたびに涙が止まらなくなる。

「ううっ・・・うううっ・・・」

オマケに如來まで突き飛ばして・・・。

（やっぱりダメ・・・私にはLG隊長^{レギオン}なんて・・・守護天使にはなれないんだ・・・）

目的もなくアテもなく。学園の外を出て、ただひたすら走るだけ。もちろんCHARMなんて持ち歩いているわけがない。

気が付いた時には野良ヒューズの多発地域にまで来てしまってい

た。

GYAAAAA!!

「なっ・・・!?!」

まずい。いくら野良のモール級とはいえ素手で勝てるわけがない。

リボンをほどき、ある部分を触る。こうすることで一時的な武器へと変わるのだ。軽いダメージぐらいは与えられるだろう。

「はっ!」

それを目(?)に向かって投げつける。

GYAAAAA!!

よし!

ボンッ!

制服のボタンを1つちぎり、地面へと叩きつける。

目眩ましは成功した。全力ダッシュしてその場から離れるが、モール級は私のあとを追ってくる。冷静に考えれば足にマジを入れ、ジャンプして離ればよかっただけなのだが、今の私にはそこまで判断出来ていなかった。

(どこかに隠れてやり過ぎす?)

だが、森だ。隠れる場所なんてたかが知れている。

(どうする?もしこんなとき京夏お姉様だったらどうしてた?)

その時だ。

「明日ねえ!」

如來?だが、姿が見えない。

「如來?」

声を上げるも、

「ごっ!木の上!」

木の上?

すると、

「うわっ!」

上から私のタングズニルが降ってくるではないか。

「・・・っと」

マジが入ってないCHARMはただの金属でしかない。落下寸前のところで受け止める。

「どうしてここが・・・」

「明日ねえ端末の位置情報忘れてる？」

あ・・・携帯端末、か。

端末自体はスカートのポケットだ。普段位置情報なんて切る必要もないので常に入れたままだ。

フォン・・・

右手をかざしCHARMを起動させる。マジが入りコアに私のルーンが示された。

ガチャン！

シューティングモードに切り替え、迫ってくる野良のスマール級目掛けて、

パンツ！

睨むまでもない距離なので命中。

GYAAAAA!!

思わずため息。

全く何やってるんだ私は。

そしていつの間にか木から降りていた如來。目の前に来て、パンツ！

思いつきり平手打ちされた・・・。頬を押さえるも下を向いたままの私。

「明日ねえのバカッ！CHARMも持たないで森に入るだなんて・・・！まさか死ぬ気だったわけじゃないでしょ？」

何も考えずにボーツとしてたなんて言えるわけがない。

「・・・わかんない・・・ごめん」

「明日ねえ・・・やっぱりおかしいよ！どうしてそんなに・・・」
パンツ！

如來に平手打ち仕返していた。

「如來には・・・私の気持ちなんてわかんないわよ！」
泣きながら大声で怒鳴ってしまった。

バンツ!

如來に押し倒された。

「守護天使だから?何したっていいっていの?違うじゃん!」

「・・・」

何も答えられなかった。

「私・・・明日ねえの妹シルトだよ?相談してくれてもいいのに・・・どうして私に何も頼ってくれないの?そのための守護天使でしょ!」

「・・・」

「前も言ったよね?私を頼ってって!変わってないのは明日ねえのほうじゃん!・・・なんで・・・なんで・・・ううっ・・・うわああああああああああああああん!!」

・・・意地張ってるのは私のほうだ。

「私はっ!如來が思ってるほど強くなってるじゃないっ!如來珠の理想であろうとして・・・頑張ってただけ・・・!今の私は・・・私は・・・目標を見失った抜け殻みたいなものよ・・・」

泣きながら如來を強く抱きしめる。

「・・・そんなことないよ。私にないものいっぱい持つてるもん。だから守護天使とか関係ない・・・私のお姉ちゃんだもん」

「・・・ありがとう如來」

そして唇を近づけてそのままキス。

「明日ねえ!?あ・・・す・・・ええええええええええええ!」

大きい声を上げ、

バタン・・・

そのまま気を失ってしまった。

(ありがとう如來・・・)

京夏お姉様は洲盧美様が亡くなった後、気持ちのやり場を失っていた。けど今の私には如來がいる。もし如來がいなくて誰とも守護天使を結んでいなかったら私はどうなっていただろう?

想像するだけでも怖い。洲盧美様みたいに後追いでいたかもしれない。そう思うと急に怖くなってしまった。

別れ。そして心身不安定その2

如來ゆきを新館の部屋へ返した後。

ピ。ピ。ピ。...

携帯端末に通話。ベスからだ。

『みなさん部屋で待機してますわ。この後どうなさいますの?』

...みんな置いてきぼりにしてしまったのは事実なので後日謝ろう。

「今日のところはそのまま解散で。遺品整理は初花様と琴乃様にお任せするって伝えておいて。お別れの立ち会い如何はその前に連絡する、ともね」

『わかりましたわ。で、如來さんとは合流しましたの?』

「合流した後、言い合いのケンカして仲直りした途端気を失ったわ。今部屋に送って帰る途中」

『そういえば如來さんの部屋って...』

「私が使ってたB棟45室。ここまで偶然が重なると、ちよつと...ね...ううっ...」

端末の前でつい泣いてしまう。

『ちよつと!?!大丈夫ですか?』

「ごめん...と、とにかくそういうことだから伝えておいて」

『わかりましたわ』

ピッ...

あぶないあぶない。感傷に浸るのは部屋に戻ってからだ。戻ったら戻ったで円と気まずくなりそうだけど...

ガチャ...

部屋に戻る。円まどかは...いた。

「...」

お互い何も会話がなのははじめてかもしれない。

「……」

「……」

「……気まずい。何か喋らなきゃ、と黙っていても何も出てこない。結局。消灯時間まで何も会話なし。」

横にはなっているものの、落ち着くはずがなく。泣きそうになる。

「はあ……」

感情を抑えながら制服に着替えて外へ。

気持ちなんてすぐに整理がつくはずがない。ましてや私の恩師だった人だ。

「……明日香さん？」

櫻子……」

「こんな時間にどうしたの……って聞くまでもないか」

「ええ……ところで、もう大丈夫なんですか？」

「大丈夫なわけ……な……い……うううっ……」

「うわああああああああああああああああああん！」

我慢しきれなくなったのか、私の前で泣き出してしまった。

共に戦ってきた仲間との別れ。しかも自分の守護天使（姉）ならなおさらだ。

「バカッ！そんなのっ！私だって同じよ！平然としていられるほうがおかしいのよ……」

最後のほうは涙声になってしまった。

しばらく2人して声を上げて泣いた後。

気がついたら朝になってしまっていた。

「……朝になってしまいましたわね」

「……そうね」

お互い目が真っ赤だ。明日香さんの表情は夜中よりも意気消沈していた。

私はそのまま食堂へ。そこに明日香さんの姿はなかった。

もちろん講義や演習にも姿は見えず。

(昨日の今日で平然といられるわけ・・・ないよね・・・)

「エリザベスさん・・・」

咲良さんだ。

「どうなさいました?」

「あの・・・明日香さんは・・・」

「今日は見ておりませんわ。昨晚一緒にはいましたが・・・」

「そう・・・ですか・・・」

なにか用事でもあつたのだろうか?そのまま李組の教室に戻って
いってしまった。

その数分後、

「あ。櫻子様ごきげんよう。明日ねえいます?」

如來さんだ。

「ええ。朝まで一緒でしたが・・・食事のときに別れて以降お会いして
いませんわ」

「え?いないんです?」

会っていないのは事実なのでそのままを述べる。

「・・・部屋に行っても円様しかいなかったし、携帯端末も位置情報切っ
ちやつててどこにいるかわからなくて・・・」

「とにかく明日香さんが今どこにいらっしやるのか皆目検討もつきま
せんわ」

まさかとは思うが・・・最悪の結果になってなければよいのだけど。

「そうですか・・・」

落ち込み気味にその場を後にする如來さん。

「・・・」

それに対して円さんは何も答えようとしなかった。普段なら何か
おっしやるはずなのに。

「すみません!」

「うわあああつーなんだ．．．如來か．．．どした？．．．つて聞くまでもないか。明日香なら今日見てないぞ？」

李組の教室。丁度みどり様がいた。

「．．．ですよねー。さつき櫻組の教室でも聞いたんですけど、誰も見てないって言われちゃったので．．．」

「そっか．．．あたしも見たらすぐ連絡してやるから」

「ありがとうございます」

みどり様もみてないのか．．．。明日ねえどこ行っちゃったんだろう？．．．こうなったら自分の足で探すしかない。

まずは山くちなし 榎館の裏。

（こんなわかりやすいところにいるわけないよね．．．）

次。足湯。

（ここもない．．．）

まさかとは思うけど．．．。

昨日出没多発地域で言い争ったけど、また．．．行っていないよね？念のためタングズニルを持っていく。

（うーん．．．）

ここにもいない．．．生徒会の人に聞いてみるか。祀様に連絡を取る。

「突然すみません。LGエリユーズニル副隊長瀬能如來です。うちの隊長．．．なにか申請出したりしますか？」

『あら如來さん．．．そうね．．．特には聞いてないわ。あなたも妹シルトだから知ってると思うけど、姉が突然いなくなったり亡くなったりした場合はその1週間は休みになるの』

と、すぐに返事が返ってきた。え？知らなかった．．．そんな制度あったんだ．．．。

「じゃあ明日ね．．．隊長が今どこで何してるかもご存知ないと？」

『ええ．．．力になれなくてごめんなさいね』

うーん．．．どこ行っちゃったんだろう??

百合ヶ丘を離れ、私は海岸をブーツと眺めていた。

小波の音が心地よい。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

携帯端末が鳴るが、無視する。

数分後、

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

再び携帯端末が鳴る。おそらく如來からだろう。もう1度無視。

その数分後、

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

．．．如來のやつ、何回メッセージ入れてくるんだ？

(あぁっ！もうっ！)

頭に来た私はどうとう端末の電源を切ってしまった。

「．．．」

．．．なにやってんだ私。ただのわがままなりリイじゃないか。

昨日もそうだったけど、如來に八つ当たりして．．．困らせて．．．

姉として振る舞わなくちやいけないはずなのに．．．。

「あ．．．いた！こんなところにいたのか．．．如來が心配してたぞ？」

みどり．．．。

「．．．」

私はわざとブーツとしているフリをする。

「おい．．．明日香ー？」

みどりが私の前に手をやる。それでもブーツとしているフリ。

「うーん．．．そつとしといてやるか．．．」

頭をかきながらそのまま行ってしまった。

「明日香見つけたぞ？」

如來に連絡すると言った手前、一応してやらないとな。

『ホントですか!?!で、どこに・・・』

「海岸でボーツとした。ただ、あたしが声かけても反応しなかったらそつとしいてやった。心ここにあらずだな」

『そう・・・ですか』

「如來は知らないと思うけど、京夏様は百合ヶ丘の中でも3本の指に入るぐらいマジ保有量多かつたんだぞ?」

『え、そうなんですか!?!』

だろうな。外部生ならそういう反応になると思う。

「アールヴヘイムの天葉様、ローエングリンの紗癒、で・・・京夏様、と。そんなスゲー人の妹だった明日香なんだから、シヨックを受けないはずがない。如來も知ってるだろ?」

『はい・・・昨日の狼狽ぶりを見れば・・・』

「だから今日ぐらいはそつとしいてやれ。いつまでも金魚のフンじゃあいつもつらいだろうよ」

と返信して以降、如來からの反応はなかった。

(ちよつとキツかったかな・・・)

あたしもそのものズバリを言つてよく明日香に怒られているが、今回ばかりはこれが正解なのかなと思う。

口にはしないが、もちろんあたしだつてつらい。人目を気にしなかつたら大声を上げて泣いているだろう。けど、それはあたしがあやしじやなくなると思っている。唯一のこだわりでもありアイデンティティだからだ。

さて——やることはやったし、あたしも学園ガーデンに・・・と思つたその時だ。

GYAAAAA!!

・・・野良かよ。しかもCHARM持つてないときに、だ。ていうかどつから出てきた?、まあ幼体のスモール級だから大したことはないのだが。

どうするあたし?縮地使用して百合ヶ丘に戻つてテイルフィング持つてくるか?そこまでする価値あるか?と問われると・・・なんだ

よな・・・。

パンツ!

GYAAAAAAAAA・・・

マジ弾の音?

見たときはすでに駆逐されていた。

「みどり様!」

いえる
因悦?

撃つたのは因悦か。

「大丈夫ですか?」

「あたしは大丈夫だよ。縮地で離れたってよかったけどな」

と言ってハツとしたのか、因悦は少しうつむき気味に、

「ですよー・・・」

「でも判断は正解だぞ。ちよつと先に明日香いるしな」

「え・・・明日香隊長いるんですか!? 如來に・・・」

「もうあたしが言っているよ。そつとしいてやれ、ともな・・・」

そう言った途端に因悦も黙ってしまった。

おそらく如來に言われたから動いたんだろうが、因悦も否定的だっ

たんだろうな・・・。

そつとしいてやれ・・・か。

みどり様の言いたいことも分かる。けど私は明日ねえの妹だ。妹は姉の支えになるべき、と。

昨日も言い争いになったばかりだが、知った仲だからこそ本気でぶつかりあえると思っている。

(よしー!)

パンツ!

自分の頬を叩き、いざ海岸へ。みどり様はもういなくなっていた。

明日ねえは・・・いた。確かにブーツとはしている。けど様子がおかしい。

「うつ．．．うつ．．．」

．．．泣いてる？

「明日香ちゃん？」

あれ．．．琴乃様だ。

「え．．．うそ．．．なんで!？」

明日ねえが驚いている。ちよつと待って!?!もしかして．．．琴乃様．．．京夏様に見えてる？

慌てて明日ねえの元に駆け寄る私。

「明日ねえ!」

「あら如來ちゃん」

琴乃様は私にすぐ気づいてくれた。

「明日ねえ．．．もしかして．．．琴乃様のこと．．．京夏様だと思つて接してます?」

「そうなのよね．．．ショックなのは分かってるんだけど．．．私もどうしていいか分からないの．．．」

琴乃様完全に困ってるじゃん．．．。昨日と同じだけど仕方ない。パンツ!

明日ねえに向かい思いつきり平手打ち。

「．．．」

しかし無反応だ。

．．．無反応?

「．．．明日ねえ?」

顔を覗き込むも、

「．．．」

ピクリとも動かない。え?明日ねえ壊れちゃった?

しばらく動かない．．．と思っていたときだ。

「うつ．．．うつ．．．うわあああああああああああああああああああああ
あああああん!」

今度は大声で泣き出してしまった。

泣きたいのはごつちだよ．．．。どう接していいかわかんないんだから。

「う……う……」

え……今度は何？明日ねえの動向を静かに見守るしかできない私。
「うわあああああああああああああああああああつ！」

藍ちゃんが狂酔ルナティックトランサーの月を発動しているときの目だ。ほんの一瞬
だったけど、え……まさかサブスキルの狂乱きしみの閼きしみが覚醒したの!?
けど、そのときのほんの一瞬だけで、その後は特に何もなかった。

……今の一体何？

私にはわけがわからなかった。

(後で医務棟行ってこよう……)

困惑

2日後。

火葬を終え、新たに作られた墓標の下に遺骨が埋葬され、最後のお別れ。

お姉様と仲のよかった人たちは泣き崩れていた。私も引きずられて泣きそうになったけどグツと我慢。

CHARMは元・妹^{シルト}である私が引き継ぐことに。

「いった・・・」

指輪をしている中指の血がダインスレイフ・カービンのコアに流れ落ちる。

パアアアアア・・・

コアが光り、京夏お姉様のルーンから私のルーンに書き換えられた。

(これからよろしくね)

心のなかで呟く。しばらくはタングズニルではなくダインスレイフ・カービンを使うことになるかな？

初花様に話を聞いたところ、進級前両親が亡くなっていたそうだ。

天涯孤独・・・そんなこと、私には何も・・・。

パンツ・・・パンツ・・・パンツ・・・

今日も訓練は入れてないのだが、自室では落ち着かず、射撃場での向かい、無心で撃っていた。

すぐそばを円が通る。

「・・・」

何も言わずに立ち去ってしまった。

このところ円と私はロクに話をしていない、部屋内の会話も必要最低限・・・このままでは円と心が離れてしまうんじゃない・・・そんな気さえもする。

「あ・・・いた。明日香さーん！」

百由様？

「うきげん・・・よう。何の用でしょう？」

「ちよつといいかしら。私に付き合ってもらえない?」

「はい?」

百由様の工房へ初めて入る。どうして工廠科の人たちは整理整頓が下手なんだ?と思うほど散らかっている。

「あれからちよつと調べ直したんだけど、意外なことがわかったのよ」
「意外なこと・・・ですか」

と、学園でもごく一部の人が閲覧できない端末の画面を見せられる。

「これを見て。私たちリリイはこの細胞が突然変異してリリイになった、と现阶段では考えているわ。あくまで仮説だけどね」

「はあ・・・」

イマイチ理解できていない私。

「ところがよ!負のマジに浸食されてしまうとヒュージ細胞と同じ速度で分裂して増殖・・・されるはずが、京夏さんはされていなかった。つまり・・・」

「つまり・・・?」

「負のマジ浸食よりリリイとしての終わりのほうが早かった、ということになるわ」

え・・・それじゃあ・・・京夏お姉様は自分の終わりが近いことを分かってて・・・。

「私の・・・せいじゃなかった・・・?」

「何のことはわからないけど・・・ヒュージが原因ではないというのはこれで明白になったわ」

「あの・・・ありがとうございます!」

一礼だけし、百由様の工房を後に。

2つ隣の乃莉子さんの工房へ。

サツ・・・

「いきなりごめん!」

ノックもせずに声をかける。

「うわあああああああつ!」

私の声に驚き、持っていたCHARMの部品を落とす乃莉子さん。

「あ、明日香さん……今度お見舞いに行こうと思ってたんだけど……何？」

「蘆乃と咲良ちゃんのCHARMっていつ頃直りそう？」

「咲良さんのCHARMは終わってるわ。問題は蘆乃さんなのよね……」

「というと……？」

「エリザベート・ファクトリーにも問い合わせたけど、プロトタイプの開発は一切関わってない、の一点張りで全く進んでないのよ……。で、強引にエリザベスさんのブラダマンテの部品を流用しようとしたんだけど、設計が根本的に違うみたいでちよつと……ね」

エリザベート・ファクトリー——グランギニョル関連のベスの会社だ。CHARM持ち替えのときに薄々気づいてはいたが、もしかしたら蘆乃って……。

「ちよつとまって。ベス呼ぶわ」

「え……今？」

「今。やることなくラウンジかなんかでボーツとしてるはずだから」

通信端末の通話機能を使い呼び出してみる。

『あ、明日香さん!?!』

「大方講義棟のラウンジでお茶してた……つてとこかな」

『で、なんなんですか？こちらを使ってまで……何か急ぎの用事でも？』

「乃莉子さんのところに来て。それと重大発表もあるわ」

ピッ……

「ホントは全員分ブレード強化してもらいたいところ……なんだけど、油断してたわ……あんなヒュージ……」

などと話しているうちに、

「まったく……なんですの……？人がのんびりお茶してるときに呼び出したなんて……」

「わかったわかった。エリザベート・ファクトリーの社長令嬢さん」

普段言われない事を聞いてハツとしたのか、急に真剣になる。

「……蘆乃のブラダマンテ・アイのことですわね」

無言で頷く私。

「ブラダマンテの設計者は誰だかご存知？」

乃莉子さんの突然の振り。

「それはもう・・・はいばらさん・榛原慧美様ですわ。今は本社のほうに・・・」

「はいビンゴ。いくらベスのとこで聞いたって断られるはずだわ・・・
榛原？」

ベスが大きいため息。

「お察しの通り、蘆乃は榛原慧美様の実の娘ですわ。ブラダマンテはわたくしのためには作ってくださいましたが・・・本当は蘆乃さんのために作られた、そう伺ってますわ」

「え・・・じゃあ」

「ええ。ふた振りともオンリーワン・・・同じものはないということですよ」

「じゃあこれからどうするの？替えCHARMなんて・・・」

「・・・当の本人が」

と言ったきり黙ってしまった。

「え・・・蘆乃に話してないの？」

無言で頷く。

ややこしいことになってきた。

「話してない・・・というよりも本人が拒否してますの・・・乃莉子さんに出させはしましたが・・・処分してくれ、としか・・・」

「マルテ・・・じゃダメなの？」

「え・・・蘆乃の前使ってた・・・」

ベスがビツクリしている。

「別に驚くことはないでしょうに・・・コアの情報みればすぐ分かることじゃない。で、中等部の工廠科でも聞いてみたけど、蘆乃のマルテ、誰も使っていないらしいわ。ルーン入ったままだったし、高くて壊しちゃうだから・・・だって」

確かにグランギニョルのCHARMは維持費のケタが違って私たちには扱えない。いくらグランギニョルの最廉価量産CHARMでも、だ。

「どっちにしても、直るまではそれでやってもらうしかないわ。それと——」

「お姉様・・・ヒューズが原因ではなかったわ」

「え・・・」

「さつき百由様から聞いたの。負のマギの浸食よりも・・・お姉様のリイの終わりのほうが早かった・・・って・・・」

「それって・・・」

「遅かれ早かれ私たちはマギの量もピークを過ぎると少なくなっていく・・・その終わりが攻撃と同時に来た・・・」

「つまり、あそこで止めようが止めまいがリイとしては終わっていった、と?」

無言で頷く。

「だからリイとして全うできて私は幸せだったんじゃないのかなあって・・・。お姉様は『違う!』って言いそうだけど・・・」

改めて乃莉子さんのほうを見向き、

「そういうことだからブラダマンテ・アイの修理は保留にしておいて。それと、相談んだけど・・・」

「なるほど。円さんのときとほぼ同じね」

「そういうこと。本人は納得しないだろうけどね。グランギニョルC HARMの部品が高いのも承知してるわ。ほんっと、ムチャなのは分かってるわ」

乃莉子さんに頭を下げる。乃莉子さんは少し考えて、

「中古部品かき集めればなんとか・・・」

ちなみに、CHARMのブレードと銃芯は定期的に交換が必要な部品なので中古というのはありえない。

「ありがとう!今度実家で取り寄せセット作った、って言ってたから送るわね」

「明日香さん、それ、わたくしにもよろしくして?」

・・・やっぱり食いついてきた。

「はいはい・・・部屋にあるから後で取りに来れば？ホントは私が夜食用にってもらった分だからね」

その後改めて控え室に全員呼び出し。

「心配かけてごめんなさい！」

開口一番謝った上で、

「まず最初に報告します。私のお姉様だった夏目京夏様だけど・・・ヒューズが死因ではなかった、と正式発表がありました」

「え・・・どういう意味？」

円が尋ねる。

「つまり、リリイとしての終わりのほうが負のマギの浸食よりも早かった、ということですね」

ベスが補足する。

「つまりはただの事故・・・私が止めようが止めまいがこうなる運命だったのよ・・・」

お姉様の余命宣告の件は結局口に出さなかった。私自身が納得できているのもあるんだけど・・・。

「それと、蘆乃」

「は、はい」

「後で私と一緒にラーズグリーズの楓さんのところに行くわよ」
「嫌です」

即答・・・。

「じゃあ・・・CHARMはどうするの？乃莉子さんにも確認取ったけど、グランギニョル本社に直接掛け合わないと修理はできないって・・・」

蘆乃はベスのほうを見るも、

「残念ながらエリザベート・ファクトリーはノータッチですわ。アーセナルの方が本社栄転の際に関係資料全部持っていったとかで一切

残っておりません」

「今聞いているとおりの蘆乃の替えのCHARMが見つかるまでは訓練はなしにします。自主練は大いにかまわないけどほどほどにね。怪我をしたら元も子もないわ」

「はい」

「じゃあ。今日はこれで解散ね。バスと蘆乃には残ってもらうわ。隊長命令として、ね」

しばらくしてエリユーズニルの控え室には似つかわしくないリイがやってきた。

「あら明日香さん、とエリザベスさんと・・・蘆乃さん？がんくび揃えてどうなさいました？」

一柳隊、ことラーズグリーズから楓さんを呼び出し、事の次第と協力を要請。

「なるほど・・・掛け合ってはみますわ。CHARMの修理ですから問題ないとは思いますが・・・」

「お願いします楓さん」

楓さんを見送り、

「さて、次は乃莉子さんのところね」

工廠科の乃莉子さんのところへ。

「ごきげんよう。どう？やってみて」

「明日香さん・・・とエリザベスさんと蘆乃さん？まあいいわ。頼まれたものはうまく行ったわよー」

「頼まれたもの・・・とは？」

「ちよつと、ね」

魔改造もう上がったのか。乃莉子さん段々早くなってない？もちろん守護天使であるバスにはとぼけてもらっている。

「ひよつとしたら円さんのアステリオンより性能いいかもよー？」

え・・・そこまでなんだ・・・。

と言って机の上に置いたのは――

「・・・マルテ？」

蘆乃がぼつりと呟く。

「・・・の中古部品かき集めて組み直して魔改造したの。グランギニョルのCHARMなんて、中古部品でもなかなか出ないから苦労したわ」

とは乃莉子さんだ。

「見た目はマルテ、ブレードはブラダマンテ、バランスウエイト・・・は搭載できるスペースがなかったから断念したわ。後ちゃんとグランギニョルから公認取ってルーン入れてもらってるからね」

「あの・・・バランスウエイト・・・って？」

蘆乃が疑問に思うのも無理はないだろう。

「私や如來、円のCHARMには仕込んであるの。シューティングモードの安定度が全く違うわ。この前の入れ替え訓練のときは無効にしてたから分からなかったはずよ」

「それと・・・こつちも」

と乃莉子さんが出したのは――

「あ・・・私が使ってた・・・」

思わず蘆乃が声を上げる。蘆乃が中等部時代に使っていたマルテだ。ただし持ち手機構の一部が傷だらけだ。

「見覚えあるでしょ？中等部でも誰も使わなかったそうよ。まあグランギニョルのCHARMは維持費のケタが違うからね」

と苦笑い。

「それはともかく、しばらくどちらかを使うことになるわ。どうする蘆乃？」

「あの・・・明日香隊長・・・どうしてここまで・・・」

「お母さんと何かあった？」

「え・・・」

急に蘆乃の顔が曇る。

「榛原慧美。グランギニョルのアーセナル。蘆乃の実のお母さん。エリザベート・ファクトリー在籍中にベスのCHARM、ブラダマンテを開発。その直後、開発資料一切を持って本社開発部署に戻って改良型の開発途中に失踪。現在も居場所は分かっていない」

「そこまで・・・知ってるんですね」

しばらく黙るも、

「あの人は・・・私の母さんなんかじゃない！」

蘆乃が大声を上げる。

「蘆乃・・・」

「あの人は！・・・あの人は・・・私のことなんて目もくれない・・・！休暇日に戻っても話に上がるのはCHARMのことばかり・・・。私のことなんてちつとも興味ないんだ・・・」

「それは・・・どうかな？」

「え・・・」

蘆乃は驚いた顔をする。

「仕事としてCHARMのことに真剣なのは当たり前？前よね？けどもしそれが、あなたのためだったとしたら？」

「・・・」

何も答えなかった。

「それと、ブラダマンテ・アイはどうやって手に入れたの？いくらユニーク機つて言ってもそう簡単には手に入れないわ。ましてやプロトタイプなんて・・・」

「・・・何が言いたいんですか。私が何かした、とでも？」

「それは今回と関係ないけど・・・グランギニョルのCHARMはマテリアルネームとアーセナルのルーン、それと使用者のルーンが刻印されている。蘆乃もそれぐらいは知ってるわよね？CHARM持ち替えのときに一通り見たけど、それらしきものが一切見当たらなかったわ」

蘆乃は無言で頷くも、

「・・・困らせてやろう、って思ったんです。関連資料も全部私が持っています」

「困らせるどころか大事おわごとになつてますわ。機密事項なので詳しくはお話しできませんが、それは守護天使シユツツエンゲルを結ぶ時時も説明しました」

「私も聞いたことが。第四世代のCHARMの開発にも携わっていたとかで、グランギニョルの精神干渉型CHARMも開発が止まっていると聞いたわ」

アーセナルの間でも有名人だったわけだ。

「あーあ……私もCHARMの開発とか依頼がくれば有名になるんだけどなあ……」

と嘆く乃莉子さんは置いておくとして、

ピピピ……

ベスの携帯端末が鳴る。

「……お父様からですわ。ちよつと失礼」

と一旦外の廊下に出てしまった。

「お母さんの件は一旦置いとくわ。CHARMはどうするの？このままだとLGとしても機能しない。それと、脅すようで悪いけど、私たちリリイは莫大な公費が投入されているわ。ノインヴェルトのバレットとかがいい例ね。CHARMもその例に漏れず、だってこと」
さらに続ける私。

「改めて言うわ。私たちリリイの相手はヒュージよ。あなたのお母さんでもない……それだけは忘れないで」

「おまたせしましたわ」

ベスが戻ってきた。

「慧美様の居場所がわかったそうです……ホント、楓さんの情報収集ネットワークには頭が上がりませんわ……」

事前に楓さんにでも根回ししといたのか？随分手際がいいな。

母親の名前を聞いてまたも険しい表情になる蘆乃。

「蘆乃。ちゃんと謝りなさい。これはわたくしが姉として言っています」

「こういうときに守護天使をダシに使うのはどうかと思うが。」

「で、どうするの？」

蘆乃は少し考えて、

「私のマルテは処分してください。それと、ブラダマンテ・アイと資料はお返しします」

言い切った。

「マルテは処分……はしないけど、部品として再利用させてもらおうわ。それでいい？」

蘆乃は無言で頷く。

「で、ブラダマンテ・アイだけど・・・どう処理するつもり？社長令嬢さん」

「わたくしに考えがありますわ」

とりあえずCHARM問題は片付いた。

親子問題は・・・私たちだけではどうにもできない。

「なんでこう・・・うちの子たちってややこしい悩みばかり抱えてるのかしらね・・・」

「わたくしからは何も申し上げられませんわ」

「だよねえ・・・楓さんも、去年の結梨ちゃん騒ぎのときに父さんと少し揉めたらしいし」

「・・・知ってましたの」

「ミリアムさんからちよつと、ね」

「ベスのところは無関係だったらしいけど、G・E・H・E・N・A.とグランギニョル本社が手を組んで、ヒュージ細胞を使った人造リイ計画に加担した、とかなんとか」

「・・・なんでそんなこと知ってますの!?!」

「たまたま耳にいただけだよ」

とシラを切ったが、実際は去年謹慎解除で部屋から出る直前、当時の生徒会会長である出江史房様いずえしのぶから直接耳にしたからだった。

「・・・次は円と私か」

ボソツと呟く。

「円さん？」

部屋に戻る。いた。

だが、目も合わそうともしてくれない。

「・・・」

そして無言のまま部屋を出ようとする。

「待ってー!」

つい円の手を掴んでしまった。

「……ごめん」

私のほうを振り向くも表情を変えず、振り払いもせず、そのまま手を離す。

「……よかった」

え？

突然円が口を開いた。

「いつもの明日香ちゃんだあああああああ！」

いきなり私に抱きついてきた。

「ええええ!!」

そしてそのまま泣き出してしまった。

「よかった……ホントよかった……」

「ちよつと!?!円!?!」

円が黙っていたのは私がちゃんと返さなかったからだだった。私の取り越し苦労か……。

「ほら、泣いてちゃダメだよ。もうすぐバスが部屋に来るんだから」

「……バスちゃん?」

「円は知らないか。バスがラーメン好きだったこと」

「え!?!そうなの!?!私……お嬢様だからてつきりそういうの食べないかと思ってた」

予想通りの返答。

「本人いたらショック受けるわよ……で、実家の取り寄せセット取りに来るはずだから」

トントン……

ほら、ウワサをすれば。

「明日香さん、円さん入りますわよ?」

ガチャ……

なんというか、この部屋には似つかわしくない人物。百合ヶ丘の生徒だからその例えは間違っているはずだが。

「さっき言ったやつなら手前のクローゼットの下にあるから」
簡潔に場所だけ説明する。

「ちよつと明日香さん！随分冷たくありません？」

「冷たい・・・つて、さつき大事なことは話したでしように・・・他に何かあるのよ・・・」

「円さんとの問題・・・とかですわ」

「・・・さつき解決したわ。単純な理由でね」

「・・・なんのこと？」

円がハテナ顔だ。

「なんでもない。それよりさ、このところ3人揃うことって訓練以外で少ないじゃない？」

「それは・・・そうですね。守護天使になってからはなおさらですわ」

「私も同じ。如來が金魚のフンみたいにベツタリだからね」

「今度久しぶりに3人でどこか行きたいね」

「ヒュージが出なかつたらね」

2年生に上がってから3人で・・・という機会は激減してしまった。すれ違うことのほうが多い。

それよりも。私たちがリリイとしての役目を終え、離ればなれになったとき、この関係はどうなるんだろう？とかふと考えてしまった。

私は母のことが嫌いだ。

アーセナルであることは誇りに思う。けど、常にCHARMのことが頭になんじや・・・と思っていた。

・・・いなくなるまでは。

結局プロトタイプは櫻子姉様を通して『私は無関係』という体で本社のほうに資料と共に返還扱いとなった。ブレードの件は試しに使ってみたらブレードにヒビが入った、ということになっているらしいが。

明日香隊長と櫻子姉様とのやりとりを見て思った。

（この人・・・真剣にヒュージと戦うことを考えてて、私たちのことも

考えてるんだ・・・」

だからこそ亡くなってしまった先代隊長の京夏様も信頼を置いていたんだと思う。妹である如來もべったりなのも納得がいく。

生徒会に申請を出し、深夜の使用許可を取った射撃場へ。

半年ぶりぐらいに使うマルテ（の魔改造仕様のマルテ・リジル。

まず射撃場へ。

ガチャン！

シューティングモードに切り替えてみる。

マルテもそうだが、グランギニョルのCHARMはシューティングモードのとき、展開がキレイで気に入って使ったところがある。

パンパンツ！

試しに数発。もちろん訓練弾だ。気持ちマジの入る速度が早い気がする。射撃自体あまりうまいほうではないので、如來や明日香隊長、円様が羨ましく思うことがある。

前に天上の間で聞いたことがあったのだが、

「ねえ・・・なんであんなに射撃上手いの？」

「なんでって・・・鍛えられたから？」

「・・・答えになってない」

「えーなんで・・・十分答えじゃん。明日香姉様に鍛えられたからね」

と答えが来た。

以前訓練でCHARMを入れ替えてやったことがあったが、ユグドラシル製CHARMを使うリライが多いのはやはり扱い易さなのだろうか？

パンツ！・・・パンツ！・・・パンツ！

素振りをしてでも仕方がないのでとにかく射撃精度を上げたくてとにかく撃ち込む。

（そういうえば・・・櫻子姉様も明日香隊長ほどじゃないけど上手いよね・・・。何が違うんだろう？）

「へえ・・・こんな時間に自主練ねえ・・・」

え・・・明日香隊長!?

「ご、ごきげんよう・・・どうしたんですか?こんな時間に」

「それはごっちの台詞よ。寮の窓眺めてたら射撃場の明かり付いてるから何かあったのかと思つて見に来たの。で、誰かさんみたいに無断使用・・・」

「じゃないですよ。ちゃんと書類もあります」

と時間外使用許可申請を見せる。

「そうだ・・・前々から気になってたんですけど・・・どうしてあんなに射撃うまいんですか?」

「そうね・・・」

明日香隊長は少し考えて、

「サブスキルの恩恵もあるけど・・・御台場時代にビームライフルやっていたのよ」

競技としての射撃、か。正確さが求められる上、勝たなければいけないプレッシャーもある。上手さの秘密はそこだったのか。

「ビームライフル・・・ですか」

「でも、ビームライフルの銃つてCHARMより遥かに重いから、最初は射撃でかなり苦労したわ」

確かに明日香隊長の言う通り、CHARMは俊敏性が求められるはず。

「で、当時の工廠科と相談してバランススイートの基本仕様が出来上がったわ。ブレードモードのときは軽く、シューティングモードは重く、ね。そのときは私以外誰も使わなかった・・・すぐ廃れると思つたんでしょね」

「ほとんどのCHARMには実装されてないですよね?どうして・・・」

「それは設計者の兵藤友葵子様と私しか資料を持ってないからね。

あ・・・今は乃莉子さんもか」

つまり誰も知らない技術、ということだ。

「それと・・・扱いやすい、扱いにくい人は人それぞれだからね。リリース全員が扱いやすい、とも限らないわ」

「なるほど・・・」

「で、私に聞きたいのはそういうことじゃないんでしょ？」

「・・・どうしたら上手くなれるか教えてほしいです」

明日香隊長は、

「そんなに焦ってどうしたの？いずれみんなに教えるつもり。だから答えは『NO』・・・と言いたるところだけど、さつき見てた限りだとあまり上手くはないわね。いや、如來のほうがもっと下手だったわ」
「え・・・」

「信じられないかもしれないけど、中等部の如來は的に当てるのがやつとなぐらい下手だったのよ？」

嘘!?

「・・・その様子だと何も聞いてないのね。如來はね、中等部時代クルツジ使ってたのよ」

ヒビロカネのCHARMでも最軽量だったと記憶しているが。

「グランギニョルのシューティングモードは少しクセがあるの。そのクセのせいで自分が下手なように錯覚するわ。例えば——ブラダマンテの弾速度は800m。タングルニルとあまり変わらないわ。オマケにグングニルより銃芯が短いから、慣性でマガ弾が下に落ちやすくなる。だから少し上目に撃つようにベスには教えたわ」

パンツ！

明日香隊長に言われた通り、そのクセを意識して撃ってみた。

「あ・・・」

結果、的の中央にかなり近づいた。

「さつきも言ったけどグランギニョルのCHARMは軽量に作られている分パワーもあまりないし、銃芯が短いから飛距離も伸びないわ。それを分かって使ってるのかと。マガを少し多めに込めれば飛距離は伸びるけど、今度はオーバーヒートのリスクが高くなる。それは避けたいわよね？」

「ははは・・・」

そこまで考えてなかった、だなんて言えなかった。

(どこまで明日香隊長はヒューズに対して真剣なんだろう?)

「あ・・・明日香隊長」

「まだ他になにか聞きたい？」

「ど……どうして隊長はリリイになろうと思っただんですか？」

これはまだ私が普通の学校に通っていた頃。

夏休みを利用して私の家族と如來、如來の祖母の吉江さんと鎌倉府のあるキャンプ場に遊びに来ていた。

私自身こういうところが初めてだったこともあり、少しはしゃいでいたのもあるが、夕飯前に『森へ入るな』と言われていたにも関わらず如來と2人が入ってしまってしまったのだ。

後にそこは出没多発地域で一般人立ち入り禁止だったことを知ったのはリリイになってからのことだ。

「怖いよお……」

「大丈夫大丈夫。何も出ないって！」

調子に乗って奥へと入っていく。

「……明日ねえ？」

「い……」

GYAAAAAAAAAA!!

スマール級ヒュージ……足がすくんで声すら出ない。

当時の身長ならかなり大きく見えていたはずだ。

「いやだあああああああ！」

その場で泣き叫ぶ如來。

そのときだ。

ザッ……

GYAAAAAAAAAA!!

「ダメじゃない。こんなところウロウロしてたら」

(カ、カツコイイ……)

一目見て思った感想。話を聞くと近所が実家で自主練中にたまたま野良に遭遇したら私たちを見た、ということだった。

その助けてくれたリリイは名乗りもせず、両親たちの元へ送り届け
てくれた。

その制服が百合ヶ丘だったのだけは覚えている。

「その頃から如來つて隊長にベツタリだったんですね」

「どこに行くのも一緒だったわ。中学に上がる前にリリイについて調
べて・・・近くにイルマ女子があるって知ったけど、私は芸術セン
スのかけらもないから御台場を選んだわ」

「大分時間も遅いわ。もう戻りましょ・・・」

「はい」

私は物心ついた時からリリイになるように育てられていた。

百合ヶ丘の幼稚舎は見た目普通のこども園や幼稚園と変わらない
教育だが、リリイのようになるための基礎知識や簡単な基礎訓練もカリ
キュラムに含まれていた。

だからといって全員が全員優秀なりリイになるわけではなく、「さ
せられていた」気持ちばかりが大きくなっていた。

(リリイが好きでなったわけじゃない！)

レアスキル覚醒も早いほうだった。周囲からは優等生扱いされ、C
HARMも中古だったが他の子たちよりもいいものを持たされた。

周囲の子は普通に接してはくれているが、どこかよそよそしく感じ
たのだ。唯一気にも止めず、普通に接してくれたのは因悦いえると亡くなっ
た麻友ちゃんだけだった。

もしかしたら・・・母は自分がリリイになれなかったのをすごく後
悔しているのかもしれない。

(あの人は・・・自分がなれなかったリリイを私に託した?)

たまにそんな事を思うが、そんな思わせることを言ったことも、素
振りを見せたことはない。

だから「あの人」は嫌いだ。

けど、明日香隊長の話聞いて少し考えが変わったかもしれない。

「何ボーツしてるの？」

因悦に肩を叩かれる。

「うひゃあつ！な、なんだ・・・因悦か・・・」

「なんだとは失礼ねー。夜中射撃場で明日香隊長と何してたの？」

「な、何もしてないっ！ただ、アドバイスをもらってただけ。それと――」

因悦にあの画像を見せる。

「・・・あれ、中等部で使ってたマルテ？」

「じゃない。いろいろあつて別な魔改造仕様のマルテを工廠科の乃莉子様を用意してもらったの。グランギニョルのCHARMは正規のルート以外では中古でも手にはいらないわ」

「じゃあなんで・・・あ」

「あの人經由じゃないわよ。櫻子姉様を通して楓様からメイン部品だけ調達し直してもらってる」

因悦にもグランギニョルのシステムについて説明。

マテリアルネーム(CHARMメーカー名)の刻印と使用者(私)のルーンの刻印がないと正規品としては扱われないからだ。

「へえ・・・百合ヶ丘つてユグドラシルのCHARM使ってる子多いのはなんでだろうね。今まで気にもしなかったけど・・・」

「さあ？工廠科行つて聞いてみたら？私は特別CHARMに思い入れがあるわけじゃないし」

「お母さんがアーセナルなの？」

「あの人の話はしないでつて言ったでしょ！あ・・・ごめん・・・」
因悦に襲いかかる手前でグツと抑える。

「そんなにお母さんのことキライ？」

その声は・・・。

「明日香隊長。ごきげんよう。夜中はありがとうございました」

「ご、ごきげんよう。今日も訓練はなしですよね？どうしてまた・・・」
「たまたま、よ。如來に講義でわからないところがあるからつて教え

てた帰り」

「それで・・・訓練なんですけど・・・」

「明日から再開するわ。それに関して因悦と藍ちゃんには後で乃莉子さんのところに行ってもらおうわ」

「あの・・・この前メンテナンスしてもらったばかりなんですけど・・・」

「これを見て」

明日香隊長がバランススウエイトシステム本体の画像を見せる。

「なんですか、これ？」

「Counter Huge Shooting Baranced Weight System。私はバランススウエイトって呼んでるわ。私と如來、円とみどりのCHARMにはこれが仕込んでいるの。

ベスと蘆乃は構造上載せられないんだけどね」

「それがどうかしたんですか？」

「射撃能力向上を図る。このシステムはブレードのときは軽く、シューティングモードのときは重くなる。どうしてかわかる？」

「わかりません」

「明日香隊長・・・ビームライフルをやっていたそうです。その利点を生かすため・・・ですよね？」

「簡単に言うとうそだね・・・ビームライフル用の銃はCHARMの倍以上の重量がある。ホントはさらに重りの塊みたいなライフルジャケットも着なきやいけないからトータル3倍以上の重量になる・・・んだけど、さすがに無理だからせめてCHARMだけでも同じに・・・と思って考えたのがこのシステムなの。ベスと蘆乃以外全員にこのシステムを搭載します」

ピ。ピ。ピ・・・

明日香隊長の携帯端末が鳴る音だ。

「丁度いいわ。因悦も私についてきて」

「え・・・」

私が強引に連れ出す形で工廠科の乃莉子さんの工房へ。

「随分早かったわね」

「でしょ？私もびっくりしたわ・・・って、あれ？因悦さんも一緒？」

「ご、ごきげんよう・・・」

「たまたま居合わせたから付き合ってもらったわ」

「これが実物ですか・・・」

バランスウエイトを眺める因悦。

「どういう仕組みかは教えられないけどびっくりするわよー。実は私も実装しちゃった」

と工房裏に置いてあるドラウプニルを指す。

「・・・あれってどこのですか？」

「あれは私が作ったのよ。唯一無二のCHARMだから」

「え・・・自作機なんですか!?!」

「だからよ。ミリアムさんや百由様とか他にも工廠科のリリイがいるのに乃莉子さんに任せてる理由。もちろんそれだけじゃないけどね」
「高等部あがつてすぐにエリザベスさんとかみどりさんに絡んで京夏様と明日香さんにこっぴどく叱られたのよね・・・。それからおかげ・・・みたいなの？」

「随分軽いノリなんですわね・・・」

「元々は友達の咲良がLGに入ったーって言って紹介されたのが明日香さんたちだった、ってだけの話。で、確認だけに来たわけじゃないんですよ？」

「ご名答。旧式ってまだある？」

「旧式？」

ついこの間まで私が使っていたので解体はされていないはず。

「まだあるわよ。それが・・・どうかしたの？」

「明日、先に旧式のほうで体験させたいから2つ用意お願いね」

「りよーかい・・・京夏様用の新品予備もあるんだけど、どうする？」

え・・・。

「それって・・・」

「明日香さんには黙っててって言われてたのよ。けど、もう・・・ね」

ある日を境に京夏お姉様が劇的に射撃の精度が上がった気がしたのだが、そういうことだったのか……。

コアを更新して、まだシューティングモードを試していないのでわからなかった、ってことか。

「お姉……様……隠し事多すぎ……」

思わず泣きそうになるがここはグツと我慢する。

「と、とにかく明日は控え室じゃなくて乃莉子さんの工房に直接ね」「はい」

翌日。

如來には副隊長として5人の訓練を任せることに。

「来たわね」

各自のCHARMを持ち寄ってもらい、早速実装することに。藍ちゃんは藍ちゃんで、

「ウワサだけは知ってました……変な仕組みを作ってるアーセナルがいるらしいって」

まあそれぞれ考え方次第なので、概ね間違っではない。

「明日香さんがあえて先に初期型を実装させるのは理由があるからだと思うけど、そこはまあいっか。モード切り替えのときにショック振動があるからそこだけ注意してね」

1時間かからずに3人分の実装完了。乃莉子さんも随分手慣れたなあ、と素直に関心してしまう。

そのまま射撃場へ。

「試しに1発撃ってみて」

因悦が右手をかざしCHARMを起動させる。

ガチャン！

シューティングモードへ切り替える。

「おわあっ！…え？…何？…どうなってるのこれ!?!」

一瞬よろめいたが、

パンツ！

訓練弾を1発撃ってみて。

「……スゴイ！全然ぶれないです！撃ったときの衝撃も緩和されてる……」

驚く因悦。

「初期型の欠点何か分かった？」

「えっと……モード切り替えのときの重量負荷がすごいですね……」
「ひとつアドバースすると、手を添える位置をもう少し前にすると
もつと安定するわよ」

射撃のアドバースをした上で、

「使つての通り、初期型はモード移動時の重量バランスがおかしくなる
つていう欠点があったの。それでも私は2年近くこれを使つてた
んだけどね。藍ちゃんもやってみて」

「はい」

ガチャン！

「つとととと……」

藍ちゃんの腰に軽く手を添える。

「あ、ありがとうございます……」

「体重をかけていない証拠ね。ただ持つてるだけではダメ。接近戦で
は問題ないけど、こういう定点射撃のときは重心を前にしないと」
「う……重い……」

藍ちゃんは少しフラフラ気味だ。

「添える手が後ろすぎるわね……この辺かな……」

と、藍ちゃんの手を誘導する。

「は、はい」

まだフラフラしているようだ。藍ちゃんは背が低い上にあまり体
重もない。うーん……ダメかな……。

「藍ちゃんにはムリか……乃莉子さん。もうちょっとウエイト重量減
らせる？みどりと同じぐらいでいいと思う」

当然だが、バランススウエイト自体強化リレイへの利用は想定してい
ない。

「ちよつとごめんね」

乃莉子さんが調整している間。

「改良型についてちよつと話すわね。実をいうと私も良く分かってないの」

「そうなんですか？」

「ええ。如來のタングズニルで初めて知ったからね。ただ、使い勝手はかなり向上してるわ。欠点も克服されている」

「タネ明かしをすると術式が少し変わってるわね。知つての通りCHARMはマジを通じて術式を介して力となるわ」

「その術式が改良されている、と」

「そゆこと。だから今みたいな苦労はしないわよ。はい、これでオツケーつと」

藍ちゃんに戻す乃莉子さん。

「これでもう一回やってみて。少し位置も直したわ」

ガチャン！

モードの切り替わる音。

「え……うそ……すごい！」

藍ちゃんもビックリしている。

「明日香隊長これチートですよ……」

藍ちゃんにチートと言われてしまった。

「私たちの相手はヒュージよ。チートとか悠長なことは言ってられないでしょ？」

「確かに……」

「かつてはソロでマジを大量にCHARMに流し込んで撃つ方法もあったらしいけど、今は禁止事項ね。その代わりとして9人でパス回してマジを貯めるノインヴェルト戦術ができた……ってまあ今日やってることとは関係ないけど、ヒュージ相手に生半可なことをしても仕方がないってこと」

そろそろ戻るか。如來に連絡を……。

ゴーン！ゴーン！

ヒュージ出現のチャイムだ。今日は当番ではないはずなのでひとまず置いておく。

「そろそろ訓練に合流するわよ」

「はい」

ピ。ピ。ピ。...

携帯端末が鳴る。メールだ。どこからだろう？

『LGエリユーズニル尾上明日香隊長、ヒュージ迎撃に関して私たちは力不足で駆逐できないかもしれないので、協力をお願いしたく連絡を上げました』

差出人は——以前手合わせしたパルパスの隊長瀬戸煌麿からだった。

慌ててメッセージで返信する。

「どういうこと？通常任務なら苦労はしないでしょ？」

『それが・・・スモール級の数が尋常じゃなくて・・・私たちだけでは駆逐しきれません！』

『場所送って。すぐ行くわ』

と返信。

通話機能を使い、如來を呼び出す。

『あ、明日ねえ。どうしたの？』

「訓練は今すぐやめて。パルパスの煌麿さんから応援要請があったわ」

『え？煌麿？なんでまた？』

「あのね・・・人で判断するんじゃないの。そっちに場所送るからすぐに向かって」

ピッ・・・

「煌麿さんって・・・パルパスの隊長ですよ？」

「そうね・・・彼女たちからのヘルプよ。スモール級を駆逐しきれないって・・・」

以前スモール級「だけ」を100体以上駆逐したことがあったが、今回はそれ以上か？

「3人とも私についてきて！」

困惑・その2

現場に到着してみた。これは……。

GYAAAAA!!

確かにスマール級の数が尋常じゃない。

「うわ……なんだこれ……あの時の悪夢が蘇るんだけど……」
とはみどりだ。

「悪夢って?」

如來^{ゆき}たちは知らない。

「去年の同じような時期に、スマール級が大量に出たことがあるのよ……100以上は確実にいたわ」

「え……」

「100って……」

今回はそれを上回る数だ。しかもミドル級もいる。

「明日香隊長。ありがとうございます」

煌麿が礼をする。

「おおよその数って分かる?後ケイブの有無」

「パルパスには鷹の目使いのリリイがいるはずなのでほぼ正確に把握できるはずだ。」

「えと……おそらくスマール級で250近く……ミドル級は大したことないみたいです。ケイブも複数確認済なんですが……うちには天の秤目使いがいないので……」

「了解。円!早速よろしく」

「えつと……誰がそうなのかな?」

とりあえずケイブを破壊しないことには始まらないので鷹の目使いの子を探す。

「私……です」

と黒髪に三編みのリリイが手を上げる。

「どの辺り?」

「ここから4キロ近く離れてます。ただ、海岸線沿いなので風さえなければ大丈夫かと・・・」

「分かった!」

フォン・・・

右手をかざしてCHARMを起動させる。

ガチャン!

シューティングモードに切り替えて構える。

そしてレアスキルを発動。

(うわあ・・・風が・・・)

ケイブ付近は強風。この横風だとかなり弾は流されるはず。追い風なら有利に働くんだけど・・・。

とはいえ文句を言っても始まらない。

(どうする? 流される分計算して少しずらす?)

ケイブ自体の規模はそれほど大きくない。数発で消滅するだろう。パンツ!

試しに空撃ち。どの程度流れるか。

(うわ・・・結構流されるなあ・・・)

それを計算した上で少しずらす。

(これで行けるはず・・・)

トリガーを引く。

パンツパンツ!

(よしっ!)

ケイブの消滅完了。

「ケイブの消滅確認。見事です! 円様」

「他のメンバーってどうしてるの?」

「私と映美以外総掛かりでスモール級に対応してます・・・」

映美さん——鷹の目の子か。

「じゃあ藍ちゃん」

「はい」

「今回大暴れしてもらうわ。発動させた後って後遺症どうなの？」

ルナティックトランサー
「狂酔の月持ち特有の症状のことだ。」

「えっと・・・私は大丈夫です。発動中の記憶のほうになりますけど・・・」

「とにかく数が多いわ。如來と円はなるべく遠くのやつを狙って。私もなるべく遠くに集中するわ。因悦とみどり、咲良ちゃんはパルパスの他メンバーのサポート、ベスと蘆乃は藍ちゃんと一緒にガンガンやっちゃって」

「はいー」

「後円はオーバーヒートさせないようにね」

「明日香ちゃんひつどーい！」

「え・・・オーバーヒートって・・・CHARMのですか？」

因悦だ。

「そうよ。オーバーヒートは2つパターンが考えられるわ。1つはマギの受給量は多くないんだけど、累積で溜まって起きるパターン。もう1つは去年のみどりみたいに一度に大量のマギを受け取ってCHARMが耐えきれなくなる場合ね」

「なるほど・・・」

「そんなわけでみんな行くわよ」

「はははははは！あっはははははははははは！」

今まで何人か酔狂の月のトランス状態は見てきたが、その中でも藍ちゃんは異質なほうだと思う。

次々と駆逐していく。

さて、私たちは確実に仕留めていこう。

「如來は右側エリア、円は一番奥を狙って。私は左を狙うわ。数が多
いからなるべくマギは節約して」

「わかった」

「オツケー」

パンツッ！パンツッ！パンツッ！

「ホント・・・みどりじゃないけど、確かに去年の悪夢よね・・・」
撃ちながらの会話。

確実に仕留めてはいる。

「ねえ・・・前から気になってたんだけど、明日ねえと円様ってどうしてそんなに仲がいいの？」

如來からの質問。このタイミングで聞くことではないと思うけど・・・。

「どうって・・・うーん・・・なんでだろう？」

「えっ？明日ねえも分かってないの？」

「どっちかっていうと私かな・・・」

「円様？」

「多分だけど・・・私が不安で押しつぶされそうだったから・・・紛らわすのに明日香ちゃんに話かけてたんだと思う」

「結局してもしなくても同じ部屋で同じクラスだったんだけどね。

おっ！と・・・」

パンツッ！パンツッ！

「元々私も・・・話すの大好きだったし、早く友達作りたい！って思ってたから・・・」

確かに円は私よりも友達が多い。コミュニケーション力オバケ・・・とまでは言わないけど、それに近いと思っっている。

10分後、

「ああああああ！あきたあああああああああああああ！」

如來が文句を言いだした。

「あのねえ・・・これは遊びじゃないのよ？」
諭すも、

「だって同じことの繰り返しだよ？やってて面白くないもん！」

もう何体撃つただろうか。一向に終わりが見えない。

一方のベスと蘆乃のほうだが――

「くっ……!」

「おっ、終わりが見えませんわっ……!」

やはり数で苦戦していた。

そして……。

「誰も気づかない……?まさかね……」

今はいつものタングズニルではなく、京夏お姉様が使っていたダイ
ンスレイフ・カービンを使っているのだが……私に気を使って何も
言わない?

「ねえ?みんな……私に気を使わなくていいわよ?」

パンツ!パンツ!

「分かってたんだ?だよねえ……コア付け替えたの?」

「違うわ。書き換えたの。だからって2つ同時に扱えるわけじゃない
けど」

「書き換え?」

「そ。契約のときと同じ要領でやれば更新されるわ」

普通はまずやらないんだけどね。

藍ちゃんのほうに目をやる。

「はあっ……はあっ……はあっ……数……多すぎっ!」

もう何体倒してるのだろう……息が荒い。それでも半分近くは行っ
てると思うが。それでもマジ切れは起こしてないらしい。強化リ
イ故の強みか。

すると、

「えっ!?!」

「な、なに!?!」

パアアアアア……

ミドル級の1体が突然光りだした。

GYA A A A A A A!!

大きい叫びとともに残りのヒュージが光に吸い寄せられていく。
まさか……!?!

「煌塵、ノインヴェルトを覚悟したほうがいいかもしれないわ!」

「はい……」

GYAAAAA!!

ヒュンヒュン・・・

大量のマギスフィアが飛んできた!

「うわあっ!」

「みんな大丈夫!?!」

必死にみんな避けている。

「藍ちゃん気をつけて!負のマギに侵されたら大変よ!」

が、当の藍ちゃんの様子がおかしい。

「う・・・ううっ・・・」

負のマギの影響の前兆か?

「因悦!藍ちゃんをどこか安全なところへ!」

「はい!」

ヒュージからなるべく見えないところへ避難してきた。

パアアアアア・・・

指輪同士の手を繋いでマギ交感。

「大丈夫?」

「う、うん・・・」

私のレアスキルとの相乗効果で藍ちゃんが楽になってくれればいいんだけど・・・。

「マギ交感って普段からしてる?」

「・・・強化リリイになってからは一度も」

「そう・・・」

「負のマギの影響を受けにくいっていうのも知ってたから・・・接術は甘んじて受けたけど・・・危なかった・・・ありがとう因悦ちゃん・・・」
酔狂の月使いは負のマギの影響を受けやすいのは知っている。けど、藍ちゃんみたいな受けにくい子でもこうなるってことは相当なことだ。

「な、なに・・・これ・・・」

目の前で起きていることが信じられない・・・。

「ヒュージ同士の共食い・・・」

正直見てられるものではなかった。まだ無機質化する前の段階なので「あの」強烈な臭いはないのだが、それでも見ていていい気分はしない。

「う・・・」

パルパスマンバーの大半が目をそらしている。

「・・・ヒュージの共食い、いつ見てもいい気分はしませんわね。まだ臭いがないだけマシですが」

まああれだけいければ起こらないはずはない。

「何かのキツカケでケンカになったんだろうな。あたしも共食いは初めて見た」

とはみどりだ。

「とはいえ見ても何も始まらないわ！早く片付けましょう！」

結局――

18人総掛かりで駆逐するのに半日近くかかってしまった。

「飯、食いそびれちゃったな・・・けどこれうめえ。明日香、あたしんところにもいくつかくれよ」

「今回は仕方ありませんわ・・・あれだけの数のヒュージですもの」

「明日香ちゃん夜の食がこんな形で役に立つなんてね」

「すみません・・・ホント助かりました」

「別にいいって。困ったときはお互い様、でしょ？」

寮に戻ったのは20時過ぎになってしまった。如來たちは天上の間の入浴時間に被ってるので運良く入れていると思うが私たちは・・・。

オマケに食堂の時間も過ぎてしまったため、実家から送ってもらったラーメンを5人がラウンジで食べている、という次第だ。

「みどりは連絡先教えるから自分でなんとかしなさい。人からたかろうとかダメな人の典型よ」

「えーケチー。LGメンバーのよしみでなんとかならないの？ていうかお嬢はただでもらってんじやん」

「ベスはいいのー！」

「なんだよそれ。ただのえこひいきじやん」

「ごきげんよう。こんな時間にどうしたの？」

梨溜さんだ。

「梨璃さんごきげんようですわ。さきほどまで他所のLGの応援をしまして……」

「応援って……パルパスの？」

「ええ。さつき戻ってきたから食事も食べそこねて……自分の夜食をみんなで食べてる」

「な、なるほど……」

「でも明日香さんすごいなあ……私なんてお姉様に頼りつきりだから」
「そうかなあ？私にはそうは見えないけど……」

梨溜さん……謙虚さは去年と変わってない気がする。私よりよっぽどしつかりしてるわよ……とは言えなかった。

「ごちそうさまでした」

梨璃さんもいなくなり、食器類を片付けているときだ。

「明日香さん」

咲良ちゃんから声をかけられた。

「LGから抜けさせてください」

……えっ？

「ど、どうしたの急に!?何か不満でも……」

突然の告白。戦力ダウンになるのは間違いない。

「今のLGに不満はないんです……」

「じゃあどうして……」

「明日香さんのやり方に対して、です」

・・・やはりか。

「それは・・・ずつと言おうと思つてて」

「・・・ちよつと遅かつたです」

とだけ言い残し、部屋に戻つていった。

「待つて咲良ちゃん！」

声をかけるも返事はない。

慌ててメッセージを送る。

『私が納得できない。納得できる理由を聞かせてほしい。書類を提出して受理されるまでは籍は抜かないわ。訓練も参加するように』

しかし、返事は来なかつた。

「明日香ちゃん・・・」

部屋に戻つてから。円とほとんど会話をせず。

咲良ちゃん突然の脱退宣言。おそらく決め手は「あの」件だろう。けど事故は事故だ。私に非はない。脱退には私の署名とルーンがなければ受理されない。

「・・・やっぱり私にはLG隊長はムリだったんだ」

ダインスレイフ・カービンを起動させ自分の胸元へ。

バツ！

円がCHARMから遠ざけようとする。

「ダメだよ！明日香ちゃん！そんなことしたつて如來ちゃんが悲しむだけだよ？」

ガシャン・・・

床にCHARMが落ち、後ろから抱きとめられた。

「・・・ごめん円」

お姉様が亡くなつてから私のメンタルが不安定だ。私自身は吹っ切つたつもりなんだけど・・・。

「咲良ちゃんと話しよ？私も納得行つてない」

無言で頷く。

「・・・私が出ても取り繕ってくれないと思う。円、お願い」

咲良ちゃんの呼び出しは円にお願いし、私は再びラウンジへ。私の姿を見れば確実に戻る。なので物陰から見ることには。

「・・・なんで私まで」

ベス・・・いや、櫻子も呼び戻す。

「私まで・・・じゃない！1人でも欠けたらエリユーズニルじゃなくなると思ってる・・・」

2年生組は5人揃わなければ意味がないと思っている。

「明日ねえ・・・咲良様が抜けるってホント？」

如來にも来てもらった。

「まだよ。LG脱退は私の署名とルーンの捺印が必要だから、許さない限りは籍は置いたままね」

咲良ちゃんが来た。

「じゃ、私と如來は隠れてるから後よろしくね」

「話ってなんですか？」

「ねえ咲良ちゃん。なんでLG抜ける、なんて言ったの？」

早速切り出した円。

「・・・」

しかし答えない。

「そんなに明日香ちゃんのやり方が気に入らない？」

「・・・ノインヴェルト戦術です」

・・・やはりか。

「わたくしもそれは思っていましたわ」

「ベスちゃん・・・」

あえて偶然を装うようにしてもらおう。

「京夏様は割と早いうちに訓練しましたが、明日香さんは一切やっていませんものね」

「いくら待ってもやる気配もない。そんな中あの事件が・・・」
もちろんそんなのは分かっている。

「そんなの・・・分かってるわよ！」

私の姿を見た途端、席を立つ咲良ちゃん。

スツ・・・

「・・・ごめん咲良様」

如來にレアスキルを使ってもらい、背後から両腕を掴んで逃げられないように。

「どうして逃げようとするの？それじゃ・・・昔の・・・あの時の私と一緒にでしょ！」

パンツ！

咲良ちゃんが私に近づき平手打ち・・・。

「だったら・・・なんであの時ちゃんと止めなかったんですか！妹でしょ！あの事件で私は失望した！それだけ・・・」

まさか今になってこの話になるとは・・・。

「あれは事故よ！・・・止めようが止めまいが結局同じ運命だったのよ・・・ノインヴェルト戦術は私のせい・・・とにかく訓練を詰め込みすぎないように！って考えて悩んで・・・」

「だからって！やらなくていいって理由になんかならない！」

如來の手を振り払おうとする咲良ちゃん。そこへ、

「・・・違うよ咲良ちゃん。やらないんじゃない・・・やれなかったんだよ？」

円・・・。

「咲良ちゃんこれ見て？」

これは・・・円があつのノートをラウンジのテーブルの上に置く。。

「これは・・・？」

「明日香ちゃんが隊長になって・・・今まで何の訓練をしてきたか、これからどういう訓練をするか、戦略のアイデアとかをまとめたノートだよ」

「・・・」

ノートを手に取り、内容を見ていくうちにそれまで立っていた咲良ちゃんが座る。

そこには如來と蘆乃が事あるごとにケンカして訓練内容が総崩れしたことを愚痴っていたり、ノインヴェルトの訓練を出来てないことを後悔し、自責の念を込めて書きなぐった形跡もそのまま残ってい

る。

「訓練でやろうとしてることがあまりにも多すぎて、組み込みミスをしてたのは謝るわ。他にまだ至らないことがあれば改善もする……。だからお願い！LGにはまだいてほしいの……。私たち2年生は、1人でもかけたらエリユーズニルじゃなくなる気がして……。洲盧美様の二の舞にしたくないの……」

膝をついて土下座。

「え……。明日香ちゃん!?ちよつと!?!」

「顔上げてくださいいな!いくら明日香さんとはいえこれでは……」

「……」

私は黙ったまま。しばらくしてようやく、

「……。明日香さん顔を上げてください」

咲良ちゃんが口を開いた。

「?」

ビリッ……

これって……。

LG脱退の書類を破く音だった。

「……ごめんなさい。私が誤解してたみたいです。本当に偶然だったんですね」

……。よかった。誤解が解けたようだ。

「約束してください。絶対ノインヴェルトの訓練をするって」

「咲良ちゃん、それなんだけどね——」

咲良ちゃんたちが戻った後。私はまだラウンジにいた。

「明日ねえ……。さっきのノート見せて?」

如來……。あんた戻ったんじゃないの?」

「もうすぐ消灯時間でしょ?大丈夫なの?」

「た、多分……」

まあ制服着てるから大丈夫か。読み始める如來。

「うー・・・」

読んでいくうちに段々顔が渋くなっていく。

「ごめんなさいごめんなさい・・・」

呪文のようにぶつぶつと言いだめた。私の愚痴が効いてるんだな・・・。

「けどスゴイ・・・どうしたらこんな戦略のアイデアとか出てくるの?」

「半分はお姉様の受け売り。半分は思いつきね。後は・・・書籍棟見た戦略の本、とかね」

「えつと・・・書籍棟って、咲良様がいる?」

あ、そっか。行ったことがないのか。

「そ。3年の講義棟の奥の別建物。建物の雰囲気山樞館に似てるかな。蔵書数がすごいよ。古い漫画や小説もあるらしいわ。私じゃ読まないけどね」

咲良ちゃん文芸好きだからその数と内容に魅了されてそのまま司書へ・・・って感じなのかな?

「・・・漫画ですつて!?!」

・・・如來じゃなくてベスが食いついてきた。

目が輝いてる・・・。ラーメン好きで漫画好き・・・お嬢様のイメージがどんどん崩れていく。まあ今更か。結局はベス・・・櫻子も私達と同じってことだ。

「あ・・・あああ」

気がついたとおもったら顔が真っ赤になっていくベス。如來がいることを忘れてたのか・・・。

「なんであんたが食いついてるのよ・・・」

はあ・・・ため息の後、

「落ちつきなさいよ・・・後で詳細送るから」

私たちのノインヴェルト戦術

ノインヴェルト戦術の訓練が未だに出来ていないのは問題だ。だからこそ昨日咲良ちゃんが無理解していたわけだし。

この前は幸い因悦いえる以外経験者あ(藍ちゃん)は不明だが)だったので「たまたま」成功はした。しかし、たまたまではダメなのだ。確実にヒュージを撃退したい。それは自分たちの命にも関わってくる。

(順番間違いなく見誤ってるよね・・・)

それは後悔してもしきれない。

「今日はノインヴェルト戦術の訓練をします」

やっど、か。

「で、明日香。場所はどうすんだ？」

みどりだ。

「去年切り通し行ったでしょ？あそこでやるわ」

「え・・・あの狭いところですか・・・」

「みどり様違いますよ」

蘆乃のだ。

「一度明日香隊長に連れて行ってもらいましたが、あそこなら迷惑かけることもなさそうですね」

と補足してくれた。

「あの切り通しはね、手前が狭くてその奥が広場みたいになってるの。その先にあつたのが大きな楠。去年私が訓練弾のフィニッシュショットで飛ばしちゃったやつね。ちなみにだけど、去年の入学式で一柳さんと結夢様、楓さんが標本になるはずだったヒュージを倒したのもここね」

「へえ・・・」

「あそこかあ・・・なんか懐かしいな・・・あのときはマジスファイアがマトモに扱えなくて苦労したんだよね私」

とは円まじかだ。

「そうでしたわね。わたくしはいい思い出はないのであまり思い出したくありませんが・・・」

ノーコンのことか。

「まあいいわ。移動するわよ」

ということやってきたわけだが、ここはヒュージ出没多発地域なので野良がどこかに潜んでいる可能性もある。そのときは倒すまでだ。

「まず最初に特殊訓練弾を使ってマギスフィアをパスする練習からやるわ。ホントはもっと早くやりたかった・・・けどあんな事態に・・・」
「思い出すな・・・思い出すな私！」

「如來と因悦の2人だけで数回パスを回して。ある程度回したら私に」

「わかった」

「はい」

「最初のショットは・・・因悦、お願いね」

と、訓練弾のノインヴェルトのバレットを渡す。

ガチャン！

シューティングモードに切り替わる音。

装填口へ訓練弾が入る。

ズガン！

「おっと・・・」

グンツ！

如來ゆおが受け取る。

「パスしたら因悦は一旦持ったまままでいて」

「じゃ行くよ！」

シュバツ！

「受け方はこの前言った通りね」

「はい」

グンツ！

因悦はこの前より苦勞することなく受け取った。

「如來。なんでこの2人だけでパスさせてるか分かる？」

「えっと・・・因悦は慣れてないのは見て分かる。私は・・・？」

「因悦のパスの受け方を見て分からなかった？」

「受けるときにCHARMを引いて・・・あ」

理解したようだ。

「御台場では押すように教わったじゃない？その方法だと手首に荷がかかって余計にマギを消費するの。私も最初それでやって矯正されたわ」

「そっか・・・引いて受ける・・・」

「因悦。如來に返していいわ」

「はい。じゃパス」

シュバツ！

パスもこの前より良くなっている。因悦、実はこっそり練習したか？

「引いて受ける・・・引いて・・・」

グンツ！

「あ・・・ホントだ。全然楽・・・」

「後2回パス回しして」

「因悦さん随分良くなりましたわね・・・」

ベスもそう思ったようで、

「そうね。この前からしたら、だけど。後は回数こなせば・・・」

さて、そろそろ待機しますか。指輪をかざし、CHARMを起動する。

フォン・・・

「明日ねえ行くよ！」

シュバツ！

如來からのパス。

グンツ！

受け取ったまま説明。

「訓練弾でのノインヴェルトに関して少し説明するわ。消費するマギ量は通常の半分以下だけど、威力が半減するわけじゃないわ。今使ってる訓練弾はちよつと特殊で3分の1しかマギを消費しないの。パス回しの練習用ね」

「へえ・・・」

とは円だ。

「ベス、蘆乃、藍ちゃん、みどり、咲良ちゃんの順でパス回し。フィニッシュシユシヨットは私がやるわ。じゃ行くわよ」

シユバツ！

「わかりましたわー！」

グンツ！

「・・・確かに今までの訓練弾より楽ですわね。藍さん！」

シユバツ！

こっそり蘆乃の元へ。

「・・・ベスつてノインヴェルトのパス回しすっごい下手だったのよ？とんでもないところに投げて良く京夏お姉様に怒られてたわね」

「・・・櫻子姉様がですか？嘘ついてませんよね？」

「本人に聞かれると後大変だからこっそり教えてるの」

と耳打ちでのやりとり。

本人に聞かれるとまた口を聞いてくれなくなりそうなので気付かれないように。

「明日香さん？何をコソコソと話してますの？」

やば・・・気づかれたか？

グンツ！

「・・・あれ？重く・・・ない？」

ベスから聞いた話ではこの前唯一ノインヴェルトでパスを回していないらしい。

「藍ちゃんノインヴェルトの経験は？」

念の為聞いてみる。

「えと・・・今日が初めて・・・です」

うわ・・・マジか。これは私のミスだ。ただ、「今は」問題なく受け取れてはいる。

「あの・・・この後どうしたら・・・」

「棒に物があたったときに跳ね返す感覚分かる？アレと同じようにやってみて」

「はい。えつと・・・こう・・・かな・・・みどり様！」

シュバツ!

「できた!」

「あいよっ」

蘆乃も特に問題はないのでそのまま、後は特に問題なくパス回し。

「明日香さん!」

ラストだ。

グンツ!

ガチャン!

シューティングモードへ。

「フイニツシュショット!」

宣言して昔私が撃った方向へ。

ズガンツ!

いつもよりかなり軽い音。そして――

ズドーン!

爆風も軽い。以前撃った同じ穴に入る。当然だが、以前私の開けた

穴は草が生えていた。

「やっぱり明日香隊長すごい……です」

「あんな正確に同じ位置に撃てるなんて……」

蘆乃と因悦だ。

「フイニツシュショットだけど……如來か蘆乃のどちらかにしようと思ってるわ」

「え?明日ねえじゃないの?」

如來が驚いているが、

「あのね……私のポジションはどこ?」

基本的な質問。

テクニカルゾーン

「T Z……」

レギオン

「流動的に変えるLGもあるけど、他所は他所よ。そもそもバレット

持つてる人が最初でしょ。必然的に私か如來になるわ。それともう

ひとつ。ノインヴェルト戦術の基本は?」

「ヒューズを攪乱させて動きを封じる……」

はあ……私が聞いたのがバカだった。

「それは説明。蘆乃、代わりに答えて」

「・・・攪乱のためにポジションごとにランダム、です」

「正解。例えばだけど・・・私から蘆乃へそこから咲良ちゃん、円、みどり、因悦、藍ちゃん、ベス、フィニッシュショットが如來、つて感じかな。そのときの状況によるけど、いかにヒューズを翻弄できるか、ね」

この場合はTZからAアタッキングゾーン Z、TZ同士、Bバックゾーン ZからTZ、ラストは如來のAZ、となる。

「つまり、指揮してる私にそんな余裕はないってこと。わかった？」

「この前みたいに明日香隊長が抜けた場合はどうなるんですか？」

藍ちゃんからの質問。

如來がノインヴェルトのバレットを持っている場合か。

少し考えてから、

「それでも基本は同じね。その場合はフィニッシュショットは蘆乃になるかな」

「ノインヴェルトの特殊弾を誰に預けるかによりますわね」

とはベスだ。

「今日は訓練だけど、実際はこの前みたいにマギを激しく消費するわ。それだけ肝に銘じておいてね」

「はい！」

「藍ちゃん、因悦、ちよっと」

2人をそばへ。

「2人には別メニューね。パスの練習で昔ベスがやってた方法が・・・」

「ちよっと！明日香さん！」

「なに？ただの個人練習よ。別に方法は関係ないでしょうに・・・」

「・・・桜子姉様。わざわざ自分で言わなくても」

私はため息。

「この際諦めたら？」

ベスはCHARMを取り出し、無言で今にも私に襲いかかろうとしている。

「姉様ダメです！落ち着いて・・・」

蘆乃が止めに入る。

またしばらく口聞かないパターンか？まあいい。

「あの・・・なんで櫻子様はあんなに怒ってるんでしょう？」

因悦たちは気づいていないようだ。

「分からなかったら直接本人に聞いてみてね。まあ教えてくれないと思うけど・・・」

とベスのほうをチラ見してその場はやり過ぎす。なによ・・・墓穴掘ったのはあんたでしように・・・。

「はい。弾はこれ使ってね」

「この弾は・・・」

用意したのは蘆乃と一緒にするときにも使った特殊訓練弾だ。

「この特殊訓練弾は一定時間マガスフィアを溜めておくことができるの。もし万一身体とかに当たっても2, 3回跳ね返った後に消えるから怪我をすることはないわ」

「お。それ知ってるぞ」

珍しくみどりが食いついてきた。

「最近ユグドラシルが作ったって弾。あたしも面白そうだから使ってみたいんだけどさ・・・なかなか手に入れられないんだよな。明日香どうやって？」

「出る前から予約入れてたわ。少しまとめ買いもしてあるし」

最近討伐報酬はカエズグッズではなく、自主練のために使うことが多くなった。

「後で取り行くからあたしにも1箱譲ってくれ。出すもんは出すから」

「別に・・・いいけど・・・珍しいわね。どうしてまた？」

「あたしも・・・さ、いい加減頼りつきりなのはどうかって思ってたさ・・・自分のため、だな」

あの自ら進んでやりたがらなかったみどりが、だ。自主練のために・・・。

「みどり・・・」

ダメだ。なんか泣きそうになってる・・・。

「後で私の部屋に来れば？」

「・・・サンキューな」

そういうところは相変わらずか。

さて、如來に訓練用のバレット渡しますか。

「如來。バレット渡しとくわ。2回ね」

しばらく因悦と藍ちゃんの様子を見ているが、

「はっー！」

シュバツ！

因悦は上達がかなり早い。対して藍ちゃんは・・・。

「うわああっー！」

昔のベスみたいに球技苦手？マギスファイアが全く取れていない。

これは要個人練習か。

「どんまいどんまい」

因悦は励ましているが、やはりこれは昔のベス同様ラクロスをやらせるべき？

「はいストップ」

一旦止めさせる。

「藍ちゃんちよつといい？」

「す、すいません・・・全然上手く受けられなくて・・・」

すごく悔しがっている。

「ベスもね。最初はひどかったのよ？投げるほうだけどね」

受け取る側の練習方法、か。動体視力の問題？

「うーん・・・」

「藍さんのことですか？」

その日の天上の間。

「ベスは投げるのが下手で、藍ちゃんは受け取るのが下手、か・・・」

「あれは去年の話ですっ！今は違いますわ！」

「けどそれって、大問題だよね？」

そう。投げるのはダメでもある程度みどりを頼ればカヴァーは可能だ。しかし、受け取る側は……。

「如來から聞いたわ。彼女のブーステッドスキル……リジエネレーターだそうよ」

「鶴紗ちゃんと同じ……」

「円知ってたんだ……」

「前に……梨璃ちゃんから聞いたことがあるんだ……」

「そう……ねえベス？」

ちよつと聞いてみるか。

「なんですか？」

「マギスファイアの……投げる練習してたとき……どうやってたの？」

京夏お姉様の個人練習の内容はノータッチだったので、何をどうやっていたのかは全く知らない。

「どうって……例えばですが……修練場なら壁に向かってキャッチボールの要領ですわ」

しかないか……。ただ、それはボールとか物理的なものに対してだ。マギスファイアとは根本が違う。

「どうしよう……」

これまでいろいろな難題をクリアしてきたつもりだったが……今回ばかりは躓いている。

「ううう……どうしよう……」

まさかマギスファイアの受け取りがこんなうまくいかないだなんて……。リレイとして一番致命傷だ……。京夏様が亡くなる直前、明日香隊長が駆けつけてくれなかったら確実に落としていた。

運動神経は可もなく不可もなく……なのだが、何が原因か皆目検討もついでいない。

予備隊にいたときはフンヴェルトまではやっている。ただ、私の場合は一番最初に投げる事が多かった。

ピピピ・・・

携帯端末だ。こんな時間に誰だろう？

『これから藍ちゃんの部屋に行きます』

と簡潔な内容。明日香隊長!?

「誰から？」

ルームメイトの庵珠ちゃんが尋ねる。

「LGの隊長がこれから部屋に来るって・・・」

まさか個人指導!?!どっちの？頭の中がぐるぐると回る。

トントン・・・

えっ？もう？

「藍ちゃん。いいかな？」

「はい・・・」

自ら部屋の外へ。

ガチャ・・・

「ごきげんよう明日香隊長。こんな時間にどうしたんですか？」

「ごめんね、こんな時間に・・・実は——」

明日香隊長からまさかこんなことを聞くとは思ってもいなかった・・・。

「そう・・・ですか」

「投げる側だったらいくらでも方法はあると思うの。私も・・・思いつく限りのことはやるから・・・ごめんね」

次の日の早朝。

悩んでも何も始まらないのは分かっている。少しでも何か策を・・・と思い始めたのは、

「ごめんね庵珠ちゃん。付き合ってもらっちゃって」

「いいよ。困ってるときはお互い様だし」

ルームメイトの庵珠ちゃんに付き合ってもらい、とにかく普通の訓練弾を弾き返すことから始めることにした。100発。

私には今何が足りないのか見極めたいというのもある。

庵珠ちゃんのグングニルの弾速度は毎秒500m。CHARMとしては遅いほうだ。弾き返せれば通常ノインヴェルトも見えるよう

になるはず。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

庵珠ちゃんだ。

『順備いい?』

右手をかざしてハーナルを起動させる。

フォン。。。。

「1分経ったら始めて。最初は合図で2発お願い。10秒間隔で」

『わかった』

ピッ。。。。

しばらくして――

パンッ!

来た。1発は上空に向けて。もう1発。。。

「いたっ!」

腹に直撃。弾が見えてない?どっちだ?

2発目。

ブンッ!

「あうっ!」

空振った。痛い。。。結局――

「100発中当たったのは5発。。。」

ここまで来ると「まぐれ」の領域。。。。

昼食後のラウンジでたまたま如來ちゃんに会った。

「藍ちゃんその手。。。どしたの?」

これだけ手がアザだらけならさすがに分かるか。。。。

「いや。。。今日から自主練で庵珠ちゃんに付き合ってもらってるんだ

けど。。。訓練弾が手に当たっちゃって。。。」

と苦笑いするも、

「当たっちゃって。。。って、いやいや。。。そんな半端なのじゃないっ

て!すごいことになってるよ?青アザじゃん」

「別にアザは気にならないんだけど。。。ブーステッドスキルで能力で

一晩もあればすぐ直るから」

「。。。昨日のノインヴェルトの訓練のこと?」

如來ちゃん私のことなんで分かるの？

私は返答できなかった。

「・・・藍ちゃん気にし」

「なるんだよー！」

つい大声で言ってしまった。

「昨日の夜、私のところに明日香隊長隊長が来て・・・個人練習のメニュー考えようとしたけどいいの思い浮かばないって相談があった・・・だから自分でも努力しなきゃって・・・」

「明日ねえ・・・また私を・・・」

「如來ちゃん。それは違うよ」

「・・・何が違うの？」

明日香隊長のことになると見境がなくなる如來ちゃん。

「明日香隊長は私に努力しろ！って言うてくれたんだと思う。だから自主練始めたんだ。LGの訓練止めたくないし・・・」

「・・・なら、私は何も言わない。そっか・・・自主練か・・・けど、ムチャはダメだよ？」

「うん」

「今日もノインヴェルトの訓練を・・・」

「明日ねえ。そのことなんだけど・・・」

如來が私に意見するとか珍しい。

「今日は普通の訓練でいいと思う。連チャンでノインヴェルトって身体が持たない気が・・・」

確かに如來が言うことも一理ある・・・のだが、それにしてもなんか不自然だ。

「もしかして、誰かのことかばってるっ？」

「な、なんのこと？」

余計な勘繰りはいけないと思いつつ、全員のことをよく見てみる。

ん？

・・・そういうことか。

「いえ、なんでも。今日は藍ちゃん以外通常訓練にするわ」

「ごっち来て」

藍ちゃんを呼ぶ。

「あ、あの・・・今日は」

アザだらけだが、ブーステッドスキルのことを考えれば寝ている間にでも回復するだろう。

「如來、何か余計なこと言わなかった？」

「いいえ・・・特別何も」

「そう・・・今日は私に付き合ってもらおうわ」

やってきたのは海岸だ。

「あの・・・もしかして・・・訓練弾を受け流す訓練・・・ですか？」

言おうとしたことを先に言われてしまった。

「もしかしてそのアザって・・・」

「はい・・・今朝ルームメイトにお願いして試しにやってみたんですけど・・・」

結果アザだらけ、というわけだ。

さて、どうするか。タングズニルは弾速度は毎秒900m、アステリオンが毎秒1800mなのでそれでも半分だ。

「ルームメイトの子のCHARMは？」

「えっと、グングニルです」

毎秒500mでもこのアザか・・・。おそらく原因は十分距離を取らなかったこと、正確な射撃でないことによるブレが原因だと思う。

「今から同じことをするけど、15秒ごとに2発ずつ撃つわ。藍ちゃんの喉ぐらいのところを狙うから確実に跳ね返してね。合図は携帯端末を鳴らすわ」

と言ってCHARMで円を描きその中に入って跳躍。1km近く離れることにする。

同じこと・・・かあ。確かに庵珠ちゃんは射撃はあまりうまくはない。アザだらけなのはそのせいもあるのかもしれない。

5分後、

ピピピ・・・

携帯端末の呼び出し音。メッセージではなく通話だ。

『準備はいい？』

「えっと・・・」

慌てて片手で起動。

フォン・・・

『この通話が切れたら始めるわよ。藍ちゃんがアザだらけなのは弾速度分を計算しないで撃ったからのはず』

ピツ・・・

よし、がんばろう！

「ゴメン円。無理やり引っ張ってきて」

みどりに連絡を取り、円を連れてきてもらった。

「別にいいよ」

たまたまCHARMメンテでアステリオン・ブリッジを乃莉子さんのところに出していたのが幸いだった。円がタングズニルを持っているのがなんか新鮮に感じる。

「じゃお願いね。藍ちゃんの喉辺りを狙って。2発ずつ」

「オツケー」

円がレアスキル——天の秤目を発動して睨む。

幸い今日は風もないから弾が流されることもないだろう。
パンツパンツ！

来たっ！CHARMを持って構える。

キンキンッ！

やった！

訓練弾はブレード中央付近に辺り跳ね返せた。15秒後、再び。

キンキンッ！

寸分変わらず同じ位置へ。これもうまく弾き返せた。実践ではまずないと思うが、明日香隊長とか如來ちゃん、円様ならこのぐらい正確に撃ってくるだろう。

1分後。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

再び端末が鳴る。

『出来てるじゃない。よかったわ』

「あ、ありがとうございます！」

素直に嬉しい。

『タングズニルの弾速度は毎秒900m。大体1kmの距離のところから撃ってるわ。グングニルの弾速度が毎秒500mだから、跳ね返すには700mか800m離れてないとダメ』

「え。それって・・・」

『つまり早すぎて見えてないってことね。ちなみにだけど撃つたのは私じゃなくて円だから。さすがにこの距離はサブスキル使っても無理だわ』

「あの・・・円様ってアステリオンじゃ・・・」

普段円様はアステリオンを使っているはずでは・・・。アステリオンだったら弾速度はもつと早いはず。

『あー、今日はメンテ出しててたまたま予備のタングズニルを使ってるのよ』

なるほど・・・だからか。

『あの・・・明日香隊長、受けられはしましたけど・・・これと、ノイ

ンヴェルトのマジスファイアは違います・・・よね?」

そう。問題にすべき点はそこで、訓練弾は物理的、マジスファイアは半物理的、という違い。形として存在しない。

(藍ちゃんの苦手意識が失敗させている?)

「藍ちゃんよかったあ・・・これでノインヴェルト戦術失敗・・・」

「それはなんともね」

「え?」

円が不思議がっている。

「だってうまく返せたんだよ?これならノインヴェルトのマジスファイアだって・・・」

「ねえ円、ノインヴェルトのマジスファイアってどんな形?」

円に質問。

「えっと・・・モノはモノだけど形があってないような・・・あ」

通信端末に向かって、

「藍ちゃん。今から昨日使った跳ね返る特殊弾使って同じことをやるわ」

『え、直接撃つんですか?それって意味ないですよね?』

「それは・・・受けてみれば分かるわよ」

ピッ・・・

「聞いての通り。特殊弾撃ってどうなるか、ね」

タングズニルに特殊訓練弾を装填する。で、

「行くよ円。パス受けたらそのまま藍ちゃんに返してね」

「え・・・!?待って・・・」

パンッ!

少し鈍い音とともにマジスファイア化した特殊弾は円の方向へ。ちなみに少し多めにマジは込めている。オーバーヒートはしないと想像けど・・・。

円が再びレアスキル発動!

グンッ!

「オーバーヒートさせるイメージで少し多めにマジを込めてそのまま投げてみて」

「こんな距離で投げたことないけど・・・やってみる」
少タイレギュラーな訓練弾の使い方だけど、これなら・・・。

マギスファイアが飛んできた。え・・・ちよつと待って!?

私は慌ててCHARMで円を描き中に入ってジャンプ。マギスファイアを追いかける。

そもそも「あの」距離でマギスファイアが私のところに届くはずがないのだが。

(落としちゃダメ!落としちゃダメ!)

落下する前になんとか返さないと。

そして、

グンッ!

「やった!間に合った!」

ピピピ・・・

明日香隊長からだ。

『これで一安心ね』

「明日香隊長・・・もしかして、私のこと・・・わかってて・・・」

『そう。あのとときノインヴェルト戦術が初めてで、あんな大きいマギスファイアが受け取れるかすごい不安でしょうがなかった、ってところかな?』

「はい・・・実は・・・フンヴェルトやったことないって・・・あれは嘘で・・・落とすのが怖かったからです」

『私をもっと早く・・・ノインヴェルトの訓練をやって気づいてあげべきだった。これは私のミスだわ・・・ごめんなさい』

「いいえ、謝らないでください明日香隊長。私の弱さだったんですから・・・」

「明日香ちゃんスゴいなあ・・・私にピンポイントであそこ狙って投げて！って言うから何するのかと・・・」

訓練後。

あの後藍ちゃんがあの位置からマギスフィアを返し、しばらく3人でパスの練習をした。

やり方としては少々強引だったが、藍ちゃんに危機感を煽らせて落とさせないようにしたのだ。

「私のことバカにしてる？」

「違うよ・・・私だったらそんなの全然思い浮かばないもん・・・」

「もつと・・・早くにノインヴェルトの訓練をしてればあんなことには・・・」

「でもよかったですわ。これで一安心・・・」

「でもないわよ？受け取れるようになっただけで、実践じゃないわ。何が起るかわからない・・・」

「明日香さんは心配しすぎなのですわ。もつと信頼なさってはいかが？」

「違うの・・・」

私が心配してるのそこじゃない・・・！

「もう・・・これ以上犠牲者を増やしたくない！ただそれだけ・・・」
「それはみなさん思ってることですわ・・・明日香さんだけの問題では・・・」

「明日香ちゃん・・・まだ京夏様のこと引っ張って・・・」

「・・・わかんない。私は吹っ切ったつもり」

「明日香。ちよつといいか？」

みどり？

「なに？課題なら教えないわよ？」

「ちげーよ。いいからCHARM持ってこつち来い。あとお嬢もな」
何をさせたいんだ？

言われたまま、修練場に連れてこられた。

そして、

「CHARM出せ！今からあたしと手合わせな」

「ちよつと！」

言うなりテイルフィングを起動させて私に向かって突っ込んでくる。

まったく・・・ベスは立ち会わせのために連れてきただけか。「形式上」はこれでも成り立つが、これは非公式だろう。

フォン・・・

慌てて起動させる。

キンツ！

寸前のところで止める。

「あのね！判定人立てればいいってもんじゃないでしょ！ルールはどうすんの！」

「うるせえ！いいから付き合え！」

みどりは勢いを緩めることなく仕掛けてくる。

キンツ！キンツ！

いつの間に・・・私としばらくやらないうちに強くなっていた。そして少し離れた後、

パンツ！

バカツ！訓練場で訓練弾って・・・非常識！しかし、

コロコロ・・・

弾の葉莢(?)はその場に落ちる。残ったのはマグスファイアだ。例のユグドラシル製の特殊弾か。そのマグスファイアの速度が早すぎて私に当たる。

「うっ・・・」

訓練弾なので怪我はしないが、かなりな衝撃だ。いつかの手合わせでも同じことをやったな。そのときはみどりはいなかったが。

「おっしやー！うまく行った！」

とみどりは満足げだ。

「・・・あんたね」

みどりを睨むも、

「いやー・・・さつき咲良と話してて、これなら練習で使えるんじゃないかってなって試したただけだよ」

私はため息をついて、

「そうならそうとやる前に言いなさいよ・・・それと、みどりと同じことなら前に手合わせでやったわ。にしても」

一旦言葉を切る。

「みどり・・・あんた随分強くなったじゃない」

ポンツとみどりの肩を叩く。これは素直な感想だ。

「あ・・・あたしだっていつまでもおんぶに抱っこじゃないからな！」

そういえばみどりとマトモな手合わせをするのはお姉様が隊長だったとき以来かもしれない。

「で?」

「で、って何よ・・・」

「如來とはもうやったのか?」

はあ!?

みどりの心臓付近にタングズニルのブレードを突きつける。

「ちよ、ま、落ち着けて!」

さらに、

ゴンツ!

「あだっ!」

ベスが頭の上から思いっきりゲンコツ。

「あ、あなたはっ!デリカシーがなさすぎるんですわっ!」

ベスが怒るのも無理はない。まあ私も大概だが。

「わ、悪かったよ・・・!分かったからCHARMは向けるなって!、お前また生徒会に捕まりたいのか?」

流石に可哀想なのでCHARMは仕舞う。

「・・・前にベスにも言ったけど、あの子とはそういう関係になろうと思えないのよ」

「この前如來と蘆乃が訓練前にケンカしてたとき偶然聞いちまったんだよ・・・。だからその・・・どう思ってるのか気になってき・・・」

如來の過去のことか。

「で、お嬢は?」

「なっ!?!」

なんだこの流れ。幸い3人以外誰もいないからいいのだが、この中に咲良ちゃんがいたら失神しているだろう。

「・・・私もよ。明日香さんと同じ」

「へえ・・・そこまで蘆乃にお熱なんだなお嬢」

「・・・今まで私にしか見せなかった「素顔」をみどりにも見せている？」

「私と蘆乃は明日香さんほど仲は深くない。けど、お互いが素直になれないのは一緒・・・」

「・・・みどりと何かあったの？」

「蘆乃の誕生日の前に円と2人でお嬢の部屋行ったんだよ。そしたら

———」

ベスが咳払い。

「そういうこと。もう長い付き合いなんだからそれぐらい察してよ。それよりも———」

ゴンツ！

みどりに2発目のゲンコツを食らわす櫻子。

「だからっ！なんであたし!？」

「とにかくデリカシーなさすぎっ！次同じようなことしたら・・・ただじゃ済まないから」

と、ブラダマンテに手をかけようとする。

「わ、わかった！わかったから落ちっこう？な？」

「みどりはもう少しデリカシーはなんたるかを覚える必要があるそうね？」

「ぎゃあああああああああつ！」

みどりは泣きながら自室へと戻っていった。

「ちよつとやりすぎ。あれじゃみどりが可愛そうだわ・・・」

「あれぐらいやりませんと・・・みどりさんには理解してもらえませんか」

「わ」

さすがの私でも・・・あそこまで鬼じゃないぞ・・・。

・・・もしかして櫻子、妹（蘆乃）のことになると見境いなくなる？

後で携帯端末で一応謝っておくか。

「ひでえ目に遭ったわ・・・」

修練場から逃げ帰るように中庭に出てきたあたし。

「あれ、みどりちゃん？明日香ちゃんと一緒じゃなかったの？」

「おお円か・・・いやな、お嬢も一緒だったんだけど・・・いろいろあつてあたしが逃げてきた」

「さつき手合わせするんだー！ってやる気満々だったよね？」

「・・・逃げる前はな」

そう。咲良と話して『これ使えるんじゃないやね？』で盛り上がって早速・・・のときは意気揚々だったわけだが。結局明日香に先を越されてたわけだ。

ピピピ・・・

ん？明日香？なんだ？

『さつきはゴメン。ベスの代わりに謝っておくわ。どうも最近蘆乃のことになると見境なくなるみたい^^；だから気にしないで』
・・・なるほど。そういうことか。

お嬢の蘆乃への熱の上げようは明日香以上な気がする。しかもお互い不器用だしな。

「明日香ちゃん？なんて？」

「ああ。さつきお嬢に頭から思いつきりゲンコツ食らってさ・・・しかも2回もだぜ？それに対しての詫び」

「みどりちゃん・・・ベスちゃんに何したの・・・」

なぜか円に白い目で見られる。

「いやいやいや・・・お嬢には何もしてねえよ・・・八つ当たりされたんだって！」

「みどりちゃん・・・最近明日香ちゃんの様子なんかおかしくない？」

唐突に振られた。

「どした？なんか気になんの円？」

「なんて言ったらいいのかな・・・京夏様が亡くなってから前以上に思い詰める事が多くなっただっていうか・・・ひとりで抱え込むことが増えたっていうのかな・・・そんな感じしない？」

「そうか？あたしにはそうは見えないけど・・・」

そのときはつい言ってしまったが、最近天上の間でも一緒になることがあまりないしな。ていうか、あたしの前ではそんな素振りなんか見せたこともない。

「こんなこと・・・みどりちゃんにぼやいてどうなるわけでもないと思うけど・・・なんか嫌な予感がするんだ・・・」

後にその嫌な予感は的中することになってしまうのだが。

守護天使（シュツツエンゲル）禁止令

時間が流れるのは早いもので、あたしたちはとうとう学年が上がってしまった。

（後輩かあ・・・なんか実感湧かないなあ・・・）

今だに自分自身が後輩な気分が続いている。

・・・いや、事実後輩なんだけど。

『約束どおり来たよ明日香姉様！』

正直如來が控え室に来た時が一番強烈な印象だった。

あたし以上に無鉄砲、明日香の事になると周囲が見えなくなつて。訓練から逃げ出してきたときも、真っ先に飛んできたのはあたしのところだったな。

「・・・みどりさん？どうなさいまして？」

お嬢？珍しく声をかけられた。

「それはこっちの台詞だよ。お嬢があたしに声をかけるとかさ」

「なっ!?失礼なっ!それではわたくしが誰とも話さないみたいじゃありませんの!」

「痛いっ!なんでつねるんだよっ!」

お嬢に頬をつねられる理由がわからないが、なぜかやられている。

「もしかして・・・蘆乃とケンカでもしたか？」

榛原蘆乃——お嬢、こと櫻子・S・エリザベスの妹だ。けどビツ

クリだよな・・・まさかあのお嬢が守護天使になるとか。

「あだっ!」

今度は足を蹴られた。この前『デリカシーがなさすぎ』とか言つて頭からゲンコツを食らったが、完全に八つ当たりじゃん・・・。

「だからあたしが何したつてんだよ!ほんつと、明日香がよく嘆いてのがよくわかるわ・・・素直になれないからリリイやモノに八つ当たりする・・・いつてええええええええ!」

今度は足ごと掬われて床に落ちて尻もち。

「あああああもうあつたまきた!あたしを怒らせるとはいい度胸してるじゃんか!お嬢もCHARM出せっ!」

フォン……

右手をかざしCHARM——ティルフィングを起動させる。

「み、みどりさん!?!何を本気に……」

「させたのはお嬢だろっ!ふぎけんじゃねえっ!人が大人しく黙って聞いてりや……勝手なことばっかしやがって!」

久しぶりにキレている気もするが……。去年の^{あちら}亜羅^や椰との一件のとき以来だと思う。

たまたま通りかかった中庭でみどりがCHARMを抜きかけてる!?!

相手はベスだ。

「ちよつとみどり!あんた何やってんのよ!」

「止めんな明日香!このわがままお嬢に喝入れてやる!」

はあ?ワガママ?

ただ、しばらく頭に来てなかったみどりが怒っている、ということ
はよほど何かあった、ということでもあるが……。

「ベス……あんたみどりに何言ったのよ……」

「それは……その……おほほほほ」

笑ってごまかした?

ゴンツ!

「いたっ!ちよ!?!明日香さん!?!」

みどり……ではなく、ベスにゲンコツ。

「櫻子さーん……ちよつといいかしら?みどりもCHARM仕舞いな
さいよ?」

あえての名前呼び。耳をひっぱりながらそのまま連れ出し足湯の
ほうへ。

ゴンツ!

「いったーい!」

事の次第を聞いた方がいいが……。

ベス・・・いや、櫻子にゲンコツ2回目。

「そりやみどりも怒るわよ・・・CHARMは・・・さすがにどうかと思うけど、みどりじゃなくても私だって同じことしたわね。それと――」

櫻子の両頬をつねった後口を大きく広げる。

「ひやへれませんかっ!!? (喋れませんかっ!!?)」

「いつになったらそのわけわかんない行動やめるの? いい加減ハツキリしなさいよ?」

「ううう・・・」

うなだれる櫻子。

「守護天使になって少しはマシになったかと思つたのに・・・余計状況が悪化してるって意味わかんない!」

「だからって! 私を殴ること・・・ないじゃない・・・」

むくれる櫻子。

「ベス・・・いや、櫻子。今後1週間LG内で守護天使としての活動は一切禁止します」

「はあ!? なによそれ!? そんなの聞いたことないっ! 大体、それってただの八つ当たり・・・」

「そうよ。八つ当たり。けどあんたがみどりにしたことも八つ当たり。なりふり構わずしていいってもんじゃないでしょ?」

守護天使活動禁止とか前代未聞だが、こうでもしないとこのわがままお嬢様の性格は変わらないと思う。

まったく・・・はじめてお嬢に会ったときはあんなじゃなかったんだけどな。

「みどりさん・・・先程は失礼しましたわ・・・」

かなり落ち込んでいる。明日香になんか言われたな?

ピピピ・・・

携帯端末が鳴る。明日香からだ。

『明日、みどりとベスの手合わせを行います。修練目的とはなってるけど手抜きはしないように』

「はあ!？」

明日香のやつ、何考えてんだ!?お譲と手合わせって……。

確かに京夏様が隊長のときは一切やったことがなかった。あたしは初花様や灯音様、琴乃様とやる機会のほうが圧倒的に多かった気がする。

「だとよ。ほれ」

と端末を見せる。

「わざわざ見せなくても存じてますわ。わたくし明日香さんから直接聞きましたし……」

「まあいいや。お嬢、明日手抜きなんかするんじゃないぞ。あたしが許さないからな!」

翌日。

「あれ、円は?」

「ごきげんよう。円は……実家だつてさ」

灯音様がLGレギオンにいるのがなんか変に感じる。休暇日申請か。

「……」

「……」

お嬢と蘆乃が一切会話ないのはなんか変な感じだが、なんでも守護天使としての会話が一週間一切禁止なんだとか。

「何ポーツとしてんの。ほら構える!」

明日香にポンツと肩を叩かれるお嬢。

「え、ええ……」

明らかに乗り気じゃないよなあ表情。

「ならその気にさせてやるよ乳オバケめ」

「はあっ!?みどりさん!?今なんて……」

「乳オバケだつたんだよ!悔しかったら蘆乃にいいところ見せてみるよ!」

「……っ!」

あたしをキツと睨みつけるも蘆乃のことは一切触れず。

(そこまで明日香の言うこと聞くことねえじゃん……)

こども徹底されるとあたしもからかいがなくなってしまう。

判定人は灯音様だ。

「時間無制限……レアスキルの使用は……なし……危険だと……判断したときは……止めに入るから……それと……うちのルール？で……薙刀術の使用は禁止」

ああそうか。灯音様は今のLGルール知らないのか。

「今うちのLGは全員琴乃様からの履修が必須なんですよ」

「そう……なんだ」

「では……構えて」

お互いCHARMを構える。

お嬢のブラダマンテは見てて腹立つんだよな……あたしのテイルフィングより扱いやすそうだし。まあここで文句を言ってもしょうがない。あたしが自分で選んだCHARMなんだから。

「はじめ！」

「でりやあああああつ！」

真っ先に向かったのはあたしだ。

ブンツッ！

「わざと」空振りさせて一旦しやがむ。

そこから上に向けて斜めに入れるっ！

キンツッ！

ガチャン！

そこから「わざと」シューティングモードへ。

「はあっ!? なっ……何を考えて……」

驚いてる驚いてる。以前明日香にあるイタズラをされたときにもらったアイデアをそのまま使わせてもらっているのだが……。

ポンツッ！

みどりのやつ、考えたな……。

まさか私のイタズラを手合わせに流用するとは思ってもよらなかったが。内容は……ここでは話せないようなものなので割愛するけど。空砲に驚いたベスはそのまま尻もち。

そして——みどりがティルフィング・ヒュミルのブレードをベスの喉元に突きつけ、

「そこまで！」

あっけなく終了した。

「納得行きませんわ！まあでもアレは反則でもありませんし……わたくしが油断した……というか……」

みどりの面白いところは私が思いつかないような突拍子もない動きを戦闘に組み込んだりするところだ。

「素直に負けを認めたら？今回ばかりは私もビックリしたわ。みどりがあんな作戦思いつくなんてねえ」

と肘でつついてやる。

「な、なんだよ！突つついたからって何もでないぞ？」

照れてる照れてる。その辺りは相変わらずか。

「あの……みどり様」

蘆乃？あつちから声をかけてくるとか珍しい。

「おう蘆乃か。どした？」

「私……何か姉様にしましたか？」

泣きそうになってる？

「ちよ、ちよつと待て！なんで泣きそうになっただよ……」

「実は——」

まったくどこまで人付き合い下手なんだあいつは。いくら明日香から守護天使禁止だからって日常でも会話しないとかないだろうに。

「だから……嫌われたんじゃないかって……うううっ……」

最終的にあたしの前で泣き出してしまった。

「ほんつと……お嬢は説明まで下手くそなんだよな……ちげーよ蘆

乃。お嬢はさ、今明日香にLG内で守護天使の活動すんなって止められてるんだよ」

「え？」

マジか・・・お嬢何も言っていないのかよ・・・。

「蘆乃・・・今、初めて知ったって顔してるか？」

「・・・はい」

ったくあのワガママお嬢はっ!?

あたしはレアスキルを使いお嬢の元へ。

いた。ラウンジで呑気に紅茶飲んでやがる。

パンツ!

思いつきりグーパーン。

「み・・・どりさん!？」

「ちよつとこつち来い!」

有無を言わさず元いた場所へ。

「え・・・あの・・・」

わけがわからずキョトンとしているお嬢。

「え・・・じゃねえだろ!お前姉だろ?蘆乃が寂しがってたぞ?」

蘆乃の顔を見た途端に目を逸らす。

あたしはお嬢の顎を掴み、あたしを見るように向かせる。

「おいお嬢。何勘違いしてるか知らねえけど、禁止されてんのは訓練

中と戦闘中だけだぞ?」

「・・・なんで知って」

「おいおい・・・バレバレだろうよ・・・蘆乃は・・・寂しくなってあ

たしんとこに泣きついてきたんだからな?後でちゃんと謝れよ」

「う・・・うううっ・・・」

今度はお嬢が泣きやがった・・・。これじゃああたしが悪者じゃん

か・・・。

「おいおい・・・なんでお嬢が泣くんだよ・・・」

お嬢を抱き寄せる。

「だってええええええええええっ!」

参ったな・・・。

「バス!？」

明日香!？」

なんだこの状況!？」

あたしに手をあげようとするも、

パツ・・・

「蘆乃?」

蘆乃が止めに入った。

「あの・・・違うんです!」

バスが大泣きしていて、みどりが何かしたと思って叩こうとしたら蘆乃に止められて・・・私の頭の中は「??」しかない。

「ごめんなさいね明日香さん・・・わたくしがもっと・・・ちゃんとしていればこんなことには・・・ううっ・・・」

まあ元はと言えばバス・・・いや、櫻子がみどりに八つ当たりで暴行(?)したのを注意するために私が課した罰なのだが・・・。

これではまるで私が悪人ではないか。

「で、一体なにがどうなってるの?」

「そりゃあ・・・あたしが聞きたいぐらいだよ・・・いきなり蘆乃がやってきて・・・あたしの前でわんわん泣き出して・・・オマケにお嬢まで・・・」

まったく・・・どこまで自分表現が下手なんだこの2人は。

はあ・・・。軽いため息。

「悪かったわよ。まさかここまでとはね・・・。もういいわ」

ゴーン!ゴーン!

なんちゆうタイミングだ。

しかも私たちが当番になっている。

生徒会から連絡は?

端末に目をやるもまだ何も連絡はない。

「はあ・・・まだ連絡はないけど控え室行くわよ」

L G控え室についた頃。

ピ。ピ。ピ。...

ようやく生徒会からメール。

『今回はラーズグリーズと合同でお願いします』

はあ!?

ちよつとまつて!?!ラーズグリーズ(一柳隊)とエリユーズニルとでは実力差がありすぎる。

格付け上では私たちのほうが上だが、実力的には間違いなくラーズグリーズのほうが上だと思っっている。

百歩譲ってそれはまあいい。けど合同？

メールの続きを読む。

『ラーズ級が2体出現。ただし、ノインヴェルト戦術は被害を拡大する危険があるため原則使用禁止とします』

使用禁止!?

頭の中で思い浮かべていた討伐プランが一気に崩れる。

(落ち着け...落ち着け明日香...こんなとき京夏お姉様だったらどう判断してた?)

単純に考えられるのは、よくお姉様がやっていた、みどりを陽動役にして全体でまんべんなく攻めてラーズ級の力を弱めていく方法だ。

ラーズグリーズも結夢様に狂酔ルナティックトランサーの月を発動させないように組んでくるはず。

ただ、隊長の一柳さん主体ではなく、結夢様や楓さん、神琳さんが戦略担当なので、事実上の司令塔は複数人いることになると思うが。

うちの場合は...藍ちゃんが暴走したところで状況が有利に働くだけ、か？

「明日ねえ...?なんか顔怖い...」
如來だ。

「そう?そんなすごい顔してた?」

「明日香...どう...するつもり?」

灯音様もやってきた。

「えつとですね...今回ノインヴェルト戦術の原則使用禁止命令が出

てるんです……」

「えっ……!?!」

「どうすんの!?! 私たち勝ち目ないじゃん……」

「相手……ラージ級……だよな?じゃあ……どうやって……」

「だから……今悩んでたんです……どうしたらいいだろう?って……」

「明日ねえ……」

「ラーズグリーズ……一柳さんと一切打ち合わせしてないから……
どうなるかわかんないけど……」

少し遅れて位置情報が来た。

場所は……アルトラ級ネストがあつた少し先か。

「場所が判明したわ。移動するわよ」

「はい」

他のメンバーにはメッセージで場所を送る。

ノインヴェルトのバレットは一応持っているが……。

「あ。明日香さん!」

一柳さんだ。

「えっと……ラージ級は?」

指を指す一柳さん。

GYAAAAA!!

うわあ……いつにもましていびつだなあ……。いまのところ実
害は出ていないようだ。

キンツ!キンツ!

すでに梅様や神琳さん、雨嘉さんたちは交戦している。ラーズグ
リーズはノインヴェルトを使わない方向のようだ。

「ノインヴェルト使用禁止ってどういうことですか!?!」
ベスだ。

「言葉のとおりよ。私も理由はわからないわ」

「えっと……フィニッシュショットがダメ……みたいだ」

「ちよつとまつて!?!マジ溜めたらダメってこと?」

「はい……正のマジの力を負のマジに変換してヒュージの力に取り込むって……」

え……マジか……八方塞がり……。

人海戦術でラージ級を倒すしかないってことか。

ていうか、みどりは何やってんのよ!

いつもなら一番乗りで現場来るのに……。

さあどうする私?陽動役やるにしてもレアスキルはあまり使いたくない。

「わりい……なぜか乃莉子に呼ばれてさあ……って明日香!」

ポフツ!

気がついたらみどりにグーパンをしていた。

「ぶげっ!」

バタン……。

そのまま地面に倒れるみどり。

「あたしなんか……した?」

あああああっ……何やってんだ私!?

「ご、ごめん!?!大丈夫!?!」

「いつてえ……それよりノインヴェルト使うなってマジか!?!」

「そのことで相談があるんだけど……」

「えー……まあ別にいいけど……」

結局方法は思い浮かばず。京夏お姉様が今まで取っていた方法をそのままやることに。

「明日香がなあ……なんか考えがあるって思ってたけど……」

「とにかくお願い!私とか如来がやってもマジが持たないはずだから……」

「あいよー!」

もう1体のラージ級に向かっていく。

今日の私たちは円がない。後方射撃をどうするか。私か?

「えつと……どう動けば……」

因悦たちも来た。

「とにかく総当りでラージ級への攻撃。ただし、一網打尽に……とかは考えないこと。それといつも言ってることだけど……極力無駄なマジは消費しないこと」

さて、散るか。

(今回もよろしくね)

今日はタングズニル……ではなくダインスレイフ・カービンだ。CHARMで円を描き、中に入ってジャンプする。

「なんで私についてくるの……早く散りなさい!」

つい怒鳴ってしまったが、まるで金魚のフンのようについてくる如
來。

「だって……」

仕方ない。権限使うか。

「隊長命令です。早く離れる!」

「……わかった」

これが吉と出るか凶と出るか。

明日ねえのバカッ!

確かに……私が金魚のフンみたいにくっついていたのは悪いんだ
けどさ……だからってあんな怒ることないじゃん……。

えっ!?

ヒュンツ!

ラージ級の触手だ。

「こんのっ!」

ガンツ!

触手の上を這わせる形でスライドする。

ヒュンヒュンヒュンヒュンツ!

それを狙ったかのように本体から飛翔体が。

(避けきれない!?)

タングズニルのブレードに飛翔体がいくつかくっついた。その瞬

間、

バンツ!

「うううっ!」

そのまま弾き飛ばされる私。

(どこか・・・ラージ級にダメージが与えられれば・・・)

いつにもましていびつなラージ級。どこか違和感・・・いや、違和感だらけなんだけど・・・。

ん?違和感?

GYAAAAA!!

改めてラージ級を見る。確かに「見た目」はラージ級だ。ん?なんだこれ!?

ガチャン!

シューティングモードへ。

スガンツ!

ラージ級の「ある」一点に向けて少しマギ多めに撃ってやる。

(オーバーヒートしないかな・・・大丈夫かな・・・)

GYAAAAA!!

うそっ!?

私めがけてラージ級が突っ込んできた!?

(間に合うか!?)

レアスキル発動!

必死にその場から離れようとする。

「如來!お前なにやってんだ!」

みどり様!?

両腕を捕まれその場から離される。

ラージ級の動きが明らかに変わった!?

「あの・・・私・・・普通にラージ級に攻撃しただけですけど・・・」
如來がみどりに怒られている?

「くっそ・・・ノインヴェルト戦術が使えればこんな苦労しねえのに・・・」

再び散るみどりと如來。

まさかとは思うが・・・ダメ元でやってみるか。もしダメなら別な方法を考える！

「今からノインヴェルト戦術をします！」

「え？」

「正気ですの明日香さん!?!」

「明日香!?!」

バレットをセットする。

「灯音様!」

ズガンッ!

ルートは申し分ない。

「・・・受け取ったよ。藍!」

シユバツ!

「は、はいっ!」

さて問題の藍ちゃんだ。マギスファイアを受け取れるように訓練はしたが・・・。

グンッ!

「や、やった!」

とりあえず一安心。もうマギスファイアに対する恐怖心は克服出来たと思う。

「えっと・・・えっと・・・すみません櫻子様おねがいます!」

ベスか。藍ちゃんの位置的に最適解だとは思うが・・・。

シユバツ!

ラージ級の触手が迫る。どっちが先だ?

グンッ!

「くううううっ!お・・・重いですわっ!」

珍しく姿勢が安定していない。いつも「重いですわっ!」とは文句を言っただけだが、ここまで不安定なベスを見るのは初めてだ。

さあ誰に投げる?

「蘆乃！」

シュバツ！

バカッ！そのルートは……。

ガンツ！

「いったっ！」

レアスキルで瞬間移動してベスを殴った？

みどりのやつそこまで余裕あるのか……。

グンツ！

「おい明日香！お前の代わりにあたしが殴つてやったからな！1つ貸しな」

「はいはい……」

ここまで来ると呆れを通り越して笑ってしまう。

「んー……この後は……咲良、蘆乃、如來つてとこかな。てことで咲良ヨロシク！」

シュバツ！

「ひゃああっ！」

グンツ！

「お……お……も……いっ！」

ミシミシミシツ……

ナグルファールのブレードにヒビが入る音？！

最近みんなのマジスフィアを込める量が増えてきてる？でなければCHARMが悲鳴を上げるはずがないのだが。

「咲良ちゃん早く蘆乃に投げて！」

「は、はいっ！」

シュバツ！

「蘆乃！受け取ったらマジを込めずにそのまま如來に投げて！」

「は、はい！」

これ以上マジを過剰に流さないためにはそうするしかない。

グンツ！

「うっ……如來！フィニツシュショットお願い！」

シュバツ！

「うえっ!?なに・・・これ・・・いつ・・・!?」

過剰なマジスフィアは行っていないはず・・・なのだが・・・。
グンツ!

受け取り、シューティングモードへ。

ガチャン!

如來の姿勢が安定していない。大丈夫か?

「明日ねえ!撃っちゃうよ?多分ここが弱点だから!」

弱点?まあいい。ここは如來を信じることにする。

ズガンツ!

「ううっ!」

撃った勢いで弾き飛ばすされる如來。

一柳さんの話では、撃った場合そのまま力を吸収して負のマジに変換する・・・って言っていたはず。

GYAAAAAAAAA!!

まずい!

「みんなここから離れて!早く!爆風に巻き込まれるわ!」

慌てて足にマジを入れ、とにかく遠くへ逃げる。

ドドドーン!!

なんだこれ!?

過去に何体かラージ級倒した後の爆風を経験しているが、その中で一番強いかもしれない。

「ううううっ!」

かなり離れているはずなのだが・・・吹き飛ばされそうになる。
数分後。

灯音様がレアスキル——鷹の目で周囲を確認する。

「大丈夫・・・成功・・・だね」

討伐は成功した。結局生徒会の言う『ノインヴェルト戦術原則使用禁止』は一体なんだったんだろう?

「すごい!どうして成功したんですか?」

一柳さんだ。

「私が聞きたいぐらいなんだけど・・・ノインヴェルトなしで討伐した

「柳さんたちのほうが全然スゴイと思うけどな・・・」

「それは私が説明します」

如來だ。

「えっと・・・どうもあのラージ級、ラージ級に「みせかけた」だけだったみたい・・・です」

みせかけただけ？どういうことだ？

「なんて言ったらいいのかな・・・えっと・・・足元の目みたいな部分？が異常に見えたから、そこ狙って撃つたら・・・ラージ級が暴れだして・・・」

足元の目？あああそこか。

つまり如來が言うには、私たちの目にはラージ級のように映っていただけで実際は違う、ということらしい。最近こういうよくわからない特型の出没率が上がっている気がする。

「まあいいわ。みんなお疲れ様。戻っていいわ・・・と言いたいところだけど、戻ったら控え室でミーティングをします」

控え室に戻った後。

「ミーティングって・・・何を話しますの？」

「もう終わったんだから話すことなんてないんじゃない？」

「まずはベス・・・あんた、最近ノインヴェルトのパス回しのルートがおかしい。ほんとどうしちやっただの？」

「うっ・・・」

私が隊長になってからのノインヴェルト戦術のパス回しミスの大半がベスのルート選びの誤選択といってもいい。

「それは・・・その・・・」

言いよどんでいるベス。

「みどりにちゃんと謝りなさいよ。それと——」

一呼吸置いてから、

「明日からポジションを一部入れ替えます」

「はあっ!?何言ってるんだよ明日香!ポジション入れ替えて・・・」
「前々から思ってたのよ・・・それをやろうと思ってたら私が倒れちゃって・・・」

私の過労騒ぎのときだ。

「具体的には私とベスはBZに下がるわ。円・・・は今いないけどTZへ。咲良ちゃんも今BZだけどTZに行ってもらおうわ」

さらに続ける。

「因悦・・・あなたはAZね」

「待つてください明日香隊長!」

「私じゃなくて藍じゃないんですか?」

狂酔の月持ちの藍ちゃんがAZに移動するのは妥当な流れだと思う。けどそれではダメなのだ。

「それと・・・明日香隊長と櫻子様がBZに下がる意味がわかりません!」

「でしようね・・・普通ならね」

「・・・そっか」

ここまで黙っていた灯音様が口を開く。

「私が・・・いたときは・・・明日香とエリザベスさんは・・・アタッキングゾーン AZ
テクニカルゾーン とTZ Z・・・だったんだよ」

「えっ!?!」

因悦が驚いている。

「そうでしたわね・・・あのときはLGメンバーにブレイブがどなたもいらっしやらなくて、どうやってAZだった琴乃様の狂酔の月を使わせないようにするか、で悩んでましたものね」

「そうね・・・その代わりマジ交感頻りにやってたわね。大半は私が京夏お姉様だったけど・・・」

「ただ・・・このフォーメーションも・・・問題があつて・・・明日香と琴乃の・・・負担が・・・かなり大きかったんだ・・・それをカヴァー・・・するために私たちが・・・走り回って・・・AZ3人体勢なら・・・ある程度は・・・カヴァーできる」

灯音様はあの位置の欠点を気づいていたのか・・・。ただ、あのメ

ンバーだったから、欠点と分かかっていてもフォーメーションとして機能していたのかもしれないが。

私も、それをわかっていたがらほぼ同じにしていたのだが……。
「ホントはね……。常にAZ3人体勢にしたかった……。けどそれだとノインヴェルト戦術の攪乱の法則が崩れてしまう……。」

一時的に藍ちゃんをAZにすることはあるが、対ミドル級までだ。

それを「あえて」崩してみようとしている。

「それも……。全部あんたのせいだけどねっ！」

ベスの足をつねる。

「いたっ！」

「ええっ!?ポジション入れ替え!?!」

円から実家から戻ってきた後の天上の間。

「けどどうして入れ替えようって思ったの?」

ベスの頬を引っ張りながら、

「文句ならベスに言つてよね!あんたの行動のせいなんだから!」

とは円に言っているが、実際は私の戦略の読みの甘さと実力の読み誤りだ。

現状のポジションは――

・ 如來・蘆乃――AZ

・ 私・ベス・みどり・因悦――TZ

・ 円・藍ちゃん・咲良ちゃん――BZ

これを、

・ 如來・蘆乃・因悦――AZ

・ 咲良ちゃん・みどり・円・藍ちゃん――TZ

・ 私・ベス――BZ

にしようとしている。TZとBZをほぼ入れ替える形だ。

こう入れ替えることでノインヴェルト戦術でより攪乱する……。狙

いなのだが・・・不安要素もある。

円がBZ以外のポジションを経験したことがない点、もし如来たちがピンチになったときにどこまで柔軟に対処できるか。

後は・・・私とベスが後衛に下がることでLG全体の戦力低下になるかもしれない、ということ。

まあデメリットとリスクのほうが大きいかもしれない。

「明日香さん！わたくしのせいにはしないでくださいます？あなただつて時々間違つた指示をしてるじゃありませんの！」

頬を引つ張り返されるも、

「・・・そうね」

そういうと黙ってしまった。

「私さ・・・最近すごい不安になることがあるのよ・・・LGとして・・・今のやり方で合ってるのかな・・・つて」

「・・・」

「それもあつて・・・今まで京夏お姉様のフォーメーションの組み方を参考にずーつとやつてきたつもり・・・だつただけど・・・ほら、私の過労騒ぎのときに藍ちゃんがあんなだつたじゃない？それで一気に不安になつちやつて・・・」

「明日香ちゃん・・・」

明日香ちゃんが弱音を吐いているところを初めて見た気がする。

「それで・・・私も・・・どうしていいかわかんなくなつちやつて・・・頭ん中グチャグチャで・・・うううっ・・・」

「明日香さん・・・」

「も・・・やだあああああああつ！うわあああああああああああああああああ
ああああん！」

「ちよ・・・明日香ちゃん!?みんな見てるよ!?!」

明日香ちゃん!?大声を上げて泣き出してしまった。

今まで張り詰めていたものが私たちに話したことで一気に切れた

みたいだ。

「え．．．どうしたの？尾上さんが泣いてる．．．」

「またケンカ？やだあ．．．」

「わ、わたくしたちは見世物ではありませんわ！」

「一旦出てラウンジで話そう？」

「ううううっ．．．」

泣きながらもうなずく明日香ちゃん。

「うううっ．．．ごめん円．．．急に泣いちゃったりして．．．」

「けどよかったね。如来ちゃんに見られなくて．．．」

「．．．っ！」

明日香ちゃん怖い．．．そんな睨まないで．．．。

と思ったら途端に下を向いてしまった。

「ううううっ．．．」

両手を押さえてまた泣いちゃってるし．．．。

ええっと．．．どうやるんだっけ？確か．．．。

指輪をしている手同士を繋ぐ。

パアアアアアアツ．．．

「ううううっ．．．」

なに．．．これ．．．っ！

一瞬倒れそうに。

(マジ交感ってこんなキツいんだ．．．)

私自身やったのが初めて、というのものもあるが、これで明日香ちゃんが落ち着いてくれるのなら．．．。

「はあっ．．．はあっ．．．」

もしかすると．．．私自身のマジ保有量があまり多くないのかもしれない。ちよつとフラフラする．．．。

「バカッ！．．．あんまりマジ保有量多くないんだから．．．円が死んじゃう．．．普段やりなれないことするから．．．けどまさか円にマジ交感されるなんて．．．思ってたなかった．．．」

逆に明日香ちゃんに抱きしめられた。

「ごめん．．．明日香ちゃん．．．けどあんな．．．今まで見たことな

かったから黙ってられなくて……」

「明日香さん……やはり京夏様のことか吹っ切れて……」

「違うよ。違うの……ちがつ……」

「どうしよう？また泣き出しちゃった……」

「パンツ！」

「いい加減にしてよ！」

「ベスちゃん!？」

「自分勝手に泣き出して……挙句の果てに私たちに押し付けて！」

「違う……」

「じゃあ何？ハッキリ言いなさいよ！」

「ベスちゃんと明日香ちゃんが本気のケンカ……初めて見た……」

「自信ないのよ！私……このままプレッシャーに押しつぶされそうで……っ！」

「明日香さん……」

「今までは京夏お姉様がいて……如來がいたからギリギリなんとか
なっていた……けど……お姉様がいなくなって……如來にも相談
できなくて……自分で抱え込む事が増えて……」

「自信喪失、か……」

「ゴメン……取り乱して……」

「そういえば……このところ明日香ちゃんは情緒不安定になること
が多かった。CHARMを自分自身に向けて殺めようとしたり……」

「明日香ちゃん……先に部屋に戻って。私も後から行くから」

「明日香ちゃんを先に部屋に戻す。」

「……どうしよう？」

「相当重症ですわね……」

「あのね……ベスちゃん。明日香ちゃん……最近ダインスレイフカー
ビンで殺めようとしたこともあったの……このままだと明日香ちゃ
ん……自殺しちゃうかも……」

「どうしてそれを早く言ってくださいませんか!?このままでは……洲
盧美様の二の舞になりかねませんわ！」

「洲盧美様？」

「京夏様の守護天使だったお方ですわ。わたくしたちの先代LGの隊長です」

あ……！

「ごめんベスちゃん！私、部屋に行くー！」

私のバカッ！

なんで明日香ちゃんを1人で行かせたんだ!?

慌てて私たちの部屋へ。

端末でみどりちゃんのところにも。

「ごめんこんな時間に。私たちの部屋に来て！早く！」

『円?!なんかわかんねえけど今すぐ行くわ』

ガチャ……

よかったあ……まだ部屋に戻ってきていない。

けどもしものことがある。

「ベスちゃん！明日香ちゃん部屋にいない……どうしよう……!?!」

明日香ちゃんのことだ。まだ遠くには行っていないはず……。

携帯端末の位置情報を見る。

(え……墓地?)

如來ちゃんにも連絡取ろう。

「如來ちゃんごめんねこんな時間に。明日香ちゃんがないの！」

『ええっ!?!どこ行ったか分かってるんですか?』

「場所送るね」

(なんでここに来ちゃったんだろ……私……)

気がつけば京夏お姉様の墓前にいた。

自分のCHARM——タングズニルを持参している。

手を合わせ、前に如來を落下から止めた崖の前に立つ。

手すりはあるものの、簡易的なものなので跨げばいつでも……っ

て何考えてんだ私!

手すりギリギリ前に出たときだ。

(あれ?)

左足に違和感。

その直後、

ガラガラッ!

自分のいた周辺の足場が一気に崩れた!?

「きゃああああああっ!」

レアスキル発動!

この程度ならすぐ上に移動すれば・・・あれ?

(レアスキルが発動しない!? どうして!?)

指輪は反応している。マジがないわけではなさそうだ。

ガッ!

CHARMは起動し、タングズニルのブレードが崖の壁に刺さってくれた。かろうじて下には落ちずに助かったようだ。

「ふう・・・」

ただし、私の手の力が持たなければそのまま海の下。

(お願い! 誰か助けに来て!)

「おい明日香?」

みどりだ。

「みどり・・・」

「待ってろ! 今助けるからな!」

みどりのレアスキル——縮地が発動。

私とCHARMを抱えて上へ。

「明日香・・・お前少し太ったか?」

ガンッ!

思いつきり足の脛を蹴ってやった。

「いってええええええっ!」

「助けてもらったのは嬉しいけど・・・一言余計っ!」

「わ、悪かったよ・・・わざと言ったわけじゃ・・・」

「・・・っ!」

みどりに殺意の目を向ける。

まったく、女子に体重のことを聞くとか・・・デリカシーのかけらも

ない！

「で、なんであんなことになってたんだよ……」

「突然私がいいた足場が崩れて……まずい！下に落ちるっ!?って思ってたレアスキル発動させようとしたんだけど……なぜか発動しなくて……」
「え……なんだそりゃ……そんなの聞いたことないぞ」

「私だってこんなのはじめてよ……だから余計パニックになっちゃって……幸いCHARMは起動したから命は助かったけど……」

結梨ちゃん騒ぎの後、百合ヶ丘に出たギガント級クラスときは、柳さんと結夢様以外全員マジが使えない、とかいう事態はあったが、それに近い症状……な気がする。

「明日ねえー!」

如來……と、円……。

「明日香ちゃん部屋に戻ったんじゃないの?」

「その……つもりだったんだけど……なんか落ち着かなくて……ホント助かったわ……ありがとうみどり」

「その足どうしたの!?まさか自殺……」

よくみたら靴下が擦れて少し破れていた。膝もすりむいている。

「違うわ」

とさっきの場所を指差す。

「事故よ……足場が崩れて下に落ちそうになったのをみどりに助けてもらったのよ。危険だから近づかないようにね。いつ崩落するかわからないから」

「あれ?でも……崩れてもレアスキルでカヴァーは出来たはずだよね?」

「そのレアスキルが発動しなかったんだとき。去年この辺にギガント級出てマジが使えなかったことがあったけど、なんかそれに似てる……」

とはみどりだ。

「指輪は反応したわ。けど何も起きなかった……」

この事故がキツカケだとはまだ誰もわからなかった。

部屋に戻り、部屋着に着替え明日の準備を終えて寝ようか、と横に

なつたときだ。

「うっ……」

突然吐き気が私を襲う。

最初のうちは自分の体調管理が悪いだけなのかとも思ったが、このところ変な食事の取り方はしていない。

(まあいいや……トイレトイレ……)

慌てて部屋を出てトイレに走る。寮内の深夜の移動は部屋着でも問題はない。

「うええええええええっ!」

汚物を洗面台に吐き出し、部屋に戻る。

ベッドに横になったときだ。

(なに!?)

ガンツ!

「っ……っ……っ!」

声にならない声。何かで思いっきり殴られたような激痛が走り、数秒目の中で光った後、

パアアアアアアアアア……

指輪が数回反応、私はそのまま気を失ってしまった。
数時間後。

「う……う……う……」

目を覚ましたが、まだ痛むような感覚が残り、結局寝られなかった。

アルケミラ女学館

翌日の朝。

日課にしていたマラソンは休み、^{まどか}円と2人で普段どおり朝食。

「・・・頭痛い」

「明日香ちゃん大丈夫？」

「でもないかな・・・夜中に突然吐き気と誰かに殴られた、みたいな激痛が走って・・・」

ありのままを述べる。

「医務棟行こう？如來^{ゆき}ちゃん心配するよ？」

「ただ、今は平気なのよね・・・痛いけど、殴られた後の痛み？みたいな感じで残ってるだけだから・・・」

その後一旦部屋に戻り、講義の準備をしていたときだ。

トントン・・・

部屋をノックする音。こんな朝の時間に誰だろう？

「はい」

ガチャ・・・

「明日香さん、ちょっとよろしいかしら？」

祀様？

部屋に来るとか珍しい。

「どうされたんですか？」

「敷井さんから聞いたの。ねえ明日香さん・・・しばらくここを離れてみてはどうかしら？」

え・・・

特別寮？

「・・・お断りします。LG^{レギオン}の隊長が特別寮だなんて・・・」

「あら？違うわよ」

「え？」

「今年から・・・LG単位での休暇制度を導入することにしたの。このところヒュージの出走率も下がっているし、仲間との結束も上がるん

じゃないかって思ってた……」

「な、なるほど……」

そういうことね……。早とちりした私が恥ずかしい……。

「ということでは、LG単位で休暇申請を出そうと思ってるんだけど……みんなはどこ行きたい？」

「私！鎌倉じゃない別な海行きたい！」

とは如來だ。

できれば具体的な場所を示してほしいんだけど……。

「わたくしも初めて聞きましたわ」

「そうね。私も今朝祀様から初めて聞いたから。ていうか鎌倉以外つて……如來抽象的すぎ」

「あのー！」

藍ちちゃん？

「えっと……私、湯河原に行きたいです」

湯河原？ふと頭に浮かんだのはアルケミラ女学館の管轄だということだ。

「え……でも湯河原って没落地域だよ？それでもいいの？」

「えっと……実は……灯音様がアルケミラにいたっていうのを聞いたので……」

それを言うなら私は駿府に行きたい！というのが本音だが、さすがに駿府までは……。

「調べてみないとなんともだけど……避難地域だったら大丈夫かも」
ただ、ヒュージとの戦闘は必須になると思う。

休暇しに行くんだか戦闘しに行くんだかわかんないような気がするがまあいい。

「温泉かあ……百合ヶ丘来てから天上の間と足湯しか行ってないないから楽しみ！」

円はそつち!?

その日の夜。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

携帯端末が鳴った。

・・・灯音様？

『円から話聞いちゃった。私も同行させてもらっていい？』

うーん・・・なんかよくわからないことになってきた・・・。

「構わないですけど・・・この場合ってLG休暇日申請扱いになるんです？」

『よくわかんない。祀に聞いてみる』

LGの籍は抜けていないので問題はないはず。

翌日。

(眠い・・・)

早朝の誰もいない百合ヶ丘正門前。

まさかこんな理由で休暇日申請が通るとは思わなかった、というのもあるが。

電車を乗り継ぎ、やってきたのは平塚だ。

一度訪れてみたかったのだが、京夏お姉様の遺骨の一部が実家にも行っている、というので、そのお墓参りがメインである。

(へえ・・・鎌倉とはまた違った緑なんだ・・・)

『佐野重牧場入口』の看板——初花様の実家だ。その少し上が京夏お姉様の実家だったところ、ということらしいが。

「・・・」

(なに・・・これ・・・)

庭の手入れがされてないのは誰も住んでないから、なのでそれはいい。問題は外観だ。

硝子が割られ、壁のあちこちに穴が開けられていた。

(空き巣にしても・・・なんてことを・・・)

初花様から聞いた京夏お姉様の部屋だった場所へ。

唯一ここだけは手つかずのままになっていた。

小さい頃の初花様と一緒に映っている写真。机横の壁には『リリイになってみんなのことをたくさん守る!』と描かれた紙が。

(なんか・・・いいなあ・・・私と如來より恵まれた環境だったんだ・・・)
『夏目家』と書かれた墓標。一般的な先祖代々のお墓の前にやってきた。

墓誌を見る。『夏目雄太郎』『夏目明子』『夏目京夏』の真新しい文字。初花様のご両親が家族ぐるみでお付き合いがあった、と聞いているのでそういうことなのだろう。

お花と線香、墓標の前に手を合わせる。

帰り道でのことだ。

パンツ!

(はあっ!?)

マジ弾の音・・・しかも実弾だ。

キンツ!

「・・・っ!」

寸前のところで弾き返す。

「あなた・・・百合ヶ丘の生徒よね?なんでこんなところをウロウロしてるのかしら?」

黒髪ロングの、赤い目のリリイ——が私に言う。

「随分とご挨拶ですね・・・学園がどこだろうがあなたには関係ないでしょ?」

制服を見る限り相模女子高等学館か?この辺りの管轄なのでいても不思議はない。

やる気とスキラー値があれば誰でも入れるとウワサの新進気鋭の学園、というのを聞いた。

「この辺りは夏目さんと佐野重さんの実家ですけど・・・そこに用事でも?」

この人・・・京夏お姉様と初花様を知っている?!

「だからって・・・実弾撃つていい理由にはならないでしょ?もし当たっていたならあなた処罰ものよ!」

「なら、正式に手合わせを申し込みさせてもらいましょうか？尾上明日香さん？」

私のことを知っている？誰だ？

記憶を辿るが該当するリリイが出てこない。

「ふーん・・・覚えてないんだ？」

私に近づいてくる・・・グルヴェイブ？

そして後ろ髪をまとめてポニーテールに・・・あれ？

「あ・・・朱美!？」

鏡朱美——御台場時代同じ東雲予備隊メンバーだったうちの1人で寮のルームメイトでもあった。レアスキルは狂^{ルナティックトランサー}酔の月。朱美・・・相模女子行ったのか・・・。

「どう・・・して・・・」

「久しぶりね明日香。聞いたわ。百合ヶ丘では自分のLGを持って、オマケに守護天使まで・・・」

「そんな・・・自分の実力じゃない・・・私は・・・前の隊長からLGを引き継いだだけで・・・」

「・・・」

「それに・・・妹だってあなたの知ってる子よ。お台場にいたときと変わわり映えなんてし・・・」

「ふざけんなああああああつ！」

「ひっ!？」

言い終わる寸前、グルヴェイブのブレードを喉元に突きつけられる。

「あんた・・・こんなことしてただで済むと思って・・・」

ガンツ!

直後、お腹周りを思いつきり蹴られる。

「うううううっ!？」

その場にうずくまる私。

「・・・昔なら私に敵意むき出しで抵抗してきたのにねえ」

そう。去年の私だったらそうしていただろう。天音のときのこともある。

実は朱美とは友人関係だった。だった、というのは彼女のほうから一方的に絶交されたからなのだが。

「う……る……さいっ……あんだだっけ知ってんじゃないの？天音との……ことっ！」

「そういえば……そんなバカな子もいたわね……」

うずくまる私をグリグリと頭の上から靴で押さえつけられる。

「がああああああっ！」

（耐えろ……耐えろ私……）

もしこの場に如來がいたのなら間違いなく暴走しているだろう。

（そういえば……未だに朱美が私を嫌いになった理由がわかんないのよね……）

ピピピ……

携帯端末が鳴る。通話機能だ。

「……っ！」

ガンッ！

再び蹴られて少し飛ばされる私。

「う……ど、どうした……の？」

『あ、明日ねえ!?どうしたの?』

連絡主は如來だ。

『蘆乃!生徒会に連絡して!早く!』

異常だと判断したんだろう。

さあどうする私?現状なら朱美を殺めたところで正当防衛が当てはまるかもしれない。

「言つとくけど、私も強化リリイだから殺めよう、とかバカな考えはやめてよね」

「あっそ……なら好都合だわ……」

フォン……

立ち上がって右手をかざし。CHARMを起動する。

「え……あなた……タングズニルじゃ……」

そうか、CHARMを引き継いだことを知らないのか。

「おあいにくさま。今日はお姉様の形見のダインスレイフ・カービン

なのよね・・・それよりも・・・」

「・・・っ!」

今度は私が朱美にダンスレイフ・カービンを突きつける。

「正体はあんたかっ! 私のお姉様の実家をあんな・・・」

「な、なんのことよっ!?! 知らないわ・・・」

そこへ――

「明日香っ! なにやってんの!?!」

灯音・・・様?

「私が聞きたいぐらいですよ。どうしてまた?」

あまりに不自然すぎる。

「なんでって・・・そりゃあ・・・初花ん家の・・・新作ぬいぐるみが・・・出てるかなあって・・・」

あ・・・灯音様はそういう人だった。ん? ぬいぐるみ?

「ゆるキャラちつくな牛がすごいかわいいんだよ! だから時々休暇取ってチェックしに来てるんだけど・・・」

久しぶりに聞く灯音様のマシンガントーク・・・って、今はどうでもいい。

「けどダメだよ?いくら・・・京夏ん家があんなだからって・・・こんな・・・」

「知ってたんですか・・・」

どうやら以前から頻繁に訪れているらしく、

「で、こっちのリリイは・・・」

仕方なく朱美の喉元からCHARMを離す。

「御台場の・・・予備隊時代のメンバーだった子です。寮のルームメイトでもありました」

「そう・・・なんだ・・・けどだからって・・・実弾撃っていいわけじゃないよ?」

・・・灯音様最初から一部始終を見ていた?

「それはどうも」

「生徒会にはもう・・・連絡済だよ・・・如來から・・・連絡も来たでしよっ!」

無言でうなづく。

当の朱美は悪びれた様子もなく、あつけらかんとした表情をしている。

「あなたは・・・拘束される・・・リリイとして・・・それでよかったの?」

されたところで・・・おそらく彼女はなんとも思っていないだろう。そういう学園方針だということを聞いたことがあるからだ。

それでいて狂酔の月持ちなんだから困ったものだ。

「さあ・・・どうなんでしょうね?」

間もなく百合ヶ丘の生徒会役員が来て彼女は拘束されたが、相手方

——相模女子高等学館の生徒会の姿はなかった。

帰り道。

「で、結局来ただけになっちゃったんですね・・・」

「うん・・・ネットとかで情報公開してないからね・・・ううううっ」
灯音様!?! 顔色が・・・。今までにないぐらい悪い。

カワイイものに関して目がなく、今まで症状が出てことがなかった。そのつもりでいつものテンションで喋ろうと思ったのだろう。

「大丈夫ですか!?!」

慌てて指輪をしている手を繋ぎマギ交感。

が、しかし、

「うううっ・・・!?!」

(な、なにこれ!?!)

琴乃様のときは一瞬フラつく程度で済んでいるのだが、全く違う。まるで・・・根こそぎマギを持つていかれるような感覚・・・。前にも同様にマギ交感をしたことはあった。今回は全く別物だ。

「ぐ、ゴメン・・・明日香・・・私も・・・ちよつと・・・ビックリしてる・・・こんなの・・・初めて・・・だから・・・」

あまり考えたくないが・・・発言障害が進行した、と考えるのが妥当だろうか。

「戻ったら医務棟で検査受けましょう!」

「そうだね・・・」

戻ってすぐにそのまま医務棟へ。

十数分後。

「明日香さんちよつといいかしら?」

祀様だ。

「桃乃さんだけど・・・発言障害があるのは知ってるわね?」

「はい・・・」

「これは本人には黙っててほしいんだけど・・・病状は最悪だわ」

え・・・。

「あの・・・それってどういう・・・」

「喋ろうとすればするほど負のマギに侵食されていくの。今までは京夏さんがマギ交感をしていたから症状の進行を抑えられていたわ。

けど京夏さんがいない今、進行を誰も止められないの」

「え・・・それって」

「元妹シルトだから知ってると思うけど、京夏さんはゼノンパラドキサのS級だったの。天葉さんの次にマギ保有量が多かったわ」

え、S級!? スキラー値85以上だったってこと!?

衝撃の事実・・・お姉様隠し事多すぎ・・・。私がどう頑張っても届くはずがなかった。

ちなみに私は78だ。

「他の・・・私たちとかじゃダメなんですか?」

「正確には・・・抑えられる、けど・・・その時間が極端に短いわ。今までいろいろなりリイが試したけど結局京夏さんだったのよ・・・」

誰も代わりがないなんて・・・。

私自身もうどうしていいかわからなくなっていた。頭の中ぐちゃ

ぐちゃ．．．昨日だって円や櫻子に八つ当たりして．．．。思いつく限りのことはしよう。

携帯端末を取り出し、因悦に連絡。藍ちゃんのほうがよかったか？『悪いけど医務棟の16室まで来てもらえないかしら？』

試したことない子たちでやってみるしかない、か。

「あの．．．どうしました？」

10分後。因悦がやってきた。

「ごめんね突然呼び出して」

「いえ．．．」

「もうちょっと待っててね。もうすぐ来るはずだから」

一旦笑顔から真剣な表情へ。

「心して聞いてほしいんだけど．．．灯音様．．．もしかしたら百合ヶ丘にいる間にいなくなるかもしれないわ」

「え．．．」

「灯音様の発言障害のことは以前話したと思うけど．．．その症状が悪化しているの．．．このままだと灯音様は．．．私たちと喋るところか．．．このまま．．．うううっ．．．」

私はそのまま泣いてしまった。

「落ち着いてください明日香隊長。それってどうにもならないんですか？」

「今までは．．．京夏お姉様が．．．マジ交感で進行を抑えていたそうよ。けどそれももう．．．」

やっぱりお姉様はすごい。マジ保有量はとてもじゃないけど私にはかなわないや．．．。

「あの．．．でも京夏様って．．．隊長と同じゼノンパラドキサ．．．でしたよね？どうしてまた？」

「マジの量の問題よ。今まで黙ってたけど、お姉様．．．S級だったのよ」

「．．．終わったよ。あれ？因悦．．．」

灯音様が戻ってきた。

「ごきげんよう灯音様。明日香隊長に呼ばれたのでちよつとここで話

を……」

「そうなんだ……」

「そういえば……灯音様って……湯河原のどの辺り出身なんですか？」

「あー……」

灯音様言いくそうだなあ……。

「ごめん……私の家は……もうどこにも……跡地なら……」
ヒュージ没落地域内、か。

「すいません……変なことを聞いちゃって……」

「いいよ……リリイなら……誰だって言いたくなかったり……悩みは持つてる……それに……私が……今ここで……死ぬわけにはいかない……から」

灯音様……。

「ああああっ!」

ボタンツ!

ちよつと因悦!?

「たまたま」コケて灯音様の上に馬乗りになるような形に。

パアアアアア……

指輪をしてる手同士が偶然重なりマジ交感をする形に。

「ううううっ……」

因悦の息が荒い。

「はあっ……はあっ……はあっ……」

レアスキル——ブレイブの相乗効果でどうにかなる……と思っただけどやはりムリか？

「大丈夫?」

「は、はい……すみません……」

苦笑いの因悦。

だが、医務棟に来る前よりも灯音様の顔色はよくなっていた。
(気にしすぎ……なのかな……)

「じゃあ……部屋に戻るね。ごきげんよう」

お互いそのまま立ち上がり、灯音様は山^{くちなし}榎館へ戻って行ってし

まった。

「大丈夫？」

「えっと・・・マギ交感のことですか？」

無言でうなづく私。

「たまたま・・・する形にはなったんですけど・・・ちよつと今までとは違った感覚でした・・・まるで・・・持つてるマギを吸い取られる・・・みたいなの」

吸い取られる、か。私とほぼ同じ症状だ。

まさかとは思うが、京夏お姉様がリリーの終わりを早く迎える事になった原因って・・・。

「明日香ちゃん！一体なにがあったの!？」

「連絡もらったときはビックリしましたわ！」

「ははは・・・ごめん・・・予備隊で一緒だった子にケンカ売られただけ・・・」

「売られたって・・・」

「これは百合ヶ丘に対する冒涇ですわ！許せませんわ・・・」

そもそも相模女子は百合ヶ丘との関係は特に何も無いはず。

「あのね・・・なんでもかんでも学園間トラブルに結びつけられればいいってもんじゃないでしょ・・・それよりも・・・」

「・・・明日香ちゃん？」

灯音様の発言障害の現状をありのまま話した。

「そんな・・・」

「負のマギの力が・・・」

「もしかして・・・」

「私も・・・信じたくはない・・・けど・・・そうとしか思えなくて・・・」
また泣いてしまった。

「そういえば・・・京夏様・・・灯音様とも・・・日常的にマギ交感されてましたものね・・・」

だからといって灯音様に非はない。ヒュージが余計憎くなる。

「で、因悦を呼んでたまたま触れた形でマジ交感したんだけど・・・」
あの後因悦はフラフラしながらも寮に戻っていった。ちよつと心配だな・・・症状に関しては伏せている。

「それならそれで、わたくしたちが交代でマジ交感すればよろしいんじゃないかって?」

「なら私が悩まないわよ・・・誰でもいいわけじゃないの・・・」

結局真実は明かせなかった。

さて、湯河原へ行く当日。

「おはよう。みんな」

休暇とはいえ、何があるかわからない。今は私服だが、目的地が目的の地だけに全員CHARMと制服は持参している。

「わあ・・・灯音様私服すっごいカワイイですー」

「そ、そう?」

なぜかテンションが一番高いのが藍ちゃんだ。

ピンクのセットアップに少し高めの高いヒール。背が低いのにしてるんだなあ・・・。

「これどこで買ったんですか? わあ・・・」

「明日ねえ相変わらずなんだあ・・・」

如來・・・あんたね・・・。

まあ否定はしないが・・・カエルのTシャツに緑のスカート、カエルのワンポイント入りの麦わら帽子。

「明日香隊長ホントにカエル好きなんですネ・・・」

「そ、そうね・・・」

苦笑い。

「あれ? 蘆乃は?」

みどりだ。

ファッションに無頓着なのかと思っていたが、ほぼその通りだっ

た。釣り(?) 関連メーカーのキャップにTシャツ、カーキ色のハーフパンツ。ボーイッシュシュ?だが似合ってるのがなんか腹が立つ。

「遅くなりましたわ」

ベス……。

あんたが一番この中で場違いだわ……。

ガンツ!

思わずゲンコツ。

「あいたつ!ちよつと!?!なにしますの!?!」

「自分の胸に聞きなさいよ……まったく……」

「だよなー……お嬢のこういうところがいけすかねえ……」

「みどりさん……」

サングラスにブランド物の服、水着か!と思うような出で立ち……。

「おはよう……ごいいます」

遅れて蘆乃もやってきた。

蘆乃のほうがベスよりもお嬢様っぽく見えるのはどうかと思うけど……。

白のワンピースがよく似合っている。

「あの……あんまり見ないでください……恥ずかしいんですけど……」

「ご、ごめん……じゃあみんな行くわよ」

私服ってこうも個性が出るもんなのか、と改めて関心してしまっただ。

咲良ちゃんもだが、みんなコーデイネットがすごくうまい。浮いた

感じがするのは私だけか……。

没落地域手前の小田原までやってきた。

この辺りも小規模ながらエリアディフェンスが張られている。

「かまぼこ……美味しいよね」

とは灯音様だ。

そういえばかまぼこは……量産品しか食べたことがない気がする。宿泊先で食べたいな……。

ということでメンバー人数+灯音様の分購入。

湯河原に到着、宿に荷物を置き、

「夕方までは自由行動にしていいわ。だからって羽目を外しすぎないようにね」

「おう明日香。釣りやろうぜ」

なに唐突に……。まあみどりらしいというか。

「なによ急に……。私やったことないわよ?」

「釣り方ならあたしが教えてやつから。竿も貸すし」

なんか意外。しかも楽しそうだし。

「あたしき、父ちゃんの影響で釣りが好きでさー。鎌倉でもやれっかなーと思つて楽しみにしてたんだけど……。堤防とか全壊じゃん? だからフライできなくてつまんなかったんだよねー」

フライ? なにか揚げるのかな……。

「ああ、フライつてのは糸を投げて釣るやり方な。昔は鎌倉辺りだとしらすとか生で食べたんだつてよ」

「あ。みどり様……と明日ねえ?」

如來だ。

「これから海岸でバーベキューやるんですけどみどり様もどうですか?」

「んー……。あたしはいいかな。ていうか久しぶりに釣りしてえ……。よっしや明日香。行くぞ!」

「私やるなんて一言も……」

「いいから来い!」

何だこの流れ……。そのままズルズルと引っ張られてしまった。

結局避難地域内の漁港内の堤防まで連れてこられてしまった。

(けどま、いつか)

と思つてしまつている自分がいるのも事実なわけで。

というか、こんな楽しそうにしているみどりを見るのがはじめてだから、というのもある。

「仕掛けはあたしがいつも使つてるやつそのまんまだからいじらなく

ても平気。あ、あたしらリリースだけど一応ライフジャケットは付けてな」

はあ、とため息。

「で、どうすんの?」

「あたしが先に見本見せるからその通りにな」

もう1本の釣り竿を取り出し、リールのレールを起こしてから疑似餌を竿から少し下りた状態に。

「えっと・・・垂らしはこんぐらい。で、今んとこあたしと明日香ぐらいしかないけど、普段なら他の人に当たらないように振らないと」
とそこで後ろヘグルグルと糸を回し始めるみどり。

「で・・・こうや・・・ってつとー!」

ブンツ!

どうやら狙った位置に行ったようで満足しているらしい。

「で、何釣るの?」

「んー・・・今の時期だとカサゴとかカレイとかかな・・・」

「あ。いたいた。明日香ちゃん!みどりちゃん!」

円だ。

「どう?」

「どうって・・・はじめたばかりだよ?そんなすぐ釣れるわけじゃないじゃない・・・」

さて、私もやってみるか。

リールのレール起こして・・・疑似餌の垂らしがこれぐらい?で、手で引つ掛けといて、それから・・・。

「あーそうそう。明日香はあたしみたいにぶん回すよりも1発でやったほうがいいかもな。たまーに引つ掛けた手離さないで服に引つ掛けたりするから」

ま、まあ1度はそれをやりそうなのが怖い。

よしー!

ブンツ!

(よっしやー!)

心のなかでガッツポーズ。狙い通りの位置へ落ちてくれた。

「明日香ちゃん釣りやったことあるの？」

「ないない・・・初めて」

「えー・・・でもじょうず・・・」

「そんなことないって。気のせいだよ」
しばらく待つ。

あ。かかった？

「な、なんか引っ張られてる」

「おっ、かかったじゃん。一気にリール巻くなよ。バレるぞ」

「バレる？」

「あーあたし使ってるのが疑似餌だからな。一気に引き上げると魚に怪しまれっから」

まあ確かに。

「で、竿を上下しながらゆっくりな」

「う、うん・・・」

言われた通りにゆっくり巻いていく。

っ、釣れた！

「カサゴかあ・・・この辺だとこのサイズかあ・・・」

な、なんか不満そう・・・。

「百合ヶ丘入る前は・・・城ヶ島とか横須賀とかしよちゆう行つてたなあ・・・で、なんだっけ・・・城ヶ島工科女子中等部のやつとよくケンカしたなあ・・・」

城ヶ島工科女子って・・・私たちにはあまり馴染みはないが、確か工学科（アーセナル専門）の学園だったはず。ていうかあんだ・・・なんでそんな子たちと絡むのよ・・・。

「あれ？出身地の話してなかったっけ？あたし葉山だから。ギリギリ没落地域外だよ」

葉山か。ほぼ地元じゃない。

「けどま、そいつらのおかげであたしは百合ヶ丘に入れたようなもんだけだな。じゃなかったらレアスキルなんて覚醒しなかつただろうし・・・」

「明日香隊長！」

藍ちちゃん？

「あの・・・今すぐこっちに来てください！」

バーベキューやってるんじゃないの？

それは置いておこう。海岸に移動してきた。

「私たちが何したって言うの！別に自由でしょ！」

「危ないから避難しろって言うてるのがわからない？」

アルケミラの制服・・・。

「ちよつと二人共・・・」

「あ。明日ねえ・・・なんか知らないけど私たちに避難しろって・・・」

この子完全に私たちを一般人と勘違いしてる？

「ちよつといい？私服だからって私たちが誰か一度確認したほうがいいんじゃないのかしら？」

フォン・・・

右手をかざし、ケースからCHARM——タングズニルを取り出す。

「・・・リリイ？もしかして・・・私たちを助けに？」

「残念だけど偶然なのよね・・・傷心を癒やすための旅行なの」

「失礼ですがあなた達は・・・」

「私たちは百合ヶ丘女学院のリリイよ」

百合ヶ丘の名前を聞いた途端、顔を歪ませる彼女。

「・・・今すぐここから出て行ってください」

「・・・言ってる意味がわかんない。出ていけって」

「なら問答無用！」

ブンツ！

突然CHARM——ブリューナクを振りかざす。

如來に目で合図。

スツ・・・

レアスキル発動！

彼女の背後に回り、片方の手を押さえる。

如來には反対側を押さえてもらう。

「えっ!?!」

「えっ……じゃないでしょ。CHARMはリリイじゃなくてヒュージに向けてね」

「結局明日香が釣った1尾だけだったよ……ってどした?」

みどりが戻ってきた。

「こっちが聞きたいぐらいよ……私たちの身分を明かしたら突然彼女が暴れだして……」

「……浮葉?」

灯音様だ。

「……灯音?」

「久しぶり」

ニツコリと笑う灯音様。

「元気してた?」

「……うん」

「あの……お知り合いですか?」

「知り合い……っていうか……私が初等科にいたときに……クラスが一緒だった子」

「もしかして……灯音、少し……変わった?」

「違うよ……これは……」

と説明しようとしたときだ。

「うううううっ!」

頭を押さえながらしゃがみこんでしまう灯音様。

(どうしよう……今いるメンバーでマジ交感させるべき?)

「藍ちゃんー!ゴメン!」

やや強引に指輪をしている手同士を触れさせる。

パアアアアアア……

「うっ……」

藍ちゃんは少しフラついたものの、すぐに安定した。

「マジか……灯音様の症状……前よりひでえことになってる……」

息が苦しい。

立っているのもやつとなぐらいだ。

(私……もう……ダメなのかな……)

今までは京夏がいて、マジ交感を頻繁にやってたからなんとか耐えてたのはある。けど、京夏はもういない。

(リリイとして終わりを迎えるんなら……せめてヒューズを倒したい！)

野良でもいい。何もしないで終わるぐらいなら……リリイとして生命を全うしてやる！

「ダメですよ！動いちゃー！」

……藍？

海岸からずーっと一緒だった？

「パアアアアアア……」

「うううっ……」

マジ交感……。

藍、苦しそう……だが、

「大丈夫ですか？」

笑顔で答える藍。

「……私はいいから。それより……ムチャしてない？」

「私は……大丈夫です。マジ量も他の子より余裕あるので……」

そういえば藍はブーステッドリリイだって聞いた。だからか。

「それよりも……今はとにかく安静にしてください！」

「先程は失礼しました。小野浮葉と言います。3年生です」

「浮葉様……。えっと尾上明日香……LGエリューズニルの隊長で2年生です」

「それで・・・灯音の症状が悪化してるっていうのは・・・」

一度灯音様を旅館のほうに戻ってもらおうことにして、私は現状を話すことに。

「灯音様は・・・中等部時代にヒュージに襲われて、普通の会話をしようとする、負のマギに侵食されて発言ができなくなる症状になったんです。だからあんな・・・たどたどしく聞こえますけど、ああ喋るのがやっとなんです」

「そんな・・・」

「灯音様がLGにいたときはまだ・・・もつと普通に喋れていたんですけど・・・最近症状が悪化しているみたいで・・・。あー、今はLGから外れてスーパースーブとしてたまに入ってもらっています。で、今回LG単位で休暇を取ったので同行したい、というので一緒にいる次第です」

「そう・・・あの子・・・小さいときに両親を亡くしてるの。自分の目の前でね」

そういえば琴乃様も父を目の前で亡くした、と話していた。

「それもあって・・・暴走することもあるわ。灯音のレアスキルって・・・」

「鷹の目です。自分がもつと戦えるならって・・・しょっちゅう悔しがつてます」

LGとして見ると戦略的に非常にありがたい存在なのだが・・・本人からすれば、前に出て戦いたい！と思うのは当然だと思う。

「LGに入って・・・発言障害のことを聞かされたときは・・・自分のようになつてほしくない！って言われました。私も・・・正義感強くてどっちかっていうと暴走して突っ走ろうとするほうなんですけど・・・よくお姉様に止められました」

「姉・・・守護天使？」

「はい・・・正確には「だった」ですけど・・・私もまだ完全には吹っ切れてなくて・・・だからLGの慰安も兼ねての旅行・・・のはずだったんですけど、なぜかこんなことに・・・」

ピピピ・・・

浮葉様の携帯端末が鳴る。

「ちよつとごめんなさい」

浮葉様が一時的に私から離れる。ヒュージ没落地域なので百合ヶ丘以上に出没率が高いはずだ。しかも少数精鋭と聞いている。

しばらくして私のところへ。

「あの・・・ごめんなさいね。ホントは休暇のはずなのに・・・正式に外征要請をさせていただきました。まもなくそちらの生徒会から連絡が来るはずです」

ピピピ・・・

携帯端末が鳴る。生徒会からメールだ、

『LG休暇中大変申し訳ありません。先程アルケミラ女学館から正式に外征要請がありました。至急応援をお願いします。なお、出現多発地域であり、討伐報酬はありません』

・・・まあ報酬のために戦ってるわけじゃないからそれは気にするところではない。

「浮葉様。私達は何をすれば・・・」

「ラージ級3体・・・と言っても、うち2体はミドル級に近いのですが・・・の討伐です。1体は私達の手には負えないので・・・」

確かにリイは9人に満たないと聞いたことがある。つまりノインヴェルト戦術が使えないということだ。

仮にマギスフィアをその人数で回したとしてもCHARMもマギも持たない。

「わかりました」

メッセージで全員に一斉連絡する。

「みんなゴメン。生徒会から正式にアルケミラからの外征要請があったわ。一旦旅館に戻って制服に着替えること。場所はこれから送るわ。現地集合で」

さて、灯音様には華をもたせてあげないとね。

「灯音様。ノインヴェルトのフィニッシュショット、お任せして大丈夫でしょうか？如來には私から説明しておきます」

『ありがとう明日香。で・・・ごめん。いろいろと・・・気使わせちゃっ

て』

「なんのことです？」

あえてシラを切る。

『とぼけてもダメだよ？私も……いずれこうなることは……分かってたことだし。せめて最後ぐらいは、ね』

灯音様……。黙ってたけど、自分のことはしっかり理解されていた。

「だよねえ……。あーあ……。もうちょっとのんびりできると思ったんだけどなあ……」

連絡を受けての一言。

「それを分かってて了承したのはどこの誰よ？」

う……。蘆乃のやつめ……。

「文句言っても仕方ありませんわ。わたくしたちの本分を忘れてはいけません」

櫻子様の言うとおりではある。私達はリリイだ。目の前のヒュージを倒すことが先決。

番外編置き場（第二章） 守護天使

如來ゆきがLGレギオンに入り1週間経った日。

『今日こそは守護天使シユツツエンゲルの契り結んでもらうから！』

と、CHARMを持ち出してまで私の元にやってきた。

（手合わせが条件で……ってこと？強引だなあ……）

私からすればやれやれ、と言った感じだが、如來本人からすれば『冗談じゃない！』という声が飛んできそうだが。

「すみません。わざわざ予定まで空けてもらって」

「いいのいいの。久しぶりに明日香ちゃんの手合わせ見られるだけでも十分楽しいから」

と、ニコニコ顔の琴乃様。

（私は見世物じゃないんだけどな……）

「で、条件なんですけど、如來が勝ったら守護天使の契りを結ぶ。私が勝ったら……今のままで」

場所は如來のほうが指定してきた。修練場以外、か。

やってきたのは海岸だ。

（レアスキル使う気？）

確か如來のゼノンパドキサの速度は私よりも遅かったはず。お互い使ったとしても明らかに私のほうが有利のはずだ。

今この場にいるのは私と琴乃様、如來の3人。

「わざわざここを指定したってことは……何か勝算でも？」

「明日香姉様でもそれは教えな——い」

妹シルトになった気でいる如來の発言。

「あ。琴乃様。レアスキルありなので！」

やはりか。

どの道如來は私には勝てない、そう思っていた。

「制限時間なし。レアスキルの制限もなし。ただし、危険と判断したらその場で止めるわ」

通常レアスキルは個人差が出るため、よほどのことがない限り「なし」が原則だが、何を思ったか、如來は使うことを決めた。

お互いCHARMを構える。そういえば如來と手合わせをするのは私が予備隊に入って少ししたとき以来だ。

「はじめー！」

琴乃様の掛け声。

「やあああああああつー！」

円のとぎと同じ攻撃パターンだ。と思わせて、

ザツ・・・

・・・早速レアスキル使ってきたか。けど、

キンツッ！

「遅いっ！」

やはり如來だ。速度はまだまだ・・・と思った。

スツ・・・

え？

いきなり目の前に如來の姿。

「ふふんっ」

妙な余裕のある表情の如來。

ステルス——サブスキルだ。

(如來・・・いつの間に・・・)

そして、避けきれず私の身体にタングズニルのブレードを突きつけられ、

「え・・・」

「そこまでー！」

まさか、秒で終わるとは・・・完全に謀られた・・・。

帰り道。

「如來・・・サブスキルなんていつ覚醒したの・・・」
なんとなく聞いてみた。

「えつと・・・予備隊に入ってしばらくしてから？」

あつけらかんと答える。

「あと・・・ステルスだけじゃないんだよね・・・」

え・・・？

「縮地のサブスキルあるでしょ？」

「インビジブルワン・・・え？」

つまり。

ステルスで気配を消して、インビジブルワンの効果で早くなった、ということだ。

精神修練室に通った？まあそれはいい。

「あの・・・琴乃様。もしかして如來のサブスキルのこと・・・知ってたんじゃ・・・」

「知ってた・・・というよりは、なんとなく、かな」
な、なんとなく・・・。

「円ちゃんとの手合わせ見た時に京夏ちゃんの動きにどこか似てるなーって」

「そ、そうなんですネ・・・」

お姉様の？琴乃様の理屈はよくわからないが、そういうことらしい。

「明日香姉様！」

早速これだ。如來は肩を寄せてくる。

「ま・だ・よ。書面持ってきてないわ」

「えー・・・」

「えー、じゃない。もつと言えは生徒会に受理されなかったら守護天使として認められないわ」

そう、書面を書いておしまい！ではなく、それを生徒会に提出、受理されなかったら守護天使にはなれない。まあよほどのことがない限り受理されない、ということはないようだが。

翌日、2年生の講義棟のラウンジにて。

「・・・明日香ちゃん大丈夫？顔色悪いよ？」

「そ、そう？」

円まじかに立ち会ってもらい、サインをしてルーンの捺印。

私自身が守護天使の導く側になるなんて想像すらしなかった。

リレイとしての実力は私のほうがまだまだ上だと思っっている。

「わあ・・・」

指輪でのルーン捺印を済ませ、すっかり顔が緩んでいる如來。

「書類は書いたけど、承認されなかったら私たちはまだただの先輩後輩でしかないからね」

と、釘を刺す。

「う・・・意地悪なあ・・・」

「ルールはルールよ。私だって・・・京夏お姉様と結んだときはそうだったんだから・・・」

言いながら照れてどうする私。

自分の身に置き換えると、如來ほど厚くはないかもしれない私とお姉様との関係。それでも私にとっては憧れの存在であり、命の恩人なのだ。

程なく生徒会から受理のメールが来た。

「おめでとう明日香ちゃん」

戻ってきた円から一言。

「あ、ありがと・・・」

「・・・あんまり嬉しくなさそうだけど、どうして？」

「いや、実感湧かない、っていうのもあるんだけど・・・」

もちろんそれだけではない。日頃の行動が全て変わる気がしているからだ。とは円の前で言えないしなあ・・・。如來の前ではなおさらだ。

この話はすぐにLG内に広がり、

ピ。ピ。ピ・・・

携帯端末のメッセージがしばらく鳴り続けた。

その日の夜の天上の間。

「おめでとうですわ明日香さん。遅かれ早かれ結ばれるとは思ってましたが・・・随分とあっけなかつたですわね」

「・・・なにそれ。私に対する皮肉?」

「先を越されたのが悔しかったんだよねーベスちゃん?」

「なっ!?!」

は?先を越された?

円に言われた途端、顔を真っ赤にして手をバタバタとし始める。

「ななな、何をおっしやってますの!?!確かに最近・・・その・・・気になる後輩がいるのは・・・事実・・・ですが、まだなる・・・だなんて・・・」

その後指同士を突きながらモジモジとし始めた。

そういえば昨日――

「ベスちゃん最近1年の講義棟でなにやってるの?」

突然円が言い出した。

「え?なんのこと?」

私にはなんのことだかさっぱりだ。

「如來ちゃんがね・・・ベスちゃんが李組の教室の前に毎日いるのかなとか・・・」

ホント、なにやってんだか。私が1年の教室にいたのは最初の何日かだけで、悪目立ちするだろう、という理由から早々に撤退したのだが。

「まったく・・・」

・・・というやり取りを思い出した。

「照れるな照れるな。自分だってちゃっかりしてるじゃない」

「う、うるさいですわっ!」

ブクブク・・・

浴槽に顔ごと沈んでいくベス。

このときはあんな大事おわごとにまでなるとは思ってたが。

一週間前。

私は李組の教室に来ていた。もちろんLGメンバー探しという大事な目的はある。が、その他に気になった子がいたからだった。

講義が全て終わり、皆寮に戻るかLG控え室に移動しよう、というタイミング。その中でただ1人、いつまでも残っている子がいた。

(あの子・・・まるで昔の私みたい・・・)

誰とも会話せず、言葉は必要最低限のみ。

次の日も。その翌日も。窓の外をじっと見つめている。

一週間もずーっと見ている私もどうかと思うが。

今日も窓の外をじっと見ている子を見に来ていた。が、今日は違った。

スツ・・・

「あなた・・・先輩ですよ？なんなんですか。私のこと・・・じっと見て」

気配なしに私の側に来たのだ。この子ユーバーザイン持ち？いやサブスキルのステルスかもしれない。

しかし、この誰も居ない状況では『なんでもありませんわ』とは返せない。

「ごめんなさいね。なんだか・・・あなたを見ていると中等部時代のわたくしを見ているようで・・・」

「・・・だったら、なんだっていうんですか。私に付きまとわないでください」

まるで誰とも関わりたくない、という感じで突き放そうとしている。一匹狼のつもりだろうか？

スツ・・・

そして彼女はレアスキルを使ったであろう、その場からいなくなっ

ていた。

(一匹狼気取りなんて・・・そのうち自分が持たなくなるのに・・・)

これは私の経験則だ。

だからこそこんな・・・ひねくれたことになったのだが。

翌日。今日も李組の教室前に私はいた。

・・・いた。窓の外をずっと見ている。

・・・と、思ったのは一瞬で、

「・・・しつこいー!」

あろうことか私にCHARMを向けてきた。

これは・・・行方不明になっている改良型のプロトタイプではないか。どうしてここに？

とりあえずそれは置いておく(いや、よくはないのだが。

彼女、ユーバーザイン持ちか。シャドウがいる時点で確定した。

「・・・あなた、こんなこととして許されると思ってますの?」

「私に構うなって言ったでしょ・・・!」

「だからといってレアスキルとCHARMを上級生に向けていい道理なんてありませんわ。とにかくCHARMは仕舞いなさい。本当に生徒会に報告しますわよ?」

生徒会の言葉を聞いた途端に慌ててCHARMは仕舞う。

「・・・そこまでしてわたくしから遠ざけたい理由はなんですか? わたくしに恨みでも・・・」

「関係ない・・・」

「え・・・」

「・・・しつこいです。来ないで!」

私を睨みだした。

「ちよつとー! あんたなにやってんの!」

明日香さん!?

腕を掴まれてしまう。周囲を見渡す。丁度視線の範囲に如來さん

が見えた。

(なるほど・・・それで・・・)

明日香さんのいる合点はいったが、当の黒髪セミロングのリリイのほうは全然納得が行ってない。

「明日香さん。ちようどよかったですわ。この聞き分けのよくない子をしかってやってくださいまし!」

「・・・あんた、まさか強引にLGに誘おうとしてないわよね?」

「違いますわ!大体、わたくしの話を一切聞こうとしないこの子が悪いんですわ!」

間違ったことは一言も言っていないので真実のまま述べる私。

「とにかく私にかまわないで!」

明日香さんが黒髪の子の前に立つ。そしてその子の腕を掴み、

「何があつたかわからないけど、話を聞かないっていうのはちよつと違うんじゃない?」

その子も明日香さんをにらみつける。

「あなたもなんなんですか!人のことを寄つてたかつて・・・」

「私はあなたとうちのLGメンバーとのケンカを止めに来ただけよ。何か特別な理由がありそうだけど、話す気はない?」

「・・・あなたには関係ない」

「そう。ならいいわ。バスもほら、さつさと謝る!」

当然私は納得行っていないので、

「どうしてですか?わたくしは納得いきませんわ!」

「はい、いいから戻るわよ。ごめんなさいね・・・なにかあつたら私のところに来て」

・・・完全にたしなめられている。まあいい。この場は明日香さんに従うことにする。

まったく、なんなのあの上級生!

オマケに1人増えてるし。

そんな中一人私に声をかけてきた。

「ごめんね。ちよつと、いい?」

外部生? 一般で入ってきた新入生? 少なくとも中等部にこんな子はいなかった気がする。薄い紫色のショートボブだ。

「・・・何?」

この子もさつきの上級生の関係者? だったら相手をしないに限る。

「私、櫻組の瀬能如來。さつきあなたを止めに入ったリリイいるでしょ? 同じLGなんだ」

この子・・・今まで私が接してこなかったタイプだ。

「・・・あんたも私を勧誘しに来たの? 悪いけど、入る気はないから」
「でも予備隊にはいたんでしょ?」

「ええ、まあ・・・」

前学園がどこか知らないが、予備隊・・・なんて言ってるところを見ると外部生らしい。

「その予備隊時代に何かあってLGに入りたくない・・・みたいなの?」
え・・・。

当てずっぽうなのだろうが、その子に私の心情を読まれた気がした。

「だったらどうだっていうの? それこそあんたに関係・・・」

「そういう子はさ・・・心にキズがあるんだよ。そのキズを埋めてくれる人が必要だよ?」

このときは『この子何言ってるの!?!』と思っていた。

よくよく考えたら如來が櫻子姉様の架け橋役になってくれたんだと思う。

「私に守護天使の契りを結べとでも? 冗談じゃない!」

「え・・・なんでそうなるの? 私は姉様のところに相談しに行きな・・・って言おうとしたんだけど・・・」

う・・・。早とちりをしたようだ。

如來に教えられた控室の番号の部屋のドアをノックする。

トントン・・・

「はーい」

先程私を止めに入ったりリイの声。

ガチャ・・・

「どうしたの？」

「えっと・・・先程はすみませんでした！あの・・・ご相談したいことが・・・」

「因悦・・・そっか・・・みんなLG入るよ・・・ね・・・」
しばらくうつむいていたが、

「私・・・どうしたらいい・・・？」

そのまま泣き出してしまった。

このタイミングで卑怯だと思う。けど、こうでもしないと話は出来ないだろうと思った。

「隣・・・よろしくて？」

蘆乃さんの隣に座るも、

「・・・しつこいつ！」

こともあるう、私に向けてCHARMを抜いてきた。2回目。

「・・・っ！」

ブラダマンテ・アイ——私のブラダマンテを元にブラッシュアップした新鋭CHARMだ。しかしまだ一般リイには一振りも作られないはず。

この子・・・グランギニョルの関係者？

「せっかく高等部に来て懲罰だなんて・・・生徒会に連絡すればすぐですわ。それと——」

「我がグランギニョルのCHARMをそんな使い方だなんて、わたくしが許しませんわ！・・・と楓さんならおっしゃるでしょうね」

「楓・・・さん？あなた一体・・・」

「櫻子・S・エリザベス。グランギニョルCHARMマテリアルのエリザベート・ファクトリーの娘ですわ」

「櫻・・・子？」

名前を聞いた途端、私に手をあげようとする。

が、私はそれを止める。

「あんたのせいであつて……！私……！」

私に対しての怒りだろう、敵対心むき出しの表情。目には涙を浮かべている。

「何をわたくしに向けて怒ってるのか皆目検討がつきませんが、手を上げていい理由にはなりませんわ」

「……覚えてませんか？」

私には何のことだかさっぱりだ。

「はいばらざとみ榛原慧美……って言えば分かってもらえますか？」

榛原慧美……まさか。

「あなた……ブラダマンテ開発者の……」

「娘です。ホントは……ブラダマンテは……私が使うためだけに開発されたCHARMだった。なのに……どうして……！」

「お待ちなさい。蘆乃さん、あなた何か勘違いされてますわ」

「え……」

と言って携帯端末のとある画像を見せた。

「これって……」

ブラダマンテ本体の柄の一部に刻印として自分の、リリーの識別であるルーンが彫り込まれている。

グランギニョルのCHARMはブレードにはリアルネーム（CHARMメーカー）、本体には使用者のルーンが。さらにユニーク機は開発者のルーンも全てのCHARMに付けられる。

「わたくしのルーンの刻印と榛原慧美様のルーンですわ。これでもあなた専用で作られたものと言い張ります？あなたもグランギニョルの関係者だったらそれぐらいのことは知ってますわよね？」

「……」

「ブラダマンテの開発開始は6年前、わたくしがメルクリウス中等部に入る記念に、と作られたものですわ」

私は続ける。

「その後……改良型の話はいただきましたが……2世代目CHARM

Mの仕様でも十分ヒュージの討伐は可能、と判断したので丁重にお断りしましたわ」

「それじゃあ・・・」

「もしそのプロトタイプが本当にあなたのために作られた、というのならどこかにリリース識別のルーンが彫り込んであるはずですよ」

慌ててCHARMを隅々まで見始めた。

「それともうひとつ——これは外部に聞かれるとまずい情報なのですけど・・・グランギニョルの本社からわたくしのほうに開発中のCHARMが一振り行方不明になっている、との情報が寄せられています。しかもここ百合ヶ丘の誰かが関係している、との垂れ込みもありますわ。もし見つかったとしても慧美様や所持者本人には何かしらの懲罰が課せられるでしょうね・・・」

それを聞いた途端、蘆乃は不気味な笑みを浮かべ、

「・・・いい気味よ」

親に向かって言う態度とは思えない台詞・・・。

パンツ！

蘆乃に向かって平手打ち。

「・・・まだわかりませんか？あなたのことですよ！」

蘆乃さんは叩かれた頬を押さえた。そしてその直後、

パンツ！

返された。

「あなたに私の何がわかるっていうのー！」

「・・・何もわかりませんわ」

「じゃあなんで・・・」

「・・・リイをしていけば、辛いことだって、悲しいことだって出てきます。それを溜め込んで己を見失ったりリイもたくさんいますわ」

「だったら何？」

「・・・蘆乃さん。あなたの敵対する相手は慧美様ではなくてヒュージ。

あなたと慧美様との間に何があったかは存じません。ですがCHARMの無断持ち出しだけは許される行為ではありませんわ」

「・・・だったら好きにすれば？」

「なら……」

私は蘆乃を抱きしめる。

「ちよつと！離してよー！」

暴れる蘆乃。レアスキルを使えばすぐにも抜け出せるはずだが、そこまで気が回っていないようだ。

「……これじゃ答えになりませんか？」

「離してー！」

「CHARMの件を帳消しにする代わりにわたくしの妹になってくださいな。今のあなたには心の拠り所が必要ですよ」

「意味わかんない……ううっ……うわああああああああん！」

言いながらも蘆乃は泣き出してしまった。

「我慢する必要はありませんわ……自分に素直になればいいんです」

蘆乃が落ち着いたところで、

「ベスは何ここで油売ってるのかなー？」

明日香さん!?

「あ、明日香さん!?!ご、ごきげんよう……ですわ」

「ごきげんよう、じゃないでしょーなーんて……ホントはあんたを叱りに来たんだけど……今の見てたらそんな気分じゃなくなっただわ」

「い、今の……って……見てましたの!?!」

「途中から……だけだね。けど、よかったじゃない……良い守護天使になれそうね」

「言ってる意味がわかりませんわ。そっくり明日香さんにお返ししますっ！」

「あのときは冗談で言ったつもりだったけど、まさかホントに守護天使になる、だなんてね……」

藍ちゃんが加入してしばらくした日の話だ。

「……何が言いたいの？」

「別にからかってるわけじゃないわ」

と前置きした上で、

「運命って不思議・・・何がきっかけで変わるかわかんないんだもん」
「・・・そうね」

ただ、気がかりな点は――

如來と蘆乃が子供っぽいところ。

L G 恒例(?)のメカヒューズ模擬戦のあとも。相変わらずことあるごとにしよっちゅうケンカしているようだ。

ホントこの2人、仲がいいんだか悪いんだか。